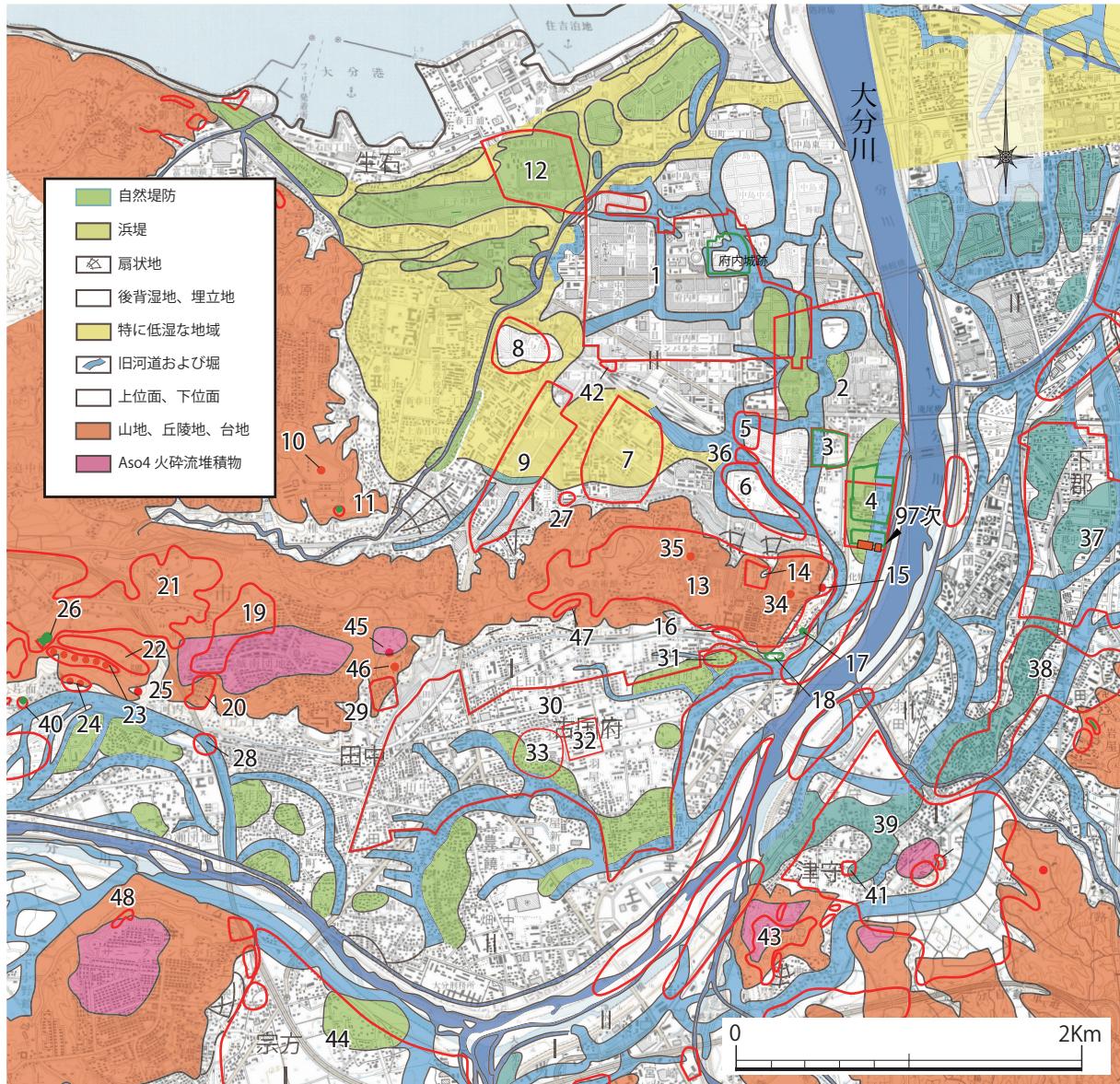


第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大分市は九州の北東部に位置し、瀬戸内海を介して九州の東の玄関口としての役割を古代より担っている。北には別府湾を臨み、これに面する一帯は大分平野が広がる。平野部には二大河川が流れ込み、その一つが由布



1 府内城・城下町跡	13 上野遺跡群	25 深河内古墳	37 下郡遺跡群
2 中世大友府内町跡	14 上野大友館跡（上原館跡）	26 蓬萊山古墳	38 羽田遺跡
3 大友氏館跡	15 大臣塚古墳	27 東大道遺跡	39 津守遺跡
4 旧万寿寺地区	16 岩屋寺横穴墓群	28 荘隅杉下遺跡	40 丑殿古墳
5 南金池遺跡	17 大分元町石仏	29 永興遺跡	41 松平忠直津守館跡
6 若宮八幡宮遺跡	18 岩屋寺石仏	30 古国府遺跡群	42 未広遺跡
7 大道遺跡群	19 城南遺跡	31 岩屋寺遺跡	43 守岡遺跡
8 東田室遺跡	20 尼ヶ城遺跡	32 金剛宝戒寺跡	44 玉沢地区条里跡
9 大道条里跡	21 庄ノ原遺跡	33 羽屋・園遺跡	45 永興千人塚古墳
10 亀甲山古墳	22 田崎遺跡	34 竜王畑遺跡	46 弘法穴古墳
11 古宮古墳	23 田崎古墳群	35 上野廃寺	47 南太平寺横穴墓群
12 勢家遺跡	24 万寿山古墳群	36 上野町遺跡	48 小野鶴横穴墓群

第6図 調査地周辺の遺跡と地形 (1/40000 地形図は千田 1986 を改変)

山系を源流とする大分川である。

大分川の下流左岸に形成された中世大友府内町跡は、南を上野台地、東を大分川とする大分市大字元町・六坊北町・顯徳町・錦町・長浜町などを含む南北約2.1km、東西約0.7kmと広範囲の面積を持つ遺跡である。遺跡の東側には、上野台地の南側裾部で大きく蛇行しながら流れる大分川が台地を迂回しながら北上し、別府湾に注ぐ。河口付近は、現在の海岸線よりも上流側で別府湾へと注がれるが、河口付近では住吉川をはじめとした複数の河川と合流する。当時の町の様子を伝える「府内古図」と呼ばれる絵図には、現在とは流路が異なる大分川が描かれており、住吉川と合流して別府湾に注ぎ、その西には沖ノ浜と記された町並みが描かれている。この付近が、当時の外港としての機能を果していたと考えられ、絵図に記された春日社や蓬萊山などの記載からして現在の住吉町・勢家町あたりに位置していたものと思われる。

遺跡は、第7図に示すように河川の堆積によって形成された標高約4～6m沖積地にあり、大分川から伸びる複数の旧河道とこれに沿って形成された自然堤防や島状に分布する州（三角州）や、後背湿地に立地する。

発掘調査は、1996年に本格的に実施されるようになり、以後、大友氏館跡の確認調査やJR線の高架化事業、国道10号の拡幅事業、県道庄ノ原佐野線事業など大規模な事業に伴う発掘調査が実施され、広範囲に広がる中世大友府内町跡に対して大きなトレンチを入れたような状況で解明が進んでいる。さらに、民間開発による住宅や店舗の建設、集合住宅の開発における発掘調査や確認調査の積み重ねにより、遺跡の形成された自然堤防に相当する地点や遺構の形成がみられない旧河道部分などの古地形が復原されつつある。

以上のことから、中世大友府内町跡は、大分川下流左岸の旧河道によって形成された自然堤防上や後背湿地に沿った範囲であることが地形でも復原される。当時の中世の府内町の北側に位置する大分川と住吉川の河口付近は、現在とは大きく異なる地形となっており、近世府内城下町の建設や河川による沖積による河道の移動、近年の埋め立てによって大きく変化し、今は当時よりも1km以上も河口が北側に移動している。この河口付近にあった大友氏の外港であった「沖ノ浜」にも慶長元年（1596）に別府湾を震源とする大地震によって別府湾沿岸の地域を襲った大津波によって多大な被害がもたらされ、浜堤などの地形も大きく様変わりしてしまったものと思われる。

第2節 歴史的環境

中世大友府内町跡から南側の上野台地にかけての場所は、弥生時代から中世にかけての遺跡や主要な史跡等の分布が知られている。

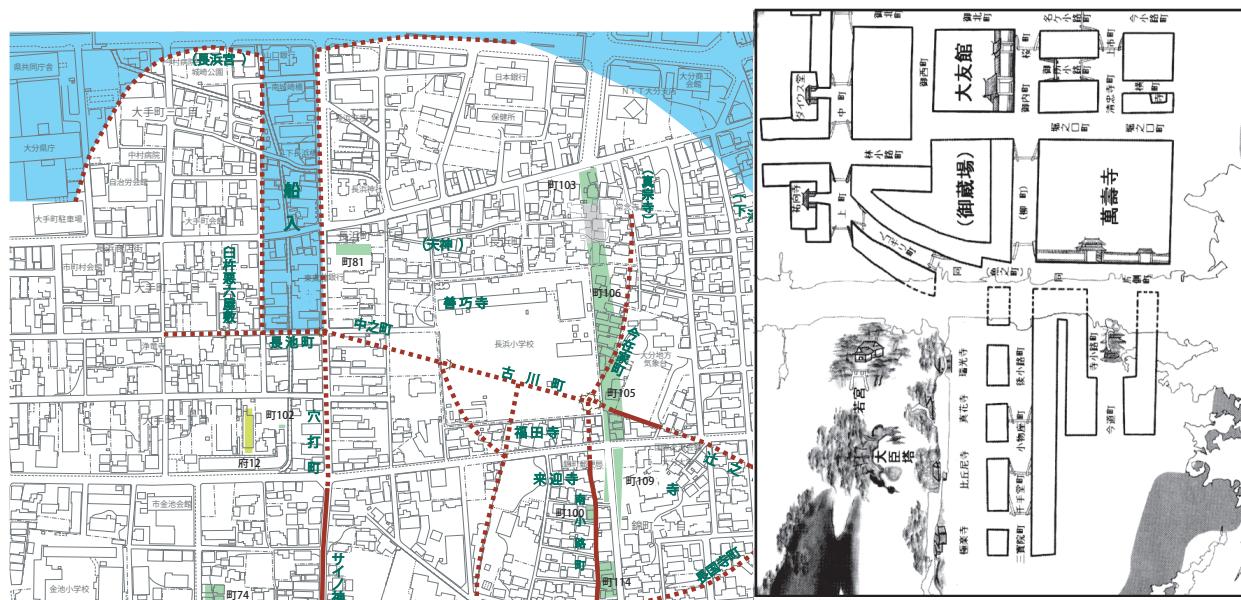
まず、大分川下流域の縄文時代では、今までのところ遺構の存在は確認されていない。しかしながら、各遺跡で遺物包含層を中心に遺物の出土例が多く見られることから遺構の存在する可能性が高いと考えられる。上野台地北側の大通遺跡群では、後期の土器が出土し、上野台地の南に位置する羽屋・園遺跡第1次調査では西平式の深鉢が、隣接する古国府遺跡群第18次調査においても黒曜石の剥片とともに同様の遺物包含層が確認されている。また、古国府遺跡群第15次調査においても同様の遺物群を含む遺物包含層が確認できる。

弥生時代の遺跡については、上野台地に「上野遺跡群」が所在しており、この地域では数少ない弥生時代の遺跡が大分市立美術館の建設時に発見されている（第7図13）。遺構については弥生時代中期のV字溝に一部囲まれた集落跡と、弥生時代後期前葉に比定される県下初例の祭祀遺構が確認された。遺構については溝に囲まれた隅丸方形周溝遺構があり、内部の空間に2間×2間の掘立柱建物跡が配されている（大分市教育委員会1993）。上野台地の南側に所在する古国府遺跡群第14次調査（上七曾子遺跡）において、市内では希少な弥生前期（板付I B式併行期）の時期の東西溝が確認されている（大分市教育委員会2003）。また、大分県教育委員会の国道210号羽屋工区道路改良工事に伴う低地の調査（第13次調査）において、弥生時代中期中頃の溝や幼児・子供・大人の足跡等が確認され、弥生時代前期から中期の生活痕跡をたどることができる（大分県教育委員会1999）。また、古国府遺跡群より1km北西の地点の標高72mの台地上には尼ヶ城遺跡が所在する。中世の城塞跡であるが、弥生時代後期の環濠集落も発見されている。未報告のため詳細は不明であるが、方格規矩鏡の破鏡

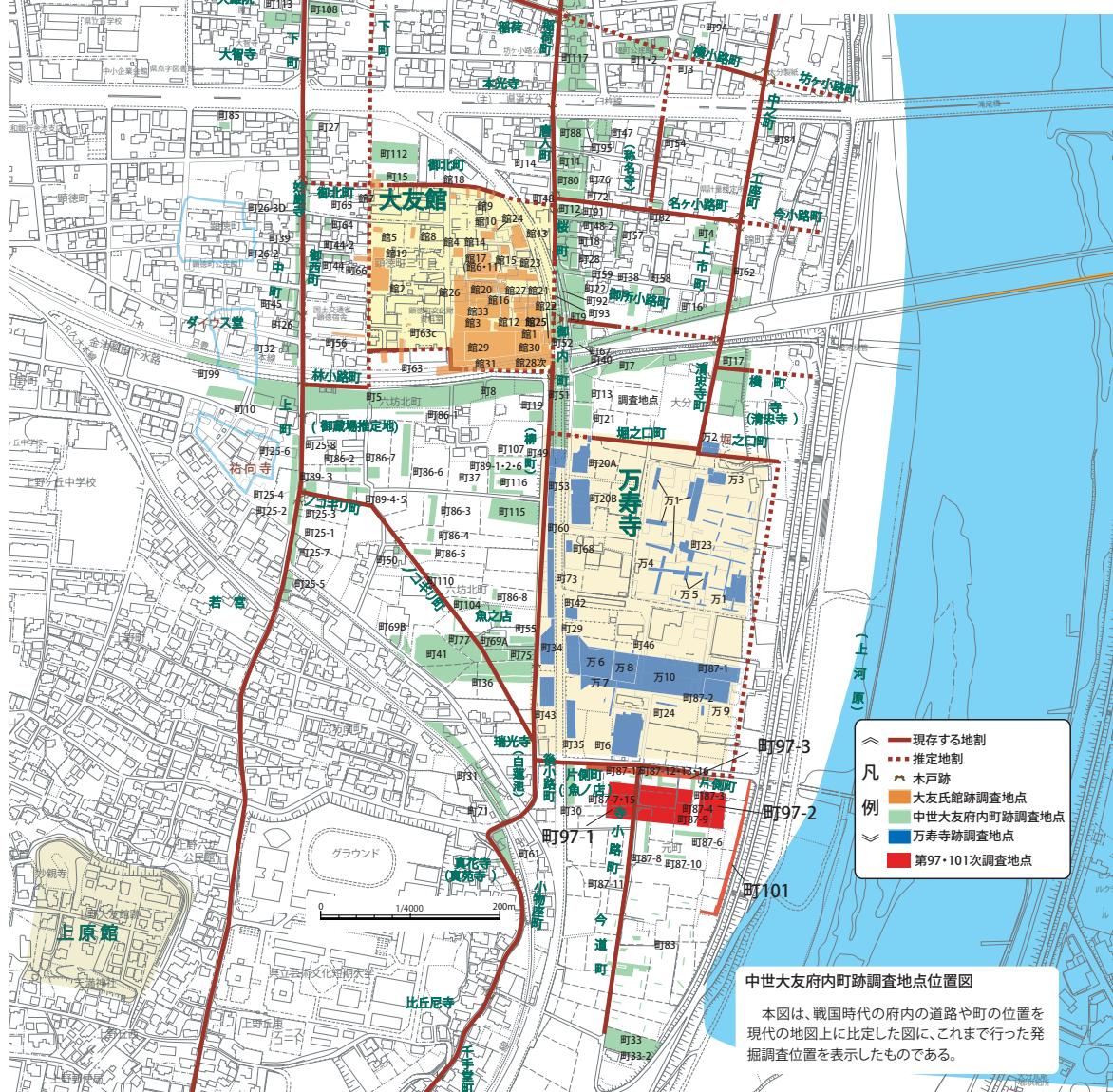
や瀬戸内地域との交流を裏付ける製塙土器などが出土している（大分市教育委員会 1997a）。

古墳時代に入ると、上野台地から庄ノ原台地にかけての丘陵上に前方後円墳である「蓬萊山古墳」（第7図26）が築造される。墳長約60m、両側くびれ部には造り出しをもつ。盾形の周溝を含めると総長約80mとなる。箱式石棺を主体部とするが、棺内遺物は古くに盗掘され詳細は不明である。壺型埴輪が表採されており、4世紀後半頃の古墳と考えられている（賀川 1955、田中 1995・2010）。なお、蓬萊山古墳の周囲には十数基の古墳があったといわれる（富来・杉崎 1975）。近接する台地の南斜面には現在も「田崎古墳群」や「万寿山古墳群」、「深河内古墳」が所在する。未発掘であるが蓬萊山古墳に近接する時期の前期古墳であると考えられている。その後、やや時期をおいて上野台地の東端部で「大臣塚古墳」（第2図15）が築造される。前方部が削平されているが前方後円墳である。主体部は組み合わせ箱式石棺であり、棺内からは人骨・刀等が出土したと伝えられている。表採された円筒埴輪のほとんどに黒斑がみられ、特徴的な幅広の突帯が貼付される（九前研 2000 P334）。中期とする説が有力である（田中 2010）。この古墳は、16世紀後半の府内の様子を描いたとされる「府内古図」にも「大臣塚」と墳丘とともに描かれている。これに続く首長墳は、永興に所在した5世紀後半の前方後円墳である「永興千人塚古墳」（第7図45）である。後円部の一部を残して墳丘部分は全て削平されていたが、周溝の遺存状況から全長約47mの規模で、後円部径は約33m、前方部長が約16mと短い帆立貝形の前方後円墳と考えられている。後円部墳丘上の祠に残されていた凝灰岩製の剝抜式石棺片より、主体部は剝抜式石棺と考えられている（大分市教育委員会 2002）。大分市内の最後の前方後円墳の一つである。次に6世紀後半から7世紀になると永興千人塚古墳の南側斜面部に円墳であったといわれる「弘法穴古墳」（第7図46）が築造される。主体部は横穴式石室である。なお、横穴式石室をもつ古墳は本古墳の他、県指定史跡「丑殿古墳」（第7図40）と国指定史跡である「千代丸古墳」が2km強の間隔を隔てて賀来・宮苑にそれぞれ1基築造されている。上野丘陵南斜面では「南太平寺横穴墓群」（第7図47）が約170mの間に27基ほど所在している他、付近には「岩屋寺横穴墓群」（第7図16）なども知られ、これらの横穴墓群と横穴式石室墳との階層性を窺うことができる。その後、谷を挟んで北側の丘陵に横口式石槨を主体部にもつ12m四方の規模をもつ方墳である国指定史跡「古宮古墳」（第7図11）が単独で築造される。古墳は風水思想に則った四神相応の地に築かれており、被葬者は天武4年（675）に死去した大分君恵足と考えられている（後藤 1982、中西 2011）。

上野台地南側に広がる古国府地域は古代には荏隈郷に属するが、古くより豊後国府推定地と考えられてきた。かつては一辺100m四方の条里状地割を踏襲した水田地帯が広がっていたが、現在宅地化が進んでおり、条里状地割を残しつつも水田地帯は住宅地へと変貌している。それに伴い緊急発掘調査も数多く実施されており、遺跡の状況が判明してきている。しかしながら国府跡に関係する遺構を含め、8世紀中頃～12世紀代の遺構・遺物は極めて少なく、豊後国府の所在については未だ霧中である。ただし律令期以前の段階にあたる7世紀代の大型掘立柱建物群が、古国府遺跡群中の西部にあたる字羽屋・井戸・園の範囲で確認されている（大分市教育委員会 1992・1997b）。この地点では、縄文時代後期の遺物包含層や弥生時代中期、4世紀～8世紀初頭までの遺構が確認されている。さらに、古国府遺跡群第15次調査では、4世紀末～5世紀初頭に比定される一辺が30mの方形に区画された方形区画施設（有力者の居館跡もしくは祭祀施設）が確認されているほか、6世紀末～7世紀初頭のコ字に配置された大型掘立柱建物跡が発見され、豪族らの拠点と考えられるものである。このように古国府地域は、集落の断絶の多い大分市内の中で、古墳時代全時期を通じて集落形成が行われている他、大型掘立柱建物跡の出現も周辺遺跡に比べて早く特異な地域と考えられる（長 2013a）。北側台地上の遺跡である上野遺跡群内では「竜王畑遺跡」（第7図34）が所在しており、7世紀後半から10世紀代にかけての遺構・遺物が確認されている。特に、掘立柱建物跡27棟や築地塀を含む溝状遺構などによって構成された3期にわたる遺構配置が見られる。出土品には、陶硯や綠釉陶器、越州窯系青磁などが出土している。この地域は平安時代後期頃の文献に残される「高（隆）国府」に位置づけられおり、豊後国府の国司館等に関連づけられる遺跡として注目されている。この上野竜王畑遺跡から900m西側には「上野廃寺」が所在する（第7図35）。共同住宅建設に伴う調査で、8～9世紀代と考えられる版築基壇遺構を伴う四面庇の大型礎石建物跡が確認され、古代寺院の



第8図 府内古図（A類）からみた調査区周辺
(玉永 2013より)



第7図 中世大友府内町跡調査地点位置図 (1/8,000)

様相をもつものと思われる。その版築下層より 7 世紀中頃以降の大型掘立柱建物跡が確認された。基壇遺構の西側には多量の瓦類や土師器の坏類が出土している。ここで特記される遺物として百濟系の単弁軒丸瓦と豊後国分寺創建時の軒平瓦、この遺跡独自の複弁七葉蓮華文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦や埴の破片、刑州窯系白磁・緑釉陶器等が出土している。こうした状況から古代寺院の一つである上野廃寺跡の存在が明らかとなった。また、下層の大型掘立柱建物跡の性格についても、竜王畠遺跡群で確認された 7 世紀後半の掘立柱建物跡とともに、国府成立直前の上野台地の土地開発や遺跡の性格を考える上で重要な意味をもつ。なお、『豊後國風土記』には大分郡内において、豊後国分寺・尼寺成立以前に二つの古代寺院の存在が知られていたが、この上野廃寺と上述した永興寺がこの「二寺」を指すと考えられており、これらの寺院の造営主体者の具体的な検討が必要である。

平安時代後期になると、上野台地の南東壁面には平安時代から鎌倉時代にかけての磨崖仏である国指定史跡元町石仏（第 7 図 17）と、県指定の岩屋寺石仏（第 7 図 18）が連なるように彫られている。豊後における石仏は国東半島から豊後の南の方まで分布するが、大分県は全国の約 70～80% を占めている。元町石仏に代表される仏教文化とともに政治的・経済的にも重要な地域であり、古国府～上野丘陵一帯は古代豊後の中枢、地方政治拠点としてきわめて繁栄した地域であったことを窺い知ることができる。県指定史跡岩屋寺石仏の北側台地上には、「上野岩屋寺遺跡」が所在しており、9 世紀中頃と 12 世紀中頃の大規模な掘り込み遺構が確認された。この場所は文献でみられる「高坂横道」に想定される場所でもあり上野岩屋寺遺跡で確認された大規模な掘り込みは、高坂横道の一部である可能性がある。この岩屋寺石仏から三ヶ田町の方向へ直線的に延びる現道は古代官道を踏襲していると思われる。

中世になると、上野台地上では 15 世紀末～16 世紀前の中世に、方形区画をもち御屋敷の字名が残る「上野大友館跡」（第 7 図 14）が形成される。館の状況は高さ 2.5m、幅 17m の土塁がめぐり、幅 10～30m の空堀と西側に曲輪状の張りだしが存在している。内郭の状況は南北 100m、東西 80 m を測るおよそ一町の規模である。また、戦国期の中世府内町の様子を伝える「府内古図」は近世初期に作成されたといわれており、沖積平野部分の元町・顕徳町・錦町一帯、大分川下流左岸の南北 2.1km、東西 0.7km ほどの規模で中世の町屋が描かれており、大友氏館や御蔵場、広大な敷地をもつ万寿寺、キリスト教会であるダイウス堂等が描かれている。平成 8・9 年度に「大友氏館跡」（第 7 図 3）の確認調査と「中世大友府内町跡」（第 7 図 2）として横小路町の町屋の調査（第 1・2 次調査）が行われた結果、「府内古図」に描かれた戦国期の景観は現実のものであることが明らかとなった。平成 10 年度からは大友氏館跡の本格的発掘調査が実施され、平成 13 年度には史跡の指定を受け、現在も確認調査が続けられている。これまでの調査から池を伴う庭園遺構や外郭施設、礎石建物と考えられる巨大な中心建物跡などが確認されている。現時点で中世大友府内町跡は 117 次を超える調査を行っている。戦国時代に九州北部 6 か国の守護として支配権を手に入れた大友氏 21 代当主義鎮（宗麟）の時代を中心に鎌倉時代から戦国時代にかけてのおよそ 400 年間を通じて大友氏は豊後の主として君臨した。しかしながら、第 22 代吉統が文禄 2 年（1593）の朝鮮出兵における失態により、秀吉に徐國されるに至り、中世府内町も終わりを告げることになる。

約 400 年間豊後の支配者として君臨した大友氏の歴史は幕を閉じ、秀吉の直轄領となる。現在の大分市の範囲は、鶴崎が熊本藩、三佐が岡藩、戸次が臼杵藩になるなど小藩領が分立する状況となり、本遺跡の位置する範囲は、府内藩となっていた場所である。その府内藩主となったのが福原直高で、秀吉から城を築くように命じられる。大分川の分流と住吉川が合流する河口部の「荷落（におろし）」と呼ばれていた場所に、城の造営を開始する。約 2 年の歳月を経て、慶長 4 年（1599）に本丸に続き、二の丸と三の丸を完成させ、直高は「荷落」の地名を嫌い、「荷揚（にあげ）城」と名づけた。慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦い後、竹中重利が家康の命で 2 万石の府内城主となり、城づくりは竹中重利に引き継がれる。竹中重利は家康の許可を得て、4 層からなる天守閣を持つ本丸、城主の御殿となる二の丸と北の丸、武家屋敷の三の丸までを完成させる。城郭が完成すると三の丸の外側に碁盤目状に四十余りの町に区画した城下町（府内城・城下町 第 7 図 1）を築造した。こうして、府内城城下町は築城開始から 11 年間を要して完成し、慶長 7 年（1602）に中世府内町の住民を移住させた。これ

により、中世大友府内町を含む大分川下流域の広範囲は用水路の開削による新田開発が進んだことで水田化されることになった。

明治維新以降は、市街地拡大に伴い三の丸外側と二の丸内側の堀は埋め立てられ、さらに海岸の埋め立てが行われた。大正8年(1919)には、大分県庁新築による本丸墨濠が破壊され、昭和20年(1945)の大分市空襲などで古い景観はほとんど破壊されてしまった。

戦後の区画整理においては、城下町区画も大幅に改変され、かろうじて空襲の被害が軽微であった大手町の部、長浜町付近の区画が城下町の町割りをほぼ踏襲している。現在の中央町、大手町、府内町、都町などは戦後の戦災復興とともに区画整理事業で江戸時代の面影を失ってしまう。さらに昭和38年に施行された新地番表示により、城下町内で使用されていた47の町名も変更され、公式には使用されなくなった。

現在は大分市街地の中心と江戸時代に大給松平氏22,000石の城下町と重なっており、前述の太平洋戦争末期の空襲による被災や近年の都市再開発により城下町の面影を偲ばせる景観がほとんど失われてしまっている。さらに中世大友府内町であった場所は、一部に水田や畠地が残るものの大半が宅地化され今日に至っている。(池邊千太郎)

第3節 調査地点周辺の調査状況と課題

前章にて述べたように、本調査区周辺では複数の隣接調査地が存在する(第3図)。ここでは、重複する地点を調査した町87次の概要を主に周辺調査成果を整理し、対象地点の調査課題をまとめておく。

(1) 町87次調査概要

調査では「府内古図」に描かれた五重塔の確認を主目的に、万寿寺境内南面の畠地と、万寿寺境内内部にトレンチを設定し調査を行った(大分市教育委員会2010a)。

調査の結果、以下の6点を確認した。

- ① 万寿寺から南北方向に延びる最大幅14mの道路を確認。
- ② 道路の東西には前面に柱穴の列、奥には大型の遺構(井戸やゴミ穴)を確認。
- ③ 塔跡に付随するような土壇跡や基礎となる土木作業痕跡は確認できず、調査範囲内では五重塔が建立されていた痕跡はない。
- ④ 万寿寺に最も近い南北道路の東側部分(5区~12区)の東西40m・南北40mの一角は、周囲と比較して柱穴や大型の遺構が極めて少なく、戦国時代の万寿寺が建っていた頃(16世紀後半)は空閑地であった可能性が高い(第9図)。
- ⑤ 町屋の裏手で南北方向にのびる「落ち」状の傾斜部分を確認。
- ⑥ 14世紀~16世紀代の中国産陶磁器や土器、五輪塔の他、14世紀~16世紀代の瓦や埴が多く出土した。
また、発掘調査では珍しい鉄釜や青銅製燭台、高麗青磁墩などの希少な遺物が出土した。

②については、「町屋」前面部分はほとんどの遺構が柱穴に限定され、これらの多量の柱穴は町屋前面部分を構成する建物痕跡と考えられる。また、背面には井戸や廃棄土坑の存在が確認されている。「町屋」背面部分となる道路より20m奥になると遺構密度が全体に希薄になる。

④の「空閑地」は14世紀の井戸や土坑、16世紀中ごろの大型遺構、そして16世紀末の大型遺構が展開する。16世紀末の遺構の一部は、万寿寺が全焼した天正14年(1586)の島津侵攻に前後する時期に相当し、年代決定が難しいものもあるが、南北道路を挟んで西側で調査した7・15・17トレンチや空閑地南側の8トレンチなどと比較して、遺構密度が低く整地痕跡も確認できない。これらのことから、万寿寺南側前面のなかでも生活痕跡が明瞭ではない「非町屋空間」としての空閑地であるととらえた。

なお、遺構が「無い」という事象については、近世の水田耕作や水係りの関係で周囲の地形が大きく改変されている可能性も考えられた。そこで検出した南北道路より約70m西で調査された町30次調査の成果をもとに、

遺構の削平度合いについて確認を行った結果、「空閑地」周辺の調査地点の遺構検出面は16世紀後葉段階の地表面が比較的維持されている可能性が高いとの結論に至り、このエリアには当時から遺構が少ない地点であることを再確認している（大分市教育委員会2010a p33～35）。したがって、万寿寺南側前面の角地という好立地にありながら生活痕跡や建物痕跡をもたないこの空閑地は、なんらかの意図・目的をもつ空間として評価できると考える。

⑥の地形の「落ち」と考えられる窪みは、平均的な遺構の検出面（L = 5.0 m前後）に対して深さは0.3～0.5 m程度でレンズ状に窪んだ形状であり、土層上でも明瞭な立ち上がりは確認できない。また部分的な確認ではあるが、溝底にも起伏があり、推定平面プランは蛇行したような形状となる。規模は東西幅10～15 m程度となり、この緩やかな「落ち」部分を境に東西で遺構の展開が異なっている。「落ち」は下層で検出される遺構が15世紀末～16世紀前半、埋没後に形成された遺構の時期が16世紀後半であることから、16世紀中頃～後に埋められたと考えられる。

（2）調査対象地域における調査成果

町87・83・33・30次の調査成果を総合すると以下のようなことが明らかとなっている（大分市教育委員会2010b）。

① 16世紀後半の万寿寺南面には「片側町」「寺小路町」「今道町」を構成する町屋が展開する。

- ・万寿寺南面には7～14 mの幅員をもった南北道路が存在し、およそ300 m分が確認されている（町87・83・33次）。
- ・南北道路は万寿寺に向かって北側に緩やかに傾斜し東西道路と交わる「T」字路になることが想定される（町87・30次）。
- ・東西道路、南北道路に面して多量の柱穴が幅約10 mの範囲に濃密に分布しており、町屋を構成する建物の存在が想定される（町30・87・83・33次）。
- ・柱穴の背面には大型の廃棄土坑や井戸跡が形成される（町30、87・83・33次）。
- ・廃棄土坑や井戸跡のさらに奥には、背割り状の溝や遺構自体が極めて希薄になる「町のはずれ」ともいべき空間が把握される（町83・87次）。

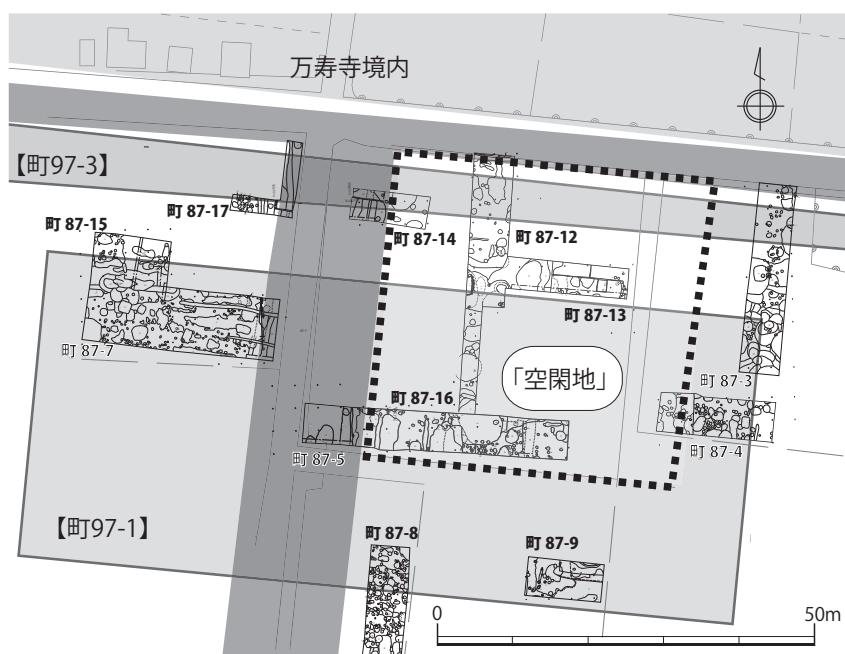
・万寿寺前面の「T」字路東側
角地には「空閑地」と考えられる遺構の希薄な場が存在する（町87）。

② 16世紀後半以前は遺構・遺物が少なく、場の性格は明確ではない。

- ・万寿寺前面や調査地点全体に14～15世紀代の遺構遺物がまばらに出土する（町83・87）。
- ・14世紀代の土師器供膳具類を多量に含む廃棄土坑が複数形成される（町30次）。

（3）調査対象地区における課題

- 町屋景観の具体像の解明。
- その町屋的な景観がいつまでさかのぼるか。



第9図 万寿寺南側面の空閑地図 (1/1000)

の2点に集約される。具体的には

建物プランの復元

100地点を超える中世大友府内町跡の調査のなかで、町屋の構造的具体像が明らかにされたものは意外に少ない。特に町屋を構成する建物構造については、礎石説・転ばし根太説などの遺構として残りにくいものであるとの説や、ピット群の存在から掘立柱建物跡で構成されるとする説など諸説ある状況であり、豊後府内の町屋景観の復元を進める上で大きな課題となっている。

これについては多くの調査地点において一度に調査する面積が狭小なため、調査中に現れる夥しい数の柱穴群から掘立柱建物プランを抽出する作業を困難にさせているという現状があり、各説を生む要因の一つとなっている。

調査対象地には道路痕跡とこれに面して展開する柱穴群が確認されており、建物プランの検討を十分に行い、豊後府内の一般的な町屋景観の復元を行う必要がある。

土地利用の変遷過程の追求

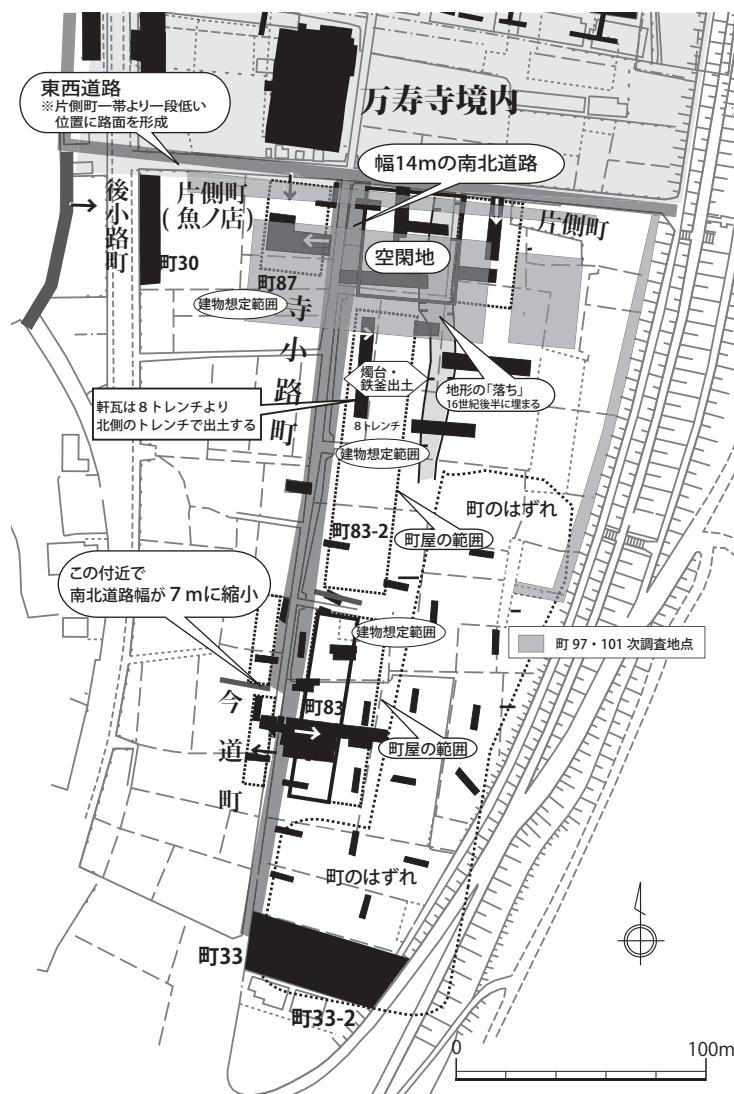
府内で検出される遺構の大部分は歴史的にも豊後府内の最盛期とされる16世紀後半～末に帰属することは明らかであるが、万寿寺前面の道路の形成時期がどこまでさかのぼるか、あわせて、廃棄土坑がいつから展開するのか、どちらも土地利用の「場」の変遷を追う上で重要な遺構であり、十分な層位的な検討を加えながら把握する必要がある。

あわせて、万寿寺前面に位置する町屋であることから町屋の性格づけについても多面的に考える必要がある。町87次調査では五輪塔の部材や14世紀～16世紀代の軒瓦や雁振瓦を含む瓦類や塼などが周辺の町屋域と比較して多く出土した他、青銅製燭台などの仏具関連資料が出でている。特に「寺小路町」とされる万寿寺に程近い地点（8トレンチより北側）に関しては、万寿寺南側の「今道町」周辺の調査（町83・33次）と比較しても瓦の出土が目立ち、五重塔などの大型多層建造物とは異なる寺院関連施設があった可能性がある。7・15トレンチでは、高麗青磁墩や青磁太鼓胴盤、青花の鉢、青磁大盤などの優品が目立っており、万寿寺に最も近い位置の生活空間としてその性格についてはより多元的に考える必要がある。

五重塔の行方

町87次調査地点では確認することができなかったが、まだ調査が及んでいない地点に存在するのか、そもそも塔は建立されなかったのか、もしくは空閑地であったエリアと推定位置が重なることから、建立予定地であったが建てられなかったのかなど、さまざまな可能性が考えられる。以上が調査対象地区における調査課題である。

（長直信）



第10図 16世紀後半の万寿寺南側の調査概要 (1/3000)

第Ⅲ章 調査・整理の方法の検討

第1節 調査の方法

(1) 調査方針 97次調査地点は 5792.6 m²を対象に実施した。開発区域が分散していたことからそれぞれ 97-1 (3768 m²)、97-2 (1178.6 m²)、97-3 (846 m²) に区分けした。97-1 は最も調査面積が大きく、遺構番号数が膨大になることから、調査区中央西で検出した南北道路 97-1SF100 を境に道路部分を含む西側を 97-1、東側を 97-1E (East の略) として呼び分けを行い、それぞれに遺構番号をふりながら調査を行った。97-1 と 97-1E に区分けすることで東西約 100 m もの巨大な現場の遺構管理が容易となり、効率的な調査・整理ができたと考える。

前章で述べたように、既存の調査・報告成果から、97次は道路・ピット群・大型土坑群が展開する町屋的な場であったことが明らかにされている。調査計画では、この町屋的な場のおよそ 5800 m²もの面積を「一挙に」調査する計画であったことから、各種の課題を解決できる極めて希有な機会と考えた。したがって調査に際して以下の点を調査の課題にあげ、解決方法を模索した。

具体的には、

- ①町屋の建物構造や建物プランに不明な点が多いことから、調査時に道路状遺構に近接する地点のピット群を中心に掘立柱建物プランを検討し、柱痕のサイズや、柱痕がどこまで地中にあるかを記録する。
- ②土坑の形成過程や遺物の出土状況を把握するため、土層観察を入念に行う。具体的には『大分市埋蔵文化財発掘調査指針』にのっとり、掘り返しの認定や各層ごとの遺物の帰属を明らかにし、土坑の形成過程やその性格を検討する。さらに一部については、土壤分析を交えながらその性格を検討する。また、遺構検出時の情報（= 遺構の切り合い関係や埋土の情報）を記録した遺構配置図を作成することにより、同一地点で重層的に形成される遺構群の重複関係を平面情報としても把握する。
- ③16世紀中葉以前の遺跡の性格を明らかにするため、建物遺構や溝・井戸、土坑の帰属時期を明確にし、時期ごとの遺構配置を検討する。

(2) 遺構番号について 97-1E 含めて 97 次調査では調査区を 4 つにわけ、それぞれ S-1 から遺構番号を付して調査を行った。遺構番号の付与は、『大分市埋蔵文化財発掘調査指針』に基づき、遺物が出土した遺構を対象に行い、調査時点で報告書掲載遺構と判断される主要な遺構については 5 の倍数の遺構番号を付した。

なお、97-1、97-1E については、1 面目に相当する調査当初の遺構検出面を完掘後、2 面とを考えられる遺構面を調査した際には、遺構番号の混乱をさけるため、2000 番代 (S-2000 ~) の遺構番号を付した。さらに、調査最終段階において、委託の仕様を超えた部分に対して直営で調査した地点については同様の理由から 3000 番代 (3000 番 ~) の遺構番号を付与している。

第2節 報告書作成の方法

今回の調査では、コンテナ 412 箱分（写真 9・10・12）とコンテナには収まらない約 400 点の大型石製品・石造物が出土した（写真 13・14）。コンテナは内寸 0.653 m × 0.401 m × 0.148 m で容積は約 0.4 m³となるやや大型のサイズである。大分市が過去調査した中世大友府内町跡の調査面積のなかでも突出した規模をもち、大分市の発掘調査史上でもトップクラスの遺物と遺構の量をもつ。さらに数十棟の掘立柱建物跡や東西、南北の道路遺構、廃棄土坑などの大型遺構が複雑に重複して展開していたこともあり、通常の都市遺跡と比較しても調査・整理段階の難易度は極めて高いものであった。

上記の目的を一定程度達するために報告書作成にあたっては、①報告遺構の吟味、②遺物選別、③遺物接合・注記、④遺物実測という流れを基本に第 1 表に示す工程で作業を行った。遺構の吟味については、遺構図の重複関係、掘立柱建物跡の検討、主要遺構の選定の 3 項目を主に検討を行った。

第1表 報告書整理作業工程

項目	内容	平成24年度						平成25年度										
		~11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
発掘	発掘調査																	
遺物 整理	遺物洗浄 委託外の遺物洗浄・接合・注記																	
	遺物選別																	
	97-1E区																	
遺構整理	遺構図整理																	
委託	遺物実測（委託） 鉄器保存処理（委託）																	
項目	内容	平成26年度																
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月					
遺物 整理	遺物選別 銅錢分類																	
	遺物実測																	
遺構整理	遺構図整理																	
版	遺物区分組 遺構区分組																	
委託	遺構図整理（委託） 遺物実測（委託） 土壤分析（委託） 鉄器保存処理（委託）																	
項目	内容	平成27年度																
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月					
遺物 整理	遺物実測 鐵製品選別 瓦類選別・計測 土種選別・計測 遺物選別（掘立柱建物出土遺物） 遺物区分組																	
版	遺構区分組 報告書レイアウト 報告書区分組																	
表	出土遺物一覧表入力 遺物類別表編集 遺構原稿作成																	
原稿	遺物原稿作成 その他の原稿作成																	
遺構 整理	遺構図整理 掘立柱建物整理																	
印刷	校正 印刷																	
委託	鉄器保存処理（委託）																	



なお、本報告書中には、遺物が掲載されていない個別遺構や、遺物は掲載したが頁の都合上個別遺構図が掲載されていないものもある。限られた整理期間・体制・報告書頁数のなかで、膨大な遺構・遺物をいかに効率的に整理し、「遺跡の総体」を提示するかを考え、膨大な未図化遺物や遺構情報については、①巻末の「遺構出土遺物一覧表」による報告書掲載遺構出土遺物の記号化、②同一型式の遺物の法量計測表（土錐類）、③石製品・金属器（鉄釘）台帳を作成、掲載することで対応した。これらの表掲載遺物や遺構出土遺物一覧表掲載資料については、図化掲載資料と同様に閲覧可能な状態で保管している。

（1）遺構

前節でのべたように、調査時において掘立柱建物跡の検討を十分におこない、調査終了後も遺構図の再検討をするなかで建物復元を行った。また、土坑については、多くが性格不明なものであることから形状のわかるものは極力個別図を作成し掲載した。遺構検出における遺構の重複が著しいものも多く、個別図の掲載にあたっては検出時点の平面的な遺構の重複図を併記したものもある。複雑な遺構の重複関係をもつものや埋土の状況については土層模式図を併記し遺物がどの層に帰属するものであるのかを極力明確にした。

調査時及び整理報告時において①掘立柱建物の検討、②南北道路（97-1SF100、97-3SF200）・東西道路（97-3SF490）の土層整理と解釈、③調査区壁面土層と遺構面の整理、④多量の遺物が出土した97-1ESK020の調査と整理の4点については、多くの時間をかけた部分である。

（2）遺物

種類ごとの整理方法を述べる。

- 大型石製品 膨大な石製品の整理は直営作業にて実施した。屋外において台帳を作成し実測可能な遺物を選別した。
- 金属製品 鉄製品・銅製品にわけ、さらに鉄釘や銅錢を除く実測可能な遺物を選別した。鉄釘は多量に出土したことから、図化は代表的なものに絞り、その他のものは小型・中型・大型に分類し、それぞれの数量を表にした。銅錢については、拓本が可能なものについてはすべて掲載した。
- 土錐 多くの土錐が出土したが代表的なものを一部図化し、それ以外は、大型・小型に分類し重量・法量計測したものを表にした。
- 瓦類 軒平瓦・軒丸瓦・埠・平瓦・丸瓦・雁振瓦・鬼瓦数点を含む多量の瓦がコンテナ197箱分出土した。鬼瓦については全て、軒瓦についても概ね全てを図化・掲載したほか、遺存率の高い平・丸瓦、雁振瓦も図化・掲載した。その他の瓦類については、まとまった量の瓦が出土した遺構にしづらて各種類の瓦ごとのコンテナ数を換算し、量の提示に努めた。
- 土器・陶磁器類 遺跡を歴史的に位置づける際に必要な情報（時空間軸上有用なもの）を有する遺物を抽出することが前提であるが、遺構の時期認定資料のほか、土器・陶磁器類のうち、記号化可能なものの多くを台帳化した。本調査区全体で14～15世紀代の遺存率の高い土師器坏Aが16世紀代の遺構に多く混入する事例が多くみられた。坏Aや小皿Aの土器編年は確立されたものではなく、また、遺跡形成期の様相を示す重要な遺物であることから遺構の帰属年代に関係しないものについても積極的に図示している。
- その他生産関連遺物である坩堝や土器を坩堝に転用した資料、板状砥石、火打石など記号化が難しい資料は積極的に図化した。なお、火災処理土坑に代表される一括性が担保できる資料については、図化可能な遺物全てを報告するように努めた。

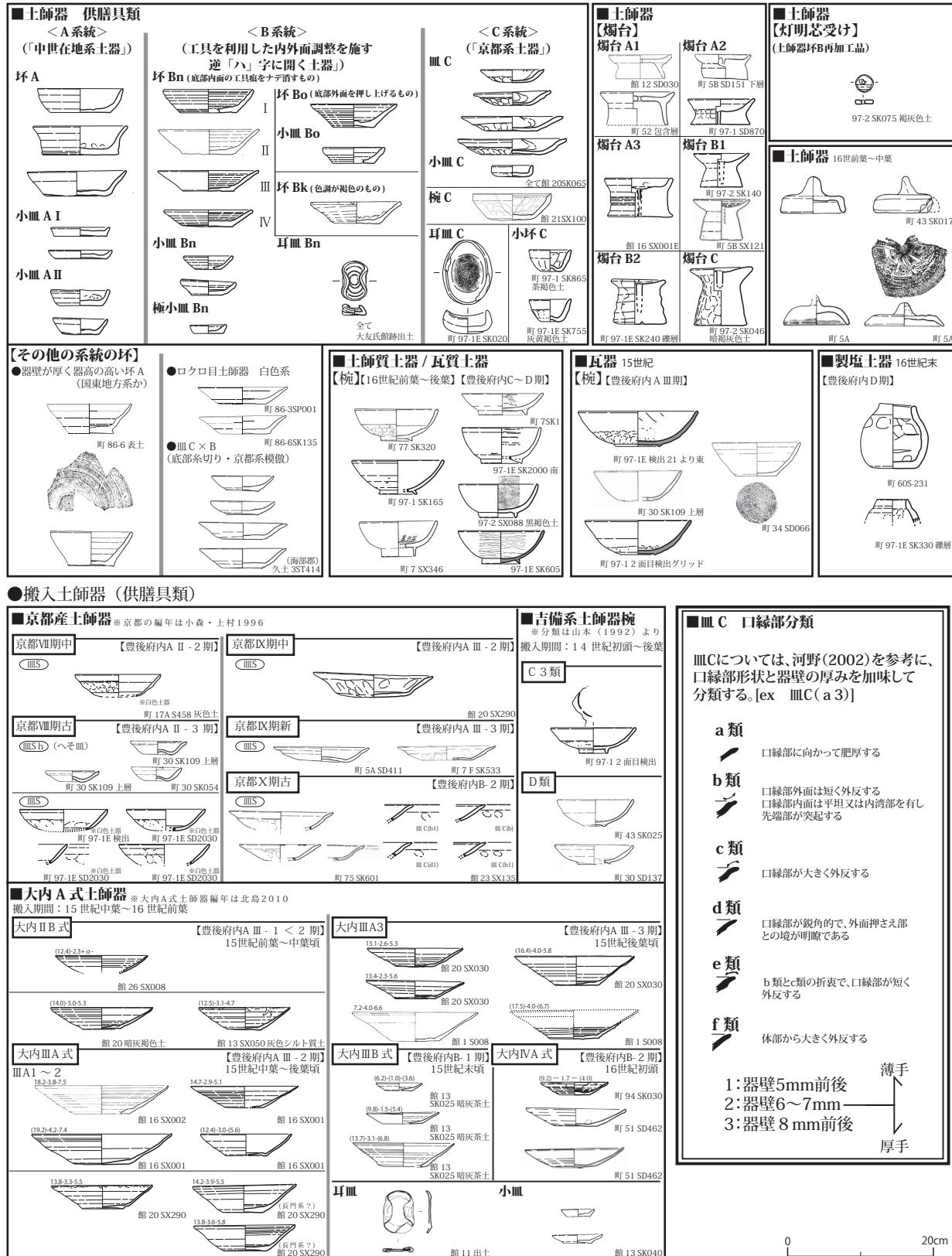
第3節 出土遺物の分類と編年

「遺構出土遺物一覧表」中の在地土器の分類は、『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針』別紙26に示す遺物分類をもとに作成された『大友氏館跡1』「第III章 第2節 大友氏館跡出土の遺物分類と時期区分について」（長2015a）に提示した内容に基づくが、中世大友府内町跡は大友氏館跡の上限年代である14世紀後半をさかのぼる14世紀初頭から遺構の形成が確認される。ここでは、97次調査出土遺物を読み解く為の基礎となる遺物分類を97次調査出土資料で一部補強するとともに、遺構論の前提となるタイムスケールについて現状の試案を提示する。

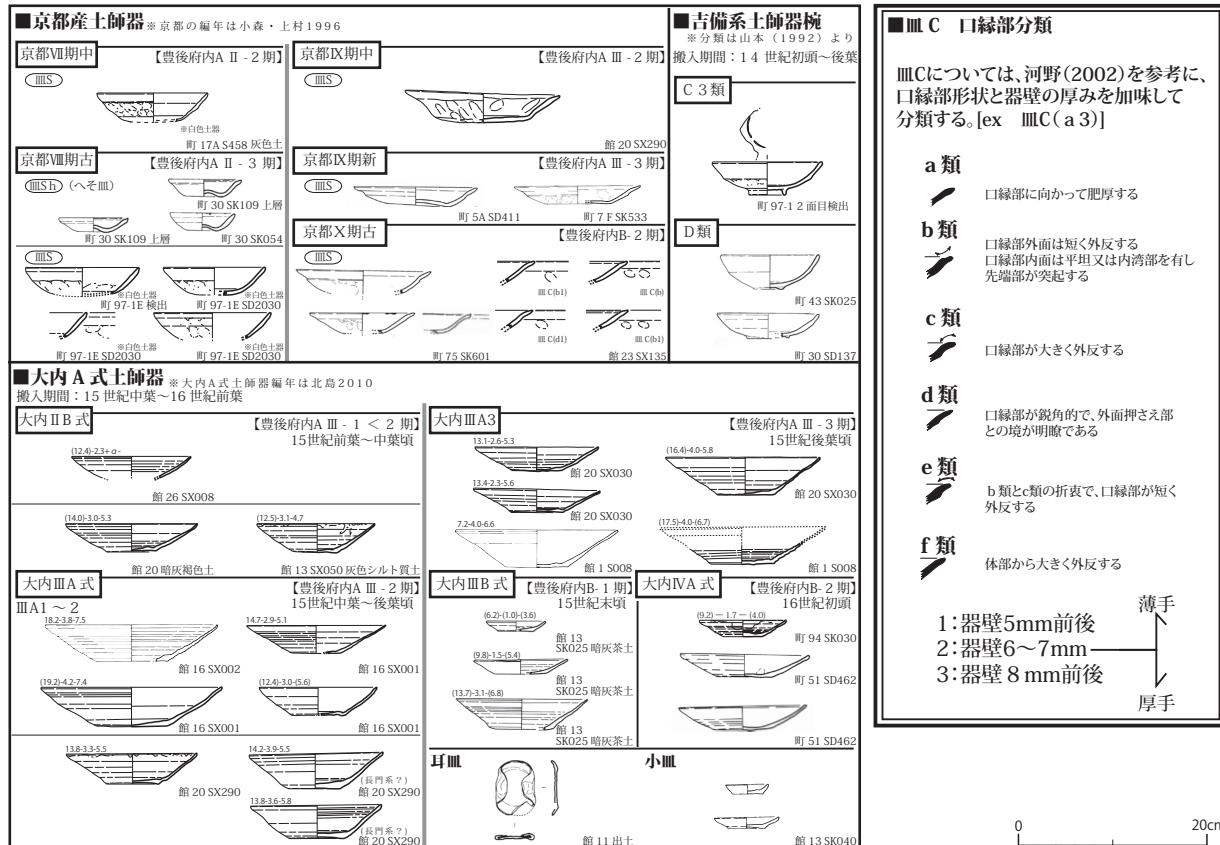
（1）遺物分類

長2015aでは、在地産と考えられる中世大友府内町跡の出土遺物の主体をなす土器類を中心に、14世紀前後～16世紀末頃までの土器群の器種・形式分類を試みた。これに97次出土遺物の様相を示す上で必要な資料を加え第11～16図に示した。広域流通品、陶磁器等の分類については以下の文献の分類、年代観を用いて報告を行っている。

●在地の土師器（供膳具類等）

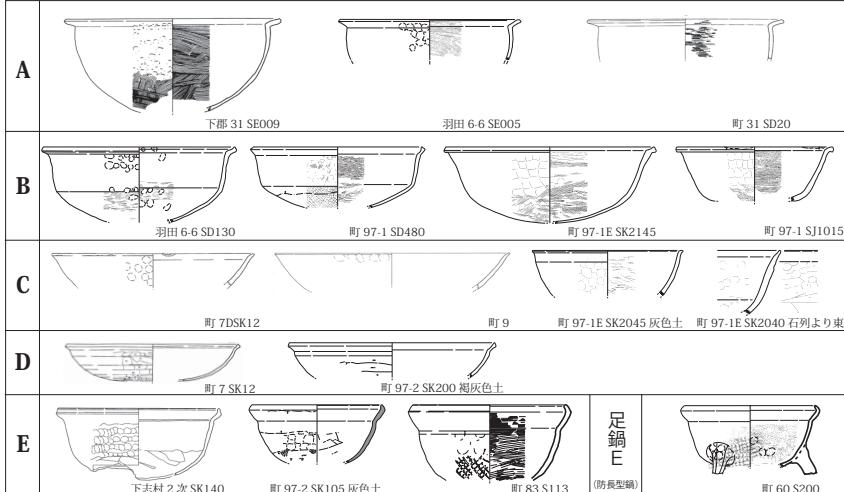


●搬入土師器（供膳具類）



第 11 図 土師器供膳具類等分類図 (1/8・1/6)

■土師質土器鍋(1/15)



<鍋>煮炊きに使用したと考えられる土器群。

鍋 A: 半球形の体部をもつもので、口縁部を「く」字に外反させる。山本哲也氏の分類の A 類にあたるもので、

古代の土師器甕を系譜と想定されている（山本 2009 p140）。[時期]12世紀後半～13世紀頃（A1-2期）

鍋 B: 半球形の体部をもつが、体部下半で屈曲し、口縁部は「く」字に外反して端部を上方に摘み上げるもので、鉄鍋模倣と考えられる鍋である。

体部外面下半には格子目タタキを施し、内外面には強いユビオサエおよび細かなヨコハケ調整を行うものが多い。口縁部形態より細分が可能であるが、型式を認定するまでの属性的検討が不十分であることからここでは大きく鍋 B として一括する。山本氏の鍋 B 類にあたる。また、岩崎氏の「西長門型鍋 a」と同形式と考えられる（岩崎 2007 p53）[時期]14世紀初頭～15世紀末頃（AII-1期～B-1期頃）

鍋 C: 直線的な体部をもち口縁端部が外反、外面に強いユビオサエ痕跡を明瞭に残す鉢形の土器である。厚手で他の鍋と比べて胎土も粗い。

粗いヘラミガミを施すものもある。当該期の主体となる鍋ではなく、出土事例は多くない。底部を含めた全形のわかる資料は知られていないが、形態的には鍋 B からの型式変化の可能性がある。河野氏分類の鍋 C 類である。[時期]16世紀後葉～末頃（B-2期～D期）

鍋 D: 玉縁状の口縁部に外面へラ削り調整を行う鍋である。深手のものと浅手のものがあるが時期差を示すものではない。玉縁が大きなものから小さなものへ、へラ削りを行うものからユビオサエのみのものへという変化の方向性が想定されている（河野 2001）が今後の検証が必要である。

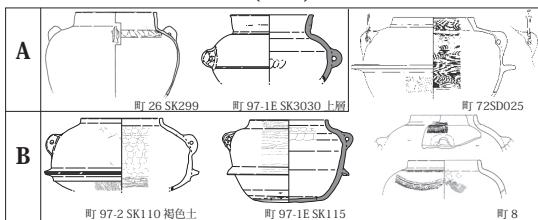
河野氏分類の鍋 B 類である。[時期]16世紀後葉～末頃（B-2期～D期）

鍋 E: 半球形の体部に「く」字に外反させた口縁端部をもつもので、口縁端部内側を上方に強く屈曲させる。体部下半には格子目タタキを施す。

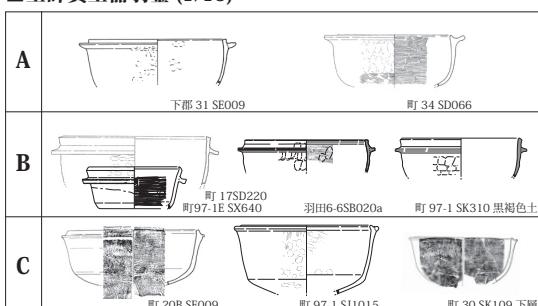
鍋 B 同様、鉄鍋を模倣した器形である。いわゆる防長型の鍋であり、変化の方向性も口縁端部の形状等から検討されている（岩崎 2007 など）。府内では客体的にしか出土しない。河野氏分類の鍋 A 類である。なお、これに足のついた資料については足鍋 E として分類する。

[時期]15世紀中頃～16世紀末頃（AIII-2～D期）

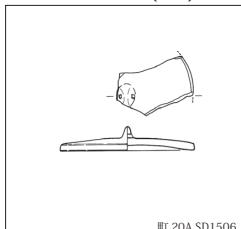
■土師質・瓦質土器双耳釜(1/15)



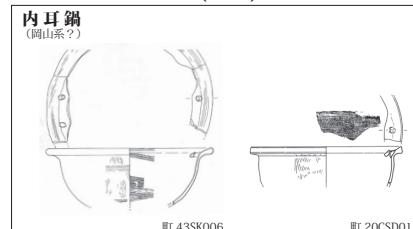
■土師質土器羽釜(1/15)



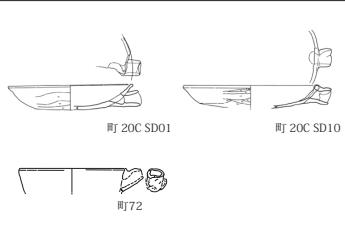
■瓦質土器 蓋(1/6)



■その他の煮炊具類(1/15)



■土師質土器把手付鍋(1/15)

**把手付鍋**: 体部にソケット状の把手を附加させたもので、中華鍋の模倣品との見解（岩崎 2003）がある。体部の浅いものと深いもので分類できそうであるが、府内での出土例は多くはない。

[時期]16世紀後半～末（C-2～D期）

第 12 図 土師器煮炊具類分類図 (1/15)

■輪花型火鉢(1/15)

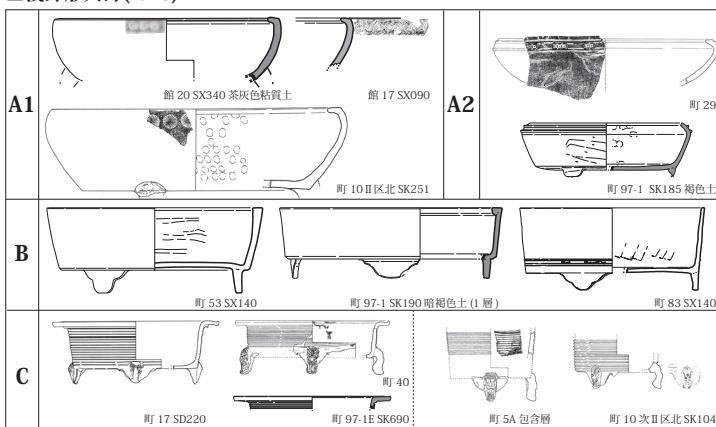


<輪花型火鉢>平面花弁形を呈する浅鉢形の火鉢である。

体部は直線的で外面には菊花紋などのスタンプが2~3連施される。

[時期]14世紀初頭~14世紀末頃 (AII-1~AIII-1期)

■浅鉢形火鉢(1/15)



<浅鉢形火鉢>口径が器高より大きいものが相当する。

全て有脚で、形態はバラエティーに富む。

浅鉢形火鉢 A: 内湾する体部をもち、円形で口縁端部が逆「L」字に内傾する。体部形態やスタンプの種類・施文方法により細分できる。

浅鉢形火鉢 A1類: 半球形の体部をもつもの。菊花紋などのスタンプが2~3連施される。[時期]15世紀中頃か (AIII-2期)

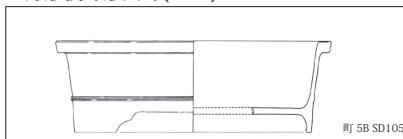
浅鉢形火鉢 A2類: 脊部最大径が口縁下半にあるもので、二条の帯状の中に連続スタンプ文が施される。[時期]15世紀後半頃~16世紀末頃か (B期~D期)

浅鉢形火鉢 B: 直線的な体部をもつ平面円形のもので、口縁端部が肥厚するもの、逆「L」字に内傾するもの、器壁が薄いものなど多様な形態がある。概ね同時期に盛行するものである。[時期]16世紀代 (C~D期)

浅鉢形火鉢 C: 直線的な体部をもつ平面円形のもので、口縁端部は、逆「L」字に外反する。体部には銅製仏具を模倣したと考えられる線状のシャープな調整が施され、獣面の脚部をもつ金蔵器を忠実に模倣した火鉢である。豊後府内型の可能性のある資料である (吉田 2011)。[時期]16世紀後半~末か (C-2期~D期)

方形浅鉢形火鉢: 直線的な体部をもつ平面方形のもので、口縁部は厚く逆「L」字に外反する。器壁が薄いものなど多様な形態があるが、浅鉢形火鉢 B と概ね同時期に盛行するものである。[時期]16世紀代か (C~D期)

■方形浅鉢形火鉢(1/15)



<深鉢形火鉢>器高が口径より大きいものが相当する。

深鉢形火鉢 A: 体部が直線的でやや開き、口縁部が肥厚するもので、二重の突帶、台形状の脚をもつ。口縁部と底部付近にそれぞれ突帶とスタンプ文を施すものもある。出土事例がもっとも多い火鉢である。

[時期]16世紀代 (B~D期)

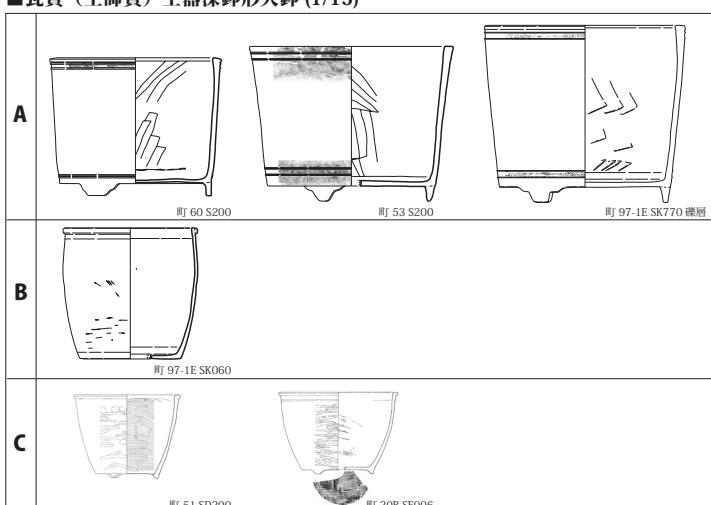
深鉢形火鉢 B: 体部最大系が体部中央にある樽型のもので口縁部は玉縁に仕上げる。突帶などの装飾は少ない。

[時期]16世紀代か (B~D期)

深鉢形火鉢 C: 体部が直線的に開くバケツ形のもので、内外面に粗いハケ調整を残す。

[時期]16世紀代か (B~D期)

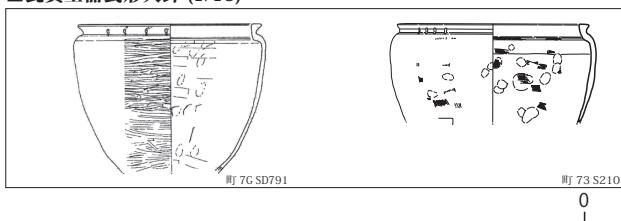
■瓦質（土師質）土器深鉢形火鉢(1/15)



<甕形火鉢>

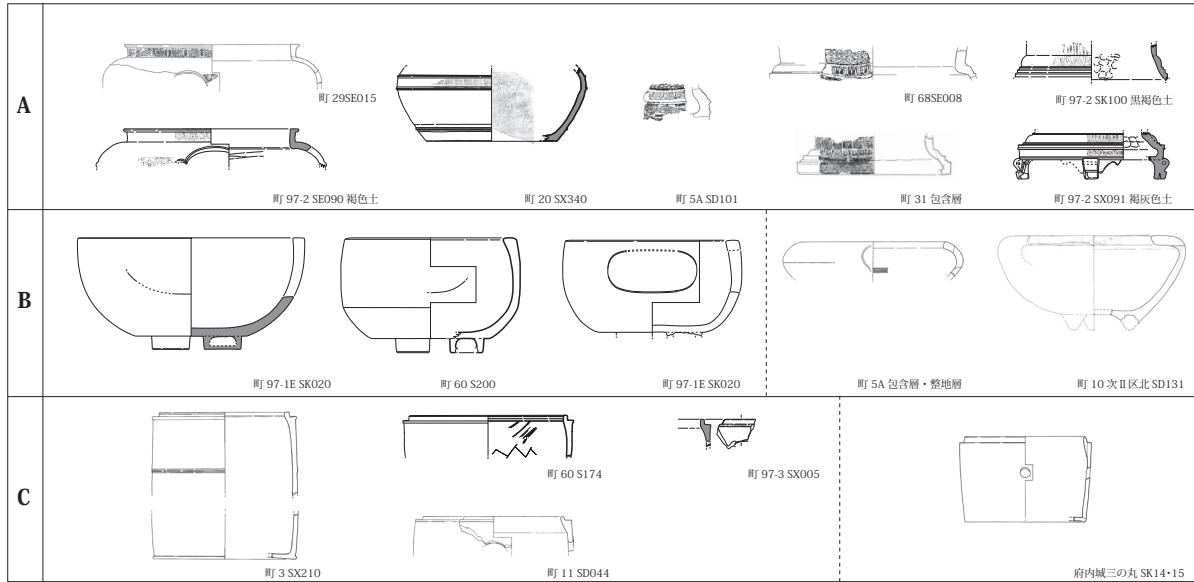
脛部上位に最大径をもち、肩が張り出す甕形のものが相当する。口縁端部は外側に肥厚し、口縁部は短く直立する。有脚の器種である。豊後府内では出土量の多い器種ではなく、細分は行っていないが、甕形火鉢については山口県内の資料を対象とした藤原彰久氏の研究があり、分類が試みられている (藤原 2005)。形態的には山口県内出土のものに非常に類似する。

■瓦質土器甕形火鉢(1/15)



第 13 図 火鉢類分類図 (1/15)

■瓦質土器風炉 (1/15)



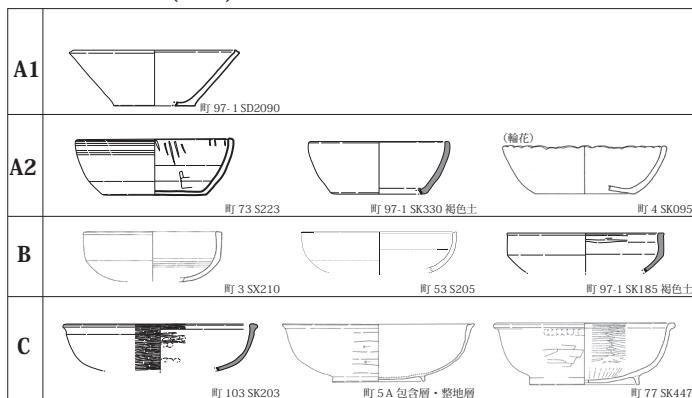
<風炉>体部に窓をもち、器高が口径より大きいものが相当する。装飾性の高いものが多い。湯沸しとして用いられたいわゆる「風炉」とされる形態をもつものであるが、風炉Cは透かしの存在から風炉としての機能が類推されることからここに含めた。

風炉A: 短く立ち上がる口縁部に球形の体部をもち、加飾された台部が付属するものである。体部には雲形などの透かしを施す。全形のわかる資料は出土していないが、口縁部片や台部の資料が確認されている。 [時期]15世紀～16世紀前半頃か (AIII-1期～B期)

風炉B: 内湾する器壁の厚い体部をもち、半月状ないし楕円形の透かしを施すものである。脚部は円柱状のもので中空のものと中実のものがある。体部の内湾形状には半球形のものや、ソロバン玉形などがあり、形によって細分可能であるが、時期差を示すもののかの検証は行っていない。内外面は丁寧なミガキ調整を施す。土師質焼成のものがほとんどである。 [時期]16世紀後半～末 (D期)

風炉C: 深鉢型火鉢 A類に類似する直線的な体部をもつものが相当する。口縁部端部は短く直立する。全形のわかる資料は少ないが、同一口縁部の碎片に雲形?の透かしをもつものがあることから風炉として分類した。内外面は丁寧なミガキ調整を施す。立石氏の風炉IIIに相当する資料である。土師質焼成のものがほとんどである。なお、近世府内城・城下町では18世紀中頃の一括資料中に類似形態の資料が確認できる(大分県教育委員会1993 p252)。関西地方では16世紀末～17世紀初頭頃に確認される遺物である。 [時期]16世紀後半～末(D期)

■瓦質土器捏鉢 (1/15)



<捏鉢>火鉢としての使用も考えられる「鉢」形の瓦質土器である。

捏鉢A-1: 体部が直線的でやや開くもの。口縁端部は四角く收める。土師質焼成のものがほとんどである。

[時期]15世紀頃～(AIII期)

捏鉢A-2: 体部が内傾気味になるもので、口縁端部は丸味をもって收める。内外面には丁寧なミガキ調整が行われ、堅緻に焼成されているものが多い。口縁部が輪花状になるものもある。

[時期]16世紀後半～末頃 (C期～D期)

捏鉢B: 全形のわかる資料は知られていないが、丸底気味の底部をもち、体部中央から直線的に屈曲する。口縁端部は方形に面取りする。内外面には丁寧なミガキ調整が行われ、堅緻に焼成されているものが多い。土師質焼成のものがほとんどである。

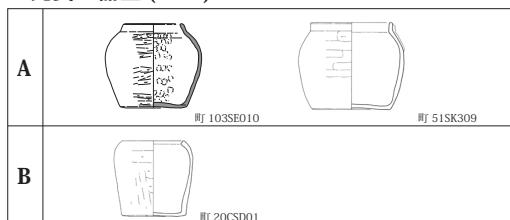
[時期]16世紀後半～末頃 (C期～D期)

捏鉢C: 鍋Dに類似する体部が「S」字に外反し、玉縁口縁となるものである。外面に鍋Dに酷似する粗いケズリを施すものもあるが、体部内外面にはミガキ調整が施され、高台がつくものがほとんどである。高台を持つ点、外面に煤がまったく付着しない点で形態・用途とも鍋Dと大きく区別される。

これらの土器は鍋Dとともに近年まで宇佐市大字高村で生産された通称「高村焼」とよばれる焙烙、および捏鉢に類似する。高村焼の考古学的な上限は18世紀頃とされているが(小柳1995、吉田2001など)形態的な類似性からみて高村産とは断定できないものの、祖形的な土器である可能性がある。

[時期]16世紀後半～末頃 (C期～D期)

■瓦質土器壺 (1/15)



<壺>「壺」形の瓦質土器である。

壺A: 短い頸部をもち、体部半部に胴部最大径をもつ壺である。外面には粗いヘラケズリ調整、内面はユビオサエ調整を明瞭に残す。

[時期]16世紀後半～末頃 (C期～D期)

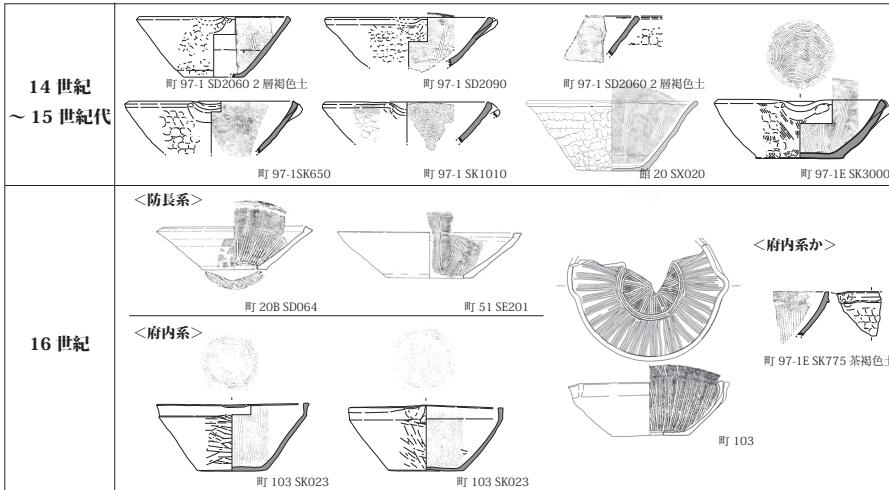
壺B: 無頸となる壺である。類例が少ないが、壺Aと同様、外面には粗いヘラケズリ調整を施す。

[時期]16世紀後半～末頃 (C期～D期)



第14図 風炉・鉢・壺分類図 (1/15)

■瓦質土器・土師質土器擂鉢(1/15)

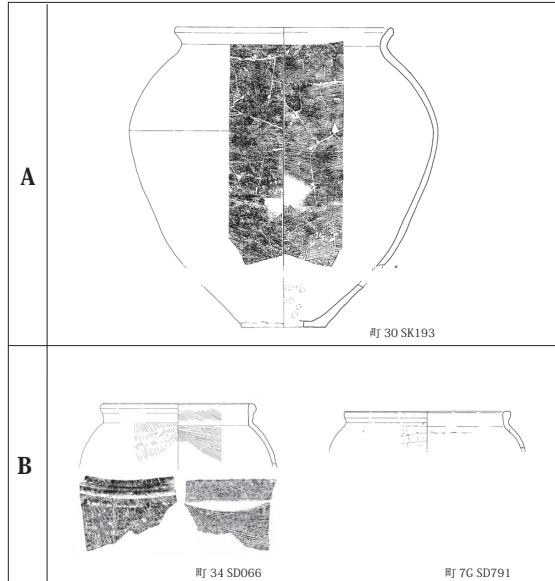


16世紀代：口縁部を内側に折り返すものと外面に粗いヘラケズリを施し口縁部を上方に強く屈曲させるものがある。ともにスリ目間の間隔は狭く、後者の擂鉢には見込み部にもスリ目を刻む。前者はいわゆる防長型と呼ばれる擂鉢、後者は豊後府内での消費を主体とする豊後に特徴的な擂鉢である。ここでは「府内系」と仮称しておく。

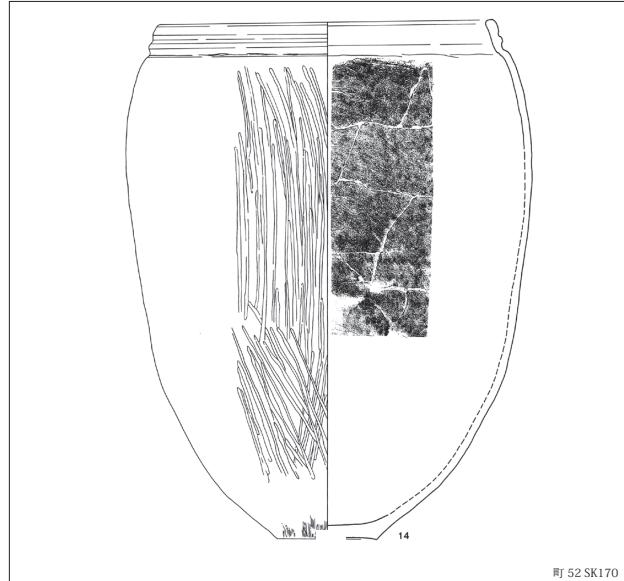
＜擂鉢＞内面にスリ目をもつ鉢である。土師質・瓦質の区分があいまいな資料も多いが、ここでは一括する。なお、擂鉢については博多遺跡群を対象に楠瀬慶太氏による分類・編年がおこなわれている(楠瀬2009)。豊後府内においても類似する擂鉢の様相をもつことから、氏の研究成果を参考に検討する必要がある。ここでは共伴する資料の年代や大まかな形態的特徴をもとに、年代ごとの擂鉢の様相を概観するにとどめる。

14世紀～15世紀代：口縁部形態とスリ目の形状の特徴から図示したようなものが確認される。口縁端部を内側に肥厚させるもの、口縁端部を方形に面取るもの、口縁端部を丸く仕上げるもの3種ほどがあり、スリ目の間の間隔は全体に広いものが多い。

■瓦質土器甕(1/15)



■瓦質土器大甕(1/15)



0 20cm

＜甕類＞「甕」形の瓦質土器である。全容のわかる資料は少なく、口縁部資料も少ないが、口縁部形態などから分類可能である。

甕A：口縁部は短く外反し、体部中央に胴部最大径をもつもので、口縁端部は丸味をもって収める。

[時期]14世紀～15世紀前半頃？(AⅡ期～AⅢ期か)

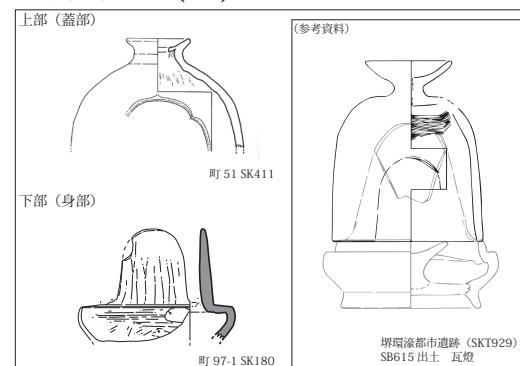
甕B：玉縁状の口縁部をもつものである。資料が少なく安定した属性は不明である。

[時期]16世紀代か？(B～D期か)

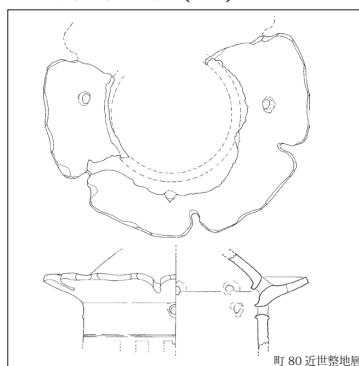
大甕：器高80cmを越える大型の甕である。資料が少ないが、全容のわかる資料からは内傾する口縁部をもち外面には粗いタテ方向のミガキ状の調整を施すようである。口縁部形態から、近世1期段階の備前焼大甕を模倣したように見える。

[時期]16世紀後半～末頃(D期)

■瓦質土器瓦燈(1/8)



■瓦質土器燈籠(1/8)



＜瓦燈＞上部に受皿が付く器形である。これまでの調査では出土例に乏しい。堺環濠都市遺跡からでは上部下部がセットで出土した事例があり参考資料として図示しておく。16世紀前半の遺構からの出土である(堺市教育委員会2008)。

[時期]16世紀前半～後葉(B期～D期か)

＜燈籠＞町80次・29次で出土例が知られる。瓦燈同様、出土例の少ない資料である。

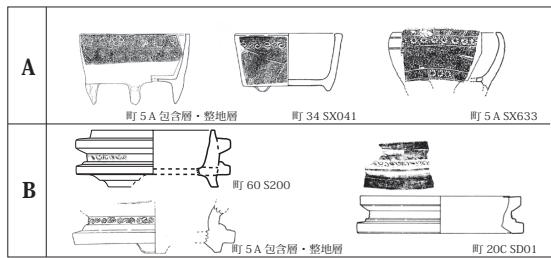
[時期]16世紀後半～末頃(C期～D期か)

0 20cm

第15図 擂鉢・甕・瓦燈分類図(1/15・1/8)

瓦質土器仮具類

■瓦質土器香炉 (1/8)



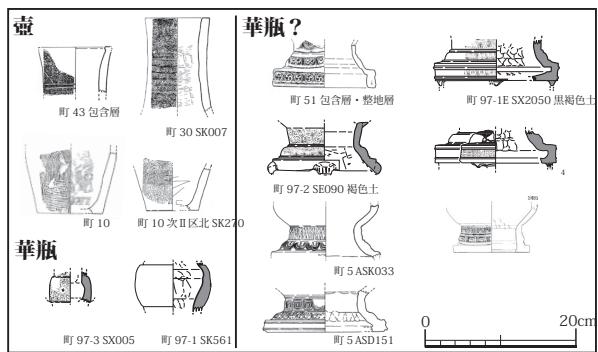
<香炉>小型の鉢形の土器ある。ここでは便宜的に機能分類である「香炉」として区分した。

香炉A：口径と底径がほぼ同じで、三足をもつ。直線的な体部をもつもの、内湾するものなどがあるが、前者が多い。ほとんどのものにスタンプ文を施す。[時期]16世紀後半～末頃 (C期～D期)

香炉B：浅い直線的な体部に2条の突帯をまわし突帯間にはスタンプ文を施すもので、3足をもつ。出土事例は少ないが、金属器を指向した香炉の一種と考えられる。豊後府内独自の器形と考えられる。

[時期]16世紀後半～末頃 (C期～D期)

■瓦質土器壺・瓶類 (1/10)



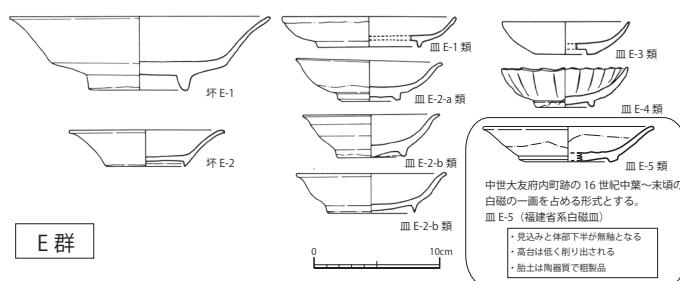
全形の不明な瓦質土器類である。形状から壺・瓶類としておく。

<華瓶?>97次調査で出土したもので、それぞれ金属器の華瓶を模した瓦質土器である。

97-3SX005出土例は体部に雷文と退化した饕餮文らしき文様をもつ。
<華瓶?>全て底部片である。角張った断面形状をもち外面に雷文や巴文などの連続スタンプ文が確認でき、金属器模倣土器の一類と考えられる。底部外面には三足がつくようであり小型の風炉A底部とも考えられるが、径が細く便宜的に華瓶として報告した。中世大友府内町跡の各所で出土するが他地域での類例に乏しいことから、豊後府内独特的仮具関連遺物の可能性がある。

[時期]16世紀後半～末頃 (C期～D期)

第 16 図 仮具関連遺物・皿・鉢類分類図 (1/10)



第 17 図 白磁分類の追加 (1/6)

長を基にした。編年の上限については、いまだ明確な遺構は確認されていないものの文献史学上してされている大友氏3代当主大友頼泰の豊後下向時期を一つの定点とし、将来的な遺構の確認を想定して12世紀後半をA I -1期とした。ちなみに、「府内」の形成については11世紀代の記録にみられる大分川河口にあった「市河」を起源とする説があるが、これまでの調査では当該期の遺構・遺物は皆無に近いことから、大友氏との関連を主眼

【陶磁器類】 大宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊XV—陶磁器分類編一』・小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 (染付は青花に読み替える)・上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2・森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 (皿群に福建省系の粗製の内面釉剥、削りだしの低高台の資料を皿E-5として加える 第17図参照)

【陶器類】 乗岡実 2005「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 資料集』・藤原良祐 2005「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 資料集』・吉田寛 2003「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」『貿易陶磁研究』No.28・中野晴久 1995「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

【中世須恵器】(東播系) 森田稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

【土師器】 大内系土師器: 北島大輔 2010「IX章 大内式の設定」『大内氏館跡 X I』山口市教育委員会

(2) 「豊後府内」編年試案 (第 18 図・第 3 表)

中世大友府内町跡（「町」）の在地産土師器編年については、河野史郎（2002）、坂本嘉弘（2005）による検討がある。両者の研究成果により、中世豊後の中枢部であった豊後府内の土器様相とその変化の方向性がほぼ明らかとなった。坂本氏が作成した「中世大友府内町跡出土土師質土器編年図」（以下、「坂本編年」）は、在地土器の型式学的変遷と、共伴する吉備系土師器椀、京都系土師器、大内氏館跡で出土する大内A式土師器皿、輸入陶磁器及び備前焼などの広域流通品の時期をもとに14世紀初頭から16世紀末までの土器様相が提示されており、約300年間の膨大な量の土器・陶磁器資料が出土する都市遺跡を理解する上で、有効なモノサシとして運用されている。坂本編年作成後、約10年が経過し、良好な基準資料の調査・報告例が増加している現状にあることから、坂本編年で空白期となっていた15世紀中頃を埋める資料を加え、各期を構成する土器組成を増加した資料に照らして再構築する必要がある。また、暦年代呼称型の編年ではない「○○期」などの様相名称を与えることで、他地域との土器の併行関係の検討や遺跡の調査・報告時における利便性も高まると考える。

①豊後府内編年試案 (第 16 図～20 図)

(第 3・4 表)

試みに、本報告書に掲載した3971点もの遺物と上記の遺物分類を素材に土器変遷図を作成した。坂本氏・河野氏の編年と館編年（長2015b）を参考に、基準資料や各期の説明を第4表に、年代根拠は第3表に示すように広域流通品や貿易陶磁器類及び在地土器（供膳具、煮炊具類・火鉢類の形式）の消

に以下のように区分した。画期区分については、土師器供膳具形態の変遷を軸に区分する。各期の名称はその時期に主体をなす土師器の系統名から付している。坏 A、小皿 A I は 12 世紀後半以後セット関係をもって変遷していく器種で、15 世紀末に坏 B が出現する間までを大きく A 期として区分する。さらに坏 A の系統の変化や坏 A の各型式の消長をもとに、A I 期、A II 期、A III 期に大区分する。この要領で坏 A に代わって出現する坏 Bn が主体をなすを B 期に、皿 C が出現し主体となる時期を C 期に、椀 C が出現する時期を D 期としてそれぞれ大区分し、さらに小画期に基づいて細分する。

豊後府内 A II 期は体部が内湾するタイプ（B 類）と紡錘形になるタイプ（C 類）の坏 A の出現と消滅を大区分とし、その後出現する厚手でやや口径が縮小した坏 A の出現と坏 A 自体の消滅を A III 期と B 期の境に、坏 B の出現と坏 B の法量分化の有無で B-1 期、B-2 期を、皿 C の厚さと口縁部形態の消長から C-1 期、C-2 期を、椀 C の出現と土師器供膳具全体の粗製化より D-1、D-2 期を分ける。D-2 期の下限は 1602 年の府内城城下町の移転を想定する。これまでの編年との対象を第 2 表に示している。表に示すように A III -1 期～D-2 期は大友館編年の A 期前半～D 期の内容に対応しており、A III 期以下の編年の概要是、『大友氏館跡 1』「第 IV 章 第 1 節 大友氏館跡出土土器の分類と編年」（長 2015b）を参照いただきたい。なお、大友氏館跡の土器様相は、遺構の形成時期が町より後出する点、土器組成が町とは異なっている点を考慮すれば町編年とは変化の方向性が微妙に異なることも想定される。今後府内全域の土器組成を整理することで明らかになると思われる。

②編年の基準資料の概要（第 4 表）

第 4 表は、これまでの「町」出土の良好な資料を機軸に町 97 次出土の基準となる遺構を並べたものである。

A I 期（12 世紀後葉～13 世紀末）：13 世紀以前の遺構は極めて少なく、大分川を挟んで東側に所在する羽田遺跡・下郡遺跡群で良好な遺構・遺物が確認されている。中世大友府内町跡南端付近に所在する第 31 次調査では若干の遺構・遺物が確認されている。

A II 期（14 世紀初頭～14 世紀後葉）：徳治元年（1306）に創建された万寿寺周辺で多くの遺構・遺物が確認されている。

A III 期（14 世紀末～15 世紀後葉）：大友氏館跡に代表される中世大友府内町跡中央から北側にかけて新たに遺構・遺物が確認される。

B 期（15 世紀末～16 世紀初頭）：他の期にくらべて存続期間が短いため良好な遺構は少ない。基準資料と呼べる資料は大友氏館跡を中心に、府内町全体に点在する。

C 期（16 世紀前葉～中葉）：B 期で形成された遺構を踏襲する地点で当該期の資料が確認されるほか、従来形成されていなかった地点に遺構・遺物が展開する。

D 期（16 世紀後葉～17 世紀初頭）：府内町全域で膨大な数の遺構・遺物が確認される。これは町の発展の最盛期であるとともに天正 14 年（1586 年）の島津軍の府内侵攻に伴う戦災という極めて大きなイベント（坪根 2013）によって生じた偶発的な多量のゴミ処理（火災処理）遺構の形成が重なったことに起因して、他の期とは比較できない数の遺構が形成されたと考えられる。D-2 期に相当する資料は少ない。D-1 期との区分の明確化により今後増加する可能性が高い。

③搬入品・広域流通品の推移と課題（第 3 表）

搬入土器類は、吉備系土師器椀⇒京都産土師器皿

第 2 表 編年対象表

【本稿】		豊後府内編年（試案）	
坪根・塩地 2001		1200 年	A 1
13-I		1300 年	I 2
13-II		1400 年	II 3
坂本 2005		1500 年	III 3
14 I 14 世紀初頭		1600 年	IV 1
14 II 14 世紀前葉			II 2
14 II 14 世紀中頃～後葉			III 3
15 I 14 世紀末～15 世紀前葉			IV 1
15 II 15 世後葉			II 2
15 II 15 世紀末～16 世紀初頭			III 3
16 I 16 世紀前葉			IV 1
16 II 16 世紀中葉～後葉			II 2
16 II 16 世紀後葉～未葉			III 1
			IV 2

大友館編年（2015）

A 期	前半
	中頃
	後半
B 期	古段階
	新段階
C 期	古段階
	中段階
	新段階
D 期	

第3表 時期区分と遺物組成表

年代イメージ	豊後府内 様相	在地産土器			在地系土器			搬入器			広域流通品							貿易磁器種相							瓦器
		A系	B系	C系	燭台	土師質 瓦質土器 鉢	土師質 土器	瓦質 土器	京都産 土師器皿	大内A式 土師器	束縛唐	龜山系	瀬戸	常滑	備前	唐津	大宰府区分 ^{※5} (太宰府市教委 2000)	白磁 (森田1982)	景德鎮窯系青花 (小野1982)	B 群	C 群	E 群	F 群	E-5	
13世紀末 ～13世紀前葉 紀	A	I-1	●				鍋A		皿Ac	II-2	-	-			●										和泉 III-1
13世紀後葉～未 (1306年含む) ※		I-2	●				鍋A・鍋B	C2類	皿Ac	III-1	-	-			●										
14世紀初頭 (1306年含む) ※		-1	●				鍋B		C3類	III-2	○	中期	7型式		●	●									在地
14世紀前葉		-2	●				鍋B	D類	皿S (京VII)	III-2	○	中期	7型式		●	●									在地
14世紀中葉～後葉		-3	●		A1		鍋B	D類	輪花型 火鉢	皿Sh (京VI期)	III-3	○	中期	7型式 中世3a期		●	●								在地
14世紀末 ～15世紀前葉		-1	●		A1		鍋B		輪花型 火鉢	皿S (京VII)			○	後期	8型式 中世3b期 中世4a期		●	●	○?	●					在地
15世紀中頃 ～後半		-2	●		A2		鍋B・鍋E	浅形 火鉢A		皿S (京IX) 皿S	II B式 III A式			後期	9型式 中世4b期		●		●	○?					在地
15世紀後半		-3	●		A3		鍋B			皿S (京IX) 皿S	III A3式			後期	10型式 中世5a期		●		○?	●					在地
15世紀末		B-1	●		B1		鍋B			皿S (京IX)	III B式			大窯1	中世5b期		●		●						
16世紀初頭		B-2	●	○	B2	●	鍋B・鍋C	深鉢型 火鉢	皿S (京IX)	IV A式			大窯1	中世6a期		●		●							
16世紀前葉 (1536・37年含む) ※2	C	-1	●	●	C	●	鍋C 鍋D								大窯2	中世6a期		●		●					
16世紀中葉		-2	●	●	B2	●	鍋C 鍋D								大窯2	中世6b期 近世1a期		●	●	●					
16世紀後葉 (1573年 ～1586年含む) ※2	D	-1	○	●	C B2	●	鍋C 鍋D	種類 増加							大窯3	近世1b期		●	●	●	●				
16世紀末 ～17世紀初頭 (1602年含む)		-2	○	●	C B2	●	鍋C 鍋D								大窯4	近世1c期 近世1d期	○	●	●	●	●				

※1:万寿寺創建年代

※2:「式三献」与京都系土器導入期の想定年代

※3:1573年一館再整備、1586年=島津侵攻

※4:城下町移転年代

※5:大宰府磁器区分は

D期:12世紀中頃～後半

E期:13世紀前後～前半

F期:13世紀中頃～14世紀初頭前後

G期:14世紀初頭～後半

であるが、坪根・塩地2001での検討を踏まえ、やや新しい年代枠を付与している。

豊後土器研究の史的な流れでは、流通品や貿易品の年代幅の下限を取る傾向にあるが、

今日の増加した資料、及び広域流通品の年代観や研究の進展と共に再検討が必要である。

第4表 画期区分と基準資料

豊後府内 編年 (試案)	画期の内容 (在地土器の変化)	基準資料例			町 97-1			町 97-2			町 97-3			
		中世大友府内町跡 大分平野			97-1	97-1 E	97-1	97-1 E	97-2	97-3	97-2	97-3	97-3	
1200年	A I期	1	・土師器環A口徑平均値 14.9 cm ・体部の立ち上がり直線化 ・土師器皿A I の口径平均値 8.4 cmと 前段階に比べ縮小。口線部短く立ち上がる		賀来・城 清 羽田 5-4SE012 羽田 6-5SE005・015 6-2SD001・8-2SE250									
1250年		2	・土師器環A口徑縮小化 (12.8 cm) ・土師器皿A・小皿A I の器高の伸張化 (3.8 cm・1.5 cm)	町 31SD24 「應永5」 下郡 140SD360 羽田 5-4SE012										
1300年	A II期	1	・土師器環A系統分化 (体部形態 a:外反 b:内湾 c:筋縫形) ・土師器皿A I の底部肥厚タイプ出現 ・土師器環A・小皿A I の器高の伸張化	町 35SD017 「應永16 (3)」 75SX009 (小皿理納) 「應永16 (3)」	羽田 6-6SD130 (六田 5号土坑) #1 (六田 2号溝状遺構) 羽田 1SD019 「應永1」 96SK233 「應永19」									
1320年		2	※属性の変化の検討必要 (京都皿S)	町 30SK115 「應永14」 112SK085・080 「大友23」 17ASK458 「應永10」	利光久保土坑 10 SD950・2060・2090									
1370年		3	・前段階と大きな変化なし ・器高のひや高い土師器皿小皿A I 出現 ・燭台A I 出現	町 41SK057 「應永16 (1)」 附 13SK439 「應永」 41SK135 「應永16 (1)」 75SK640 「應永16 (3)」	SK1010・3000・3007 SK2036 SI1015	SD2030								SD355 SK135・195 SK070
1400年	A III期	1	・土師器環A b 内湾・c 細縫形の消滅 ・土師器環A 外反タイプ主体。口縫細小、器高伸長	町 20SK072 「應永7」 30SK040 「應永14」 41SK057 「應永16 (1)」 附 13SK439 「應永」	SK348・570 SK535 SX640									
1470年		2	・土師器環A II 安定的に出現 ・土師器環A ヴァリエーションの増大 ・燭台A2・3 出現	町 20SK290・館 16SX001 「應永」 11SD043 「應永17 (1)」 11SD051 「應永17 (1)」	SK650・940・SD580 SD950・2060・2090 SD2120	SK120・2145・3000 SK3030								SJ180 SK178・190
1500年		3	・土師器環A 体部を逆「ハ」字に 外反させるタイプ出現	町 4SE175・SX196 「大友4」 20SX030・館 16SX030 「應永」 1SK008 「應永」	SE2000 SD870									
1550年	B 期	1	・土師器環Bn 出現 ・土師器環A、小皿A C類の激減	町 17ASK190 「應永」 閣 7SK712 「應永3」 26SK042 「大友8」 27-2SK144 「大友9」 5BSX134・SK245 「應永」 (小路 B地区 SX2) #2	SK125 SD2120	SK140・145								
1586年		2	・土師器環Bn 多法量化 ・極薄の皿C 出現 (京都産の忠実模倣倣入品)	町 23SX005 「應永」 17ASK375・376 「大友10」 5BSK601 「應永16 (1)」 館 23SX005 「應永」	SK165・180 SJ405 SK098・450	SK165								
1602年	C 期	1	・土師器皿C (京都系土器) の安定的な出土	館 23SX010 「應永」 17ASK360 「大友10」 51SK063 「應永15」	SK120・320・1000 SE2100 SK115・240・2005 SK2015・2115	SK155								
1550年		2	・土師器皿C 在地化進行。粗製品出現 口縫部形態 e タイプの出現	館 24SK040 「應永」 7SK557 「應永3」 称名寺堀 「應永17 (1)」	SD435 SK055・425 ST155	SK095・145・440 SK690・2000・2075 SX2050	SK070・200 SE090 裏込	SK060						
1586年	D 期	1	・土師器皿C 出現 ・土師器皿C 壁の肥厚化	大規模施設(町 80SD101) 「應永17 (1)」 万寿寺堀 (町 51SD200 等) 「應永15」 3SX210 「大友5」 75SK052 「應永」 「應永16 (1)」	SK010・035・090・115 SK145・150・156・160 SK190・865 SK105・165・2095	SK060・155・180 SK225・545・770 SK775・2045 SK20・940	SK100・105・110 SK115・120	SK054・055						
1602年		2	・土師器皿C 壁の肥厚化進行 (埴地 4期) ・土師器皿C 壁の肥厚化 (埴地 4期)	町 14SE240 「大友6」 72SE240 「大友6」 4SK064 「大友」	80SX042 「應永17 (1)」 72SF002 「應永17 (1)」									

A III期～D 期については、館編年 2015 の内容とおむね同一であるが、館内部と比較して土師器供膳具類のヴァリエーションが多い

※ 1 国東市 2 竹田市

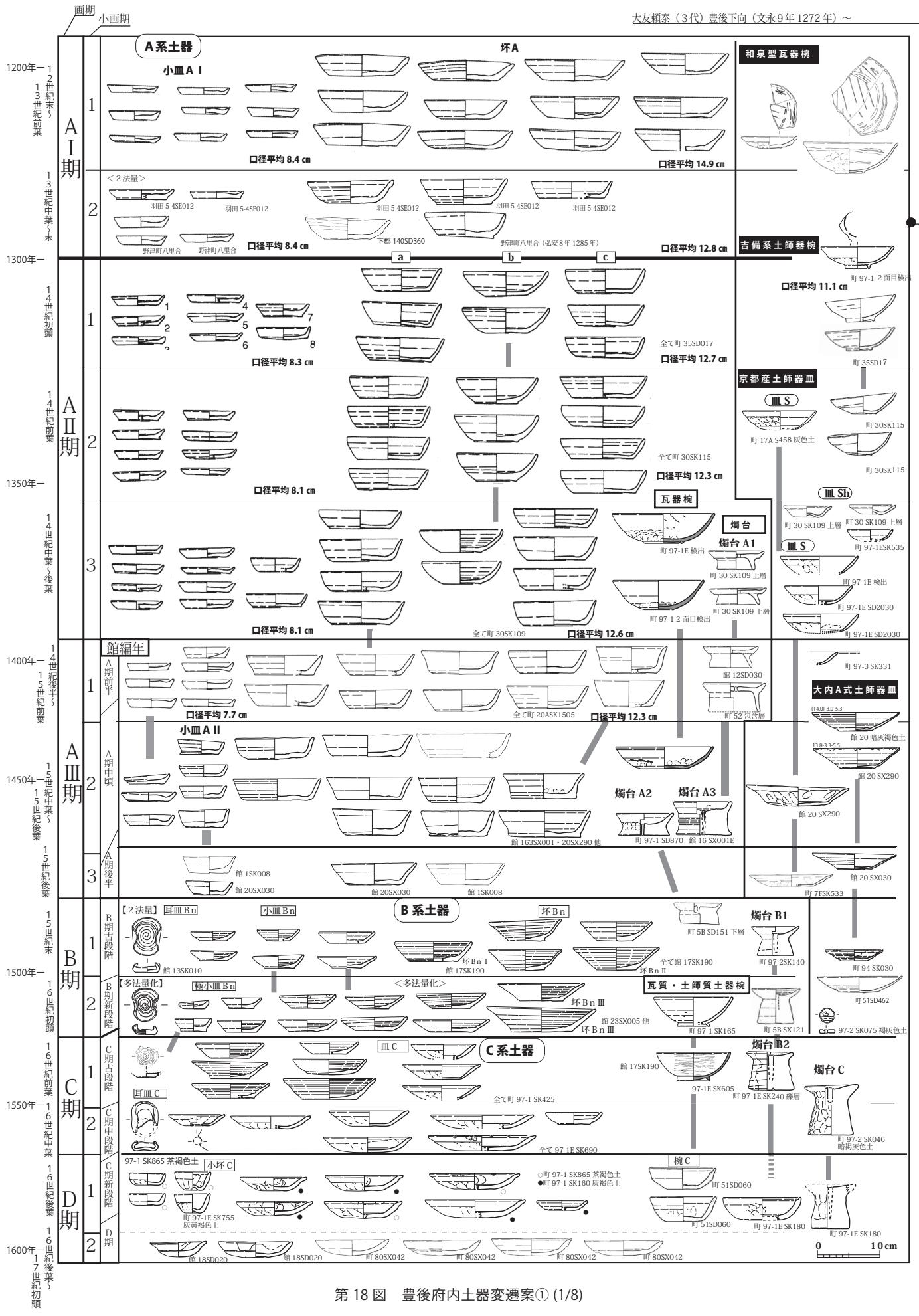
「館」 … 「大友氏館跡」 (大分市教育委員会刊行報告書)

「大友」 … 「大友府内」 (大分市教育委員会刊行報告書)

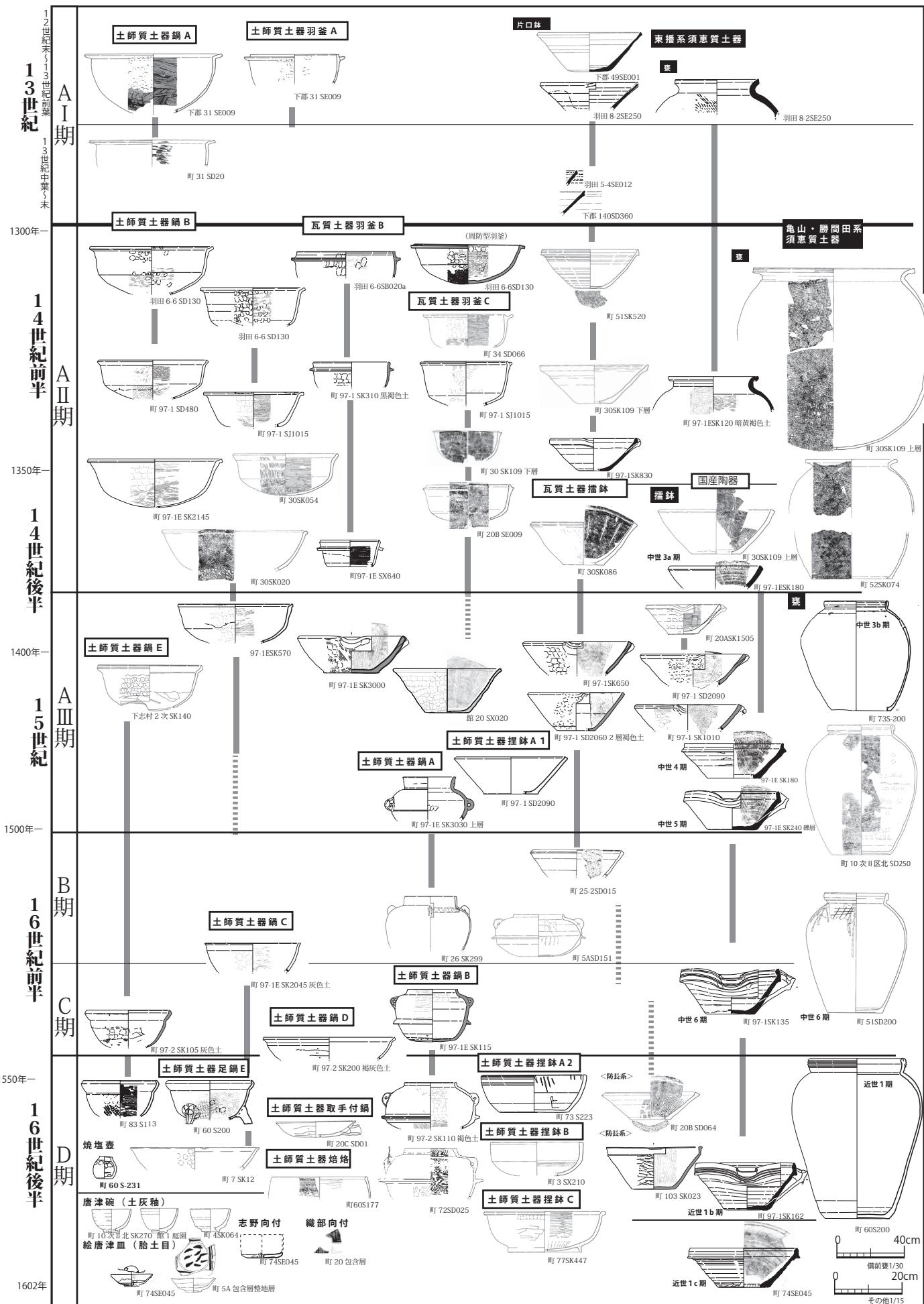
「應永」 … 「應永府内」 (大分県教育厅理藏文化財センター刊行報告書)

ゴシック体は火災処理土坑

第
III
章



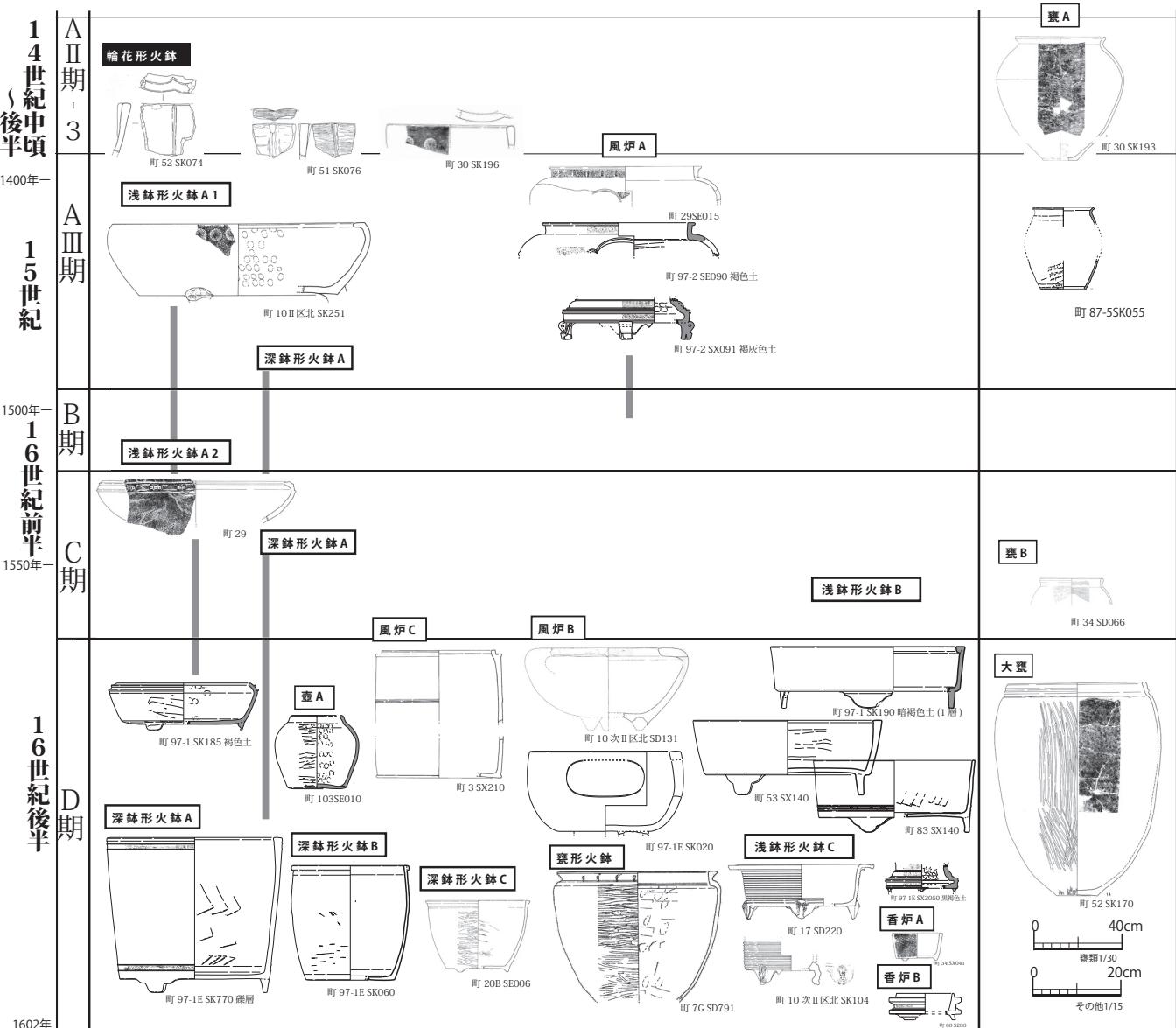
第18図 豊後府内土器変遷案①(1/8)



第19図 豊後府内土器変遷案②(1/8・1/15・1/20)

(皿S・皿S h) ⇒大内A式土師器の順に確認され、広域流通品や陶磁器類は、瀬戸産陶器、常滑、亀山・勝間田系陶器、東播系須恵質土器の出現と消滅⇒備前産陶器の増加⇒白磁皿E-5類(内底露胎の粗製皿)第17図)と景德鎮窯系青花碗E群の出現とやや遅れて漳州窯系青花の出現⇒景德鎮窯系青花皿F群の出現⇒唐津の出現が大まかな推移でありこれらの遺物が遺構の時期決定上重要な要素となっている。これまでに整理してきたように(長2011・2012・2015b等)、豊後府内の土器様相は壺A・壺B・皿Cという極めて特徴的な供膳具のセットがドラスティックに変化していくと点と、これに伴って瀬戸内や京都、周防の土器資料が段階的に流入していく点が特徴であり、土器様相の理解及び年代的な整理が非常に明快なものとなっている。しかしながら、壺Aや小皿Aが1点出土したのみでは時期決定が難しいところが課題であり、今後は搬入土器資料を鍵に、14・15世紀代の壺A・小皿Aの系統的な分類と属性レベルでの型式の認定、組列の検討を行いながら、AⅠ期~Ⅲ期の内容を明らかにしていく必要がある。

次章以降の遺構の年代観及び時期呼称は以上の編年に基づいて記載する。中世大友府内町跡の調査と報告は毎年のように蓄積されているものであり、隨時分類と編年の再検討を行いながら更新する必要がある。よって、今回の検討も暫定的であることを明記しておく。なお、区分した「期」によっては、その存続期間は10年程度から50年程度までの幅をもっており、遺構変遷や遺構の同時性を検討する上で、留意すべき点である。(長直信)



第20図 豊後府内土器変遷案③(瓦質土器・土師質土器)

第Ⅳ章 調査概要

第1節 調査の概要および基本層序

97次調査は、5792.6m²を対象に2012年6月～翌3月まで実施した。97-1(3768m²)、97-2(1178.6m²)、97-3(846m²)に区分けし、97-1南北道路を境に西側を97-1(1608m²)、東側を97-1E(2160m²)として呼び分けを行った。また、調査後半に97-1Eと97-2の間を97-4として80m²分の機械掘削及び遺構検出を行った。101次調査は開発地東端部の762m²分を対象に遺構・遺物の確認を目的とし、2013年4月18日に実施した。97-4を含めて総計6634.6m²もの調査したことになり、万寿寺前面の遺跡の様相を詳細に知ることが出来た。

(1) 遺構 調査の結果、遺物が出土した遺構だけでも3700基を超える量を検出し、これまで断片的にしかうかがうことのできなかった町屋の様相を広範囲に把握することができた。豊後府内の町屋景観を考えるうえでの一つのモデルともなりえる成果を得た。

検出した遺構は「道路状遺構」「掘立柱建物跡」「柵状遺構」「井戸跡」「土器埋納遺構」「方形土坑」「大型土坑」「石組土坑」「溝跡」「部分的な整地層」の10種の遺構で、それぞれ一定の密度をもって分布することを確認した。そのうち、16世紀後半～末に相当する遺構群は、配置状況からみて戦国時代末期に存在したと考えられる「片側町」「寺小路町」を構成するものと推察される。また、14世紀前半の遺物や15世紀代の井戸・道路状遺構の側溝と考えられる遺構を複数確認し、万寿寺創建段階の様相や16世紀中頃以前の場の様相を知る上でも、極めて重要な調査となった。

なお、今回の調査地点でも総瓦葺の五重塔の存在を傍証するような瓦の出土状態はみられず、掘り込み地業や礎石及び礎石抜きとり痕等は確認されなかった。

(2) 遺物 コンテナ412箱分とコンテナには収まらない約400点の大型石製品・石造物が出土した。出土遺物は、16世紀末のものが主体であるが、14世紀～15世紀代の遺物も一定量含まれる。

土器類：14世紀代の資料は少なく、15・16世紀代の土師器供膳具が主体を占める。吉備系土師器碗や大内A式土師器皿、京都産とおもわれる土師器などの搬入品も出土した。また、供膳具類とともに煮炊具類も充実しており、瓦質土器火鉢も多い。その他、綠釉陶器や黒色土器、白色研磨土師器、6世紀～9世紀頃の須恵器や土師器、弥生後期の壺・甕類などの遺物が出土している。

陶磁器類：16世紀代の陶磁器が大部分であるが、14世紀～15世紀代の白磁・青磁、朝鮮陶磁器も一定量含まれる。97-1E SK020からは、タイ産（メナムノイ窯系）の鉢や、97-1SK035では遺存状態の良い華南三彩鶴形水注が出土した他、97-1SK055では漳州窯系青花の鉢に金属容器と青花小壺を埋納したものが出土した。16世紀後半の溝97-3 SD205からは中国南部もしくはイスラムの可能性のある瑠璃釉のかかった短頸壺が出土した。土器・陶磁器類はコンテナ187箱分である。

瓦類：15世紀～16世紀代の遺構中から出土している。軒平瓦（連珠文・蓮華文などの万寿寺創建瓦類を含む）・軒丸瓦・塙・平瓦・丸瓦・雁振瓦・鬼瓦数点を含む多量の瓦が出土した。コンテナ196箱分が出土した。

石製品・石造物：五輪塔・板碑・宝篋印塔・無縫塔・方塔・石製五重塔の基壇の可能性のある四面仏（計191点）・六角石組み井戸の部材・石臼（茶臼25点、粉挽臼51点）・砥石類など多様で膨大な量の石造物・石製品が出土した。五輪塔中には鎌倉末や南北朝期に遡るものもあり、周囲に想定される墓地空間の形成時期を知るうえで重要である。石製品の中には携帯用の板状砥石（砂岩製・緑泥片岩製）、火打石（石英・チャート）、漆研磨用砥石（頁岩製。図版編第171図6・7）などが存在する。

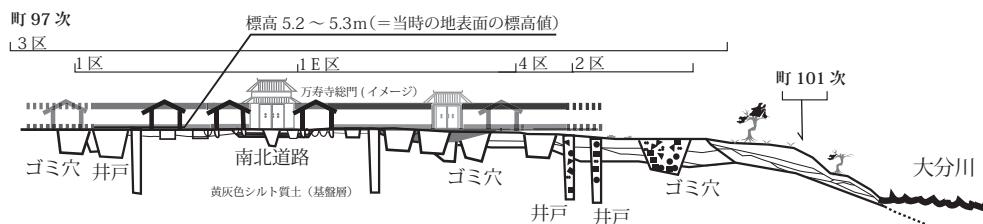
金属製品：鉄釘類や銅錢が多くを占めるが、鉄鎌・鍵・錠前・飾金具・鉄製釜蓋・鉄滓、大型の金属製品などの希少品も出土しており多様である。また、ガラス片やガラス小玉、八角形に面取りした銀製の指輪状環状金具なども出土した。その他、土製鋳型や坩堝類・棒状の鉛素材と思われるものなど生産関連遺物も出土した。炉跡などの生産遺構の存在は確認できなかったが、金属器生産を行っていることが伺える。火災処理土坑である97-1E

SK020 からは豊富な金属製品類が出土した。鉄製薬研や兜・小札・棒状鉄製品、錠や鍵、天秤皿の可能性のある銅製容器、分銅、権が出土しており極めて重要な発見となった。金属製品類は、総計 20 箱程度出土した。

(3) 全体層序 (第 21 図) 97 次・101 次は、大分川左岸に形成された自然堤防上に立地し、現在の標高は約 4.0 ~ 6.0 m を測る。この自然堤防を構成する堆積土層は、2.0 ~ 4.0 m 程の厚さがあり、下位の砂層からは縄文時代後期～古墳時代前期の土器が、上位の層からは 8 世紀頃の遺物が出土していることから、縄文時代から古代にかけて長期にわたり形成されたと考えられる。全体の基本層序は、第 21 図に示すように調査区東側を流れる大分川の方向へ傾斜する地盤をもつ自然堤防上に立地する。弥生土器や古墳時代、古代の土器群は調査区全体の基盤層である黄灰色シルト質土中より確認される。

遺構検出面の標高は 5.2 ~ 5.3 m で、これは中世段階の地表面の標高とほぼ同じである。遺構の形成は 14 世紀前半頃に始まり、15 世紀後半から遺構の展開が調査区全体で確認される。15 世紀後半～末頃はこれらの遺構上面に整地層が形成される。整地層は調査区全体を面的に嵩上げするうような大規模なものではなく、地盤の低い地点や基盤層の凹凸が多い部分、大分川方向へ傾斜する地点を埋めるなど部分的なものである。一部、上部に何らかの構造物を形成するための掘り込みを伴う整地を行ったものもある。整地面では 16 世紀初頭前後の遺構が形成され、その後 16 世紀後半になって遺構密度を増しつつ、複数の遺構が切り合いをもちながら形成される。

調査にあたっては重機を併用しながら整地層除去を行い、2 面目に相当する遺構の検出をおこなった。前章で述べたように 2000 番代の遺構番号は 2 面目検出以後に確認した遺構であるが、1 面目と 2 面目の明確な区分が難しいところもあり報告にあたっては時期ごとではなく原則として遺構番号順に報告する。以下では、遺構種毎に遺構分布図、遺構一覧、及び図版編を参照しつつ調査概要を述べる。報告遺構は 700 基近いため、原稿記載にあたっては、掲載した個別図のある遺構について遺構原稿を記載し、遺物のみしか掲載していない遺構は全体図・配置図にて位置関係を示すほか、遺構の情報については、巻末の遺構出土遺物一覧表中に示している。なお、遺物のみの掲載遺構の大部分は、銅錢が出土したものや希少な遺物が出土したものである。



第 21 図 第 97 次・101 次調査区 全体基本土層模式図

第 2 節 第 97-1 次調査区

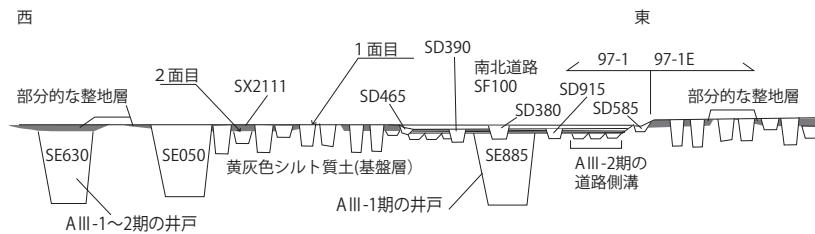
(1) 概要

97 次調査区の南北道路 SF100 より西側調査区である。これまでの調査成果によると、「寺小路町」西側と「片側町（魚ノ店）」の背面に相当する地点である。高麗青磁墩が出土した 87-7 区全体が重複する（第 27 図）。

調査の結果、14 m の幅員をもつ巨大な南北道路 SF100 と、これに面して東西 10 m の幅で極めて高い密度で分布するピット群がその背面には井戸 4 基、土坑墓 1 基、さらに西側に廃棄土坑が確認された。ピット群内では 20 棟、その背面で 7 棟の掘立柱建物を確認した。ピット群には方形土坑が一定の距離をおいて南北に展開している。また、調査区北側の「片側町」背面にあたる地点では、東西方向に重複の著しい廃棄土坑群（北西部土坑群）を確認した。特筆すべき点は、SK035 とした方形土坑より遺存状態の極めてよい華南三彩鶴形水注が廃棄された状態で出土したほか、SK055 とした浅い方形土坑より完存する漳州窯系青花碗の内部に漆継ぎをした明代初期の青花小壺を置き、さらに金属容器を小壺に被せた状態で発見されたことである。遺構の性格は不明であるが埋納遺物と考えられる。

南北道路については、A III -2 期（15 世紀中頃～後半）段階の道路側溝と考えられる溝（SD950・975・980、SD730・2075・2065・2060 など）を東西で確認した他、道路内南側や北側で A III -1 期（14 世紀末～15c 前

葉)に形成された井戸跡(SE885など)を検出しており、道路としての土地利用がA III-2期以降に始まったことが確認された。道路西側でも同時期の井戸跡、東西溝、土坑等も確認され、当該期より面的な遺構の展開が確認されたことは大きな成果といえる。なお調査区の中央南側には部分的な整地層が確認できる。この層を除去すると、A II-2～3期頃の遺構が検出される。



第22図 第97-1次調査区 基本土層模式図

(2) 基本土層(第22図)

黄灰色シルト質土上に15世紀代の遺構が形成され、一部に部分的な整地層をはさみつつ16世紀初頭前後から16世紀後半にかけて広範で高密度に遺構が展開する。15世紀代の井戸が形成された周囲については、井戸掘削による地盤の沈下を想定したためか、部分的な整地層が形成されており、調査当初に1面目とした面では井戸の掘方プランは検出できなかった。道路状遺構部分は複雑な層位をもつことから別項にて報告する。基本的な層序のあり方は97-1Eと同様である。

(3) 主要遺構

掘立柱建物跡(SB)

第5表に示すように掘立柱建物跡27棟を確認した。内訳は南北道路SF100前面のものが20棟、町屋背面にあたる調査区中央付近で7棟である。町屋背面の建物は調査工程上、柱穴完掘後に建物プランの検討を行ったため柱痕の有無の確認や土層の検討は行っていない。SF100前面の建物は、第23図に示すようにSF100内に入り込むA列と、それより約2m西に下がって並ぶB列がある。各列は、A列がD-2期、B列がC-2～D-1期頃の建物と考えられる。

南北道路前面の建物は調査の初期段階で確認した97-1SB260やSB270の規模や方位を参考に、調査中にプランを確認し半截等の詳細な調査を行った。調査終了後に再度柱穴の整理を行う過程で、各建物に帰属する柱穴に変更を加えたものもあるが、柱穴密集地点の柱穴の選択には不安が残る。97-1Eと同じ様相である柱穴の密度に比例して、南北道路前面南側の建物の重複が著しく、2～3時期に及ぶ。時期や変遷の詳細については第VI章にて検討を加えるが、各棟の計測値などについては第5表にまとめている。なお個別図中の柱間数値は厳密なものではない。

97-1 SB265 (【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第4図、遺物図：なし)

調査区北東部のK7グリッドで検出したA列の建物である。A III期の井戸SE895や道路側溝と考えられるSD900を切る。梁行2間、桁行6間、身舎面積26.9m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-5.2°-Eの東西棟である。西側の柱穴i～kの間に想定される柱穴jは、近世の畝掘削時に削平された可能性がある。柱穴は直径0.21～0.42mの概ね円形を呈する。柱穴a、b、c、f、i、n、o、で柱痕が検出されており、直径0.09～0.15mの隅丸方形である。柱間は梁行1.4～3.2m、桁行0.9～2.6mである。柱穴から土師器壊Aや土師器小皿Aなどが出土した。調査初期に確認した建物で、SB270と共に、他の掘立柱建物の検討の際に基準とした遺構である。

97-1 SB270 (【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第5図、遺物図：第95図1、第98図1)

調査区東部のG7、グリッドで検出したA列の建物である。A III期の道路側溝と考えられるSD935や、C-1期のSK100を切る。梁行2間、桁行7(10)間、身舎面積27.2m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-8.37°-Eの東西棟である。K～m間は河原石や五輪塔部材を浅く掘り込んだ溝に並べた礎石構造であり、礎石と掘立柱建物を併用する建物である。したがって、これらの礎石の上端標高5.3～5.4mは、16世紀後半当時の地表をそのまま示していると考えられる。柱穴は直径0.24～0.54mの概ね円形を呈する。柱穴a、b、c、d、e、f、g、p、



第 23 図 第 97-1 次 調査区 SB 掲載位置図 (1/200)

第5表 第97-1次調査区 掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	規模	梁行(cm)	桁行(cm)	方位	床面積(m ²)	場所	遺構番号	規模	梁行(cm)	桁行(cm)	方位	床面積(m ²)	場所
SB265	2×6	3.22	8.36	N-5.2° -E	26.9	SF100前面	SB1055	2×5	2.99	7.17	N-5.46° -E	21.4	SF100前面
SB270	2×7(10)	3.03	8.97	N-8.37° -E	27.2	SF100前面	SB1060	2×5	3.22	5.62	N-9.44° -E	18.1	SF100前面
SB275	2×4(5)	3.05	8.99	N-7.47° -E	27.4	SF100前面	SB1065	2×5(6)	3.07	7.37	N-5.59° -E	22.6	SF100前面
SB290	2×4(5)	4.17	7.62	N-9.3° -E	31.8	SF100前面	SB1070	3×5	3.74	7.88	N-5.64° -E	29.5	SF100前面
SB335	2×15	3.26	6.53	N-7.61° -E	21.3	SF100前面	SB1075	4×4	4.19	6.50	N-5.56° -E	27.2	SF100前面
SB340	2×4(5)	2.97	7.77	N-7.16° -E	23.1	SF100前面	SB1080	2×5	3.69	6.37	N-7.44° -E	23.5	SF100前面
SB450	2×4(6)	3.15	6.48	N-6.47° -E	20.4	SF100前面	SB1085	2×7	2.43	8.50	N-6.07° -E	20.7	SF100前面
SB490	(2)×4(5)	2.70	6.64	N-7.52° -E	17.9	SF100前面	SB1090	(2)×4(2)	2.05	4.36	N-0° -E	8.9	町屋背面
SB495	1×5	2.95	5.08	N-6.47° -E	15.0	町屋背面	SB1095	3×4	2.17	6.08	N-1.81° -E	13.2	町屋背面
SB1030	2(3)×4	4.02	7.55	N-11.51° -E	30.4	SF100前面	SB1100	4(3)×4	5.33	7.94	N-9.89° -E	42.3	町屋背面
SB1035	(2)×3	4.29	6.13	N-7.56° -E	26.3	SF100前面	SB1105	2×4	2.77	8.15	N-4.53° -E	22.6	町屋背面
SB1040	2×4(5)	3.87	8.83	N-7.69° -E	34.2	SF100前面	SB1110	(1)×5	2.40	8.70	N-8.67° -E	20.9	SF100前面
SB1045	1×4	2.79	5.62	N-5.62° -E	15.7	町屋背面	SB1115	3(4)×5	2.99	8.60	N-6.96° -E	25.7	町屋背面
SB1050	2×4	3.68	7.22	N-9.4° -E	26.6	SF100前面							

第6表 第97-1次調査区 掘立柱建物跡出土遺物一覧表

遺構名	柱穴	出土遺物	時期
SB265	d(SP836)	国産陶器(中世)：備前壺(口縁部)	D-2期
	b(SP441)	土師器：小片	
	c(SP439)	土師器：环A片	
	f(SP206)	土師器：环A片 国産陶器(中世)：備前壺	
	j(SP996)	土師器(古墳)：高环(脚部)	
SB270	o(SP311)	土師器：环A・吉備系・小皿A I 土師質土器：鍋	D-2期
	k·l·m (SX420)	土師器：环A・环B	
		国産陶器：備前壺	
		石造物：火輪(図版第95図1) ・地輪(図版第98図1)	
		龍泉窯系青磁：碗D 中国陶器：褐釉陶器 土製品：土垂	
SB290	a(SP723)	土師器：环A 瓦質土器：小片	D-2期
SB335	f(SP698)	白磁：碗	A期～
SB340	o(SP423)	土師器：环A片 龍泉窯系青磁：碗II類	D-1期
	b(SP309)	土師器：小片 景德鎮窯系青花：皿B群	
	d(SP1003)	土師器：供膳具小片	
SB450	e(SP228)	土師器：小皿A	D-2期
	f(SP202)	供膳具小片	
	j(SP432)	土師器：大内A式(底部片)	
	k(SP434)	土師質土器：鍋A X	
	e(SP203)	土師器：环A 瓦質土器：鍋片X	
SB490	SP899と同一		A期～
	g(SP344)	国産陶器(中世)：備前壺片	
	i(SP689)	土師器：环A小片	
	I(SP198)	土師器：小片(环A X)	
	n(SP429)	土師器：环A片	
SB495	e(SP313)	土師器：环A小片	B期～
	f(SP958)	土師器：环A・小皿A	
	m(SP365)	龍泉窯系青磁：环	
	p(SP851)	土師器：供膳具小片	
	f(SP742)	土師器：环A小片	
SB500	c(SP1324)	土師器：皿C・大皿C 瓦質土器：火鉢(深鉢)	D-1期
	g(SP414)	土師器：片	
	i(SP321)	土師器：环Bn 龍泉窯系青磁：破片(被熱)	
	e(SP748)	土師器：环B 弥生土器：破片	
	b(SP1251)	土師器：环A	
SB505	b(SP599)	土師質土器：鍋片	D-2期
	g(SP463)	土師器：环A・小片	
	i(SP771)	土師器：环A	
	a(SP122)	土師器：环A・小皿A 龍泉窯系青磁：环	
	c(SP031)	瓦質土器：片	
SB510	d(SP027)	土師器：环A	D-1期
	f(SP244)	土師器：环B・环Bn 土師質土器：鍋C	
	i(SP039)	白磁：皿E V類 景德鎮窯系青花：皿E X B	
	j(SP526)	土師器：小皿A II 龍泉窯系青磁：破片 須恵器(古墳)：壺	
	e(SP768)	土師器：小片 土師器(古代)：环d X	
SB515	h(SP627)	土師器：环A小片 土師質土器：鍋A X 弥生土器：破片	D-2期
	i(SP622)	白磁：碗IX類	
	j(SP289)	土師器：破片 瓦質土器：鍋小片	

r、s、t、u、v、w で柱痕が検出された。直径 0.06 ~ 0.18 m の方形である。柱間は梁行 1.5 ~ 3.0 m、桁行 0.7 ~ 1.7 m である。

97-1 SB275 (【本文・表編】第23図・第5~表6／【図版編】遺構図：第6図、遺物図：なし)

調査区北東部の J7 グリッドで検出した A 列の建物である。SK175 に切られる。梁行 2 間、桁行 4(5) 間、身舎面積 27.4 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 7.47° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.24 ~ 0.48 m の概ね円形を呈する。柱穴 a、c、k で柱痕が検出されており、直径 0.06 ~ 0.16 m の方形である。柱間は梁行 0.8 ~ 2.2 m、桁行 1.4 ~ 3.1 m である。遺物は出土していない。

97-1 SB290（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第6図、遺物図：なし）

調査区東部のF7 グリッドで検出したA列の建物である。梁行2間、桁行4(5)間、身舎面積31.8 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 9.3° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.36～0.96 mの概ね円形を呈する。柱穴a、e、k、l、mで柱痕が検出されており、直径0.08～0.12 mの方形である。柱間は梁行1.5～4.1 m、桁行0.5～2.4 mである。D-2期の遺物が出土した。

97-1 SB335（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第7図、遺物図：なし）

調査区北東部のJ7 グリッドで検出したB列の建物である。SK175に切られる。梁行2間、桁行5間、身舎面積21.3 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 7.61° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.24～0.56 mの概ね円形を呈する。柱穴a、f、h、iで柱痕が検出されており、直径0.12～0.16 mの方形である。柱間は梁行1.5～3.2 m、桁行0.9～1.7 mである。柱穴からはA期～D-1期の遺物が出土した。

97-1 SB340（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第7図、遺物図：なし）

調査区東部のI7 グリッドで検出したA列の建物である。梁行2間、桁行4(5)間、身舎面積23.1 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 7.16° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.24～0.44 mの概ね円形を呈する。柱穴a、b、c、e、g、j、k、lで柱痕が検出されており、直径0.12～0.16 mの方形である。柱間は梁行1.4～3.3 m、桁行1.0～4.9 mである。柱穴bより青花皿B群が出土した。

97-1 SB450（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第8図、遺物図：第97図1）

調査区東部のI7 グリッドで検出したB列の建物である。梁行2間、桁行4(6)間、身舎面積20.4 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 6.47° - Wの東西棟である。柱穴は直径0.16～0.56 mの概ね円形を呈する。柱穴a、c、e、d、f、j、lで柱痕が検出されており、直径0.08～0.16 mの方形である。柱間は梁行0.9～2.2 m、桁行0.8～2.2 mである。

97-1 SB490（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第8図、遺物図：なし）

調査区東部のF7 グリッドで検出したB列の建物である。梁行2(3)間、桁行4(5)間、身舎面積17.9 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 7.52° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.16～0.48 mの概ね円形を呈する。柱穴o、pで柱痕が検出されており、直径0.08～0.12 mの方形である。柱間は梁行1.1～1.5 m、桁行0.5～2.2 mである。B期～D-1期の遺物が出土した。

97-1 SB495（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第9図、遺物図：なし）

調査区北部のK5 グリッドで検出した町屋背面の建物である。梁行1間、桁行5間、身舎面積15 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 6.47° - Eの東西棟である。梁間は3.0 mと広いので、礎石などが存在していた可能性が高い。柱穴は直径0.2～0.4 mの概ね円形を呈する。柱穴b、c、d、e、f、g、h、j、kで柱痕が検出されており、直径0.08～0.16 mの方形である。柱間は梁行3.0 m、桁行0.7～1.3 mである。

97-1 SB1030（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第9図、遺物図：第60図1～2）

調査区南東部のC7 グリッドで検出したA列の建物である。梁行2(3)間、桁行4間、身舎面積30.4 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 11.51° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.24～0.8 mの概ね円形を呈する。柱穴cで方形プランの柱痕が検出されており、直径0.16～0.32 mの円形である。柱間は梁行1.0～2.2 m、桁行0.7～2.5 mである。柱穴cより土師器皿Cが出土した。

97-1 SB1035（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第10図、遺物図：なし）

調査区南東部のD7 グリッドで検出したB列の建物である。SK440に切られる。梁行2(3)間、桁行3間、身舎面積26.3 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 7.56° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.2～0.56 mの概ね円形を呈する。柱穴bで柱痕が検出されており、直径0.08+α mの円形である。柱間は梁行1.0～2.2 m、桁行1.5～4.6 mである。柱穴iより土師器壺Bnが出土した。

97-1 SB1040（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第10図、遺物図：なし）

調査区南東部のD6 グリッドで検出したA列の建物である。梁行2間、桁行4(5)間、身舎面積34.2 m²の掘立

柱建物で、建物主軸方向N - 7.69° - Eの東西棟である。柱穴は直径2.0～6.4mの概ね円形を呈する。柱穴j、kで柱痕が検出されており、直径0.08～0.16mの方形である。柱間は梁行1.9m、桁行0.9～2.5mである。1～n間はSF100の西端を示す石列(SX800)を礎石として使用したと考えられる。D-2期の遺物が出土した。

97-1 SB1045（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第11図、遺物図：なし）

調査区西部のG3グリッドで検出した町屋背面の建物である。梁行1間、桁行4間、身舎面積15.7m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 5.62° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.32～0.64mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行2.8m、桁行0.7～2.2mである。柱穴iより白磁皿E-5類、青花皿E又はBが、fから土師器壺B・壺Bn、土師質土器鍋Cが出土した。出土遺物からD-1期以降に廃絶したものと推定される。

97-1 SB1050（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第11図、遺物図：なし）

調査区南東部のE7グリッドで検出したA列の建物である。梁行2間、桁行4間、身舎面積26.6m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 9.4° - Eの東西棟である。柱穴は直径2.4～4.8mの概ね円形を呈する。柱穴kで柱痕が検出されている。柱間は梁行1.5～2.1m、桁行1.4～2.8mである。柱穴hより青花碗E群が出土した。

97-1 SB1055（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第12図、遺物図：なし）

調査区南東部のE7グリッドで検出したA列の建物である。梁行2間、桁行5間、身舎面積21.4m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 5.46° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.24～0.48mの概ね円形を呈する。柱穴b、d、e、f、g、hで柱痕が検出されており、直径0.08～0.16mの円形である。柱間は梁行0.8～0.16m、桁行0.3～1.5mである。柱穴kより壇が出土した。

97-1 SB1060（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第12図、遺物図：なし）

調査区東部のF7グリッドで検出したB列の建物である。梁行2間、桁行5間、身舎面積18.1m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 9.44° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.4～0.56mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行0.9～1.7m、桁行0.6～1.7mである。A期～D-1期の遺物が出土した。

97-1 SB1065（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第13図、遺物図：なし）

調査区東部のF7グリッドで検出したB列の建物である。梁行2間、桁行5(6)間、身舎面積22.6m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 5.58° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.16～0.88mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行1.3～1.8m、桁行0.8～2.2mである。柱穴lから土師器皿Cが出土した。

97-1 SB1070（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第13図、遺物図：なし）

調査区東部のG6、H7～H8グリッドで検出したB列の建物である。梁行3間、桁行5間、身舎面積29.5m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 5.64° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.24～0.56mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行0.8～1.7m、桁行0.3～2.3mである。A期～D-1期の遺物が出土した。

97-1 SB1075（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第14図、遺物図：なし）

調査区東部のG7グリッドで検出したB列の建物である。梁行4間、桁行4間、身舎面積27.2m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 5.56° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.12～0.4mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行0.7～1.6m、桁行0.9～2.1mである。遺物は出土していない。

97-1 SB1080（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第14図、遺物図：なし）

調査区東部のG7グリッドで検出したB列の建物である。梁行2間、桁行5間、身舎面積23.5m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 7.44° - Wの東西棟である。柱穴は直径0.2～0.8mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行1.3～2.0m、桁行0.9～1.8mである。A期～D-1期の遺物が出土した。

97-1 SB1085（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第15図、遺物図：なし）

調査区東部のI7グリッドで検出したA列の建物である。SK238・276に切られる。梁行2間、桁行7間、身舎面積20.7m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 6.07° - Eの東西棟である。柱穴は直径0.24～0.44mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行0.5～1.4m、桁行0.8～2.2mである。柱穴gから土師器壺B・壺Bnが出土した。

97-1 SB1090（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第15図、遺物図：なし）

調査区南部のC4グリッドで検出した町屋背面の建物である。整地層除去後に確認した。梁行2(3)間、桁行4(2)間、身舎面積8.9m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-0°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.16～0.44mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行0.6～1.1m、桁行0.7～2.4mである。柱穴gより土師器坏Aが出土した。

97-1 SB1095（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第16図、遺物図：なし）

調査区南部のD4グリッドで検出した町屋背面の建物である。整地層除去後に確認した。梁行3間、桁行4間、身舎面積13.2m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-1.81°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.16～0.4mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行0.4～1.1m、桁行0.3～2.1mである。A期以降の遺物が出土した。

97-1 SB1100（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第16図、遺物図：第60図3）

調査区南東部のE7グリッドで検出したA列の建物である。梁行4(3)間、桁行4間、身舎面積42.3m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-9.89°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.2～1.36mの概ね円形を呈する。柱穴p、qで柱痕が検出されており、直径0.08mの円形である。柱間は梁行0.4～1.1m、桁行0.3～2.1mである。柱穴jより完形の土師器坏Aが、柱穴hより土師器坏B片が出土した。

97-1 SB1105（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第17図、遺物図：第60図4）

調査区北部のJ4グリッドで検出した町屋背面の建物である。梁行2間、桁行4間、身舎面積22.6m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-4.53°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.2～0.48mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行1.3～2.8m、桁行1.5～3.0mである。柱穴hより土師器坏Bn小片が、柱穴jより厚手の土師器皿Cが出土した。C期以降に位置づけられる。

97-1 SB1110（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第17図、遺物図：なし）

調査区北部のK4グリッドで検出した町屋背面の建物である。掘り込み整地SX690を切る。梁行1(2)間、桁行5間、身舎面積20.9m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-8.67°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.12～0.64mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行0.9～2.4m、桁行1.4～2.1mである。柱穴fより京都産の可能性のある土師器皿が出土した。B期以降に位置づけられる。

97-1 SB1115（【本文・表編】第23図・第5～6表／【図版編】遺構図：第18図、遺物図：なし）

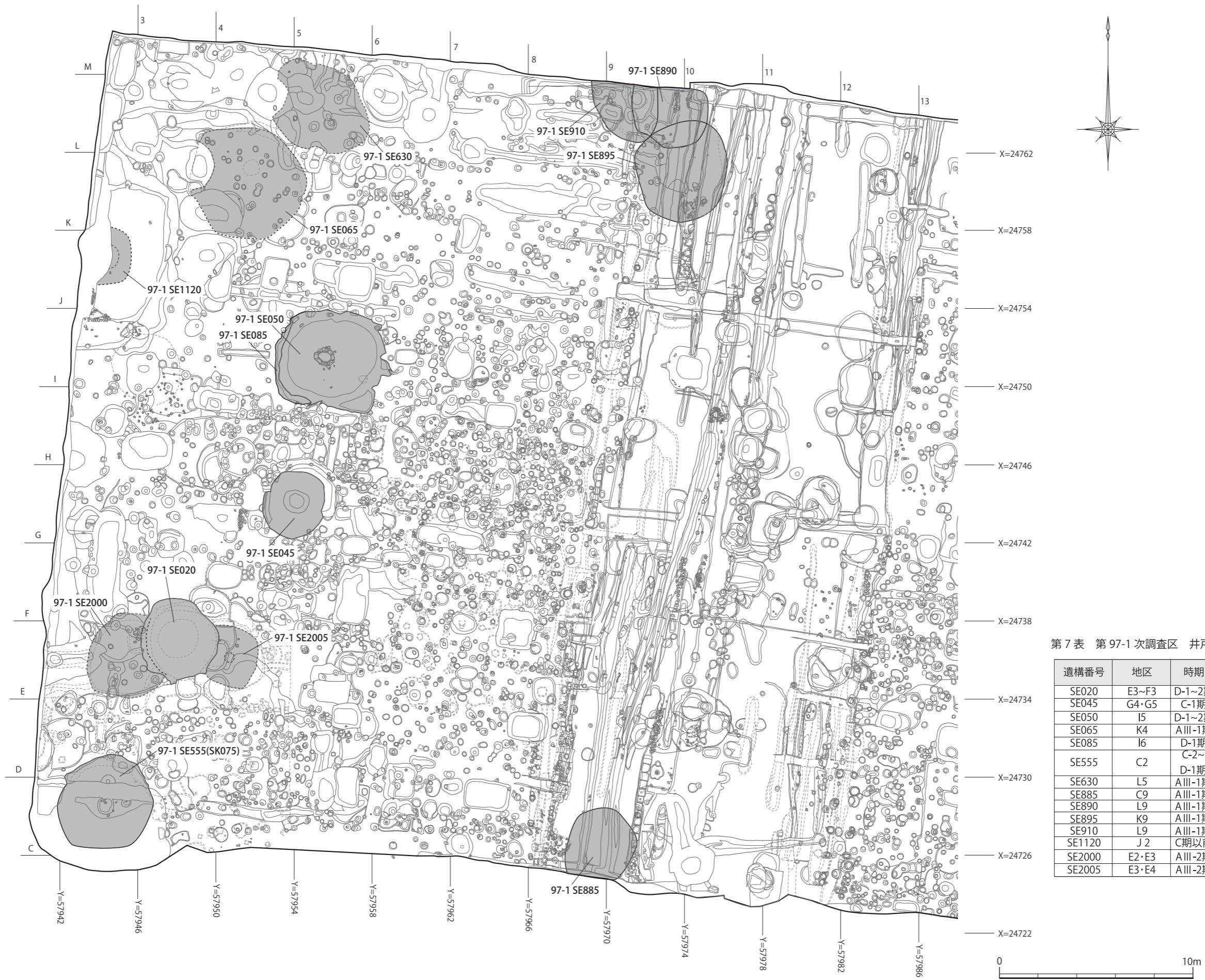
調査区西部のH3グリッドで検出した町屋背面の建物である。掘り込み整地SX690を切る。梁行3(4)間、桁行5間、身舎面積25.7m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-6.96°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.24～0.56mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行0.4～1.3m、桁行1.2～3.8mである。柱穴oから土師器坏Bが出土した。C-1期のSX690を切ることから、C期以降に位置づけられる。

井戸跡（SE）

南北道路SF100前面の掘立柱建物の裏手に建物と同時存在したと考えられる井戸5基、15世紀に遡る井戸4基、SF100の下層よりAⅢ-1期の井戸4基の計13基を検出した。調査の工期と安全管理上、水溜部まで確認できたのはSE050・065のみで、完掘したのはSE010のみである。その他は、97-1と同様に井筒の構造把握や土層図作成及び遺物回収を目的に調査終了直前に重機にて半截した。

97-1 SE020（【本文・表編】第24図・第111表／【図版編】遺構図：第19図、遺物図：第60図5～13、第93図1、9、第100図1）

調査区西南部のE3・F3グリッドで検出した。検出面での掘方は長径4.1m、短径3.9mの不整円形である。1.0m分を掘り下げた。埋土は茶褐色土である。第19図に示すように、井戸枠は抜き取られている可能性が高い。出土遺物は「裏込茶褐色土」「裏込黄褐色ブロック土」、抜き取り後の堆積土と考えられる「茶色土」「灰黄砂質土」から取り上げた。遺物は遺構全体の一段掘り下げ時の層である。「SE020」から朝鮮陶器粉青沙器皿、茶臼が、「灰黄褐色砂質土」から瀬戸瓶子、被熱した丸瓦が、「裏込」からは石臼が、「茶色土」から椀型滓が出土した。「茶色土」「灰黄色砂質土」より土師器皿C・椀、備前焼擂鉢（近世1期）が出土し、また「灰黄砂質



第24図 第97-1次調査区 SE掲載位置図(1/200)

第7表 第97-1次調査区 井戸跡 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SE020	E3~F3	D-1~2期			22
SE045	G4・G5	C-1期			22
SE050	I5	D-1~2期			23
SE065	K4	A III-1期			24
SE085	I6	D-1期			23
SE555	C2	C-2~ D-1期		×	25
SE630	L5	A III-1期			26
SE885	C9	A III-1期			27
SE890	L9	A III-1期			28
SE895	K9	A III-1期		×	27
SE910	L9	A III-1期			28
SE1120	J 2	C期以前		×	42・43
SE2000	E2・E3	A III-2期			29
SE2005	E3・E4	A III-2期			29

土」からは土師器皿C・椀Cが出土しておりD-1～2期に廃絶したものと考えられる。

97-1 SE045（【本文・表編】第24図・第111表／【図版編】遺構図：第19図、遺物図：第60図14～16）

調査区西部のG4・G5グリッドで検出した。第59図SX690周辺遺構に示すように、SE045裏込部分はSX690など多くの遺構に切られる。検出面での掘方は長径3.5m、短径3.1mの不整円形である。2.0m分を掘り下げた。中央に直径0.9mの円形を呈する井筒部が確認された。構造は桶組みなどの有機物と考えられる。出土遺物は「SE045」「枠内」「枠内褐色土」「裏込」で取り上げた。「裏込」から薄手の土師器皿C、土師質土器鍋Dが出土しており、C-1期に廃絶したものと考えられる。

97-1 SE050（【本文・表編】第24図・第111表／【図版編】遺構図：第20図、遺物図：第60図17～33、第61図34～44、1～3、第93図10、第95図3～8、第98図2～8、第100図2、第101図1、1）

調査区西部のI5グリッドで検出した。SE085を切る。SE085を掘り返した井戸と考えられる。検出面での掘方は長径5.7m、短径4.9mの不整楕円形である。1.8m分を人力で掘り下げ、枠内下部までを重機により掘り下げた。水溜部までは、深さ3.0mを測る。中央に直径約0.9mの円形の土坑SK064を検出した。井筒部はSK064除去後に確認した。出土遺物は、第20図断面模式図に示すように「SE050」「枠内」「枠内桶内」「枠内下層」「井筒内」「裏込」「裏込茶褐色土（黄褐色ブロック土）」「黄褐色土」「黄褐色ブロック土」から取り上げた。井戸枠構造は、火輪、地輪を加工して八角形に組んだもので、9段ほど積む。水溜部は曲物を用いていた。これらの石塔類は、第95図4～8に代表するように火輪のかえり部を組みやすいうように削り落とし、裏面も「アール」をつけて削る。遺物は「裏込」から土師質土器鍋、地輪、茶臼再加工品、銅製品目貫金具が、「井筒内」から華南三彩が、「枠内下層」から青花鉢が、「黄褐色土裏込」から「永楽通宝」が、「茶灰色土」「井戸枠」からは火輪・地輪が出土した。「裏込」より厚手の土師器皿Cが出土したことからD-1～2期に構築され、廃絶したものと考えられる。

97-1 SE085（【本文・表編】第24図・第112表／【図版編】遺構図：第20図、遺物図：第61図19～23）

調査区西部のI6グリッドで検出した。大部分がSE050に切られている。検出面での掘方は長径6.0m、短径4.95mの不整円形である。1.8mまでを人力で掘り下げた。地表面より深さ3.0m分掘り下げると、中央やや東よりにSE050井戸枠とやや位置をずらした位置に径約0.8mの楕円形を呈する井筒部を確認した。水溜部には曲物を用いる。出土遺物は「裏込」から取り上げた。土師器杯Aが多く出土しているが、土師器皿Cの出土やSE050との連続性からみてD-1期頃に廃絶したものと考えられる。

97-1 SE065（【本文・表編】第24図・第112表／【図版編】遺構図：第21図、遺物図：第61図4～18）

調査区北西部のK4グリッドで検出した。1面目で井戸枠及び掘方プランを確認した。検出面での掘方は長径6.0m、短径5.8mの不整円形である。3.9m分を掘り下げた。中央に直径約0.8mの円形を呈する井筒部が確認された。出土遺物は「SE065」と「裏込」から取り上げた。土師器坏A・小皿AⅠ・AⅡ、白磁皿IX類が出土しており、AⅢ-1期に廃絶したものと考えられる。

97-1 SE555（SK075）（【本文・表編】第24図・第112・117表／【図版編】遺構図：第22図、遺物図：なし）

調査区西南部のC2グリッドで検出した。検出面での掘方は長径5.5m、短径5.1mの不整円形で、3.8m分を掘り下げた。検出面より2.0m掘り下げた段階で中央に直径0.8mの円形を呈する井筒部を確認した。これより上部はSK075とした部分で井筒は抜き取られたと考えられる。第22図に示すように、土層12～34層を掘り返し後に堆積した層（SK075）、35～38層がSE555の裏込土と考えられる。SE555から土師器皿Cや青花皿などが出土した。C-2～D-1期に位置づけられる。

97-1 SE630（【本文・表編】第24図・第117表／【図版編】遺構図：第23図、遺物図：第61図24～31）

調査区北西部のL5グリッドで検出した。北西部土坑群と重複する位置にある。井筒部をSK156除去後に確認したが、裏込プランの検出は多くの土坑と切り合って難しかった。SE065と同様に整地層がない地点であった為か、1面目で検出できる。検出面での掘方は長径5.0m、短径4.6mの不整楕円形である。2.3m分を掘り下げた。中央西に直径約0.6mの円形を呈する井筒部が確認された。井筒部は桶などの木製と考えられる。出土遺物

は土師器小皿 A I、土師質土器鍋 B I、備前焼擂鉢（中世 4a 期）、龍泉窯系青磁碗 D 類が出土しており、A III -1 期に廃絶したものと考えられる。

97-1 SE885（【本文・表編】第 24 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 24・56 図、遺物図：第 62 図 1～7、第 94 図 7）

調査区南部の C9 グリッドで検出した。SF100 及びベルト SF1130 除去後に検出した南北道路形成以前の井戸跡である。検出面での掘方は長径 3.3 m、短径 3.3 m の不整円形である。0.6 m 分を掘り下げた。検出時及び掘り下げ時には井戸枠が確認されないことから抜き取られた可能性が高い。出土遺物は土師器壺 A、土師質土器鍋 B、方形石材が出土した。A III -1 期に廃絶したものと考えられる。

97-1 SE895（【本文・表編】第 24 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 24 図、遺物図：なし）

調査区北部の K9 グリッドで検出した。SF100 除去後に検出した。SE890 に切られる。検出面での掘方は長径 5.4 m、短径 4.3 m の不整楕円形である。1.5 m 分を掘り下げた。中央に直径約 0.9 m の円形を呈する井筒部が確認された。土師器壺 A、土師質土器鍋、備前焼甕が出土した。A III -1 期に廃絶したものと考えられる。

97-1 SE890（【本文・表編】第 24 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 25・54 図、遺物図：第 62 図 8～12）

調査区北部の L9 グリッドで検出した。SF100 除去後に検出した。SE890・910 を切る。検出面での掘方は長径 4.1 m、短径 2.9+ α m の不整楕円形である。1.5 m 分を掘り下げた。北半分は調査区外に展開する。調査位置では井筒は検出されなかった。土師器壺 A・小皿 A II、備前焼擂鉢・甕が出土しており A III -1 期に廃絶したものと考えられる。

97-1 SE910（【本文・表編】第 24 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 25 図、遺物図：第 62 図 13～16）

調査区北部の L9 グリッドで検出した。SF100 除去後に検出した。SE890 に切られる。検出面での掘方は長径 2.75 m、短径 1.6+ α m の不整楕円形である。1.85 m を掘り下げた井筒は第 25 図の土層に示すように、直径 1.0～1.2m の木製と考えられる。土師器壺 A・小皿 A I、東播系須恵質土器甕が出土しており、A III -1 期に廃絶したものと考えられる。

97-1 SE1120（【本文・表編】第 24 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 39 図、遺物図：なし）

調査区北西部の J2 グリッドで検出した。SK354・320 などの C～D 期の大型遺構の下層で検出した。調査区西壁にかかる為、掘下げが十分でないが、直径 2.5 m で検出面より 2.0 m 以上の深度をもった遺構である。重機による掘り下げ時に火輪や地輪が出土した。C 期以前に埋没したと考えられる。直線的に掘り込まれた深度を持った遺構であることから井戸と考えている。

97-1 SE2000（【本文・表編】第 24 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 26 図、遺物図：第 62 図 17～31）

1 面目の井戸である SE020 検出時には確認できず、整地層除去後に確認した 2 面目の遺構である。検出面での掘方は長径 4.3 m、短径 3.9 m の不整円形である。2.15 m 分を掘り下げた。中央北東よりに長径 1.0+ α m、短径 0.9 m の方形を呈する井筒部が確認された。井筒は木製と考えられる。土師器壺 A・小皿 A I・A II・大内 A 式土師器皿、土師質土器鍋 B 1、白磁碗 IV 類が出土しており、A III -2 期頃に廃絶したものと考えられる。

97-1 SE2005（【本文・表編】第 24 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 26 図、遺物図：第 62 図 32～38）

調査区西南部の E3・E4 グリッドで検出した。SE2000 と同様の 2 面目の井戸である。SK020 に切られている。検出面での掘方は長径 3.8 m、短径 3.6 m の不整円形である。2.0 m 分を掘下げた。土師器壺 A・小皿 A I・A II・大内 A 式土師器皿、土師質土器鍋 B 1 が出土しており、A III -2 期頃に廃絶したものと考えられる。

土坑（SK）

170 基を超える土坑を検出した。小型の方形土坑や円形土坑、複数の切り合い関係をもつ大型廃棄土坑などがその内訳である。97-1E では少なかった正方形プランに近い小型の方形土坑が多く、SF100 前面のピット群中とその背面に分布している。大部分が遺構全体の最盛期ともいえる D 期に帰属するが、大型廃棄土坑の形成は B 期より始まっている。また、小型の方形土坑の中には A 期まで遡る可能性をもつものもあるが、出土遺物が少なく A 期と確定できる遺構は少ない。

■北西部土坑群（SK005・156・190・295・160 他）について（【図版編】遺構図：第 27 図）

調査区北西部に密集する土坑群である。97-1E 北東部の土坑群を構成する SK125、SK115、SK2000 では同一地点で垂直方向に掘り返しを行うのに対して、97-1 北西部土坑群は、第 27 図に示すように東西 16 m の範囲に場所を平行移動しながら廃棄土坑を形成する。土坑の形状は隅丸方形や楕円形プランで 1.0 m 前後の深さをもった土坑が B 期の SK391 を最古に、以後 C ~ D 期にかけて 10 基以上が形成される。SK160・156 が最新の土坑である。

北西部土坑群の一部は 87-7 と重複している。町 87-7SX045 として調査した土坑からは高麗青磁墩とよばれる希少な遺物が出土している（大分市教育委員会 2010 p26）。87-7 で確認した土坑群は第 27 図上・中段に示すとおりである。多くの土坑は共通して最上層ないし土坑内部に多量の礫を含む。

97-1 SK001（【本文・表編】第 25 図・第 111 表／【図版編】遺構図：第 28 図、遺物図：第 63 図 1～12）

調査区北西隅の K3・L3 グリッドで検出した。長軸 2.55 m、短軸 2.0 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.4 m である。出土遺物は土師器坏 A、土師質土器鍋 C、白磁皿 E 群が出土しており、A Ⅲ -3～B 期に位置づけられる。

97-1 SK005・051

調査区北西隅の L3・M3 グリッドで検出した。北西部土坑群を構成する。SK005 は SK051 を切る。

97-1 SK005（【本文・表編】第 25 図・第 111 表／【図版編】遺構図：第 28 図、遺物図：第 63 図 13～17）

長軸 2.6 m、短軸 2.0 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.85 m である。埋土は 4 層に分層しており、砂層と灰色土の互層で下面に集石が見られる。出土遺物は「SK005」「砂土 1 層」「黒色土 4 層」から取り上げた。「砂土 1 層」からは土師器皿 C が出土した。C-2～D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK051（【本文・表編】第 25 図・第 8 表／【図版編】遺構図：第 28 図、遺物図：なし）

SK051 は SK005 を切る。長軸 1.5 m、短軸 1.25 m の楕円形で、検出面からの最大深度は 0.8 m である。埋土は明黄灰色である。図示していないが、土師器皿 C や青花皿 B 群が出土した。C-1～2 期に位置づけられる。

97-1 SK010・145・150

調査区北西の J3・K3 グリッドで検出した。SK010 の除去後に SK145・SK150 を検出しておらず、近接した時期に形成された連続した廃棄土坑と考えられる。

97-1 SK010（【本文・表編】第 25 図・第 111 表／【図版編】遺構図：第 28 図、遺物図：第 63 図 18～30、第 64 図 31～38、1～16、第 65 図 17～29、第 94 図 4、第 100 図 3）

長軸 5.4 m、短軸 2.8 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.6 m である。埋土は 3 層に分層しており 1～2 層は黒褐色土、3 層は褐灰色土である。焼土を多く含んでいる。出土遺物は「SK010」「茶褐色土」「ベルト茶褐色土 1～3 層」「焼土」から取り上げた。多くの遺物が出土しており、「茶褐色土」からは中国黑釉陶器灯明皿、壺、華南三彩鴨形水注が出土した。その他「SK010」からは土師器皿 C、石製容器が、「ベルト茶褐色土 1～3 層」からは土師質土器鍋 B ないし C が、「焼土」からは青花碗 C 群、「茶褐色土」からは土師器皿 C、青花皿 B 群・E 群、碗 E 群、漳州窯系青花皿 C 群、性格不明の板状鉄製品などが出土した。D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK145（【本文・表編】第 25 図・第 111 表／【図版編】遺構図：第 33 図、遺物図：第 69 図 5～14）

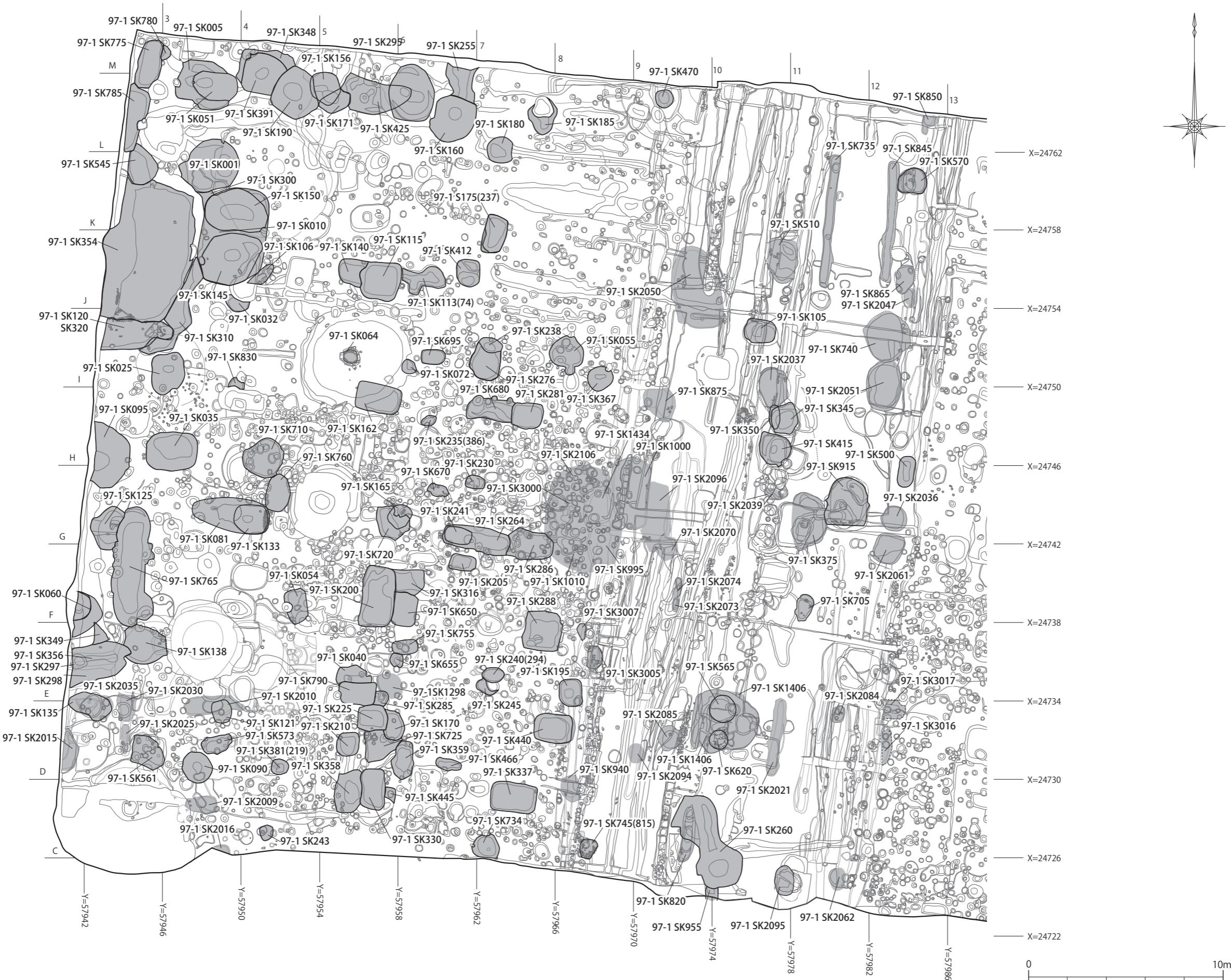
長軸 3.0 m、短軸 2.4 m の楕円形で、検出面からの最大深度は 0.7 m である。SK010 の除去後に確認した。埋土は炭化物や焼土粒を含む。出土遺物は土層ベルト部分のみ「層序」で取り上げたが、それ以外は「黒褐色土一括」で取り上げた。土師器皿 C・耳皿 C、青花皿 F 群が出土しており、D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK150（【本文・表編】第 25 図・第 113 表／【図版編】遺構図：第 33 図、遺物図：第 69 図 15～26）

長軸 3.15 m、短軸 2.1 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.75 m である。SK010 の除去後に確認した。埋土は SK145 と類似しており、焼土や炭化物を含む。出土遺物は、土層ベルトのみ「層序」で取り上げたが、それ以外は「黒褐色土一括」で取り上げた。土師器皿 C、土師質土器鍋 D、青花碗 E 群、白磁菊皿 E-4 類が出土しており、C-2～D-1 期に位置づけられる。

第8表 第97-1次調査区 土坑 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁	遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SK001	K3~L3	A III-3~B期			31	SK466	D6	A期	×		5・6
SK005	L3~M3	C-2~D-1期			31	SK470	L9	C-2~D-1期	×		5・6
SK010	J~K3	D-1期			31	SK500	G12~H12	A III期	×		5・6
SK025	D2	C-2~D-1期			31	SK510	J10	C-2~D-1期			43
SK032	I3~J3	A III期	×		5・6	SK545	K2	C期			42
SK035	H3	D-1期			32	SK561	D2	C~D期	×		5・6
SK040	D5~E5	D-1期	×		5・6	SK565	D10	C-2~D-1期		×	43
SK051	L3	C-1~2期		×	31	SK570	K12	C-2~D-1期			43
SK052	L4~M4	C期			33	SK573	D3	C期~	×	銅銭のみ	5・6
SK054	F4	C-1期	×		5・6	SK620	D10	D-1期			48
SK055	I8	C-2~D期			33	SK625	I7	不明	×	銅銭のみ	所在不明
SK060	F1~F2	D-1期			34	SK650	E6	A III-3~			44
SK064	I5	A III期		×	2・3	SK655	E5・E6	B-1期	×		5・6
SK072	I6	C-2~D期		×	33	SK665	D6	C-2期	×		所在不明
SK075	C2	A期		×	25	SK670	G6	C-D期	×		5・6
SK081	G4	D-1期		×	33	SK680	H7	C-2~D-1期			44
SK090	D3	C-2~D-1期			35	SK685	H8	A III期	×		所在不明
SK095	G2~H2	B-2期			35	SK695	I6	不明		×	44
SK105	I10	D-1期			35	SK705	F11	C-2~D-1期		×	44
SK106	J3~J4	不明	×	×	5・6	SK710	H4	A III期~			5・6
SK113	J5~6	D-1期	×		5・6	SK715	G6	B-1期	×		所在不明
SK115	J5	D-1期			35	SK720	G5	B期	×		5・6
SK120	I2~I3	C-2~D-1期			42・43	SK725	D5	A III-1期	×		5・6
SK121	D3~E3	近世	×		5・6	SK734	C7	C期	×	銅銭のみ	5・6
SK125	G2	C-2~D-1期			36	SK735	J11・K11	D-1期			44
SK133	G4	B期		×	33	SK740	I12	D期			45
SK135	E2	C-2期	×		5・6	SK755	E6	C-1期			45
SK138	E2	C-2~D-1期	×		5・6	SK760	G4	A III-3~B期		×	45
SK140	J5	D-1期			35	SK765	F2・G2	A III期			45
SK145	J3~J4	D-1期			36	SK775	L2・M2	A II期		×	45
SK150	K3~K4	C-2~D-1期			36	SK780	M3	A II期		×	45
SK156	L4~L5	D-1期			36	SK785	L2	A期	×		5・6
SK160	L6	D-1期			37	SK790	E5	A III期			46
SK162	H5	D-1期			37	SK815	C8	C-2~D-1期			46
SK165	G5	B-2期	×		5・6	SK820	C9	A III期			46
SK170	D5	C-2期			38	SK830	H3・I3	A II期			46
SK175	K7~J7	D期			37	SK845	J12・K12	D-1期			46
SK180	K7~L7	B-2期			37	SK850	L12	C期			46
SK185	L7	D-1期	×		5・6	SK865	J12	C-2~D-1期			46
SK190	L4	C-2~D-1期			38	SK875	H9	A期		×	47
SK195	E8	C期		×	37	SK915	G11	D-1~D-2期			47
SK200	F5	D期			38	SK940	C8	A III-1~2期			47
SK205	F6	A II期	×		5・6	SK955	B10	C-2~D期	×		47・57・58
SK210	D5	C期	×		5・6	SK995	G8	C-1~C-2期		×	47
SK225	D5	C-2期			38	SK1000	G8	B-2~C-1期			47
SK230	G6	A期	×		5・6	SK1010	F8	A III-2期	×		51
SK235	H6	B期	×		5・6	SK1020	E7	A III期			59
SK238	I7	不明		×	38	SK1169	E6	A期	×	銅銭のみ	所在不明
SK240	E7	B期	×		5・6	SK1298	E5	A III-1~2期	×		5・6
SK241	E7	C-2~D期			38	SK1406	D10	不明		×	48
SK243	C4	17c~	×	銅銭のみ	5・6	SK1434	G8	不明		×	47
SK245	E7	A II-3期~	×		5・6	SK2009	C3	A II-3~			47
SK255	L6	C-2期	×		5・6	SK2010	D3	A III-1期			47
SK260	C9・C10	C-2~D-1期			39	SK2015	D1	A III-2~3期		×	48
SK264	F7・G6・G7	C期			38	SK2016	C3	A期	×		5・6
SK276	I7	B期~	×		38	SK2021	D10	C-2~D期			48
SK281	H7	C-2期			39	SK2025	D2	A期	×		5・6
SK285	D5	C-1期~	×		5・6	SK2030	D2	A期			48
SK286	F7~G7	A期~		×	38	SK2035	D1・D2 E1・E2	A III期	×		5・6
SK288	F7	C-2~D-1期			39	SK2036	G12	A III-2~3期			48
SK295	L6	C-2期			39	SK2039	G10	A期		×	48
SK297	E1~E2	D期		×	3・4	SK2047	J12	B-2~C期			49
SK298	E2	D期			34	SK2050	J9	C-1~C-2期			49
SK300	K3	C-1期	×		5・6	SK2051	H12・I12	A期		×	49
SK310	I2~I3	C-1期			42・43	SK2061	F12	不明			49
SK316	F6	D期			40	SK2062	B11	A期	×		5・6
SK320	I2	C-2期			42・43	SK2066	D10	C-2~D-1期		×	48
SK330	C5	C期			40	SK2067	D10	C-2~D-1期		×	48
SK337	C7	C-1期	×		40	SK2068	D10	A期		×	48
SK345	H10	D-1~D-2期			40	SK2070	F9	A期			5・6
SK345・350	H10	D-1~D-2期			40	SK2073	F9	C-2期	×		5・6
SK348	M4	C期			33	SK2077	D9	A期~		×	48
SK349	F1~F2	C-2~D-1期			34	SK2084	D11	A II-3~ A III-1期			49
SK350	H10	D-1~D-2期			40	SK2085	D9	B期~			49
SK354	I2	C-2~D期			42・43	SK2094	D8	A III期~		×	49
SK356	E2	D期	×		34	SK2095	B11	D-1期			50
SK358	C5	D期	×		41	SK2096	G9	A期	×		所在不明
SK359	D6	C期			41	SK2106	G8	A期	×		5・6
SK367	I8	D-1期			41	SK2300	G8	A III-2期			50
SK375	G11	不明		×	41	SK3005	E8	A期	×		51
SK381	D4	A期	×		5・6	SK3007	F8	A期	×		51
SK386	H6	B期	×	銅銭のみ	5・6	SK3016	D12	A期		×	52
SK391	M4	B期			33	SK3017	D13	A III-1期	×		52
SK412	J6	B期		×	41						
SK415	H10	C-2期			41						
SK425	L5	C期			43						
SK440	D7~D9	C期~			43						
SK445	C5	A期	×		5・6						



第25図 第97-1次調査区 SK掲載位置図(1/200)

97-1 SK025（【本文・表編】第 25 図・第 111 表／【図版編】遺構図：第 28 図、遺物図：第 65 図 1～2）

調査区北西の I3 グリッドで検出した。SX030 を切る。長軸 1.85 m、短軸 1.4 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.35 m である。埋土は黒色土の単層である。厚手の土師器小皿 C が出土しており、C-2～D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK035（【本文・表編】第 25 図・第 111 表／【図版編】遺構図：第 29 図、遺物図：第 65 図 4～24、第 66 図 25～26、第 100 図 4～9、第 101 図 2～3）

調査区西側の H3 グリッドで検出した。SX690 を切る。長軸 2.55 m、短軸 1.9 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 0.55 m である。埋土は 3 層に分層しており、1～2 層は「暗褐色土」、3 層は「黒褐色土」である。出土遺物は「SK035」「暗褐色土」「黒褐色土」から取り上げた。「SK035」「暗褐色土」は 1～2 層、「黒褐色土」は 3 層に対応する。遺物は床面直上に堆積する「黒褐色土」から土師器皿 C・小皿 C、備前焼大甕（近世 1 期）、龍泉窯系青磁香炉、白磁蓋、華南三彩鶴形水注、軒平瓦、碁石、火打石、石臼破片が出土した。「SK035」から鎧金具、釘、鉄鏃、銅製品錠、錠のバネ部が、「暗褐色土」から土師器坏 A・皿 C が出土した。D-1 期に位置づけられる。第 29 図に示すように、碁石は板状の有機物上に散らばったような状態で出土した。華南三彩鶴形水注は口縁部と頭部を欠くが、大・小の破片となって床面に散らばった状態で出土した。これらは全て接合した。なお H8 グリッドに所在する SP794 出土の水注片と接合した。

97-1 SK052（【本文・表編】第 25 図・第 112 表／【図版編】遺構図：第 30 図、遺物図：第 67 図 6、第 93 図 2、第 97 図 2）

調査区北西隅の L4・M4 グリッドで検出した。北西部土坑群を構成する。SK005・051 に東接する。SK052・348 は同一遺構の可能性があり、SK391 を掘り返した土坑と考えられる。SK052・348 は長軸 3.0 m、短軸 2.5 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.6 m を測る。水輪が出土したほか、土師器坏 Bn・皿 C が出土しており C 期に位置づけられる。

97-1 SK391（【本文・表編】第 25 図・第 115 表／【図版編】遺構図：第 30 図、遺物図：第 67 図 8～9、第 101 図 1）

SK052・348 除去後に検出した。長軸 3.4 m、短軸 3.1 m の正方形で、検出面からの最大深度は 0.6 m である。図示していないが土師器坏 Bn、土師質土器鍋 D が出土しており、B 期に位置づけられる。なお、銅滓の付着した埴堀や調査地点唯一の土製鋳型が出土した。

97-1 SK055（【本文・表編】第 25 図・第 112 表／【図版編】遺構図：第 30 図、遺物図：第 67 図 8～9、第 101 図 1）

調査区中央の I8 グリッドで検出した。長軸 1.6 m、短軸 1.1 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 0.15 m である。埋土は焼土や炭化物を含む褐色土の単層で、床面は凸凹がみられる。遺物は土師器坏 A・坏 Bn や土師質土器鍋片、瓦質土器擂鉢などの小片が出土した他、床面直上より完形の漳州窯系青花鉢が出土した。青花鉢内に堆積する土ごと取り上げ、室内で土を除去すると内部に青花小壺とこれを覆う天地を逆にした金属製容器を確認した。小壺内部は空洞で、遺物や有機物痕跡などはみられない。土坑墓とするには小型で浅く、埋納遺構のわりに遺構が大きい性格不明の遺構である。漳州窯系青花鉢の存在から C-2～D 期の遺構と考えられる。

97-1 SK060・297・298・349・356

調査区中央端の F1・F2 グリッドで検出した。同一地点で複数回にわたって形成された。第 31 図に示すように、SK349 → 298 → 356 → 297 → 060 の順に形成される連続土坑群である。

97-1 SK060（【本文・表編】第 25 図・第 112 表／【図版編】遺構図：第 31 図、遺物図：第 67 図 10～15）

長軸 $0.8+\alpha$ m、短軸 1.2 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.25 m である。埋土中の 4 層は灰褐色砂礫層で、砂礫を多く含んだ層である。土師器皿 C 又は B・皿 C や、漆器椀などが出土した。D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK297（【本文・表編】第 25 図・第 114 表／【図版編】遺構図：第 31 図、遺物図：なし）

長軸 $2.6+\alpha$ m、短軸 2.2 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.4 m である。埋土中には全体に焼土・炭を含む。土師器皿 C、備前焼擂鉢（近世 1 期）、青花皿 E、朝鮮陶器碗が出土した。D 期に位置づけられる。

97-1 SK298（【本文・表編】第 25 図・第 114 表／【図版編】遺構図：第 31 図、遺物図：なし）

長軸 $2.8+\alpha$ m、短軸 2.1 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 1.1 m である。埋土は 4 層に分層している。

埋土の大部分を占める 24 層は砂礫を多く含んだ層である。図示していないが、完形品の土師器皿 C が多数出土した他、備前焼擂鉢（近世 1 期）が出土しており、D 期に位置づけられる。

97-1 SK349（【本文・表編】第 25 図・第 115 表／【図版編】遺構図：第 31 図、遺物図：第 75 図 1、第 99 図 7）

長軸は $1.5 + \alpha$ m、短軸は 3.15 m の不整円形で検出面からの最大深度は 1.05 m である。SK298 や SK060 と同様に 28 層や 33 層中には砂礫を多く含んでいる。出土遺物は図示していないが、土師器皿 C・小皿 C、土師質土器鍋 B、龍泉窯系青磁碗 II、白磁皿 E-2・E-5、備前焼擂鉢（中世 6 期）が出土した他、第 99 図 7 に示す基部を切断した板碑の傘部が出土した。C-2～D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK356（【本文・表編】第 25 図・第 115 表／【図版編】遺構図：第 31 図、遺物図：なし）

大部分が SK297・060 によって削平される。長軸 $1.1 + \alpha$ m、短軸 $0.3 + \alpha$ m が遺存しており、検出面からの最大深度は 0.6 m である。SK060・298・349 と同じく埋土には砂礫が多く含まれる。出土遺物は図示していないが、土師器皿 C・耳皿 B、青花碗 C が出土した。前後の遺構の切り合いから D 期に位置づけられる。

97-1 SK072（【本文・表編】第 25 図・第 112 表／【図版編】遺構図：第 30 図、遺物図：なし）

調査区中央の I6 グリッドで検出した。SE050・085 の裏込部を切る。長軸 0.75 m、短軸 0.75 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.25 m である。埋土は焼土を多量に含んでおり、火災処理土坑と考えられる。青花皿 E 群や釘などが出土した。C-2～D 期に位置づけられる。

97-1 SK133（【本文・表編】第 25 図・第 113 表／【図版編】遺構図：第 30 図、遺物図：なし）

長軸 1.7 m、短軸 1.5 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.55 m である。東側壁面のみに拳大の礫を三段ほど粗く積む。土師器壺 B が出土しており、B 期の遺構と考えられる。

97-1 SK090（【本文・表編】第 25 図・第 112 表／【図版編】遺構図：第 32 図、遺物図：第 67 図 16～26）

調査区南西隅の D3 グリッドで検出した。長軸 1.6 m、短軸 1.45 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.45 m である。埋土は灰色土の単層である。完形に近い厚手の土師器皿 C が多く出土しており、C-2～D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK095（【本文・表編】第 25 図・第 112 表／【図版編】遺構図：第 32 図、遺物図：第 67 図 27～34、第 68 図 1～5、第 101 図 3）

調査区西側の G2・H2 グリッドで検出した。長軸 $1.85 + \alpha$ m、短軸 3.35 m で検出面からの最大深度は 1.45 m である。埋土は 9 層に分層している。土層は 1～2 層、4～6 層、7～8 層にそれぞれ不整合面をもつことから、3 回ほどの掘り返しを行った可能性が高い。遺物はこれらの単位を意識してとり上げている。土師器皿 C が 1 点出土しているが、遺構上面の包含層からの混入品と考えられ、土師器壺 Bn のみの組成である。B-2 期に位置づけられる。

97-1 SK105（【本文・表編】第 25 図・第 112 表／【図版編】遺構図：第 32 図、遺物図：第 68 図 6～9、第 100 図 1、第 101 図 4）

調査区中央東の I10 グリッドで検出した。南北道路 SF100 上の遺構で、SD380 に切られる。焼土層で埋められた火災処理土坑である。長軸 1.89 m、短軸 1.2 m の楕円形で検出面からの最大深度は 1.0 m である。壁面はややオーバーハング気味になる。埋土は 8 層に分層し、遺物はそれぞれ「焼土層」「灰茶色砂質土」でとり上げたが、一括廃棄された遺物群である。土師器皿 C・椀 C、「咸平元宝」が出土した他、「焼土層」からは銀製の指輪状製品が出土した。D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK115（【本文・表編】第 25 図・第 113 表／【図版編】遺構図：第 32 図、遺物図：第 68 図 10～17、第 101 図 6）

調査区中央西側の J5 グリッドで検出した。SK140 を切る。長軸 2.15 m、短軸 2.0 m の方形で、検出面からの最大深度は 0.7 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は黒褐色土、2 層は褐色土、3 層は黄褐色土である。出土遺物は「遺構一段掘り下げ時」と「SK115」、それ以外を「黄灰砂質土」として取り上げた。遺物は「SK115」から「元符通宝」が、「黄灰色砂質土」からほぼ完形の青花碗 E 群が出土している。厚手の土師器皿 C、備前焼擂鉢（近世 1 期）が出土しており、D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK125（【本文・表編】第25図・第113表／【図版編】遺構図：第33図、遺物図：第68図28～32）

調査区西側のG2 グリッドで検出した。SK765 を切る。長軸 2.1 m、短軸 1.85 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.35 m である。埋土にはブロック土を含む。厚手の土師器皿 C が出土しており、C-2～D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK140（【本文・表編】第25図・第113表／【図版編】遺構図：第32図、遺物図：第69図3～4）

調査区中央西側のJ5 グリッドで検出した。SK115 に切られている。長軸 $1.1 + \alpha$ m、短軸 1.25 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.5 m である。埋土はブロック土を多く含んでいる。土師器皿 C、備前焼擂鉢（中世6期）が出土しており、D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK156（【本文・表編】第25図・第113表／【図版編】遺構図：第33図、遺物図：第69図27～31）

調査区北西側のL4・L5 グリッドで検出した。北西部土坑群を構成する遺構である。SK157・171・190 及び SE630 を切り、SK078 に切られる。長軸 1.6 m、短軸 1.4 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.55 m である。埋土は細かくとり上げているが、大きくは上・下 2 層である。底面からは A 期の井戸である SE630 の井筒部が確認された。厚手の土師器皿 C や青花皿 F 群が出土した。D 期に位置づけられる。

97-1 SK162（【本文・表編】第25図・第113表／【図版編】遺構図：第34図、遺物図：第70図22～25）

調査区中央のH5 グリッドで検出した。SE050・085 の裏込部分を切る。長軸 2.1 m、短軸 1.35 m の長方形で、検出面からの最大深度は 0.35 m である。逆台形を呈する。埋土は焼土を多量に含む褐色土の単層で、火災処理土坑と考えられる。土師器皿 C、備前焼擂鉢（近世1期）、龍泉窯系青磁碗 E、白磁皿 E-4 類が出土しており、D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK160（【本文・表編】第25図・第113表／【図版編】遺構図：第34図、遺物図：第70図1～21）

調査区北西のL6 グリッドで検出した。北西部土坑群を構成する。SK295 を切る。長軸 2.6 m、短軸 1.75 m で検出面からの最大深度は 1.25 m である。最上層からは礫が多量に出土した。町 87-1SX342 と同一遺構である。8 層は SK160 とは別の土坑と考えられる。埋土下層からは凝灰岩製の板状石製品が出土した他、各層より多くの遺物が出土した。出土遺物より D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK170（【本文・表編】第25図・第113表／【図版編】遺構図：第35図、遺物図：第71図1～2）

調査区中央南側のD5 グリッドで検出した。SK225 を切る。長軸 1.5 m、短軸 $0.9 + \alpha$ m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.25 m である。埋土は灰色土の単層である。土師器皿 C・小皿 C、龍泉窯系青磁碗 I、青花皿 B などが出土しており C-2 期に位置づけられる。

97-1 SK175（【本文・表編】第25図・第113表／【図版編】遺構図：第34図、遺物図：第71図3～7）

調査区中央北側のK7・J7 グリッドで検出した。SB265・335・275 を切る。長軸 1.9 m、短軸 1.15 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。埋土は褐色土の単層である。遺物は華南三彩小壺（水注？）底部小片が出土した。その他、土師器皿 C・大皿 C が出土しており、D 期に位置づけられる。

97-1 SK180（【本文・表編】第25図・第113表／【図版編】遺構図：第34図、遺物図：第71図8～15）

調査区中央北側のK7・L7 グリッドで検出した。上部を近世以降の耕作により削平される。長軸 1.25 m、短軸 1.25 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.25 m である。埋土は 2 層に分層しており 1 層は黒褐色土、2 層は灰黄褐色土である。1 层は大礫を多く含み、全体的に炭化物・焼土を多く含む。土師器壺 Bn・耳皿、瓦質土器鍋 B、龍泉窯系青磁碗 B IV、備前焼擂鉢（中世6期）が出土した。また第71図13は瓦燈の一部（受部）で、これまでの調査では報告例のない珍しい資料である。B-2 期に位置づけられる。

97-1 SK190（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第35図、遺物図：第71図22～34、第72図1～9、第93図4、11、第101図7）

調査区北西隅のL4 グリッドで検出した。北西部土坑群を構成する。SK079・156 に切られ、SK052・348・391・389 を切る。長軸 1.9 m、短軸 1.8 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 1.35 m である。埋土は 2 層に分層している。1 層は暗褐色土、2 層は暗灰褐色土である。暗褐色土は大礫が多量に破棄されており、暗灰

褐色土からはやや少なくなる。人頭大の礫で埋められた土坑である。土師器極小皿B、瓦質土器火鉢、中国陶器人形、ボタン状ガラス製品、「熙寧元宝」や、石臼・茶臼など多様な遺物が出土した。その他厚手の土師器皿C・極小皿B・椀C、瓦質土器足鍋、青花皿E群、備前焼擂鉢（中世6期）が出土しており、C-2～D-1期に位置づけられる。

97-1 SK195（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第34図、遺物図：なし）

調査区中央東側のE8グリッドで検出した。長軸2.05m、短軸1.75mの不整円形で検出面からの最大深度は0.35mである。埋土は褐色土の単層である。土師器皿Cが出土しており、C期に位置づけられる。

97-1 SK225（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第35図、遺物図：第72図21～26）

調査区北西隅のD5グリッドで検出した。SK170に切られる。長軸1.45m、短軸1.35mの隅丸方形で検出面からの最大深度は0.5mである。埋土は焼土を多く含む灰色土の単層である。土師器壺A・皿C・燭台が出土した。C-2期に位置づけられる。

97-1 SK200（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第35図、遺物図：第72図10～13、第101図8）

調査区中央南側のF5グリッドで検出した。長軸3.0m、短軸1.65mの方形で検出面からの最大深度は0.85mである。ブロック土を多く含む層で埋没する。厚手の土師器皿C、白磁皿E-2、「館咸平元」が出土しておりD期に位置づけられる。

97-1 SK276・238

調査区中央のI7グリッドで検出した。SB1085を切る。SK276はSK238の下より検出した土坑である。第35図はSK276完掘時のものである。

97-1 SK276（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第35図、遺物図：なし）

長軸2.2m、短軸1.55mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.35mである。埋土は暗褐色土の単層である。土師器壺Bnが出土しており、B期以降に位置づけられる。なおSK238からは遺物は出土していない。

97-1 SK241・264・286

調査区中央北端のE6・G6・G7グリッドで検出した。第35図の遺構重複関係図に示すように、SK264とした大型長方形プランの土坑をSK241が切っている。SK264の床面よりSK286を検出した。

97-1 SK241（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第35図、遺物図：第72図30～31）

長軸 $1.2+\alpha$ m、短軸1.1mの隅丸方形で検出面からの最大深度は0.25mである。埋土は褐色土の単層である。厚手の土師器皿C、白磁皿E-2b類、青花碗Eが出土した。C-2～D期に位置づけられる。

97-1 SK264（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第35図、遺物図：第73図10～13）

調査区中央北側のF7・G6・G7グリッドで検出した。SK264はSK241に切られる。長軸3.45m、短軸1.2mの隅丸方形で、深さ0.3m程度の浅い土坑でSK286上面に堆積する帶状の整地層の可能性がある。床面よりSK286を検出した。埋土は褐色土の単層である。土師器皿C、白磁皿E-2b類、硯、砥石が出土しておりC期に位置づけられる。

97-1 SK286（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第35図、遺物図：なし）

調査区中央北端のF7・G7グリッドでSK264の床面より検出した。長軸2.1m、短軸1.3mの隅丸方形で検出面からの最大深度は0.1mである。埋土は暗褐色土の単層である。土師器壺A、龍泉窯系青磁碗Eが出土しており、A期以降に位置づけられる。

97-1 SK281（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第36図、遺物図：第73図14）

調査区中央のH7グリッドで検出した。SK680を切る。長軸1.6m、短軸1.35mの隅丸方形で検出面からの最大深度は0.7mである。埋土は暗褐色土である。土師器皿Cが出土しておりC-2期に位置づけられる。

97-1 SK288（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第36図、遺物図：第73図16～25、第102図2）

調査区中央のF7グリッドで検出した。SJ1015、SD1025、SB290を切る。長軸1.9m、短軸1.8mの正方形で検出面からの最大深度は0.85mである。小型の坩堝や「治平元宝」が出土した他、土師器皿C、青花碗Eが

出土した。なお最下層の5層「黄褐色砂質土」からは土師器坏Aが大量に出土したが、下層の土師器埋設遺構SJ1015に帰属する遺物と考えられる。

97-1 SK260（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第36図、遺物図：第73図6～9）

調査区南東のC9・C10グリッドで検出した。SF100上にあるが、遺構上面は大きく攪乱されており、SF100との前後関係は不明である。なお97-1E SD1501を切る。長軸4.75m、短軸2.1mで検出面からの最大深度は0.95mである。埋土は礫が多く入る。遺物はタイ産陶器壺が出土した他、土師器皿C、越州窯系青磁I類、白磁皿IX類、備前焼擂鉢（中世6期）が出土しており、C-2～D-1期に位置づけられる。

97-1 SK295（【本文・表編】第25図・第114表／【図版編】遺構図：第36図、遺物図：第73図26～30）

調査区中央北のL6グリッドで検出した。北西部土坑群を構成するSK160を切りSK425に切られる。長軸2.9m、短軸2.2mの楕円形で、検出面からの最大深度は1.35mである。埋土上層の「灰褐色土」部分はブロック土を多く含む。図示していないが、土師器皿Cが一定量出土した他、備前焼擂鉢（中世6期）、漳州窯系青花皿が出土しており、C-2期に位置づけられる。

97-1 SK330（【本文・表編】第25図・第115表／【図版編】遺構図：第37図、遺物図：第74図2～10）

調査区中央南のC5グリッドで検出した。SK358に切られる。長軸1.9m、短軸1.1mの隅丸方形で検出面からの最大深度は0.7mである。埋土は4層に分層しているが、全てにブロック土が多く含まれることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺存状態の良い土師器坏Aやその他A期の遺物も多いが、各層より土師器皿Cが出土しており、C期に位置づけられる。

97-1 SK337（【本文・表編】第25図・第115表／【図版編】遺構図：第37図、遺物図：なし）

調査区中央南のC7グリッドで検出した。長軸2.3m、短軸1.5mの方形で検出面からの最大深度は0.5mである。土師器坏A・吉備系土師器碗などA期の遺物が出土しているが、薄手の土師器皿Cが出土しており、C-1期頃に位置づけられる。

97-1 SK316（【本文・表編】第25図・第115表／【図版編】遺構図：第37図、遺物図：第73図40～41、第101図2）

調査区中央のF6グリッドで検出した。SK200・650を切る。長軸2.6+ α m、短軸1.6mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.4mである。埋土は単層である。厚手の土師器皿C、龍泉窯系青磁碗D、白磁皿D、青花碗E、漳州窯系青花皿B、備前焼擂鉢（中世6期・近世1期）が出土した他、鉛製の可能性のある短冊状の金属（第101図2）が出土した。D期に位置づけられる。

97-1 SK345・350

調査区中央東側のH10グリッドで検出した。共にSD370を切り、SK345はSK350に切られる。

97-1 SK345（【本文・表編】第25図・第115表／【図版編】遺構図：第37図、遺物図：第74図11～17）

SK350はSK345の掘り返しの可能性が高い土坑で、第37図はSK345・350完掘時のものである。SK345は長軸2.05m、短軸1.45mの楕円形で検出面からの最大深度は0.55mである。多量の礫で埋没していた。非常に厚手の土師器皿C、備前焼擂鉢（中世6期）が出土していることからD-1～2期に位置づけられる。

97-1 SK350（【本文・表編】第25図・第115表／【図版編】遺構図：第37図、遺物図：第75図2～3、第102図3）

模式図に示すように1層は暗灰色土、2層は灰色砂層、3層は礫層が堆積する。土師器皿C、白磁菊皿E-4、「開元通宝」が出土した。D-1～2期に位置づけられる。

97-1 SK358（【本文・表編】第25図・第115表／【図版編】遺構図：第38図、遺物図：なし）

調査区中央南のC5グリッドで検出した。SK330を切る。長軸2.2m、短軸1.4mの隅丸方形で検出面からの最大深度は0.65mである。埋土は単層で、遺物は出土していない。C～D期頃のSK330を切ることからD期前後の遺構と考えられる。

97-1 SK359（【本文・表編】第25図・第115表／【図版編】遺構図：第38図、遺物図：第75図7）

調査区中央南のD6グリッドで検出した。長軸1.55m、短軸0.8mの隅丸方形で検出面からの最大深度は0.3mである。埋土はブロック土を含む。土師器坏Aが多量に出土した他、土師質土器鍋B、白磁皿IX類、石鍋など

が出土したが、土師器皿 C が出土していることから C 期に位置づけられる。

97-1 SK367（【本文・表編】第 25 図・第 115 表／【図版編】遺構図：第 38 図、遺物図：なし）

調査区中央東の I8 グリッドで検出した。長軸 1.35 m、短軸 1.15 m の不整円形で検出面からの最大深度は 0.5 m である。埋土は焼土を多く含む。図示していないが、土師器皿 C・小皿 C・椀 C、青花皿 E が出土しており、D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK354（【本文・表編】第 25 図・第 115 表／【図版編】遺構図：第 39～40 図、遺物図：第 75 図 4～6）

調査区中央西の I2 グリッドで検出した。SK120・310・545 を切る。長軸 6.9 m、短軸 $3.8+\alpha$ m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 1.4 m である。西側が調査区外に延びる為規模は不明だが、擂鉢状に窪む大型の土坑で、大量の砂層によって埋没する。埋土は 5 層のブロック土を含む間層を挟んで上下に砂礫層が堆積する。大量の砂礫を処理した土坑と考えられる。遺物は土師器皿 C が多量に出土した他、完形の燭台 C、瓦質土器火鉢、青花鉢や備前焼擂鉢（中世 6 期）が出土したが、遺物の多くは SK120 からの搔き揚げと考えられる。C-2～D 期に位置づけられる。

97-1 SK120（【本文・表編】第 25 図・第 113 表／【図版編】遺構図：第 39～40 図、遺物図：第 68 図 18～26）

SK120 は SK354 に切られ、SK320・310 を切る。長軸 $2.8+\alpha$ m、短軸 $1.7+\alpha$ m で、検出面からの最大深度は 0.7 m である。埋土中から巨大な凝灰岩の石核が出土した他、土師器が多く出土した。土師器壺 Bn・大内 A 式土師器皿・皿 C、龍泉窯系青磁 E 類、備前焼擂鉢（中世 6 期）が出土しており、C-2～D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK375（【本文・表編】第 25 図・第 115 表／【図版編】遺構図：第 38 図、遺物図：なし）

調査区中央東の G11 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。SK915 (87-5SK020) に切られる。長軸 2.95 m、短軸 1.85 m の楕円形で検出面からの最大深度は 1.05 m である。87-5SX045 と同一遺構である。キメの細かい砂層のみで埋没している。遺物は出土していない。SK354 と同様の砂の処理土坑か。

97-1 SK412（【本文・表編】第 25 図・第 116 表／【図版編】遺構図：第 38 図、遺物図：なし）

調査区中央の J6 グリッドで検出した。長軸 2.1 m、短軸 1.75 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.65 m である。図示していないが土師器壺 Bn が出土しており、B 期に位置づけられる。

97-1 SK415（【本文・表編】第 25 図・第 116 表／【図版編】遺構図：第 38 図、遺物図：第 75 図 11～13）

調査区中央東の H10 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。長軸 1.6 m、短軸 1.5 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.8 m である。壁面はややオーバーハンプして、断面はフラスコ状になる。土師器壺 Bn、やや薄手の土師器皿 C が出土しており、C-2 期頃に位置づけられる。

97-1 SK440（【本文・表編】第 25 図・第 117 表／【図版編】遺構図：第 40 図、遺物図：第 75 図 22～26、第 76 図 1～7、第 100 図 10）

調査区中央南の D7・D9 グリッドで検出した。SB1035 を切る。長軸 1.9 m、短軸 1.45 m の方形で検出面からの最大深度は 0.6 m である。埋土は 2 層に分層している。1 層の下面より釘数十本以上が錆着して鉄塊となった遺物（第 100 図 10）が出土した。土師器壺 A が多く出土したが、土師器皿 C や青花碗 E 群が出土しており、C 期以降に位置づけられる。

97-1 SK510（【本文・表編】第 25 図・第 117 表／【図版編】遺構図：第 40 図、遺物図：第 76 図 17～19）

調査区北東（道路北側）の J10 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。SD380・370 に切られる。長軸 2.35 m、短軸 1.45 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.5 m である。床面は凸凹をもち、埋土は灰色砂礫混じりの土層である。厚手の土師器皿 C が出土しており、C-2～D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK565（【本文・表編】第 25 図・第 117 表／【図版編】遺構図：第 40 図、遺物図：なし）

調査区南東（道路南側）の D10 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。長軸 1.4 m、短軸 1.35 m の円形で検出面からの最大深度は 1.03 m である。床面は凹凸をもち、断面はフラスコ状に底部が張り出す。埋土は砂質土と土が互層となって堆積し、13 層に分層している。図示していないが厚手の土師器皿 C や銅滓が付着する土師器皿 C が出土しており、C-2～D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK570（【本文・表編】第 25 図・第 117 表／【図版編】遺構図：第 40 図、遺物図：第 76 図 25～31）

調査区北東隅（道路北側）の K12 グリッドで検出した。SF100 上の遺構で、SK845 を切る。長軸 1.5 m、短軸 1.2 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.8 m である。床面はやや凹凸を持ち、壁面はオーバーハング気味になる。埋土は砂礫層と土との互層であり、遺構形状や埋土が SK565 に似る。土師器皿 C が多く出土した。C-2～D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK650（【本文・表編】第 25 図・第 117 表／【図版編】遺構図：第 41 図、遺物図：第 76 図 33～39）

調査区中央の E6 グリッドで検出した。SK200・316 に切られる。長軸 2.6 m、短軸 1.2 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。埋土は焼土や炭を多く含む。出土遺物は「SK650」と「下層」から取り上げた。土師器壺 A・小皿 A II・壺 Bn が出土しており、A III-3～B-1 期頃に位置づけられる。

97-1 SK680（【本文・表編】第 25 図・第 118 表／【図版編】遺構図：第 41 図、遺物図：第 77 図 2）

調査区中央の H7 グリッドで検出した。SK281 に切られる。長軸 2.3 m、短軸 0.9 m の不整橢円形で検出面からの最大深度は 1.2 m と深い。埋土はブロック土を多く含む。備前焼鉢が出土しており、C-2～D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK695（【本文・表編】第 25 図・第 118 表／【図版編】遺構図：第 41 図、遺物図：なし）

調査区中央の I6 グリッドで検出した。長軸 1.25 m、短軸 0.8 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 0.35 m である。埋土は単層で、遺物は出土していない。

97-1 SK705（【本文・表編】第 25 図・第 118 表／【図版編】遺構図：第 41 図、遺物図：なし）

調査区中央東の F11 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。長軸 1.65 m、短軸 1.1 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 1.25 m と深い。壁面はオーバーハングしている。埋土はブロック土を多く含む。遺物は出土していないが、遺構の形状より SK510・415 に類する C-2～D-1 期の遺構と考えられる。

97-1 SK735（【本文・表編】第 25 図・第 118 表／【図版編】遺構図：第 41 図、遺物図：第 77 図 16～17、第 97 図 3）

調査区北東（道路北側）の J11・K11 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。長軸 6.8 m、短軸 0.5 m の直線的な溝状の長土坑で、検出面からの最大深度は 0.45 m である。埋土は大礫（円礫）を大量に含む暗灰色砂質土と暗褐色土である。SK845 と対になる遺構と考えられる。遺物は土師器壺 Bn、備前焼擂鉢（近世 1 期）、水輪が出土しており、規模・位置・埋土の状況からみて D-1 期に位置づけられる。

97-1 SK740（【本文・表編】第 25 図・第 118 表／【図版編】遺構図：第 42 図、遺物図：第 77 図 18～22 図）

調査区南西の I12 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。SK2051 を切る。長軸 2.45 m、短軸 2.15 m の橢円形で検出面からの最大深度は 1.0 m である。埋土は模式図に示すように拳大の礫層と砂質土層である。壁面は大きくオーバーハングがみられ、断面はフ拉斯コ状となる。厚手の土師器皿 C、青花碗 E が出土している。D 期に位置づけられる。

97-1 SK755（【本文・表編】第 25 図・第 118 表／【図版編】遺構図：第 42 図、遺物図：第 78 図 1～4、第 101 図 6）

調査区中央南の E6 グリッドで検出した。長軸 3.2 m、短軸 1.2 m の不整橢円形で検出面からの最大深度は 0.25 m である。遺物は土師器小皿 Bn・薄手の皿 C・大皿 C・小皿 C・薄手の耳皿 C、銅製品容器が出土した。C-1 期に位置づけられる。

97-1 SK760（【本文・表編】第 25 図・第 118 表／【図版編】遺構図：第 42 図、遺物図：なし）

調査区中央の G4 グリッドで検出した。長軸 1.3 m、短軸 1.15 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.95 m である。埋土は炭やブロック土を多く含む。大内 A 式土師器皿・壺 B が出土しており、A III-3～B 期に位置づけられる。

97-1 SK765（【本文・表編】第 25 図・第 118 表／【図版編】遺構図：第 42 図、遺物図：第 78 図 5～8）

調査区南西の F2・G2 グリッドで検出した。SK125 に切られる。「整地層」除去後に検出した遺構である。長軸 5.8 m、短軸 1.6 m の橢円形で検出面からの最大深度は 0.7 m である。埋土はブロック土を多く含む。出土遺物は土師器壺 A、土師質土器鍋 B、龍泉窯系青磁碗 II などが出土しており、A III 期に位置づけられる。

97-1 SK775・780

調査区北西隅のL2・M2・M3グリッドで、薄い「整地層」を除去後に検出した。SK775はSK780を切る。

97-1 SK775（【本文・表編】第25図・第118表／【図版編】遺構図：第42図、遺物図：なし）

長軸2.5m、短軸1.2mで検出面からの最大深度は0.5mである。埋土は灰褐色土である。土師器壺A・小皿Aや吉備系土師器碗などが出土しており、AⅡ期に位置づけられる。

97-1 SK780（【本文・表編】第25図・第118表／【図版編】遺構図：第42図、遺物図：なし）

長軸 $0.5+\alpha$ m、短軸0.85mで検出面からの最大深度は0.3mである。埋土は灰褐色土である。土師器壺A・小皿Aが出土しており、A期に位置づけられる。

97-1 SK790（【本文・表編】第25図・第118表／【図版編】遺構図：第43図、遺物図：第78図10～13）

調査区中央のE5グリッドで検出した。SK040A・040BやSK285など、E9グリット周辺に展開する複数の方形土坑に切られている。長軸1.85m、短軸1.2mの方形で検出面からの最大深度は0.9mである。上部にテラスをもち、断面は「V」字形となる。埋土はブロック土を多く含む。出土遺物は「暗灰黄褐色土」「暗褐色土」「灰黃褐色土」「暗灰黃色土」「暗灰色土」から取り上げたが、それぞれ「SK790」1、2、3、4層に対応する。各層に大きな時期差はなく、土師器壺A・小皿Aが出土していることから、AⅢ期頃に位置づけられる。

97-1 SK815（【本文・表編】第25図・第118表／【図版編】遺構図：第43図、遺物図：第78図14～16）

調査区中央南のC8グリッドで検出した。SF100上の遺構で、西側溝SD110西前面に形成される。長軸1.05m、短軸0.85mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.35mである。埋土は2層に分層しており、1層は灰褐色砂礫層、2層は暗褐色砂礫層である。円礫・小礫を多量に含む。廃棄土坑と考えられる。やや厚手の土師器皿C、備前焼擂鉢（中世6期）が出土しており、C-2～D-1期に位置づけられる。

97-1 SK820（【本文・表編】第25図・第118表／【図版編】遺構図：第43図、遺物図：第78図17～18）

調査区南東のC9グリッドで検出した。SK260に切られる。長軸2.85m、短軸0.75mの不整楕円形で検出面からの最大深度は1.05mである。埋土中には礫が含まれる。土師器壺Aの他、備前焼甕、常滑焼甕が出土した。AⅢ期に位置づけられる。

97-1 SK830（【本文・表編】第25図・第118表／【図版編】遺構図：第43図、遺物図：第78図19）

調査区中央西側のI3グリットで検出した。ST155に切られる。床面より、2/3に復元される東播系片口鉢が出土した。

97-1 SK845（【本文・表編】第25図・第118表／【図版編】遺構図：第43図、遺物図：第78図20～22）

調査区南東のJ12・K12グリッドで検出した。SK735と対をなす遺構である。SK570に切られる。長軸6.35m、短軸0.5mの直線的な溝状の長土坑で、検出面からの最大深度は0.45mである。遺構内は多量の大礫を含む暗灰色土で埋まる。遺物は青花碗E群や瓦質土器火鉢・擂鉢の他多量の瓦が出土した。厚手の土師器皿Cが出土しており、D-1期に位置づけられる。

97-1 SK850（【本文・表編】第25図・第118表／【図版編】遺構図：第43図、遺物図：第78図23）

調査区北東隅のL12グリッドで検出した。SF100上の遺構である。長軸 $1.0+\alpha$ m、短軸0.75mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.3mである。遺物は銅滓が付着した土師器皿Cや坩埚が出土しており、C期に位置づけられる。

97-1 SK865（【本文・表編】第25図・第119表／【図版編】遺構図：第43図、遺物図：第78図24～34、第79図35～36）

調査区北東（道路北側）のJ12グリッドで検出した。SF100上の遺構である。SK2047を切る。長軸1.5m、短軸0.9mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.55mである。床面は凹凸が激しく一部がピット上に窪み、断面はフラスコ状になる。埋土は茶褐色である。厚手の土師器皿C・小皿C・耳皿C、備前焼徳利などが出土しており、C-2～D-1期に位置づけられる。

97-1 SK875（【本文・表編】第 25 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 44 図、遺物図：なし）

調査区中央の H9 グリッドで検出した。SF100 の西側溝と考えられる。SD455 の下部に位置し、SF100 に切られる。長軸 2.0 m、短軸 1.45 m の不整円形で検出面からの最大深度は 0.15 m である。埋土は单層である。図示していないが土師器坏 A、龍泉窯系青磁碗 D が出土しており、A 期に位置づけられる。

97-1 SK915（87-5 SK020）（【本文・表編】第 25 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 44 図、遺物図：第 79 図 1～2、第 93 図 12）

調査区東側の G11 グリッドで検出した。SK375 を切る。長軸 2.8 m、短軸 2.2 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 1.1 m である。多量の人頭大礫で埋められている。87-5SK020 として報告した遺構で、ベトナム産白磁碗などが出土地している。D-1～2 期に位置づけられる。

97-1 SK940（【本文・表編】第 25 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 44・50・51 図、遺物図：第 79 図 3～4）

調査区南東の C8 グリッドで検出した。A III 期の南北道路側溝と考えられる SD950・975 を切り、第 51 図 G-H 土層に示すように、SF100 に切られる。長軸 1.3 m、短軸 1.0 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。埋土中には炭層がマーブル状に入る。遺物は第 50 図に図示した G-H ベルトを境に北と南に分けて遺物を取り上げた。土師器坏 A、龍泉窯系青磁香炉が出土した。A III -1～2 期に位置づけられる。

97-1 SK995（【本文・表編】第 25 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 44 図、遺物図：なし）

調査区中央の H8 グリッドで検出した。SF100 西側溝付近に位置する。SF100 除去後に確認した。長軸 2.3 m、短軸 $1.3 + \alpha$ m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.75 m である。埋土は单層である。図示していないが、土師器坏 A や吉備系土師器碗とともに土師器皿 C が出土しており、C-1～2 期に位置づけられる。

97-1 SK1000（【本文・表編】第 25 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 44・49・50 図、遺物図：第 79 図 7～14）

調査区中央の G8 グリッドで検出した。SF100 西側溝付近に位置し、SF100 除去後に確認した。長軸 3.75 m、短軸 1.9 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。埋土は暗褐色土の单層である。SK1000 は SB270 を構成する石列 SX420 の直下に位置する遺構である。遺物は京都産の可能性のある薄手の土師器皿 C・坏 Bn などが出土した。SK995 と遺物が接合する。B-2～C-1 期の遺構と考えられる。

97-1 SK1406（2066・2067・2068・2077・620）（【本文・表編】第 25 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 45 図、遺物図：なし）

調査区南東の D10 グリッドで検出した。SF100 上の遺構群である。SD422 に切られる。第 45 図に示すよう 2066 → 2068 → 2067 → 2077 → 1406 → 620 → 565 の順に遺構が切り合う。SK2066 から土師器皿 C や漳州窯形青花皿 C などが、SK2067 からは青花皿 F 群が出土しており、C-2～D-1 期に同一地点で繰り返し形成された土坑群と考えられる。

97-1 SK2009（【本文・表編】第 25 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 44 図、遺物図：第 79 図 26～27）

調査区南西隅の C3 グリッドで検出した。整地層除去後に確認した。長軸 1.65 m、短軸 0.95 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.15 m である。完形の土師器坏 A・小皿 A I、東播系片口鉢が出土した。A II -3～A III -1 期に位置づけられる。

97-1 SK2010（【本文・表編】第 25 図・第 119 表／【図版編】遺構図：第 44 図、遺物図：第 79 図 28）

調査区南西の D3 グリッドで検出した。整地層除去後に確認した。長軸 3.15 m、短軸 0.9 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.2 m である。埋土は褐灰色土の单層である。土師器坏 A が出土した。A III -2 期に位置づけられる。

97-1 SK2015（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 45 図、遺物図：なし）

調査区南西隅の D1 グリッドで検出した。整地層除去後に確認した。長軸 2.15 m、短軸 $0.8 + \alpha$ m の方形で検出面からの最大深度は 0.2 m である。埋土は褐色土の单層である。図示していないが土師器坏 A、大内 A 式土師器皿が出土しており、A III -2～3 期に位置づけられる。

97-1 SK2021（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 45 図、遺物図：第 79 図 30～33）

調査区南東の D10 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。長軸 3.9 m、短軸 0.85 m の直線的な長土坑で、検出面からの最大深度は 0.55 m である。埋土は 2 層に分層している。1 層は暗灰土、2 層は礫層である。鬼瓦や赤間石硯、青花碗 E、備前焼擂鉢（近世 1 期）が出土しており、C-2～D 期に位置づけられる。

97-1 SK2030（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 45 図、遺物図：第 80 図 1～2）

調査区南西隅の D2 グリッドで検出した。整地層除去後に確認した。SK2017 の床面より検出した。SE2000 に切られる。長軸 1.55 m、短軸 0.95 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.55 m である。埋土は灰黄色土である。A 期に位置づけられる。

97-1 SK2036（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 45 図、遺物図：第 80 図 8～12）

調査区東の G12 グリッドで検出した。SF100 除去後に確認した。長軸 1.35 m、短軸 1.25 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.7 m である。埋土は单層である。土師器壺 A・大内 A 式土師器皿が出土しており、A III-2～3 期に位置づけられる。

97-1 SK2050（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 46・49・50・55 図、遺物図：第 80 図 14～20）

調査区北東の J9 グリッドで検出した。第 55 図の土層に示すように SF100 除去後に確認した大型遺構である。長軸 4.3 m、短軸 2.5 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.6 m である。土師器壺 A・壺 Bn・小皿 C が出土しており C-1～2 期に位置づけられる。SF100 の路面形成の上限を示す重要な遺構である。

97-1 SK2039（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 45 図、遺物図：なし）

調査区東の G10 グリッドで検出した。長軸 1.6 m、短軸 1.5 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.45 m である。埋土は茶褐色の单層である。須恵質土器の破片のみ出土した。

97-1 SK2061（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 46 図、遺物図：第 102 図 10）

調査区東の F12 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。長軸 1.55 m、短軸 1.5 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.25 m である。「天禧通宝」が出土した。

97-1 SK2051（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 46 図、遺物図：なし）

調査区東の H12・I12 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。SK740 に切られる。長軸 2.5 m、短軸 1.75 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.45 m である。埋土は单層である。土師器壺 A 小片が出土したのみである。

97-1 SK2047（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 46 図、遺物図：第 80 図 13）

調査区北東の J12 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。SK865 に切られる。長軸約 1.3+ α m、短軸 0.6 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.55 m である。埋土は单層である。土師器壺 Bn が出土しており、B-2～C 期以降に位置づけられる。

97-1 SK2084（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 46・49・50 図、遺物図：第 80 図 29～31）

調査区南東の D11 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。SD2075 の床面で確認した。土坑状の土器集中遺構である。長軸 0.85 m、短軸 0.6 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.2 m である。底部は起伏がありピット状の窪みがみられる。埋土は褐色土の单層である。土師器壺 A・小皿 A が出土した。A III-1 期頃に位置づけられる。

97-1 SK2085（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 46 図、遺物図：第 80 図 32）

調査区南東の D9 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。SF100 除去後に確認した。長軸 0.8 m、短軸 0.8 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.45 m である。埋土は灰褐色土の单層である。白磁皿 E-4 が 1 点出土した。B 期以降に位置づけられる。

97-1 SK2094（【本文・表編】第 25 図・第 120 表／【図版編】遺構図：第 46 図、遺物図：なし）

調査区南西の B8 グリッドで検出した。SF100 上の遺構である。SF100 除去後に確認した。長軸 1.6 m、短軸

1.25 mの楕円形で検出面からの最大深度は0.7 mである。埋土は茶褐色の単層である。土師質土器鍋片が出土した。

97-1 SK2095（【本文・表編】第25図・第120表／【図版編】遺構図：第48図、遺物図：第80図33～53、第100図11～13、第102図11～12）

調査区南西端のB11グリッドで検出した。SF100上の遺構である。長軸1.55 m、短軸0.95 mの楕円形で検出面からの最大深度は1.05 mである。床面は凹凸が激しく、断面はフラスコ状となる。埋土は焼けた土壁を多量に含む黒褐色土の単層で、火災処理土坑と考えられる。遺物は備前焼短頸壺、白磁小壺、釘・筒形鉄製品・「熙寧通宝」、またガラス瓶？の破片も出土した。厚手の土師器皿Cや椀Cの出土からD-1期頃に位置づけられる。

土坑墓（ST）

97-1 ST155（【本文・表編】第29図・第113表／【図版編】遺構図：第48図、遺物図：第81図29～32）

調査区中央西端のH3・H4グリッドで検出した。SX030に切られる。掘方は長軸4.8 m、短軸1.9 mの隅丸方形で、検出面からの最大深度は0.5 mである。2層に分層されている。1層は灰黄褐色土、2層は褐色土である。床面より土師器皿C（第48図2・3）が伏せた状態で検出した。土坑墓の埋土上層から釘が1点出土したのみであり縦断、横断土層にも木棺の痕跡等は確認できなかったことから土坑墓と考えられる。床面より完形の土師器皿Cが2点と2/3ほどが接合する皿C（第48図1・4）が、埋土中より皿C（第81図29）が出土しており、4枚の皿Cを供献したと考えられる。C-2期頃に位置づけられる。

道路状遺構（SF）

・16世紀後半以降の道路関連遺構

万寿寺前面の寺小路町に面する幅14 mの南北道路97-1SF100（=97-3SF200）と、15世紀の道路側溝を確認した。ここでは16世紀後半段階の道路関連遺構とそれ以前の遺構とに分けて記述する。

【道路】

97-1E SF100（SF835・905）（【本文・表編】第26～28図・第112表／【図版編】遺構図：第49～56図、遺物図：第88図17～41、89図1～2、第99図3、100図16、102図16～20、103図1）

調査区中央のC9～M9、C11～M11グリッドにかけて検出した南北方向の道路状遺構である。第52図に示すように東側溝、SD585・405、石を用いた西側溝SD110・465、SD455からなる。調査初期の段階で14 m幅の砂礫を多く含む層を確認し、SF100として掘り下げを行った。第56図の「SF100周辺遺構形成過程」の模式図に示すように、調査が進むにしたがって、SF100として調査した部分に近世以降の攪乱（近世以降の耕作による削平。一部近世段階の道路利用のための舗装もあった可能性あり）が想像以上に深く及んでいたことが分かり、路面として調査した大部分が17世紀以降の堆積層であることがわかった。また、16世紀後半当時の路面や道路構築土の上面に16世紀末段階に整地（第56図に示す97-1SX1125）を行い、SD380とした大型の南北溝が形成されていることがわかった。したがって第54図や第55図に示すように、調査区北側を中心に16世紀後半段階の道路面の遺存状況は非常に悪い。このSF100部分は後述する道路上に掘り込まれた溝や土坑を掘削後、重機による掘り下げを行い、道路形成面の検出を行った。重機掘削後に検出した遺構には2000番代の遺構番号を付している。

SF100は地山直上に凹凸をもって堆積しており、重機掘り下げ時に剥ぎきれなかった道路部分をSF835（第49図）、西側道路側溝を検討するために掘り残した道路堆積層をSF905（第49図）として遺構番号を分けているが、ともにSF100の堆積土の一部である。第55図や第56図に示すように、遺構検出面を0.6 mほど掘り込んだ部分に、砂層と締まった土や粘質土を交互に積み重ねる。調査区南壁周辺はA III-1期の井戸SE885が存在し、地盤が軟弱であったためか他よりも積土が厚く堆積する。なお、第51図のQ-R土層でSF100古段階、中段階、新段階と記載したように間層を挟んで不整合面をもつ部分が西側溝付近で確認でき、継続的な路面のメンテナンスや改修を行っているようである。

SF100除去後には複数の大型遺構を確認しているが、そのうち最新の年代を示す遺構はSK2050である。第

55図に示すようにSK2050はSF100道路堆積層直下に形成されている。SK2050はC-1～2期頃に埋没した遺構であることから、SF100形成の上限年代はC-2期前後に位置づけられ、その後D-2期頃にSX1125とした整地層が面的に堆積し、SD380が掘削される頃に（幅14m分の）道路としての機能は失われたと考えられる。なお、道路東側部分（7m程の幅員）については後述するSD585から唐津焼溝縁皿が出土していることから17世紀前半頃まで道路としての利用が継続されていた可能性がある。

【側溝】

97-1SD110・465・455、SD585・405（【本文・表編】第26・27図・第41・42表／【図版編】遺構図：第52～56図、

遺物図：第84図6、85図1～3、22～23、101図8）

第9表 第97-1次調査区 道路状遺構 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SF100	C9～M9 C11～M11	C-2 ～近世			51～58
SF835	J10・K10等	C-2期			51
SF905	C8～G8・H9	C-2期			51

第11表 第97-1次調査区 西側南北溝（道路側溝）
報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SD814	H8～I8	A III期か		×	52
SD900	J9～K9	C-2期			52
SD950	C8～D8	A III-2期			52
SD975	C8～D8	A III-2期			52
SD980	C8～E8	A III-2期			52
SD1426	F8～E8	A期		×	52
SD2090	D9～G9	A III-2期			52

第13表 第97-1次調査区 溝跡 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SD173	L3	D期～			59
SD770	F2～G2	A III-1期～			59
SD1025	E7	A III-1期		×	59
SD2045	E2・E3	A III-1期			59

第10表 第97-1次調査区 SF100上面溝状遺構 報告遺構一覧表

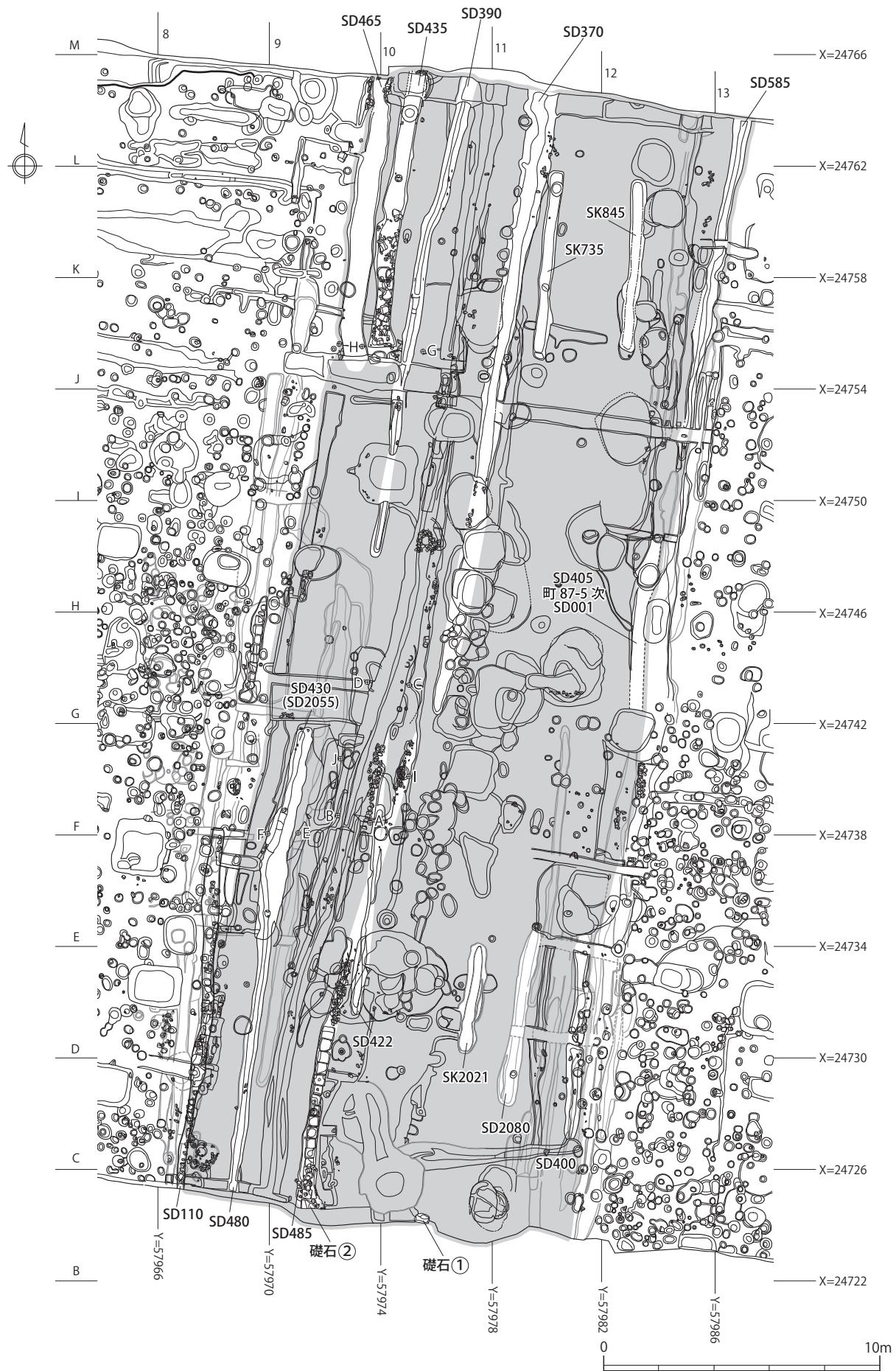
遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SD110	C8～E8	D期		×	54
SD370	G11～L11	D-1～D-2			55・56
SD380	2F～G10	D-2期			55・56
SD390	J10	D-1～D-2			55・56
SD405	G12～H12	C期	×		5・6
SD422	D10～E10	D期		×	54
SD430	E9～G9・E8	D-2期			55・56
SD435	L10～K10	D-1期			55・56
SD455	E9～I9	D-1期			55・56
SD465	J9～L9	C-2期			55・56
SD480	C8～D8	D-2期			55・56
SD485	D8～G8	C-2～D期			55・56

第12表 第97-1次調査区 東側南北溝（道路側溝）
報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SD580	I12～L12	A III-2期			52
SD585	K13	D期～17C			54
SD730	D11～F11	A III-2期			52
SD2033	L12	B期			52
SD2048	H12～I12	A III～B期			52
SD2060	E12～F12	A III-2期			52
SD2075	C11～D11	A III期			52
SD2080	C11～D11	C-2～ D-1期			52
SD2105	C12～D12	A III-2期			52
SD2110	C12	A III-2期			52
SD2115	C11	A III-2期			52
SD2120	C12～F12	A III期			52
SD2125	D12～E12	A III-2期		×	52
SD2130	E12	A III-2期		×	52
SD3010	C12	A III-2期か		×	52



第26図 第97-1次調査区 SF100内SD掲載位置図(1/200)



第27図 第97-1次調査区 道路状遺構 遺構配置図1 (1/200)



第 28 図 第 97-1 次調査区 道路状遺構 遺構配置図 2 (1/200)

東側溝

SD585（遺物図：第 85 図 22～23）：SD580 を切る。町 97-3SD230 の南側延長部の可能性がある。幅 0.5 m、深さ 0.3 m で、南北 $12.5 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 9.48° - E である。

SD405（遺物図：第 84 図 6）：町 87-5SD001 と同一の南北溝である。

SD585 からは唐津焼溝縁皿が、SD405 からは多量の土師器壺 A とともに皿 C や鬼瓦片が出土した。SD585 の最終埋没時期は 17 世紀前半まで下る可能性がある。

西側溝

SD110（遺物図：なし）：幅 0.8 m、深さ 0.25 m で主軸方向 N-11.98° -E である。石列 SX800 が伴なう

SD465（遺物図：第 85 図 2～3）：幅 1.0 m、深さ 0.15 m で、南北 $10 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 7.23° - E である。

SD110・SD465 ともに方形凝灰岩や河原石、石塔を直線的に並べた遺構で、二列の地点と一列の地点がある。明確な掘方は確認できず、路面端に並べたのみのようである。97-3 SD110 は同様の石組み列であり一連の遺構と考えられる。

SD455（遺物図：第 85 図 1、第 101 図 8）：SD110 と SD465 の間で検出した溝状遺構である。第 53 図に示すように SD465 と連続する側溝の可能性がある。浅い素掘りの形状で、幅 0.6 m、深さ 0.1 m で、南北 $18.6 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 10.44° - E である。

SD110 の石組内部には焼土が多量に含まれており（図版編第 53 図）、島津侵攻後の火災処理層の可能性がある。なお SD110 の石列の一部は SB1040 などの建物基礎として利用されている。D 期を中心とする時期に形成、埋没したと考えられる。

SD900（遺物図：第 85 図 42：幅 0.4m、南北 7m 程を確認した。土師器杯 Bn が出土しており B 期の道路側溝の可能性がある。）

・16 世紀後半以前の道路関連遺構

【道路】

97-1E SF1130（【本文・表編】第 41 図・第 39 表／【図版編】遺構図：遺構図：第 52～56 図、遺物図：なし）

SF100 以前の道路堆積層は後世の攪乱や SF100 の掘り込みによって大部分が消失したと考えられるが、第 51 図の K-L 土層に示すように、SF100 形成以前の道路堆積を確認している。便宜的に SF1130 とする。北側延長部の 97-3SF500 と同様に単位の粗い堆積層である点、年代的にも近接する点から 97-3SF500 と 97-1SF1130 は連続する一連の道路堆積層と考えられる。なお、SF1130 は A III -2 期の東側道路側溝と考えられる SD950 を切ることから、存続年代は C-1 期を下限に B 期を中心とする時期に比定できる。

【SF100 下層の側溝】

東側溝部分と西側溝部分の下部にあたる地点で、複雑に切り合った状態の南北溝を多数確認した。これらの溝はすべて A III -2～3 期を中心とするものである。東側と西側の溝の間には同時期の遺構が全く展開しない点、道路面が SF1130、SF100 に削平されている可能性が高い点などから、以下の溝は 15 世紀段階の道路にともなう側溝として報告する。

東側溝（第 49 図・50 図、51 図）

< B11 グリッド付近の溝集中部分 >

西から順に SD730・2118・2075・2065 (= 2120)・2060・2115・2130・2110・2125・2105 (= 3010) の 10 条が側溝関連の溝である。複雑な溝の前後関係は第 49 図の土層模式図に示している。

第 49 図に溝の前後関係を模式図化した。

- SD730・2118（遺物図：第 85 図 24～28）：幅 0.5 m で、深さ 0.25～0.3m 程となる。位置や主軸方向より一連の溝と考える。主軸方向 N - 6.99° - E である。
- SD2075（遺物図：第 87 図 23～27、第 102 図 15）：幅 0.5m で、南北 $9 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で

主軸方向 N - 9.68° - E である。SD2118 に切られる。埋土中より杯 A がまとまって出土した。特に集中して出土した地点は SK2084 として報告している。

- ・ **SD2120 (= 2065)** (遺物図: 第 87 図 21 ~ 22・第 88 図 6 ~ 16) : 幅 0.8 m C、深さ 0.2 ~ 0.25m で、南北 $17.5 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 9.08° - E である。土師器杯 A がまとまった量出土した。
- ・ **SD2060** (遺物図: 第 87 図 5 ~ 20) : 幅 0.7 m、南北 $16.7 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 9.3° - E である。SD2120 と同様、土師器杯 A が出土した他、大内 A 式土師器皿が出土した。SD2065・2130・2115 を切る遺構である。
- ・ **SD2115** (遺物図: 第 88 図 4 ~ 5) : 幅 0.5m、深さ 0.3m 南北 $6.5 + \alpha$ m を確認した。
- ・ **SD2130** (遺物図: なし) : 幅 0.4 m、深さ 0.3m で、南北 $6.5 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 5.9° - E である。
- ・ **SD2110** (遺物図: 第 88 図 3) : 幅 0.2 m 土で、南北 $5.5 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 5.9° - E である。SD2130 と同一の溝の可能性がある。
- ・ **SD2125** (遺物図: なし) : 幅 0.3 m で、南北 $5 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 10.19° - E である。
- ・ **SD2105** (遺物図: 第 88 図 1 ~ 2) : 幅 0.6 m、深さ 0.3m で、南北 $5 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 8.48° - E である。SD2125 と一連の溝か。

< H ライン北側の溝 >

- ・ **SD580** (遺物図: 第 85 図 16 ~ 21) : 幅 0.35 m、深さ 0.4 m で、南北 $4.5 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 7.11° - E である。
- ・ **SD2048** (遺物図: 第 86 図 37 ~ 38) : 幅 0.5 m で、南北 3.7 m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 8.95° - E である。
- ・ **SD2033** (遺物図: 第 86 図 28 ~ 29) : 幅 0.7 m で、南北 $2.6 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 2.0° - E である。道路に関連する遺構かは不明である。

西側溝（第 49 図・50 図、51 図）

東から順に SD2090・1426・980 (= 935・870)・975 (= 945)・950 (= 985)・814 の 6 条が側溝関連の溝である。

溝の前後関係は第 49 図の土層模式図に示している。

- ・ **SD2090** (遺物図: 第 87 図 29 ~ 47) : 幅 0.6 m で、南北 17 m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 9.59° - E である。溝の底面から上層にかけて遺存率の高い土師器杯 A や捏鉢や擂鉢などが出土した。
- ・ **SD1426** (遺物図: なし) : 幅 0.3 m で、南北 $4.2 + \alpha$ m を確認した。主軸方向 N - 5.48° - E である。
- ・ **SD980 (935・870)** (遺物図: 第 85 図 35 ~ 41・47 ~ 48・第 86 図 25 ~ 27) : 幅 0.6 m、深さ 0.42 m で、南北約 $30 + \alpha$ m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 7.61° - E である。SD935 は土師器皿 C を含むが混入品と考えられる。なお、SD870 は町 87-7SD023 と同一の溝である。
- ・ **SD975 (945)** (遺物図: 第 86 図 1 ~ 5、17 ~ 24) : 幅 0.4 m、深さ 0.46 m で、南北約 20 m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 4.86° - W である。
- ・ **SD950 (985)** (遺物図: 第 86 図 6 ~ 16) : 幅 0.5 m で、南北約 20 m を確認した。ほぼ直線で主軸方向 N - 6.22° - E である。大内 A 式土師器皿が出土した。
- ・ **SD814** (遺物図: なし) : 幅 0.6 m、深さ 0.15m ~ 0.2m で、南北約 6.0 m である。ほぼ直線で主軸方向 N - 8.6° - E である。

【溝状遺構（SD）】（第 53 図）

ここでは SF100 中央付近に形成される南北溝群を報告する。SD380・SD480・SD430（2055）は SF100 上面に堆積する整地層 SX1125 上面から掘削される最新の溝で、それ以外は全て SF100 の路面部分より掘削されている。全ての溝が道路中央に西側偏って掘削される点が特徴的である。

< H ライン北側の溝 >

SD435（【本文・表編】第 26～27 図・第 13 表／【図版編】遺構図：第 52～54 図、遺物図：第 84 図 19～46、第 93 図 7～8、第 94 図 2～3）幅 0.5～0.7 m、検出面からの最大深度は 0.6 m、97-3SD205 の南側延長部の溝と考えられ、これを含めると溝の規模は南北 $24+\alpha$ m となる。主軸方向 N - 1.23° - E である。断面は「U」字形で、砂質土を多く含む埋土で埋没する。出土遺物から、D-1～2 期頃に埋没したものと考えられる。

97-1 SD370（【本文・表編】第 26～27 図・第 13 表／【図版編】遺構図：第 52～55 図、遺物図：第 81 図 33～44、第 82 図 1～5、第 101 図 7）

幅 0.5 m、検出面からの最大深度は 6.6 m、97-3SD215 の南側延長部の溝と考えられ、これを含めると溝の規模は南北 $22.4+\alpha$ m となる。ほぼ直線で主軸方向 N - 10.23° - E である。断面は「U」字形となる。遺物の取り上げは第 53 図に示すとおりである。最上位層は礫を多量に含んだ埋土である。出土遺物から D-1～2 期頃に埋没したものと考えられる。

97-1 SD380・SX1125（【本文・表編】第 26～27 図・第 13 表／【図版編】遺構図：第 49～50、52～56 図、遺物図：第 82 図 6～35、第 83 図 36～40、1～34、第 102 図 13）

土層観察から SF100 上面の整地層 SX1125 上面より掘り込まれた大型の溝で、SD370 を切る。幅 1.3～3.8 m、検出面からの最大深度は 1.3 m となる。町 97-3SD250 の北側延長部の溝と考えられ、これを含めると溝の規模は南北 $112\text{ m} + \alpha$ となる。蛇行しているが主軸方向は概ね N - 9.69° - E である。断面は第 54・56 図に示すように東側にテラスをもつ幅の広い断面台形状プランの溝である。近世以降の削平部分を復元すると、幅約 2 m、最大深さ 1.2 m の堀状の施設になる。出土遺物や遺構の切り合いから D-2 期に埋没したものと考えられる。なお、97-1SX1125 は、SD380 掘削前に形成される整地層で第 56 図の南壁土層からみて 0.23 m の厚みで堆積する。

97-1 SD390（【本文・表編】第 26～27 図・第 13 表／【図版編】遺構図：第 49～50、52～55 図、遺物図：第 84 図 1～5、第 93 図 6、第 94 図 1）

幅 0.6 m、検出面からの最大深度は 0.42 m、SD380 に切られる溝である。ほぼ直線で主軸方向 N - 11.08° - E である。断面は「U」字形となる。遺物の取り上げは第 53 図に示すとおりである。底面直上には礫を多量に含んだ砂質土が堆積する。出土遺物から D-1～2 期頃に埋没したものと考えられる。

< H ライン南側の溝 >

97-1 SD422（【本文・表編】第 26～27 図・第 13 表／【図版編】遺構図：第 52 図、遺物図：なし）

幅 0.5 m、検出面からの最大深度は 0.5 m、SD380・485 に切られる。ほぼ直線で主軸方向 N - 6.49° - E である。杯 B が出土している。SF100 を切ることから D 期以降に埋没したものと考えられる。

97-1 SD430（2055）（【本文・表編】第 26～27 図・第 13 表／【図版編】遺構図：第 52～53 図、遺物図：第 84 図 7～18、第 87 図 1～4、第 100 図 15）

幅 0.3～1.0 m、検出面からの最大深度は 0.3 m、南北 7.5m 程の溝である。一面目で掘削した SD430 の掘り残し部分を 2 面目の遺構 SD2055 として調査したものであり同一遺構である。主軸方向 N - 9.68° - E を測る。SD480 を切ることから D-2 期頃に埋没したものと考えられる。

97-1 SD480（【本文・表編】（第 26～27 図・第 17 表／【図版編】遺構図：第 53 図、遺物図：第 85 図 4～10、第 94 図 5）

幅 0.7 m、検出面からの最大深度は 0.4 m、南北 $10+\alpha$ m を検出した。SD380 と同様に SX1125 を切って形成される。ほぼ直線で主軸方向 N - 7.76° - E である。断面は「U」字形となる。出土遺物から D-2 期頃に埋没したものと考えられる。

97-1 SD485（【本文・表編】第 26～27 図・第 13 表／【図版編】遺構図：第 52～53 図、遺物図：第 85 図 11～15、第 96 図 1～11、第 97 図 12～13、第 99 図 5～6）

幅 0.6 m、検出面からの最大深度は 0.4 m、南北 $10+\alpha$ m を検出した。石列部は主軸方向 N - 7.42° - E で、礫部は主軸方向 N - 16.4° - E である。

【溝跡（SD）】

道路に関連する遺構以外の溝を報告する。

97-1 SD173（【本文・表編】第 29 図・第 13 表／【図版編】遺構図：第 58 図、遺物図：第 100 図 14）

調査区北西端の L3～L4 グリッドで検出した東西方向の溝状遺構である。幅 1.05 m、検出面からの最大深度は 0.25 m、ほぼ直線で主軸方向 E - 0° - S で、東西 $7.7+\alpha$ m を測る。断面は緩い台形状である。1 層より鉄製蓋が完形品で出土した。

97-1 SD770（【本文・表編】第 29 図・第 12 表／【図版編】遺構図：なし、遺物図：第 85 図 29～34）

調査区西端の E2～G2 グリッドで検出した南北方向の溝状遺構である。SK095・125・349 に切られる。西側の肩が調査区外に延びる為、全容は不明である。長土坑の可能性も考えられる。幅 $1.2+\alpha$ m、検出面からの最大深度は 1.0 m である。土師器Ⅲ C が 1 点出土しているが、壁面中からの混入品である可能性が高く、A 期を主体とした遺物組成をもつ。A Ⅲ -1 期に埋没したと考えられる。

97-1 SD1025（【本文・表編】第 29 図・第 12 表／【図版編】遺構図：第 58 図、遺物図：なし）

調査区南北部の端の E7 グリッドで検出した南北方向の溝状遺構である。SK288、SK1020、SJ1015 に切られる。SK1020 は 1 面目では検出が難しく、整地層除去後に確認した土坑である。調査工期の関係上、西側延長部については検出・掘削できていないが、後述する SD2045 は西側延長部の溝の可能性がある。幅 0.8 m、検出面からの最大深度は 1.3 m と深い。ほぼ直線で主軸方向 E - 0° - S である。底部の標高は 3.9 m である。断面は急な台形状である。5、6 層は粘質の強い堆積土であり、滯水環境であったと考えられる。限られた調査範囲であったこともあり遺物は出土しなかったが、上部に形成された SJ1015 や SK1020 に切られることから A Ⅲ -1 期頃の遺構と考えられる。

97-1 SK1020（【本文・表編】第 29 図・第 12 表／【図版編】遺構図：第 58 図、遺物図：第 79 図 22～24）

長軸 $2.7+\alpha$ m、短軸 1.4 m の楕円形で、検出面からの最大深度は 0.6 m である。土師器壺 A、常滑焼甕、輪花形火鉢が出土した。A Ⅲ -1 期頃に位置づけられる。

97-1 SD2045（【本文・表編】第 29 図・第 12 表／【図版編】遺構図：第 58 図、遺物図：第 86 図 33～36）

調査区西端の E2 グリッドで検出した東西方向の溝状遺構である。SD1025 と断面形状や主軸方向、時期が同じであることから、同一の溝である可能性がある。なお、その場合総長 24m 以上の規模となる。SK298、SE2000 に切られる。幅 0.8 m、検出面からの最大深度は 1.7 m、ほぼ直線で主軸方向 E - 0° - S である。底部の標高は 3.7 m である。断面は傾斜角度のきつい急な台形状である。土師器壺 A、土師質土器鍋 B が出土している点、A Ⅲ -2 期頃の SE2000 より古い点から、A Ⅲ -1 期頃に位置づけられる。

土器埋設遺構（SJ）

97-1 SJ1015（【本文・表編】第 29 図・第 14 表／【図版編】遺構図：第 58 図、遺物図：第 89 図 21～30）

調査区南東部の E7 グリッドの SK288 床面付近より検出した。SK288 に切られ、SD1025 を切る遺構である。長軸 4.6m、短軸 4.25 m の楕円形で、検出面からの最大深度は 2.4m である。3 の土師質土器鍋が天地を逆にして床面に置かれ、その上に 1・2・5 の土師器壺 A2 枚が伏せた状態で出土した。SK288 中には完形に近い壺 A が多く出土しており、本来は SJ1015 に帰属するものであったと考えられる。A Ⅲ -1 期頃に位置づけられる。

97-1 SJ325（【本文・表編】第 29 図・第 14 表／【図版編】遺構図：第 58 図、遺物図：第 89 図 20）

調査区南東部の C7 グリッドで検出した。長軸 2.5 m、短軸 1.9 m の楕円形で、検出面からの最大深度は 0.55 m である。土師器壺 A 一個体を半截し、破片とともに床面に置いた状態で出土した。底部中央のみ欠損する。A Ⅲ 期に位置づけられる。

性格不明遺構（SX）

97-1 SX030（【本文・表編】第29図・第17表／【図版編】遺構図：第59図、遺物図：第90図6～9、第100図17）

調査区中央北端のH3・I3グリッドで検出した。SK025、ST155を切っている。長軸2.9m、短軸2.6mの隅丸方形で検出面からの最大深度は0.15mと浅い。床面より焼土・炭片と共に鎌が出土した。柄の部分も炭化してはいるが遺存しており、刃渡19cm、柄長16cmの完存する遺物である。出土遺物は土師器皿Cが出土しており、C-2期頃に位置づけられる。

97-1 SX460（【本文・表編】第29図・第17表／【図版編】遺構図：第53・59図、遺物図：なし）

調査区中央東のH10グリッドで検出した。SD380埋土の上面で確認されており、調査区中でも最新の遺構である。直径0.24cm程の河原石を中心、周囲に拳大の礫を廻らせたもので、礎石の根締石に類似する。掘方は確認できなかった。D-2期に位置づけられる。

97-1 SX690（【本文・表編】第29図・第17表／【図版編】遺構図：第59図、遺物図：第90図15～18）

調査区中央北端のH3・H4・G3・G4グリッドで検出した深さ0.1m程の掘り込み整地状の遺構である。SK035に切られSE045の掘方部分を覆う・SB1115の範囲に重なることから、掘立柱建物形成に伴う遺構の可能性も考えられる。C-1期頃に位置づけられる。（長直信・堀麗）



第14表 第97-1次調査区 埋納遺構 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SJ325	C7	A III期			59
SJ1015	E7	A III-1期			59

第15表 第97-1次調査区 柱穴 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SP319	E7	B-2期	×		5・6
SP398	H3	C期	×	銅錢のみ	5・6
SP421	E7	不明	×	銅錢のみ	5・6
SP427	J8	A期～	×		5・6
SP449	G6	A～B期	×		5・6
SP498	D3	A期	×	銅錢のみ	5・6
SP584	D6	不明	×		5・6
SP596	D7	A期	×		5・6
SP600	H7	不明	×		5・6
SP638	F3	A III-2期	×		5・6
SP662	G8	A期～	×		5・6
SP673	G7	不明	×	銅錢のみ	5・6
SP793	H8	A期～	×	銅錢のみ	5・6
SP842	I7	D期	×		5・6
SP918	E7	A III期	×		5・6
SP925	H9	A期	×		5・6
SP949	G8	C期	×	銅錢のみ	5・6
SP1092	D7	不明	×	銅錢のみ	不明
SP1097	D6	不明	×	銅錢のみ	不明
SP1131	G8	不明	×	銅錢のみ	不明
SP1341	H7	A期	×	銅錢のみ	不明
SP2007	D3	A III期	×	銅錢のみ	不明
SP3003	G8	A期			50
SP3011	B12	A期		×	52

第16表 第97-1次調査区 土坑墓 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
ST155	H3・H4	C-2期			50

第17表 第97-1次調査区 性格不明遺構 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SX030	H3～I3	C-2期			60
SX074	J5	近世	×	銅錢のみ	5・6
SX357	G2	C-1期	×		5・6
SX460	H10	D-2期		×	60
SX690	H3～H4 G3～G4	C-1期			60
SX1268	F5・F6	A III-2期	×		5・6
SX2024	E10	A期	×		5・6
SX2103	G8	A期	×		5・6
SX2111	F4・F5	B期か	×		5・6
SX2116	D11	D期	×		5・6
SX3009	C12	A期			52
SX3015	D12	A III-1期			51

(4) 出土遺物

以下の97-1・97-1E、97-2、97-3の各報告では紙面の都合上、掲載した出土遺物の全ての原稿を記載できていない。遺物の種類・名称・法量等は遺物観察表を参照いただきたい。また、今回総計3971点の遺物を図示掲載したものの、図示できていない重要な遺物も数多くある。第3章第2節の報告書作成の方法にて述べたように、掲載遺構に絞って出土遺物を記号化した形で巻末の遺構出土遺物一覧表にて「報告」している。遺構の時期認定に関わる遺物も表に掲載するのみとなっているものもあるが、出土遺物の全容についてはこれを参照されたい。なお、表に掲載した遺物も掲載遺物と同様のレベルで閲覧可能である。十分に記号化できていない遺物も多く、今後の課題である。ここでは、本調査区における一括資料、特殊遺物について概観する。

なお、以下の図版番号は全て【図版編】のものである。

■一括資料

SK010（第64・65図）からは、D-2期を中心とする資料が出土した。SK010下層からはSK145・150も近接した時期の一資料である。SK145からは青花皿F群が出土しており、最新の陶磁器組成を示す。

SK035の黒褐色土（第65図13～24、第66図25・26）は方形土坑の床面から出土した遺物群である。第65図18～23は板状木製品と併に出土した碁石と考えられる蛇紋岩である。6点分を図示しているが合計98点が出土した。第66図25は備前焼大甕である。26は華南三彩鶴形水注である。頭部と口縁部を欠損するが過去の発掘調査事例の中でもっとも遺存状態が良好な資料である。色調も緑・黄・白色の発色がよく、光沢のある釉がかかる。木村幾多郎氏の分類する1類に属するものである（木村2008）。本文・表編の表紙に首里城跡下之御池出土の鶴形水柱の頭部、豊見城市宜保家伝世品の口縁部の図面を参考に全体の復元図を示している（新垣2011）。華南三彩鶴形水注は小片の状態で出土した。約20m西にあるH8グリッドにあるSK794から出土した胴部片と接合することから、近隣で破損した遺物をかきあつめて投棄したものと考えられる。その他、鎧金具と考えられる鉄製品（第100図7）、雁又鉄鎌（第100図6）、錠の牡鍵部分が2個体出土した。第101図2には第100図8のバネ部が接合する。なお、第65図17は宝珠唐草文軒平瓦片である。吉田寛氏の分類する「宝珠唐草文軒平瓦C」であり、称名寺や万寿寺をはじめ中世大友府内町跡の各所で確認される型式である。吉田氏の検討によれば16世紀後葉に製作されたものとされている（吉田2013）。97次調査区全体ではこの1点のみの出土である。

SK055は浅い方形土坑床面で出土した遺物である。出土状況は第30図に示すように中国陶磁器と鉛製容器が入れ子の状態で出土した。第67図8は青花小壺である。口縁端部を一部欠損する。体部は濃い青色に発色した呉州で渦巻紋を描く。無釉となる底部付近は赤く発色している。薄手で軽い製品である。体部には欠損部を接合した痕跡があり（第67図8矢印部分。）、使用当時に漆などで接合したと考えられる。文様構成と底部の形状がややことなるが博多遺跡群第124次SK512出土の小壺に類似する（福岡市教育委員会2004）。明代初期（14世紀後半）の製品と考えられる。第67図9は漳州窯系青花鉢である。完形品である。体部外面には唐草と雀らしき小鳥が描かれる。口縁部は釉剥ぎされており、蓋物と考えられる。町80次SD101より類似した資料が出土している（大分県教育庁埋蔵文化財センター2013b P339）が類例の少ない器種である。第101図鉛製品1は土圧のためひずんでいるが口径11.2m、器高3.3m、底径8.4mを計る容器である。第67図8の小壺の蓋として出土した。厚さ1mmと脆弱な資料である。図面上では底部が欠損した状態であるが、完存する資料である。蛍光X線分析から鉛68.1%、錫20.7%、鉄8.7%、砒素0.8%の値が確認されており、鉛の産地は華南産との値が出ている試料である（註1）。博多遺跡群第124次SK236（陶磁器埋納遺構）からは、16世紀中頃の陶磁器類とともに錫製品5点（錫製鍋・徳利等）が出土しており、本資料もこれに類するものと考えられる。

SK105はSF100上面に形成された火災処理土坑である。層位的に遺物を取り上げたが埋土全体に焼土が含まれており第68図6～9、第100図銀製品1は一括廃棄されたものである。第100図銀製品1は八角形の環状製品である（註2）。銀製である点や形状から指輪の可能性が高い。

北西部土坑群は、B期～D-1期にかけて形成された土坑群である。SK156は遺構の重複関係上最新の土坑であり、第69図27～29に示すように青花皿F群が出土する。SK190はSK156に切られる土坑である。第71図22～

34・第72図1～9に示す遺物が出土した。厚手の土師器皿CからD-1期ごろ遺構である。31は中国陶器と考えられる人形である。赤茶色の釉（トーン部分）を全体に施すが表面の衣服部のみ黄褐色の釉が施される。衣服は法被のような形にみえる。裏側は帯のような表現が確認できる。胎土は淡黄橙色のきめ細かい土である。34はガラス製のボタン状ガラスである。被熱のため表面が変色している。裏面中央に条痕が確認できる。中世大友府内跡の調査で類例が散見できる資料である。

SK162はSE050裏込め部に形成された火災処理土坑である。出土遺物は少ないが近世1期の備前焼擂鉢や白磁の木瓜皿などが出土している。

SK320は性格不明の大型土坑SK354に削平されるため、遺構規模や性格等不明であるが遺存率の良い土師器類が多く出土した。第74図59～65は非常に薄手の皿Cであり京都系土師器導入前後の資料の可能性がある。第73図43～58は土師器坏Bnである。B-2～C-1期にかけての過渡的な遺物組成を示す。

以上の土坑類の一括資料はC～D期が主体であり、B期・A期に帰属する遺構・遺物は非常に少ない。A期は溝跡出土資料を中心に出土した。

SD950は15世紀代の南北道路西側溝とした溝で、切り合い関係上最も古い時期の溝跡となる。第86図6～16に示す土師器坏A、土師質土器鍋B、瓦質土器擂鉢などの遺物が出土した。第86図9の土師器皿Cは混入品と考えられる。土師器坏Aは薄手でやや器高が高いものが多い。大内A式土師器皿の存在からAⅢ-2期に帰属する遺物群と考えられる。なお、第86図16は中国黒釉陶器皿である。天目碗に似た釉調をもつが皿型の形態のものである。15世紀代の製品と考えられる。

SD2060は15世紀代の南北道路東側溝とした溝で、土師器坏Aや大内A式土師器皿、瓦質土器擂鉢などが出土した。第87図11は淡黄褐色の色調をもつ精製された土師器坏である。非常に薄手の製品であり搬入品と考えられるが大内系土師器とはやや作風が異なる。第87図17は大友氏館跡第20次で検出した瓦質土器鉢の埋設遺構SX020に類例のあるもの（大分市教育委員会2008 p40）である。口縁端部は玉縁状にやや肥厚し、外面にユビオサエ痕を明瞭に残す特徴的な資料である。第87図19は形態から瓦質土器風炉と考えられる資料である。

SD2090は15世紀代の南北道路西側溝から出土した土師器群である。遺存率が良い土師器が多く出土し、一括投棄されたものと考えられる。第87図46の土師質土器捏鉢や47の瓦質土器擂鉢の形状はAⅢ-2期前後のものを示す。

SJ1015は土師質土器鍋B・羽釜と土師器小皿AⅠ・坏Aを埋設したものである。土師器は外反気味の体部に口縁端部をやや尖らす形態のものに占められる。第89図28の羽釜は類例の少ないものである。AⅢ-1期前後の土師器供膳具と煮炊具のセットを示す良好な資料である。第89図30は軽石製の性格不明の石製品である。底部と頂部に穿孔がみられるが貫通していない。

その他、一括資料ではないが、A期のまとまった遺物組成を示す遺構としてSE065・2000の裏込部から出土した土器群が上げられる。土師器小皿AⅡや大内A式土師器皿を含み、AⅢ-2期を中心とした土器群と考えられる。第61図17は瓦質の製品で2.8cmと厚みのある資料である。裏表に菊花文と梅花文のスタンプが押印される。文様埠の可能性を考えたが、本資料1点のみの出土であり性格は断定できない。

■その他特殊遺物

第60図5は朝鮮陶器粉青沙器碗である。高台端部は露胎で赤く発色する。内面には象嵌された円文と中央に彫三島の印花原体に似た菊花文が確認できる。15世紀前半の製品と考えられる。第60図12は内面に融着物が付着した丸瓦である。97-2SK120や115出土瓦と同様に火災に伴う資料と考えられる。被熱のため陶器化している。

第61図2は青花の鉢である。大型品で呉須の発色も極めて良い優品である。町87-7検出時出土遺物中に同一形態の鉢が出土している。接合しないが同一個体と考えられる（大分市教育委員会2010 p26）。

第65図3は大型の瓦質製品の一部である。脚部のような筒形の形状である。摩滅が著しいが金属器を模倣したのか装飾的な調整が施される。瓦塔など的一部の可能性も考えられるが類例のない特殊遺物と考えられる。

第 71 図 13 は B 期の廃棄土坑から出土した瓦橙の下部である。内面と外面の一部に煤が付着する。内外面は丁寧にミガキ調整を施している。これまでの調査では瓦橙の上部の資料の出土・報告例はあったが下部の資料は初報告と考えられる。

第 73 図 9 はタイ産陶器壺である。口縁部に縁がかった褐色釉がかかること。

第 75 図 5 は青花の鉢である。肉厚な製品であり非常に大型になると考えられる。文様構成や器壁の厚み等からみて万寿寺西堀である町 73S223 出土資料に類似する（大分市教育委員会 2009 p186）。

第 75 図 10 は土製鋳型である。「T」字状の 1.5mm ほど窪みがあり、非常に薄手の製品を製作したと考えられる。

第 76 図 46 は高麗青磁碗である。雲形の印花原体の形状から、14 世紀前半頃の製品と考えられる（註 3）。

第 77 図 1 は中国陶器磁竈系陶器の盤である。内面見込み部に陰刻された文様が確認できる。全面に緑釉がかかること。第 77 図 16 は精製された白色の胎土を用いた土師器皿である。内面見込み部に螺旋状の鋭い工具痕が確認できる。町 87-12SX010 裏込めからも同様の特徴を有する土師器皿が出土している（大分市教育委員会 2010 p25）。中世大友府内町跡のその他の調査地点でも稀に出土する資料で、大内系土師器とは異なる白色を呈する土師器である。類似する資料は肥前や筑後地域の中世の遺跡で確認できることから、これらの地域からの搬入品の可能性が考えられる。

第 79 図 4 は龍泉窯系青磁香炉である。釉が厚くかかる優品である。第 79 図 6 は華南三彩獅子形水滴である。型成形で、接合面で欠損している。体部に穿孔が確認される。頭部付近にたてがみらしき表現があることから獅子と判断した。第 79 図 34 は犬型土製品である。大型の資料で五十川育子氏の分類にあてはまらない資料である（五十川 2015）。土製品が出土した SK2025 は 2 面目で確認した遺構である。

第 80 図 53 は青緑色を呈すやや肉厚のガラス製品である。ボトル状の瓶の頸部付近の破片の可能性がある。断面形状は扁平である。

第 85 図 8 は土師質土器鍋 B である。遺物が出土した SD480 は D-2 期に下る遺構であり混入品である。鍋 B の全形のわかる貴重な資料である。底部は大型の格子目タタキを施し体部はタテハケとユビオサエ調整を行い、内面はヨコハケを施す。

第 86 図 13 は瓦質土器で壺ないし火鉢などが考えられる製品である。体部外面に大型の木ノ葉形のスタンプ文が確認できる。町 31 次調査で同様の製品が報告されている（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2006）。共伴する遺物から A III -2 期（15 世紀中葉～後葉）の製品と考えられる。

第 88 図 34 は朝鮮陶器の鉢で、断面三角形の口縁端部をもつ。体部は斜め方向のタタキ成形で内面には無文當て具痕が確認できる。第 88 図 38 はやや青味かかった透明色のガラス小玉である。

第 89 図 36 は碧玉製の管玉である。町 87-5SX006 からは瑪瑙製の勾玉（大分市教育委員会 2010 p29）が出土していることから付近に古墳時代の遺構が存在したと考えられる。

第 89 図 39 は中国褐釉陶器の茶入である。淡茶赤色の極めて緻密な胎土をもち、器壁も非常に薄い。肩の張った丸みをもった形態に復元される。共伴した遺物中に 16 世紀代のものがみられないことから 15 世紀代の遺物か。

第 91 図 1 は白磁の碗である。青白釉のかかる薄手の製品で内面には型成形による文様が確認できる。第 91 図 6 ~ 14 は検出時に出土した遺物である。9・11 は 15 世紀代の龍泉窯系青磁で、ともに厚い釉がかかった優品である。9 は底部に朱書きの文字が確認できるが判読はできない。13・14 は白磁の壺である太宰府分類の四耳壺 III -3 類の可能性のある資料である。第 91 図 15 は青白磁梅瓶底部である。97 次調査区全体で梅瓶の体部片が多く出土したが、最も遺存状態のよい資料である。高台内面付近まで釉葉がかかり内面は露胎となる。

第 92 図 52 は在地産の瓦器椀である。非常に低く退化した高台と厚手の器壁をもつ資料である。

第 92 図 54 は吉備系土師器椀である。見込み部に重ね焼き痕が確認できる。高台と器高の高い古手の属性をもつ資料である。

第 100 図鉄製品 1 は SE050 枠内で出土した棒状鉄製品である。97-1E SK020 からは同様の鉄製品 3 本がまとまって出土しており鉄素材と考えられる。本資料は 1 本のみの出土であるが同様の性格をもった資料と考えられる。

第100図鉄製品10は方形土坑SK440の床面付近で出土した鉄塊である。鉄釘数十本が融着したものである。小型の釘と中型の釘で構成されているようである。97-1では坩堝や鋳型など金属生産関連遺物が一定量出土しており、釘を鋳潰す過程で生じた製品の可能性がある。

第100図鉄製品14はSD173で出土した鉄製の蓋である。完存する資料で環状の摘みが付属する。

第100図鉄製品17はSX030出土の鉄製鎌である。刃渡り17.8cmを測る。出土時は柄が折れた状態であった。図示した部分は柄の一部であり、検出時の計測から柄の全長は約40cmを測る。

また、古代の遺物として、第65図9の須恵器壺C、第64図1・第86図29の緑釉陶器皿、第70図8の脚部を八角形に面取りした都城系の土師器高壺、第88図32の底部糸切り成形の灰釉陶器碗、第89図1の陶硯、第89図35の細かな格子目タタキをもつ平瓦、第91図21の須恵器壺底部がある。97-1Eも同様の傾向を示しており、当地が8～9世紀代の物資の集積地であった可能性がある。

その他、第69図13、第71図36、第79図35・36は弥生土器甕の底部で、全て底部付近のみが完存する資料である。欠損部は摩滅しており中世においてコップ形の容器として転用した可能性がある。（長直信）

第3節 第97-1E次調査区

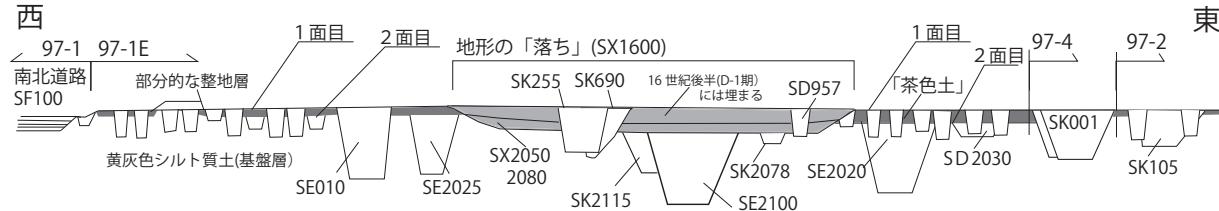
(1) 概要

当該調査区は97-1南北道路SF100より東側の調査区である。これまでの調査成果によると「寺小路町」東側と「片側町」の背面に相当する地点である。調査区中央～北側は87-5・16、調査区西端は87-3・4、調査区南東部は87-9、調査区南西部は87-8の一部が重複する。

調査の結果、97-1とほぼ同様に南北道路の97-1SF100に面して東西10mの幅で極めて高い密度で分布するピット群と、その背面に井戸13基、廃棄土坑を10地点以上確認した他、掘立柱建物跡を25棟、柵跡1条を確認した。道路前面のピット群内には方形土坑10基程が一定の距離をおいて南北に展開している。特筆すべき点は、SK020とした火災処理土坑から完存する鉄製兜1両、天秤皿、分銅、権、薬研、錠、多量の釘など希少品を含む多量の金属製品や、タイ産鉢・中国製茶入などが一括して出土したことである。また、SJ860とした小型のピット状遺構から、完形品に復元できる瀬戸産華瓶が埋置された状態で検出された。その他、SK295とした石組方形土坑や、SK440とした大型土坑が土壤分析よりトイレ関連遺構であることを確認した点も大きな成果である（第V章1節参照）。調査区中央部では87-5・13で検出した地形の落ち（97SX1600）が確認され、この地点を整地しながら（SX2050・2080等）、大型廃棄土坑SK255・690などが複数形成されている状況を確認した。87次調査で「空閑地」と把握した地点は、今日の調査において他の地点と比較して遺構密度は極めて希薄であり、既存の調査成果を追認することとなった。

なお、調査の中盤に97-1E東側と97-2をつなぐ97-4を設定し、遺構の様相把握を行った。以下では97-4の概要も含めて調査成果を述べる。

(2) 基本土層（第30図）



第30図 第97-1E次調査区 基本土層模式図

97-1同様、黄灰色シルト質土上に、15世紀代の遺構が形成され、一部に部分的な整地層をはさみつつ16世紀初頭前後から16世紀後半にかけて広範で高密度に遺構が展開する。地形の落ち部分の底面にはB期～C-2期の遺構が展開し、C-2～D-1期頃よりSX2050・2080とした整地土で埋められ、最終的にSX1600とした整地層で平坦に均される。この平坦面にD-1期の廃棄土坑（SK690・255など）が形成される。低地を整地した不安定地盤であるためか遺構密度は低い。なお、落ちの底面では中世の遺構に切られてSK2078とした9世紀代の土坑を確認した。今回の調査で唯一の古代に遡る遺構である。

SX1600から調査地東端部では、「黄灰色シルト」上面に14～15世紀代の井戸など、AⅡ～Ⅲ期の遺構が展開する（2面目）。この面は砂礫混じりの整地層「茶色土」によって埋められる。「茶色土」は東端部では0.2mの厚みで堆積するが、さらに東側の97-2や調査区北側及び97-3では0.1mほどと薄くなる。整地層上面には、AⅢ期～D-1期にかけての遺構が複数形成される（1面）。SX1600西側から南北道路前面までは、北側では基盤層である表土直下より「黄灰色シルト」が確認される地点と、15世紀代（AⅢ-2期頃）の部分的な整地層が確認される。整地層除去後には、AⅡ-3期～AⅢ-2期頃の遺構が確認される。東側は異なり面的な整地を行っていないことから、「黄灰色シルト」上面にはA～Dまでの幅をもった時期の遺構が露出している。

(3) 主要遺構

掘立柱建物跡（SB）・柵状遺構（SA）

第18表に示すように掘立柱建物跡25棟と柵跡1条を確認した。内訳は南北道路SF200前面のものが17棟、

第18表 第97-1E次調査区 掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	規模	梁行(cm)	桁行(cm)	方位	床面積(m ²)	場所	遺構番号	規模	梁行(cm)	桁行(cm)	方位	床面積(m ²)	場所
SB360	2(3)×8(9)	2.62	9.51	N-7.98° -E	24.9	SF100前面	SB840	2(3)×4	3.71	6.58	N-5.68° -E	24.4	SF100前面
SB365	2×6	3.07	8.26	N-8.98° -E	25.4	SF100前面	SB845	1(2)×3(4)	2.91	6.16	N-8.3° -E	17.9	SF100前面
SB370	2(3)×5(7)	3.14	7.63	N-5.7° -E	24.0	SF100前面	SB850	2×4	2.45	6.21	N-7.89° -E	15.2	SF100前面
SB375	2(3)×3	4.16	6.23	N-7.63° -E	25.9	SF100前面	SB855	2×6	2.80	10.28	N-9.47° -E	28.8	SF100前面
SB380	1×5	2.10	8.56	N-7.6° -E	18.0	町屋裏手	SB860	1(2)×3	2.95	8.43	N-5.93° -E	24.9	SF100前面
SB795	1(2)×4	2.52	6.06	N-6.62° -E	15.3	町屋裏手	SB865	3×4	3.46	6.61	N-3.51° -E	22.9	SF100前面
SB800	3×5	3.52	6.64	N-3.61° -E	23.4	町屋裏手	SB870	2(3)×5	2.62	8.59	N-5.56° -E	22.5	SF100前面
SB805	1(2)×5	2.76	7.82	N-4.2° -E	21.6	町屋裏手	SB875	3×5	2.78	7.08	N-6.87° -E	19.7	SF100前面
SB810	2(3)×3(5)	2.19	7.11	N-9.34° -E	15.6	町屋裏手	SB880	1(2)×2	2.75	4.74	N-6.96° -E	13.0	SF100前面
SA815	2×5	3.58	8.14	N-11.6° -E	29.1	町屋裏手	SB885	2×4(5)	2.74	6.03	N-6.3° -E	16.5	SF100前面
SB820	4×1+α	2.24	6.42	N-6.7° -E	14.4	町屋裏手	SB890	2(3)×3	3.15	5.76	N-6.42° -E	18.1	SF100前面
SB825	2×3	3.46	5.09	N-7.41° -E	17.6	町屋裏手	SB895	2(3)×3(5)	3.57	7.39	N-8.8° -E	26.4	SF100前面
SB830	2×5(6)	3.53	8.90	N-4.85° -E	31.4	町屋裏手	SB900	2×5	2.42	4.28	N-14.79° -E	10.4	町屋背面
SB835	2(3)×3(4)	3.13	9.39	N-4.59° -E	29.4	町屋裏手	SB905	1(2)×5(6)	2.48	4.28	N-11.72° -E	10.6	町屋背面

第19表 第97-1E次調査区 掘立柱建物跡出土遺物一覧表

遺構名	柱穴	出土遺物	時期
SB360	j(SP1254)	土製品:土壁	D-2期
	p(SP733)	土師器:坏A(底部片)-吉備系	
	x(SP507)	龍泉窯系青磁:碗II類	
	y(SP1511)	土師器:坏A片	
SB365	z(SP1367)	土師器:坏A	D-2期
	b(SP1524)	土師質土器:鍋B	
	d(SP1059)	土師器:小片	
	e(SP1372)	土師質土器:破片	
SB370	f(SP1416)	土師器:坏A(底部片)	D-2期
	h(SP2079)	瓦質土器:鍋片	
	h(SP2079)	土師器:坏A:小片	
	h(SP2079)	瓦質土器:深鉢型火鉢・小片	
SB375	h(SP2079)	瓦類:丸瓦(被熱)・平瓦	D-2期~D-3期
	h(SP2079)	中國陶器:灯明皿	
	k(SP537)	土師器:坏Bn	
	b(SP1341)	國產陶器(中世):備前指鉢(中世5期×)	
SB370	d(SP528)	土師器:坏A	D-2期
	f(SP728)	國產陶器:備前片	
	m(SP1579)	土師器:坏A:小片	
	q(SP1422)	國產陶器:備前片	
SB375	r(SP1567)	土師器:坏A	AIII-D-1期
	j(SP1262)	土師器:坏A(底部片)	
	k(SP1114)	土師器:坏A(15c~)	
	b(SP778)	土師器:坏A:小片	
SB795	e(SP784)	土製品:土壁	C-2期
	g(SP683)	土師器:坏A×B(1/3残存)・皿C	
	h(SP891)	土師器:坏A	
	i(SP666)	土師器:小片	
SB800	k(SP678)	土師器:坏A	C-2期
	a(SP662)	土師器:坏A(ほぼ完形)	
	c(SP672)	土師器:坏A・小皿A I	
	d(SP674)	須惠質土器:東播系片口鉢片	
SB810	e(SP782)	龍泉窯系青磁:碗II類	C-2期
	f(SP783)	土師器:坏A	
	g(SP896)	土師質土器:鍋B	
	h(SP901)	白磁:碗IV類	
SB805	i(SP902)	土師器:坏A:小皿A I	C~D期
	c(SP773)	土師器:坏A:小片	
	f(SP613)	土師器:坏A片	
	a(SP588)	瓦質土器:片	
SB810	d(SP589)	土師器:坏A	C-2期
	f(SP1003)	土師器:坏A:小片・皿C	
	i(SP846)	土師器:白色系小片	
	j(SP467)	土師器:坏A	
SA815	i(SP444)	瓦質土器:擂鉢	C-2期
	b(SP654)	土師器:坏A:小片	
	a(SP469)	土師器:坏A(摩滅)・皿C	
	b(SP428)	土師器:坏A	
SB820	c(SP182)	土師器:坏A(多)・小皿A I	C-1~2期
	f(SP651)	土師器:坏A片・坏Bn	
	国產陶器(中世):備前窯片	鐵製品:釘	
	a(SP291)	土師器:坏A・小皿A I	
SB825	h(SP408)	須恵器(古代):壺×	C-2期
	d(SP1359)	土師器:坏A・小皿A I(ほぼ完形)	
	h(SP427)	弥生土器:片	
	m(SP161)	土師器:坏A・小皿A I	
SB830	a(SP291)	須恵器(古代):壺×	C~D期
	h(SP408)	土師器:坏A・小皿A I(ほぼ完形)	
	d(SP1359)	弥生土器:片	
	h(SP427)	土師器:坏A:小片	
SB830	m(SP161)	土師器:坏A・小皿A I	
	a(SP291)	弥生土器:壺(後期)	
	b(SP654)	土師器:坏A片	
	a(SP469)	土師器:坏A(摩滅)・皿C	
SB895	b(SP428)	土師器:坏A	C期~D-1期
	c(SP1377)	景德鎮窯系青花:碗D×C	
	j(SP1556)	國產陶器:備前窯	
	d(SP2084)	土師質土器:破片	
SB900	g(SP2088)	瓦質土器:破片	B期~
	h(SP961)	土師器:坏A	
	m(SP2048)	土師器:坏A:小片・大内A式	
	e(SP2074)	土師器:坏A:小片	
SB905	i(SP2089)	瓦質土器:擂鉢片・不明片	B期~
	h(SP961)	土師器:坏A	
	m(SP2048)	土師器:坏A:小片・大内A式	
	e(SP2074)	土師器:坏A:小片	

2面目として調査した町屋背面にあたる調査区中央南側で2棟、町屋裏手にあたるSX1600の東側で8棟と柵1列である。東側の建物・柵跡は調査工程上、柱穴完掘後に建物プランの検討を行ったため、柱痕の有無の確認や土層の検討は行っていない。A III -2期頃の整地層上に形成されており、A III期以降に位置づけられる。

南北道路前面の建物は、調査の初期段階で確認した97-1SB260やSB270の規模や方位を参考に、調査中にプランを確認し半截等の詳細な調査を行った。調査終了後に再度柱穴の整理を行う過程で、各建物に帰属する柱穴に変更を加えたものもあるが、柱穴密集地点の柱穴の選択には不安が残る。柱穴の密度に比例して、南北道路前面南側の建物の重複が著しく、2~3時期に及ぶ。第31図に示すように建物にはSF100内に入り込むA列と



第31図 第97-1E次調査区 SB掲載位置図(1/200)

これより 1m 程東に下がって並ぶ B 列、さらに 0.5m 程東に下がった地点で並ぶ C 列がある。各列は A 列が D-2 期頃、B 列が D-1 期頃、C 列が C-2 期頃の建物と想定する。各棟の計測値などについては、第 18 表にまとめている。個別図中の柱間数値は厳密なものではない。

97-1E SB360（【本文・表編】第 31 図・第 18・19 表／【図版編】遺構図：第 109 図、遺物図：第 160 図 1）

調査区南西部隅の B12 グリッドで検出した A 列の建物である。梁行間 2(3) 間、桁行 8(9) 間、身舎面積 24.9 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 7.98° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.27 ~ 0.42 m の概ね円形を呈する。柱穴 a,b,d,f,i,j,k,l,n,o,p,q,t,w,x で柱痕が検出されており、直径 0.06 ~ 0.18 m の隅丸方形である。柱間は梁行 0.56 ~ 1.4 m、桁行 0.5 ~ 1.8 m である。柱穴 j から壁土片が出土したほか、各柱穴からは A II ~ III 期を中心とする遺物（全て小片）が出土した。

97-1E SB365（【本文・表編】第 31 図・第 18・19 表／【図版編】遺構図：第 110 図、遺物図：第 160 図 2 ~ 8）

調査区南西部隅の C12 グリッドで検出した A 列の建物である。梁行 2 間、桁行 6 間、身舎面積 25.4 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 8.98° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.21 ~ 0.6 m の概ね円形を呈する。柱穴 a,h,i,j,l,p で柱痕が検出されており、直径 0.06 ~ 0.18 m の隅丸方形である。柱間は梁行 1.5 ~ 1.7 m、桁行 0.5 ~ 2.1 m である。棟先部分の柱穴 h,i,j は柱痕中に焼土を多く含む。柱穴 h からは厚手の土師器皿 C や土師質土器鍋 C、中国黒釉陶器灯明皿片などが出土した他、被熱した瓦片が出土している。

97-1E SB370（【本文・表編】第 31 図・第 18・19 表／【図版編】遺構図：第 111 図、遺物図：第 208 図 1）

調査区南西部の E12 グリッドで検出した A 列の建物である。梁行 2(3) 間、桁行 5(7) 間、身舎面積 24.0 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 5.7° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.24 ~ 0.6 m の概ね円形を呈する。柱穴 b,c,d,f,o,q,r で柱痕が検出されており、直径 0.06 ~ 0.18 m の隅丸方形である。柱間は梁行 0.4 ~ 1.7 m、桁行 0.4 ~ 1.9 m である。柱穴 h とした地点は相輪（第 208 図）と河原石を礎盤石としている。柱穴 b から土師器坏 A が 3 個体出土した。

97-1E SB375（【本文・表編】第 31 図・第 18・19 表／【図版編】遺構図：第 112 図、遺物図：なし）

調査区西部の H13 グリッドで検出した B 列の建物である。梁行 2(3) 間、桁行 3 間、身舎面積 25.9 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 7.63° - E 東西棟である。柱穴は直径 0.16 ~ 0.48 m の概ね円形を呈する。柱穴 a,e,j から柱痕が検出されており、直径 0.08 ~ 0.12 m の隅丸方形である。柱間は梁行 0.9 ~ 2.7 m、桁行 1.6 ~ 2.7 m である。遺物は土師器坏 A が出土したのみである。

97-1E SB380（【本文・表編】第 31 図・第 18・19 表／【図版編】遺構図：第 112 図、遺物図：なし）

調査区北西部隅の J13 グリッドで検出した A 列の建物である。梁行 1 間、桁行 5 間、身舎面積 18.0 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 7.6° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.2 ~ 0.42 m の概ね円形を呈する。柱穴 c,j,k,l,m で柱痕が検出されており、直径 0.08 ~ 0.2 m の円形である。柱間は梁行 2.0 ~ 2.1 m、桁行 1.1 ~ 2.2 m である。遺物は出土していない。

97-1E SB795（【本文・表編】第 31 図・第 18・19 表／【図版編】遺構図：第 113 図、遺物図：第 160 図 9 ~ 10）

調査区南東部隅の A23 グリッドで検出した。梁行 1(2) 間、桁行 4 間、身舎面積 15.3 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 6.62° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.24 ~ 0.4 m の概ね円形を呈する。柱間は梁行 0.8 ~ 1.7 m、桁行 0.9 ~ 3.1 m である。柱穴からは A III 期頃の土師器坏 A が出土したが、整地層中のかき上げ遺物と考えられる。柱穴 g より土師器皿 C が出土した。

97-1E SB800（【本文・表編】第 31 図・第 18・19 表／【図版編】遺構図：第 113 図、遺物図：第 160 図 11）

調査区南西部隅の A22 グリッドで検出した。梁行 3 間、桁行 5 間、身舎面積 23.4 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 3.61° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.16 ~ 0.64 m の概ね円形を呈する。柱間は梁行 0.8 ~ 1.8 m、桁行 0.7 ~ 2.3 m である。柱穴 a からは完形に近い土師器坏 A が出土した他、各柱穴からは A 期を中心とする遺物が出土したが、多くは整地層中に帰属する遺物である。

97-1E SB805（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第114図、遺物図：なし）

調査区南東部のC22 グリッドで検出した。梁行1(2)間、桁行5間、身舎面積21.6 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 4.2° - E の東西棟である。柱穴は直径0.2～0.72 mの概ね円形を呈する。柱間は梁行0.9～2.5 m、桁行1.0～2.5 mである。土師器壺A 小片が出土した。SB795・800・805・825・835とも近似した建物方位をもっており、近接した時期の建物と考えられる。

97-1E SB810（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第114図、遺物図：第160図12）

調査区南東部のD22 グリッドで検出した。梁行2(3)間、桁行3(5)間、身舎面積15.6 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 9.34° - E の東西棟である。柱穴は直径0.16～0.42 mの概ね円形を呈する。柱間は梁行0.6～1.2 m、桁行0.6～2.9 mである。柱穴f からやや厚手の土師器皿C が出土した。C-2期頃に位置づけられる。

97-1E SA815（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第115図、遺物図：なし）

調査区南東部のD22 で検出した。柱穴8基からなる東西3.5 m、南北7.9 mとなる「L」字状の柵状遺構である。主軸方向はN - 11.6° - E である。SB810 に伴う柵跡と考えられる。

97-1E SB820（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第115図、遺物図：第160図13）

調査区南東部のE22 グリッドで検出した。梁行4間、桁行1+α間、身舎面積14.4 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 6.7° - W の南北棟である。西側はD-1期に形成されたSX1600 に切られる。柱穴は直径0.36～0.72 mの概ね円形を呈する。柱間は梁行1.5～1.8 m、桁行1.4～2.1 mである。柱穴e,f,g の床面からは礎盤石が確認された。柱穴からは土師器皿C・壺Bn が出土しており、SX1600 より古いことからC-1～2期頃に位置づけられる。

97-1E SB825（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第116図、遺物図：第160図14）

調査区東部のG23 グリッドで検出したSB830に重複するが、前後関係は明らかではない。梁行2間、桁行3間、身舎面積17.6 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 7.41° - E の東西棟である。柱穴は直径0.24～0.6 mの概ね円形を呈する。柱間は梁行0.9～2.7 m、桁行1.1～2.1 mである。柱穴h から土師器壺A・完形に近い小皿A I が出土した。

97-1E SB830（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第116図、遺物図：なし）

調査区東部のG23 グリッドで検出した。梁行2間、桁行5(6)間、身舎面積31.4 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 4.85° - E の東西棟である。柱穴は直径0.16～0.88 mの概ね円形を呈する。柱間は梁行1.5～2.2 m、桁行0.6～3.0 mである。

97-1E SB835（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第117図、遺物図：第160図15）

調査区北東隅のI23 グリッドで検出した。梁行2(3)間、桁行3(4)間、身舎面積29.4 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 4.59° - E の東西棟である。柱穴は直径0.24～0.64 mの概ね円形を呈する。柱間は梁行1.0～1.7 m、桁行1.5～3.5 mである。柱穴c から土師器壺Bn が出土した。

97-1E SB840（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第117図、遺物図：なし）

調査区西部のI13 グリッドで検出したA列の建物である。梁行2(3)間、桁行4間、身舎面積24.4 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 5.68° - E の東西棟である。柱穴は直径0.2～0.4 mの概ね円形を呈する。柱穴m で柱痕が検出されており、直径0.08～0.16 mの円形である。柱間は梁行1.0～2.3 m、桁行1.3～2.0 mである。内部に柱穴n,o を用いた間仕切り状の施設が存在した可能性がある。柱穴b より土師器壺Bn、柱穴c より土師器皿C が出土した。

97-1E SB845（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第118図、遺物図：なし）

調査区西部のG13 グリッドで検出したC列の建物である。梁行1(2)間、桁行3(4)間、身舎面積17.9 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N - 8.3° - E の東西棟である。柱穴は直径0.28～0.4 mの概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行1.4～2.9 m、桁行1.2～2.4 mである。

97-1E SB850（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第118図、遺物図：なし）

調査区西部のF13で検出したB列の建物である。梁行2間、桁行4間、身舎面積15.2m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-7.89°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.2～0.44mの概ね円形を呈する。柱間は梁行1.0～1.5m、桁行1.2～4.7mで柱穴j-a間の柱穴はSK310・440により削平されている。

97-1E SB855（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第119図、遺物図：なし）

調査区西部のF12グリッドで検出したA列の建物である。梁行2間、桁行6間、身舎面積28.8m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-9.47°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.24～0.8mの概ね円形を呈する。柱間は梁行1.1～1.8m、桁行1.1～4.1mである。柱穴kから土師器坏Bが出土している。

97-1E SB860（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第120図、遺物図：なし）

調査区西部のK13グリッドで検出したC列の建物である。梁行1(2)間、桁行3間、身舎面積24.9m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-5.93°-Eの南北棟である。柱穴は直径0.16～0.44mの概ね円形を呈する。柱間は梁行1.2～2.9m、桁行1.9～4.0mである。遺物は柱穴fより土師器坏Aが出土したのみである。

97-1E SB865（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第120図、遺物図：なし）

調査区南西部のE13グリッドで検出したC列の建物である。梁行3間、桁行4間、身舎面積22.9m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-3.51°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.24～0.56mの概ね円形を呈する。柱間は梁行0.9～1.5m、桁行1.1～2.6mである。柱穴からはA期を中心とした遺物が出土した。

97-1E SB870（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第121図、遺物図：なし）

調査区南西部のE12グリッドで検出したB列の建物である。梁行2(3)間、桁行5間、身舎面積22.5m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-5.56°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.24～0.52mの概ね円形を呈する。柱間は梁行0.6～1.4m、桁行0.6～2.4mである。柱穴からはA期を中心とした遺物が出土した。

97-1E SB875（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第121図、遺物図：なし）

調査区南西部のE12グリッドで検出したB列の建物である。梁行3間、桁行5間、身舎面積19.7m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-6.87°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.2～0.48mの概ね円形を呈する。柱間は梁行0.4～1.3m、桁行1.1～1.9mである。柱穴からはA期を中心とした遺物が出土した。

97-1E SB880（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第122図、遺物図：なし）

調査区西部のG13グリッドで検出したB列の建物である。梁行1(2)間、桁行2間、身舎面積13.0m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-6.96°-Eの東西棟である。柱穴は直径0.16～0.48mの概ね円形を呈する。柱間は梁行0.9～2.8m、桁行1.9～2.8mである。遺物は出土していない。

97-1E SB885（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第122図、遺物図：なし）

調査区南西部隅のC13グリッドで検出したA列の建物である。梁行2間、桁行4(5)間、身舎面積16.5m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-6.3°-Eの南北棟である。柱穴a,h,i,j,k,lで柱痕が検出されており、直径0.06～0.18mの隅丸方形である。柱穴は直径0.2～0.6mの概ね円形を呈する。柱間は梁行0.9～1.8m、桁行0.8～2.1mである。柱穴dから土師器皿Cが出土した。

97-1E SB890（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第123図、遺物図：第160図16～17）

調査区南西部隅のB13グリッドで検出したC列の建物である。梁行2(3)間、桁行3間、身舎面積18.1m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-6.42°-Eの東西棟である。柱穴e,g,jで柱痕が検出されており、直径0.06～0.16mの隅丸方形である。柱穴は直径0.16～0.48mの概ね円形を呈する。柱間は梁行0.5～1.8m、桁行1.5～2.3mである。

97-1E SB895（【本文・表編】第31図・第18・19表／【図版編】遺構図：第123図、遺物図：なし）

調査区南西部隅のD13グリッドで検出したB列の建物である。梁行2(3)間、桁行3(5)間、身舎面積26.4m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-8.8°-Eの東西棟である。柱穴b,d,eで柱痕が検出されており、直径0.06～0.18mの隅丸方形である。柱穴は直径0.12～0.64mの概ね円形を呈する。柱穴1から柱痕が検出されており、

直径 0.2 m の円形である。柱間は梁行 0.5 ~ 2.1 m、桁行 0.8 ~ 3.0 m である。柱穴 f から土師器坏 A 小片が、柱穴 j から備前焼片が、柱穴 l から土師器坏 A が、柱穴 m から土師器坏 A、青花碗が出土した。

97-1E SB900（【本文・表編】第 31 図・第 18・19 表／【図版編】遺構図：第 124 図、遺物図：なし）

調査区南西部の D16 グリッドで検出した。2 面目として調査した遺構である。梁行 2 間、桁行 5 間、身舎面積 10.4 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 14.79° - E の東西棟である。直径 0.16 ~ 0.8 m の概ね円形を呈する。柱間は梁行 1.2 ~ 1.3 m、桁行 0.6 ~ 1.7 m である。A 期を中心とした時期の遺物が出土したが、建物主軸が近似する SB905 からは土師器坏 Bn が出土しており、B 期以降に位置づけられる。

97-1E SB905（【本文・表編】第 31 図・第 18・19 表／【図版編】遺構図：第 124 図、遺物図：なし）

調査区南西部の C15 グリッドで検出した。2 面目として調査した遺構である。梁行 1(2) 間、桁行 5(6) 間、身舎面積 10.6 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 11.72° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.24 ~ 0.6 m の概ね円形を呈する。柱間は梁行 0.9 ~ 2.4 m、桁行 0.4 ~ 1.1 m である。柱穴 l より土師器坏 Bn の小片が出土しており、B 期以降に位置づけられる。

井戸跡（SE）

南北道路 SF100 前面の掘立柱建物群の裏手に建物と同時存在したと考えられる井戸 5 基、調査区北東部付近で C ~ D 期の井戸 4 基、SX1600 底面で C 期の井戸 1 期、東側整地層除去後に A II 期頃の井戸 1 期を検出した。完掘したのは SE010 のみで、その他は、町 97-1 と同様に井筒の構造把握や土層図作成及び遺物回収を目的に調査終了直前に重機にて半截した。

97-1E SE005・075（【本文・表編】第 32 図・第 122 表／【図版編】遺構図：第 125 図、遺物図：第 161 図 1 ~ 15、第 162 図 1、第 202 図 1、第 203 図 1 ~ 2、第 216 図 1）

調査区中央東部の E16・F16 グリッドで検出した。第 125 図土層模式図に示すように SK195 → SE075 → SK190 → SE005 の順に形成されている。SE005 は調査記録に混乱があり、井戸枠と裏込部とで遺物を分けて取り上げたものの平面図との照合が難しく、SE005 自体が SE075 の井戸枠抜き取り痕である可能性がある。この場合、出土遺物は全て SE005 もしくは SE075 の最終埋没時期を示すこととなる。検出面での掘方は長径 4.0 m、短径 3.5 m、深さ 1.7 m までを掘削した。SE075 は SE005 によって大部分が削平されており、規模は不明である。

出土遺物は「明道元宝」、茶臼・石製容器の他、中国南部産陶器鉢 C、土師器皿 C・椀 C・耳皿 C が出土しており、D-1 ~ 2 期頃に廃絶したものと考えられる。

97-1E SE010（【本文・表編】第 32 図・第 122 表／【図版編】遺構図：第 126 図、遺物図：第 161 図 16 ~ 26、第 200 図 1、第 202 図 2 ~ 3、第 203 図 3、第 204 図 1、第 205 図 13 ~ 14、第 206 図 9、第 207 図 7、第 208 図 5 ~ 6、第 209 図 7、第 210 図 1 ~ 5）

調査区中央東部の C17 グリッドで検出した。D-1 期の井戸である SE530 を切る。今回の調査で唯一完掘調査した井戸で、遺構検出面での掘方は長径 3 m、短径 2.9、深さ 3.5 m の円形である。井戸枠は六角形石組構造をもつ。4 × 3.6 × 4 m 程の凝灰岩製の板石（第 209 図 7）を六角形に組み、遺構検出面より 6 段分を積む。板石内側が反るように「アール」をつけて整形されており、井戸枠の内径は 0.68 m の円形を意識した丁寧なつくりになっている。最下段は左右に割り込みをいれた四枚の板石を相互に噛ませながら石同士を組み、掘方底面直上に寝かせている。板石同士は粘土を用いて接着し、さらに石材同士の接着面に生じた隙間には小石を詰め丁寧に接着する。井戸水溜部の構造は明確ではないが、木片が多く出土したことから曲物であったと考えられる。

井戸枠内部は最下層から検出面まで石塔や大・小の川原石によって埋められていた。図に示すように標高 3.6 m 付近で四面仏が出土し、これを取り除くと標高 2.8 m 付近には無縫塔や宝筐印塔の台座、手水鉢状の石製品、火輪・地輪がまとまって出土した。これらを除去すると、標高 1.8 m 付近にあたる井戸枠最下段で 50 cm 四方の板石、地輪の順に投げ込まれていた。井戸枠内最下段付近では、備前焼甕の体部片が水溜部を覆うように出土した。水溜部からは 4 片の鉄器が出土した。2 点は五徳の一部であり（第 208 図 5）、もう 2 点は接合しないが

第20表 第97-1E次調査区 井戸跡 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SE005	E16・F16	D-1~2期			129
SE010	C17	D-1~2期			130
SE030	I16	D期			131
SE075	E16・F16	D-1期			129
SE085	K24・K25	D-1期	×		131
SE090	K22	D-1期			132
SE205	I19・I20	C期	銅銭のみ		132
SE225	G16・G17	C期			133
SE530	C17	D-1期	×		133
SE2020	D22・D23	A II-3~ A III-1期			134
SE2025	K19・K20	A III期	×		135
SE2100	C21・D21	C-1期			134



第32図 第97-1E次調査区 SE掲載位置図(1/200)

おそらく同一個体の刀子状の鉄製品（第 208 図 6）である。これらの遺物に呪術的な意味合いがあるか断定できないが、井戸鎮めにおける祭祀的な遺物の可能性がある。出土遺物から D-1 期に形成、D-2 期頃に廃絶したと考えられる。

97-1E SE030（【本文・表編】第 32 図・第 122 表／【図版編】遺構図：第 127 図、遺物図：第 161 図 27～29、第 204 図 4）

調査区中央北東部の I16 グリッドで検出した。検出面での掘方は長径 3.9 m、短径 3.7 m、深さ 1.5 m の不整橙円形である。出土遺物は「SK030」と「褐色土」「暗灰褐色土」「暗灰褐色砂質土」から取り上げたが、全て井戸枠抜き取り後の埋め戻し土である。検出面より 1 m 程下で大型礎石を検出した（第 204 図 4）。礎石には直径 0.35 m 程の円形のアタリ痕があり、大型の礎石建物の礎石と考えられる。円形で大型の柱であることから、寺院に用いられた礎石と推測される。各層で厚手の土師器皿 C が出土しており、D 期に井戸枠内を抜き取り、大型礎石と共に埋め戻したと考えられる。

97-1E SE085（【本文・表編】第 32 図・第 123 表／【図版編】遺構図：第 127 図、遺物図：なし）

調査区北東部隅の K24・K25 グリッドで検出した。検出面での掘方は長径 $3.2+\alpha$ m、短径 $0.9+\alpha$ m、深さ 1.25 m の円形であり、大部分が調査区外にのびる。井筒は土層観察より直径 0.6 m で、木製の井戸枠と考えられる。遺物は出土していないが、D-1 期の SE090 と位置が揃う点や 1 面目から掘り込まれることから、D-1 期頃の遺構と考えられる。

97-1E SE090（【本文・表編】第 32 図・第 123 表／【図版編】遺構図：第 128 図、遺物図：第 162 図 2～7）

調査区北東部隅の K22 グリッドで検出した。検出面での掘方は長径 3.7 m、短径 $1.3+\alpha$ m、深さ 1.25 m であり、大部分が調査区外にのびる。井戸枠は確認できない。裏込部分を掘削したと考えられる。遺物は白磁把手が出土した。その他、厚手の土師器皿 C・小皿 C、白磁皿 E-2 が出土しており、D-1 期頃に廃絶したと考えられる。

97-1E SE205（【本文・表編】第 32 図・第 124 表／【図版編】遺構図：第 128 図、遺物図：なし）

調査区中央北部の I19・I20 グリッドで検出した。検出面での掘方は長径 4.75 m、短径 3.45 m、深さ $1.6+\alpha$ m の不整橙円形である。中央やや東よりに直径約 0.9 m の橙円形を呈する井筒部が確認された。出土遺物は「SE205」と「褐色土」「暗灰黄褐色土」から取り上げたが、全て井戸裏込部からの出土遺物である。土師器皿 C が出土しており、C 期に廃絶したものと考えられる。

97-1E SE225（【本文・表編】第 32 図・第 124 表／【図版編】遺構図：第 129 図、遺物図：第 162 図 8～23）

調査区中央部の G16・G17 グリッドで検出した。検出面での掘方は長径 6.3 m、短径 5.45 m、深さ $2.45+\alpha$ m の不整円形である。87-5 次調査で 87-5SE010 として報告した遺構である。1～9 層が井戸枠抜き取り後の埋戻土、10～22 層が裏込土と考えられる。遺物は A～B 期のものが主体であるが、「灰褐色土」からは土師器小皿 C が出土しており、C 期に廃絶したものと考えられる。

97-1E SE530（【本文・表編】第 32 図・第 126 表／【図版編】遺構図：第 129 図、遺物図：なし）

調査区中央南部の C17 グリッドで検出した。検出面での掘方は長径 $3.4+\alpha$ m、短径 3.2 m、深さ 1.9 m の円形である。中央やや南よりに直径約 1.3 m の円形を呈する井筒部が確認された。出土遺物は土師器皿 C・燭台 C、青花碗 E、漳州窯系青花皿 C が出土しており、D-1 期に廃絶したと考えられる。

97-1E SE2020（【本文・表編】第 32 図・第 128 表／【図版編】遺構図：第 130 図、遺物図：第 162 図 24～28）

調査区南東部の D22・D23 グリッドで検出した。整地層除去後の 2 面目の遺構である。井筒部は木枠が遺存しており桶組の可能性がある。検出面での掘方は長径 4.9 m、短径 4.1 m、深さ 2.1 m の不整円形である。中央やや東よりに直径約 1 m の円形を呈する井筒部が確認された。出土遺物は「黒褐色土（井筒内）」「灰色ブロック土（裏込）」「ブロック土」から取り上げた。「SE2020」1 層、2 層～3 層、4 層～5 層に対応する。「灰色ブロック土」からは土師器壺 A・小皿 A、土師質土器鍋 B1 が出土しており、A II -3 期～A III -1 期に廃絶したものと考えられる。

97-1E SE2025（【本文・表編】第 32 図・第 128 表／【図版編】遺構図：第 131 図、遺物図：なし）

調査区中央北部の K19・K20 グリッドで検出した。検出面での掘方は直径 3.75 m、短径 $3.2+\alpha$ m、深さ

1.75+ α mの不整橢円形である。中央より南東に 1.1 mの円形を呈する井筒部が確認された。井筒部は木枠であったと考えられる。出土遺物は土師器小皿 A、龍泉窯系青磁碗 D が出土し、AⅢ期頃に廃絶したと考えられる。

97-1E SE2100（【本文・表編】第 32 図・第 129 表／【図版編】遺構図：第 130 図、遺物図：第 163 図 1～21、第 203 図 4、第 205 図 12、第 206 図 10）

調査区南東部の C21・D21 グリッドで検出した。D-1 期の SX1600 及び SX2050 を除去後に確認した。検出面での掘方は長径 2.9 m、短径 2.9 m、深さ 1.9+ α m の不整円形である。埋土は単層である。井筒は確認できないが完掘していない為、素掘り井戸か掘り返し後の井戸かの判断はできなかった。火輪・水輪、石製容器が出土した。土師器壺 Bn・薄手の皿 C が出土しており、C-1 期に廃絶したと考えられる。

土坑（SK）

本調査区は今回の調査区で最も面積が大きいことから、150 基を超える土坑を検出した。小型の方形土坑や円形土坑、複数の切り合い関係をもつ大型廃棄土坑などがその内訳である。大部分が遺構全体の最盛期ともいえる D 期に帰属するが、大型廃棄土坑の形成は B 期より始まっている。また、小型の方形土坑の中には A 期まで遡る可能性をもつものもあるが、出土遺物が少なく A 期と確定できる遺構は少ない。

97-1E SK020（【本文・表編】第 33 図・第 122 表／【図版編】遺構図：第 132 図、第 133 図、遺物図：第 164 図 1～19、第 165 図 20～39、第 210 図 6～47、第 211 図 48～69、第 212 図 70～71、第 213 図 72、第 215 図 1～33、第 216 図 1～2）

調査区西南の B15 グリッドで検出した。長軸 1.6 m、短軸 1.5 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。炭化物や焼土ブロックを多く含む火災処理土坑である。遺構検出時点で多量の焼土や炭とともに、釘などの遺物が確認されていた。遺構最下層には炭層が堆積しており、この層中に鉄製薬研や薬研車輪、兜、分銅、天秤などの主要な金属製品が出土した。遺物は遺構北側に偏って分布しており図に示すように西部と東部で遺物の組成が異なっている。西側は上述した炭層の上面に炭化物と、これに伴うと考えられる多量の小型の釘が出土する。炭化材に打ち込まれた状態のものもあり、箱などの釘を使った木製品が炭化した可能性を考えている。これより上位の層は焼土ブロックを多量に含んだ埋土である。土層の堆積と遺物の出土状況から北側から遺物を投棄し、その後南側から埋め戻しを行っていたと考えられる。最下層は炭層と炭化物層が顕著であり、部分的に木製品の形が維持されている。土坑掘削後、土坑を掘削した土で埋め戻していたと考えられる。第 132 図 7 層は焼土そのものである。埋土中には焼土や炭を多量に含むことから、土坑掘削当時、周囲にはまだ炭化した遺物が散在する状況であったと解釈される。最終埋没時には人頭大の石を投げ込み、焼土の少ない土（土坑掘削最初期の土）で完全に埋め戻されている。

遺物は第 133 図で分類するように、土師器耳皿 C を含む土器、茶道具類や茶碗類、壺、擂鉢、砥石の他、薬研のセット、鉈や鑿などの工具類、兜・小札といった武具類、鍵や金属素材と思われるもの、秤類（分銅 10 点が秤内に入った状態で出土）、木製容器に関連する八双金物や飾金具、釘類が出土した。中世大友府内町跡の過去 110 地点以上の調査のなかでも、一遺構からこれほど多種多様な遺物が出土した事例はなく、また兜一両や鉄製薬研、ほぼ完存する天秤皿など出土事例のない遺物も含んでいる点で特異な遺構である。さらに鉢類として報告した 72～75 も見慣れない遺物で、75 は厚さ 3～6 cm と非常に肉厚の木製品に打たれた巨大な鉢であることから、廃棄された木製品もまた類例の少ないものであったと推測される。また、鉄釘は図示したものも含めて小型のものが 39 本、中型のものが 113 本、大型のものが 11 本の計 163 本が出土しており、これ自体も類例のない出土量である。兜は天辺の座金具や前立などの付属物（金銅製か？）が全て外されていることから、再利用できそうなものは取り去っている可能性もある。厚手の土師器皿 C やメナムノイ窯系陶器鉢、朝鮮陶器碗、備前焼擂鉢（近世 1 期）からなる組成より D-1 期の一括資料であり、天正 14 年（1586）の島津府内侵攻の兵火を起因とする火災処理土坑と考えるのが適切な所であろう。「寺小路町」の一角の建物（群）に帰属する遺物群であり、町の様相の一端を具体的に示す一級資料である。

97-1E SK025（【本文・表編】第33図・第122表／【図版編】遺構図：第134図、遺物図：第166図1）

調査区西南のC15グリッドで検出した。長軸3.45m、短軸3.1mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.2mである。埋土は3層に分層しており、1層は非常に固く締まった灰色土、2層は暗灰色土、3層は暗茶灰色土である。床面からは南北にピットを2基、中央に浅い土坑を検出した。出土遺物は瀬戸・美濃卸皿が出土、その他、土師器壺Bが出土しておりB期に位置づけられる。

97-1E SK040（【本文・表編】第33図・第122表／【図版編】遺構図：第134図、遺物図：第166図4～23、第216図1）

調査区中央西側のF21グリッドで検出した。SX1600を切る。長軸2.9m、短軸1.7mの不整橢円形で、検出面からの最大深度は0.4mである。埋土は3層に分層しており、1層は焼土塊を多量に含む暗茶色土、2層は焼土粒を少量含む灰黒色土、3層は炭片を含む暗灰色土である。1層より1/3程が遺存する和銅鏡片が出土した。厚手の土師器皿Cが出土しており、D-1期に位置づけられる。

97-1E SK050（【本文・表編】第33図・第122表／【図版編】遺構図：第134図、遺物図：第166図25～28、第214図1、第216図2）

調査区西南のD13グリッドで検出した。長軸1.8m、短軸1.65mの方形で検出面からの最大深度は0.45mである。埋土は2層に分層したが、埋土のほとんどが焼土を多く含む暗灰色土の単層である。床面付近からは五徳が出土した他、銅製品鍵、完存する青花碗E群が出土した。その他、土師器皿C、土師質土器鍋B類が出土しており、D-1期に位置づけられる。

97-1E SK060（【本文・表編】第33図・第122表／【図版編】遺構図：第134図、遺物図：第167図1～12）

調査区中央西側のF15・F16グリッドで検出した。長軸1.45m、短軸1.35mの橢円形で検出面からの最大深度は0.35mである。被熱を受けた円礫（大礫）が多数出土した。遺物は礫とともに一括で出土した。厚手の土師器皿C・小皿C、備前焼鉢などが出土しており、D-1期に位置づけられる。

97-1E SK070（【本文・表編】第33図・第122表／【図版編】遺構図：第134図、遺物図：第167図16～21、第216図3）

調査区北部東端のI25グリッドで検出した。SK190を切る長軸2m、短軸1.1mの不整橢円形で検出面からの最大深度は0.15mである。埋土は3層に分層しており、1層は褐色土、2層は明黒褐色土、3層は灰黄褐色土である。「皇宋通宝」が出土した。出土遺物は「褐色土」と「明黒褐色土」から取り上げた。それぞれ1層、2～3層に対応する。「褐色土」から土師器壺A、大内A式土師器皿、龍泉窯系青磁碗III類が出土しており、AIII-2期に位置づけられる。

97-1E SK055（【本文・表編】第33図・第122表／【図版編】遺構図：第135図、遺物図：なし）

調査区南のC16グリッドで検出した。長軸4.8m、短軸2.5mで検出面からの最大深度は0.2mと浅い。埋土は暗褐色土の単層で、床面には灰や炭が薄く堆積する。遺物は出土していない。

97-1E SK072（【本文・表編】第33図・第122表／【図版編】遺構図：第135図、遺物図：第168図1～3）

調査区北のJ19・J20グリッドで検出した。長軸1.1m、短軸1.1mの方形で、検出面からの最大深度は0.35mである。埋土は4層に分層しており、1層は暗茶灰色土、2層は暗灰色粘質土、3層は暗黄褐色土、4層は暗黄褐色砂質土である。ブロック土を多く含んでおり、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は平瓦、青花碗B群のほか、漳州窯系青花壺片、中国南部産陶器鉢、土師器皿Cなどが出土しており、D-1期頃に位置づけられる。

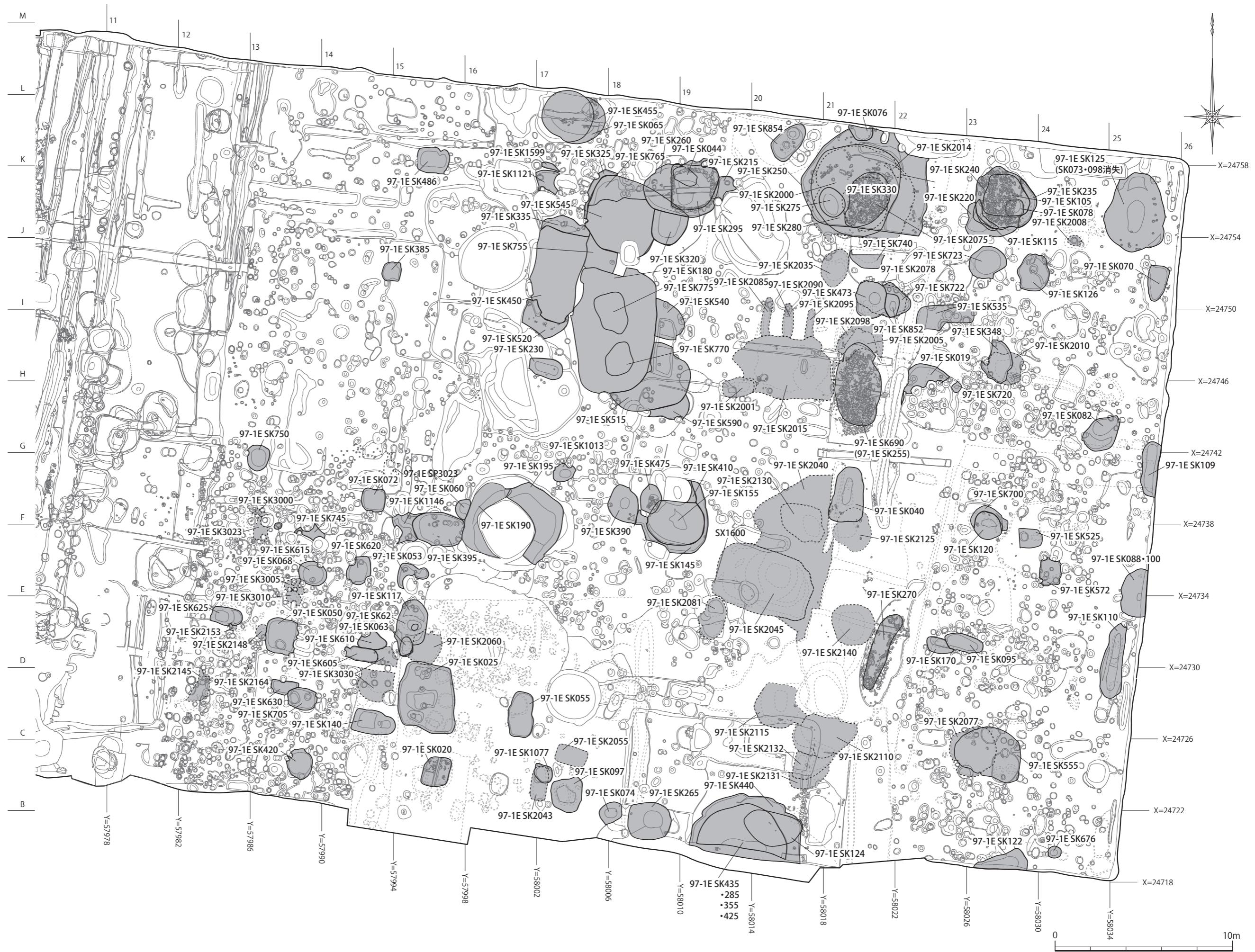
97-1E SK073（【本文・表編】第33図・第122表／【図版編】遺構図：第135図、遺物図：第168図4～5、第216図【銅製品】3）

調査区北東端のJ25・I25グリッドで検出した。長軸4.35m、短軸3.2mの不整橢円形で検出面からの最大深度は0.15mである。SK098・125は同一地点で掘り返されながら形成される一連の廃棄土坑で、SK073は最後に形成された土坑である。埋土は灰色土と褐色土の混合土の単層で、検出面に礫（円礫）が多量に出土した。天秤皿が出土している。床面でSK098を検出した。D期に位置づけられる。

第21表 第97-E次調査区 土坑 報告書遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SK019	G22	D期	×		105・106
SK020	B15	D-1期			136・137
SK025	C15	B期			138
SK029	I18	B-2期		×	153
SK033	E15	B期~	×		所在不明
SK039	E17・F17	C期	×		所在不明
SK040	F21	D-1期			138
SK044	J19	C-2~D-1期	×		105・106
SK050	D13	D-1期			138
SK053	E15	AIII-2期	×		105・106
SK055	C16	不明		×	139
SK060	F16・F15	D-1期			138
SK062	D15	A期		×	140
SK063	D15	A期	×		105・106
SK065	K17	C期	×		105・106
SK068	E13	A期	×		105・106
SK070	I25	AIII-2期			138
SK072	J19・J20	D-1期			139
SK073	J25・I25	D期			139
SK074	A18・B18	C-1期	×	銅錢のみ	105・106
SK076	K21	B期	×		105・106
SK078	J23	D期	×		105・106
SK082	G24	AIII-2期			139
SK088	E25・D25	C-2~D-1期			140
SK095	D22・D23	D-1期			139
SK097	B17	D-1期		×	140
SK098	J25	B期			139
SK100	E25	C-2~D-1期			140
SK105	J23	D-1期			146
SK109	F25	AIII-2~3期			140
SK110	C25・D25	AIII-2期			140
SK115	J23	C-2期			146
SK117	D15	AIII × C2期		×	140
SK120	E23・F23	AIII-2期			141
SK122	A23	A期		×	142
SK124	A20	D-1期		×	141
SK125	J25	B期			142
SK126	J23	B期~		×	141
SK140	C14	C期		銅錢のみ	141
SK145	E18	D-1期			143
SK155	E18・F18	D-1期			143
SK170	D22	A期~		×	141
SK180	H17~I17 H18~I18	D-1期			145
SK190	E16	C期			105・106
SK195	E16	B期	×		105・106
SK215	J19	A期	×		105・106
SK220	J23	B期	×		105・106
SK230	H17	D期		×	141
SK235	J23	不明		×	146
SK240	J23	C-1期			147
SK250	J21	C期	×		105・106
SK255	G21・H21	D期			148
SK260	J18・J19	D期	×		149
SK265	A18	D-2期			148
SK270	C21・D21	C期	×		105・106
SK275	J20	C期	×	銅錢のみ	105・106
SK280	J21	D期	×		105・106
SK285	A19・A20	D-1~2期		×	151
SK295	J19	D期			149
SK320	I18・J18	C-2~ D-1期		銅錢のみ	148
SK325	J17・J18	C-2期	×		105・106
SK330	J21	D-1~2期			148
SK335	I17・J17	C-2~D期		×	150
SK348	H23	AIII-1期	×		105・106
SK355	A19・A20	D-1~2期		×	151
SK385	I15	C期	×		105・106
SK390	F18	B期			143
SK395	E15	C期頃か			150
SK410	F18	C-1期	×		143
SK420	B13	AIII-2期		×	150
SK425	A19・A20	D-1~2期		×	151
SK435	B19・A19	D-1期	×		151
SK440	A20	C-2~D-1期			151
SK450	I17	C-1期			150
SK455	K7	D-1期	×		105・106
SK473	I21	D-1期		×	150

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SK475	F18	C期			143
SK486	K15	D期		×	152
SK515	H18・G18	B期			152
SK520	H16・H17	B-2期			152
SK525	E23	A期	×		105・106
SK535	H22	AIII-1期			152
SK540	H18・I18	B期~		×	153
SK545	J18・I18	C-2~D-1期			153
SK555	B23・C23	C期	×		105・106
SK570	D22~F22	AIII-1期			105・106
SK572	E24	A期	×		105・106
SK590	G18	A期		×	153
SK605	D14	C~D期			153
SK610	D14	C~D期			153
SK615	E13	A期	×		105・106
SK620	E14	AIII-1期	×		105・106
SK625	D12	AIII-1期			153
SK630	C13	C-1期			153
SK676	A24	B期	×		105・106
SK690	G21・H21	D-1期			148
SK700	F23	C期	×		105・106
SK705	C13	C期	×		105・106
SK720	G22	A期	×		105・106
SK722	H21・I21	D-1期		×	150
SK723	I23	AIII期	×		105・106
SK740	I21	不明	×		105・106
SK745	F13	B-C期~	×		105・106
SK750	G13	AIII-1~2期			154
SK755	I17・I18	C-2~D-1期	×		105・106
SK765	J18	D-1期	×		105・106
SK770	H17・H18	D-1期			145
SK775	I17・I18	C-2期			145
SK852	I21	D-1期			150
SK854	K20	A期~	×		105・106
SK1013	F17	B期~	×		105・106
SK1077	B17	C-2期	×		105・106
SK1121	不明	D期	×		105・106
SK1146	E14・E15	不明			150
SK1599	J17	C期	×		105・106
SK2000	J21	D-1期			154
SK2001	G19	D-1期~		×	155
SK2005	H21	C-1期			155
SK2008	J24	A期~	×		105・106
SK2010	H23	AII-3期			155
SK2014	J22	不明	×	×	105・106
SK2015	H20	B-2~C-1期			156
SK2035	I21	B-2期			156
SK2040	D20~F20	D-1期	×		105・106
SK2043	B17	A期~		×	156
SK2045	E19・E20	D-1期			157
SK2055	B17	C期~			157
SK2060	D15	AII期	×		105・106
SK2075	J21	C期	×		105・106
SK2077	B22	A期	×		105・106
SK2078	H21	9C~			157
SK2081	D19	A期~		×	157
SK2085	H20	A期~		×	159
SK2090	H20	A期~		×	159
SK2095	H20	A期~		×	159
SK2098	H21	A期~		×	155
SK2110	B20	B-2期~	×		105・106
SK2115	C21・D21	B-2~C-1期	×		158
SK2125	K19・K20	C-1期	×		105・106
SK2131	B20	B期			159
SK2132	B20	B期			159
SK2140	D21	B-2期	×		158
SK2145	C12	AIII期			159
SK2148	D12	A期	×		105・106
SK2153	D12	A期	×		105・106
SK2164	D12	A期	×		105・106
SK2173	C12	A期	×		105・106
SK3000	E13	AIII-2期			159
SK3005	E13	AIII-1~2期			159
SK3010	E13	AIII-1~2期			159
SK3023	E13	AIII-2期~		×	159
SK3030	C14・D14	B期			159



第33図 第97-1E次調査区 SK掲載位置図(1/200)

97-1E SK098（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第135図、遺物図：第169図9～13、第214図2、第217図8）

調査区北東端のJ25 グリッドで検出した。SK073 除去後に確認した遺構であり、長軸 1.9 m、短軸 1.65 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.65 m である。埋土は灰黄褐色砂質土の単層で、大礫を多量に含む。「元符通宝」が出土した他、土師器皿Bn・小皿Bn、鉄製品が出土しており、B期に位置づけられる。

97-1E SK082（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第135図、遺物図：なし）

調査区中央東端のG24 グリッドで検出した。長軸 2.25 m、短軸 1.45 m の不整橢円形で、検出面からの最大深度は 0.25 m である。埋土は褐色土の単層である。土師器坏A・小皿AⅡ・大内A式土師器皿が出土しており、AⅢ-2期に位置づけられる。

97-1E SK095（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第135図、遺物図：第169図3～8）

調査区東側のD22・D23 グリッドで検出した。長軸 2.1 m、短軸 0.85 m の橢円形で、検出面からの最大深度は 0.45 m である。埋土は、上層は暗褐色土、下層は暗黄褐色土である。上層～中層付近に円礫（大礫）が投げ込まれた状態で出土しており、東側の中層付近では土師器皿Cが出土している。遺物は上下層とも一括して取り上げた。厚手の土師器皿C・小皿Cが出土しており、D-1期に位置づけられる。

97-1E SK088・100（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第136図、遺物図：第169図1～2・第206図12、第208図2）

調査区中央東端のE25・D25 グリッドで検出した。検出時にSK088がSK100を切る状況で検出した。壁面土層5～10層がSK088に、11～14層がSK100に対応する。SK088はSK100を掘り返した土坑と考えられる。第136図はSK100完掘後のものである。長軸 2.6 m、短軸 1.05+α m で調査区外に展開している。検出面からの最大深度は 0.95 m である。SK088からは土師器坏A・小皿AⅠが出土しており A期の組成を示すが、SK100からは土師器皿C・坏Bnが出土しており、SK088・100ともにC-2～D-1期に位置づけられる。SK100は床面直上より水輪や相輪から火焰部を切り落とした石塔部材が出土した。他の遺構でもみられる円形の石塔部材を投棄した廃棄土坑と考えられる。

97-1E SK097（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第136図、遺物図：なし）

調査区中央南端のB17 グリッドで検出した。長軸 2.0 m、短軸 1.5 m の不整形で検出面からの最大深度は 0.6 m である。埋土には多量の礫と焼土を含む。各層より土壁とともに多くの遺物が出土した。備前焼大甕（近世1期）の破片や厚手の土師器皿Cが出土しており、D-1期に位置づけられる。

97-1E SK109（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第136図、遺物図：第170図2）

調査区中央東端のF25 グリッドで検出した。長軸 3.0 m、短軸 0.85 m の橢円形で、半分は調査区外に展開している。検出面からの最大深度は 0.45 m である。遺物は土師器小皿AⅡ・大内A式土師器皿の他、蓮珠文軒平瓦が出土した。AⅢ-2～AⅢ-3期に位置づけられる。

97-1E SK110（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第136図、遺物図：第170図3～10）

調査区中央東端のC25・D25 グリッドで検出した。長軸 4.0 m、短軸 0.85 m の溝状遺構で検出面からの最大深度は 0.55 m である。上層には円礫（大礫）をまばらに含む。床面の北側付近には円礫（大礫）が3段重なって出土した。遺物は「灰黄褐色土」から中国陶器天目碗・壺が出土した。その他、吉備系土師器椀・大内A式土師器皿が出土しており AⅢ-2期頃に位置づけられる。

97-1E SK117（062）（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第136図、遺物図：なし）

調査区東側のD15 グリッドで検出した。長軸 2.4 m、短軸 1.6 m の隅丸方形状の遺構である。検出面からの最大深度は 0.35 m である。遺物は出土していない。

97-1E SK120（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第137図、遺物図：第170図17～33）

調査区中央東部のE23・F23 グリッドで検出した。長軸 1.45 m、短軸 1.35 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.6 m である。遺構壁面に多くの土師器類が出土しており、一部は AⅡ-2期の整地層中の遺物も含んで

いる可能性が高い。白磁碗B群、龍泉窯系青磁碗B4IV類、京都産土師器皿、その他、土師器坏A・小皿A・大内A式土師器皿が出土した。AIII-2期に位置づけられる。

97-1E SK124（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第137図、遺物図：なし）

調査区中央南端のA20グリッドで検出した。大型廃棄土坑でSK285・355・425・435・440の上面に形成される。長軸3.3m、短軸1.75mの楕円形で検出面からの最大深度は0.2mである。埋土は単層で、厚手の土師器皿Cが多く出土した他、青花碗C群など多くの遺物が出土した。D-1期に位置づけられる。

97-1E SK126（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第137図、遺物図：なし）

調査区北東部のI23グリッドで検出した。長軸2.15m、短軸1.7mの不整円形で検出面からの最大深度は0.1mである。埋土は「暗褐色土」の単層で、埋土上位より礫が多量に出土している。土師器坏A・坏B・大内A式土師器皿・燭台が出土しており、B期に位置づけられる。

97-1E SK140（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第137図、遺物図：第217図9）

調査区南西部のC14グリッドで検出した。長軸2.2m、短軸1.15mの方形に近い土坑で、検出面からの最大深度は1.05mである。掘立柱建物のSB365の背面に位置する。出土遺物は「SK140」と「茶褐色土」「褐色土」「黄褐色土」から取り上げた。土色は1層、2層、3層に対応する。土師器坏A・坏B・皿C・大内A式土師器皿、龍泉窯系青磁碗Dの他、「洪武通宝」が出土している。C期に位置づけられる。

97-1E SK170（【本文・表編】第33図・第124表／【図版編】遺構図：第137図、遺物図：なし）

調査区東南部のD22グリッドで検出した。長軸1.55m、短軸0.85mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.3mである。埋土は2層に分層しており、1層は暗灰黄色土、2層は黒褐色土である。遺物は出土していない。

97-1E SK230（【本文・表編】第33図・第124表／【図版編】遺構図：第137図、遺物図：なし）

調査区中央東側のH17グリッドで検出した。長軸1.7m、短軸1.3mの不整方形で検出面からの最大深度は0.75mである。埋土は褐色土の単層である。土師器坏A・椀C、白磁碗V又はVII類が出土しており、D期に位置づけられる。

97-1E SK145・155・390・410・475（【図版編】遺構図：第139図）

調査区中央のE18グリッドで検出した土坑群である。遺構重複図に示すように、円形の大型土坑SK155にSK145が切られた状態で検出し、SK145除去後、SK390・410・475を確認した。

97-1E SK145（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第139図、遺物図：第171図14～27）

調査区中央のE18グリッドで検出した。SK155に切られる。長軸4.55m、短軸4.05+αmの不整方形で検出面からの最大深度は0.2mと浅い。やや厚手の土師器皿Cや朝鮮陶器碗、瓦質土器把手付鍋などが出土した。D-1期に位置づけられる。

97-1E SK155（【本文・表編】第33図・第124表／【図版編】遺構図：第139図、遺物図：第172図1～11）

調査区中央のE18・F18グリッドで検出した。SK145を切る。長軸3.1m、短軸2.8mの不整円形で検出面からの最大深度は1.1mの断面が擂鉢状になる遺構である。最下層には礫が多く含む。遺物は厚手の土師器皿Cが主体であり、備前焼擂鉢（近世1期）も出土する。D-1期に位置づけられる。

97-1E SK390（【本文・表編】第33図・第125表／【図版編】遺構図：第139図、遺物図：第178図12）

調査区中央のF18グリッドで検出した。SK145に切られる。長軸1.95m、短軸1.75mの不整円形で、検出面からの最大深度は0.85mである。ブロック土とともに円礫が多く出土した。遺物は最下層の13層から鬼瓦が出土した他、土師器坏A・坏B、青花皿Bが出土しており、B期に位置づけられる。

97-1E SK410・475（【本文・表編】第33図・第125・126表／【図版編】遺構図：第139図、遺物図：第179図10、11）

調査区中央のF18グリッドで検出した。ともにSK145・155に切られる。SK410は長軸1.65m、短軸1.56mの不整円形で、検出面からの最大深度は0.1mである。SK475は長軸1.4m、短軸1.0m、深さ0.6mを測る。共にC期頃に位置づけられる。

97-1E SK125（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第138図、遺物図：第170図34～39、第171図40～42、1～13、第200図3～6、第216図4）

調査区北東部のJ25 グリッドで検出した。SK073・098 に切られる大型土坑である。掘削後の土層観察より、SK073・098 を含む複数回の掘直しが行われたと思われる。長軸 4.2 m、短軸 3.1 m の楕円形で、検出面からの最大深度は 1.55 m である。第138図に示すように SK125 は「暗灰黄褐色土砂質土」「暗灰色砂質土」「黒褐色砂質土」で、それぞれが掘り返し後の堆積層である。遺物は土師器坏 Bn・耳皿 Bn が出土しており、B期に位置づけられる。SK073・098・125 は B期に形成され、4回以上の掘り返しを行いながら最終的に D-1期の SK073 によって完全に埋め戻されている。

なお、完掘後、壁面中に平面「コ」字型に分布する直径 0.05～0.1 m ほどの小型のピット列を確認した。ピットの性格については第VI章にて検討するが、土坑に伴う杭の痕跡と考えられる。

97-1E SK122（【本文・表編】第33図・第123表／【図版編】遺構図：第138図、遺物図：なし）

調査区南端のA23 グリッドで検出した。長軸 2.75 m、短軸 0.8+α m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.45 m である。半分は調査区外に展開している。土師器小皿 A I、吉備系土師器碗片が出土した。A期頃に位置づけられる。

■中央部土坑群（SK450・330・520・510・180（770・775）他）について（【図版編】遺構図：第140図）

土坑は小型のものや方形のものが南北道路前面のピット集中部やその裏手の地点に分布する。中央部土坑群とはこのさらに裏側に相当する調査区中央部付近（SK180付近）で確認した大型廃棄土坑密集地点をさす。第140図に示すように、隅丸方形や楕円形の10基以上の遺構が複雑に重複しながら形成されている。調査区北東部の連続土坑群 SK115 や SK125 のように、同一地点での位置を殆ど変えずに形成される土坑とは異なり、97-1 北西部の土坑群のように、同一地点において前後左右に位置を変えながら土坑が形成される。B期の SK450・520 を最古に SK180・295、SE030 などがこれらの土坑を切って D-1期まで連続して形成される。

中央土坑群付近から北側にかけては、87-12・13 として重複ないしは近接した位置を調査している。87-12SX010 は 97-1ESK295 に類似する方形石組土坑（97-1SK200）である他、87-12SX015・030 は複数の土坑が掘り返しを繰り返しながら形成された大型土坑（97-1ESK065・455）である。どちらも 87 次の調査報告書に個別図を掲載している（大分市教育委員会 2010p15）。また、87-13SE025（030）とした D期の井戸跡を確認しており、本調査区北端からさらに 5～8 m までは中央土坑群周囲と同様の景観が展開している。

97-1E SK180（【本文・表編】第33図・第124表／【図版編】遺構図：第141図、遺物図：第172図13～41、第173図42～50、第200図7～9、第203図6、第205図2、第207図8、第214図3～4、第217図10）

調査区中央北部のH17・H18・I17・I18 グリッドで検出した。SK770 及び SK775 を切る。長軸 5.3 m、短軸 3.35 m の隅丸方形で、検出面からの最大深度は 0.35 m である。大量の焼土と炭化物及び少量の円礫が堆積する。調査当初は SK770・775 含めて一つの大型遺構として半截し掘り下げていたが、途中で下位に SK770・775 の存在を確認したため、別遺構としてそれぞれ調査した。したがって、遺物中には SK770・775 の遺物を一部含む。SK770・775 とは不整合面を持たないことから、大型廃棄土坑 SK770・775 の埋没後に生じたくぼみに火災処理層を充填したような遺構である。小刀・板付鉄製品のほか、朝鮮陶器碗や彫三島瓶などを含む土器・陶磁器類、壁土、石製容器など多様な遺物が出土した。厚手の土師器皿 C・碗 C が出土しており、D-1期に位置づけられる。なお、SK180 出土遺物は 97-1SD390 出土遺物と接合する。

97-1E SK770（【本文・表編】第33図・第127表／【図版編】遺構図：第141図、遺物図：第184図1～15、第185図16～18、1～15、第201図1～3、第206図1～2、第207図9、第214図10～12、第216図6）

調査区中央北部のH17・H18 グリッドで検出した。SK775 を切り、SK180 に切られている。長軸 3.45 m、短軸 3.5 m の不整楕円形で、検出面からの最大深度は 1.15 m である。焼土層や大型の礫、石製品で埋められていた他、北側は遺構の北側壁面にそって拳大の小型の石を積んでいるような箇所があった。出土遺物は「礫層」「礫層2」から取り上げた。地輪や火輪、一辺 1.5 cm の方形のアタリ痕をもつ礎石（第204図5）が出土した他、中

国陶器瓶、厚手の土師器皿 C・椀 C が出土しており D-1 期に位置づけられる。

97-1E SK775（【本文・表編】第 33 図・第 127 表／【図版編】遺構図：第 141 図、遺物図：第 185 図 16～34、第 186 図 35～43、第 202 図 5、第 205 図 11）

調査区中央北部の I17・I18 グリッドで検出した。SK180 及び SK770 に切られている。長軸 2.6+α m、短軸 1.6 m の不整橢円形で検出面からの最大深度は 1.15 m である。SK770 とは異なり礫を殆ど含まず、下位には砂礫を多く含む層が、上位にはブロック土を多く含む層が堆積する。遺物は土師器椀 C を含まず備前焼擂鉢（中世 6 期）が出土しており、SK770 より一時期古い C-2 期に位置づけられる。

97-1E SK105（【本文・表編】第 33 図・第 123 表／【図版編】遺構図：第 142 図、遺物図：第 169 図 17～22、第 170 図 1、第 203 図 5、第 205 図 15）

調査区北東部の J23 グリッドで検出した。SK073・098・125 と同様に、複数の掘り返しによって形成された土坑の一つである。長軸 2.2 m、短軸 2.05 m の不整方形で、検出面からの最大深度は 0.55 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は暗黒褐色土、2 層は暗灰黄褐色土、3 層は淡黒褐色土である。遺物は、土層ベルト 1 層を「暗黒褐色土」、1～3 層全体を「黒褐色土」で取り上げた。火輪、石製容器が出土した。遺物は「暗黒褐色土」から完形に近い軒平瓦や石皿が出土した他、厚手の土師器皿 C が出土した。D-1 期に位置づけられる。

97-1E SK115（【本文・表編】第 33 図・第 123 表／【図版編】遺構図：第 142 図、遺物図：第 170 図 11～16、第 205 図 1）

調査区北東部の J23 グリッドで検出した。SK105 に切られている。長軸 2.85 m、短軸 1.65 m で、検出面からの最大深度は 0.25 m である。埋土は中礫（円礫）をまばらに含む暗灰色砂質土の単層である。遺物はほぼ完形の瓦質土器羽釜 B や空風輪が出土した他、土師器皿 C、龍泉窯系青磁碗 D、備前焼擂鉢（中世 6 期）が出土した。C-2 期に位置づけられる。

97-1E SK235（【本文・表編】第 33 図・第 124 表／【図版編】遺構図：第 142 図、遺物図：なし）

調査区北東部の J23 グリッドで検出した。SK105 及び SK115 に切られており、遺構中央が大きく攪乱されている。長軸 3.35 m、短軸 2.9 m で検出面からの最大深度は 0.35 m である。

97-1E SK240（【本文・表編】第 33 図・第 124 表／【図版編】遺構図：第 143 図、遺物図：第 173 図 8～25、第 174 図 26～44、第 204 図 2、第 205 図 3～9、第 207 図 1）

調査区北東部の J23 グリッドで検出した。SK235 を切り SK105・115 に切られる。長軸 3.5 m、短軸 3.2 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 1.5 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は礫層、2 層は暗褐色土、3 層は暗灰色土である。出土遺物「SK240」と「礫層」から取り上げたが、第 143 図に示すように 4～9 層は SK240 より古い別の大型土坑である。人頭大の礫によって埋没するが、空風輪や瓦類も多く含まれる。「礫層」から平瓦、鬼瓦が出土した他、土師器壺 Bn・薄手の皿 C・燭台 B・燭台 C、白磁皿 E-2 が出土したことから、C-1 期に位置づけられる。

97-1E SK255（【本文・表編】第 33 図・第 124 表／【図版編】遺構図：第 144 図、遺物図：第 175 図 5～33、第 176 図 1～16、第 200 図 11～12、第 205 図 10）

調査区中央の G21・H21 グリッドで検出した。SK690 を掘り返して形成される廃棄土坑である。長軸 3.8 m、短軸 2.0 m の橢円形で、検出面からの最大深度は 0.75 m である。SK240・125 と同様に多量の円礫（大礫）・凝灰岩を含む。調査区中央の地形「落ち」と考えた SX1600 の上面に形成されており、遺構プランの把握が難しかったため、一部トレーニングを入れ堆積状況を確認した（「トレーニング」内で遺物取り上げ）。遺物は鬼瓦や鳥糞などの瓦類や空風輪の他、赤色顔料の付着した備前焼壺（第 176 図 2）など多くの遺物が出土した。土師器椀 C や備前焼擂鉢（近世 1 期）が出土しており、D 期に位置づけられる。

97-1E SK690（【本文・表編】第 33 図・第 126 表／【図版編】遺構図：第 144 図、遺物図：第 181 図 30～53、第 182 図 54～69）

調査区中央の G21・H21 グリッドで検出した。SK255 に切られている。長軸 4.55 m、短軸 2.7 m のほぼ円形で、検出面からの最大深度は 1.35 m である。SK255 と同様に円礫（大礫）・凝灰岩を含んでいる。遺物は土師器皿 C・

壺 Bn が多く出土した他、備前焼擂鉢（中世 6 期）が出土している。D 期の SX1600 を切ることから D-1 期に位置づけられる。

97-1E SK265（【本文・表編】第 33 図・第 124 表／【図版編】遺構図：第 144 図、遺物図：第 176 図 24～32）

調査区中央南端の A18 グリッドで検出した。長軸 2.8 m、短軸 1.8 m のほぼ円形で、検出面からの最大深度は 0.75 m である。最上層は礫が多量に出土した。出土遺物は「SK265」「暗灰色土」「礫層」から取り上げた。遺物は暗灰色土から青白磁梅瓶、枢府手碗（B 群）などの希小品や、焼成不良の朝鮮陶器碗が出土した。また土師器皿 C・小皿 C・椀 C、青花皿 F 群が出土しており、D-2 期に位置づけられる。なお、SE010 井戸枠内出土遺物と接合した遺物がある。

97-1E SK320（【本文・表編】第 33 図・第 125 表／【図版編】遺構図：第 144 図、遺物図：第 217 図 13）

調査区中央北部の I18・J18 グリッドで検出した。中央部土坑群を構成する SK545 を切り、SK295 に切られている（第 140 図）。長軸 2.0 m、短軸 1.9 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.45 m である。埋土は炭化を含んだ焼土である。出土遺物は「祥符元宝」、土師器皿 C、白磁碗 IX 類・皿 E-5、青花碗 C・碗 D が出土しており、D-1 期に位置づけられる。

97-1E SK335（【本文・表編】第 33 図・第 125 表／【図版編】遺構図：第 146 図、遺物図：なし）

調査区中央北部の I17・J17 グリッドで検出した。中央部土坑群を構成する SK450・545 などを切る。長軸 2.5 m、短軸 2.2 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.7 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は暗灰黄色土、2 層は黄灰色土、3 層は黒褐色土である。遺構の切り合いから C-2～D 期に位置づけられる。

97-1E SK295・260（【本文・表編】第 33 図・第 124・125 表／【図版編】遺構図：第 145 図、第 149 図、遺物図：第 177 図 15～29、第 180 図 1～10、第 203 図 8、第 204 図 3、第 207 図 2～3）

調査区中央北部の J19 グリッドで検出した。中央部土坑群を構成する SK260 とした楕円形の土坑と重複して形成される。長軸 4.0 m、短軸 2.6 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.65 m を測る方形石組土坑である。石組は平面プランが「D」字型になっており、西側列のみ拳大程の石を細かく積む。全体に粗い積み方で目地は通らない。南側は石塔含む大型石材を用いて 3 段に積む。北～東側は 1～2 段程大型石材を積む。底部は東側が浅くなり、平坦面をもたない。遺物は「黒褐色土」から厚手の土師器皿 C・椀 C が出土しており、D 期に位置づけられる。なお、SK260 は長軸 4 m、短軸 2.7 m の不整楕円形で、SK295 に重なることから SK260 が SK295 の掘方である可能性と、SK295 が石組遺構として改修される前の同様の性格をもった遺構の可能性がある。D 期に位置づけられる。

97-1E SK330（【本文・表編】第 33 図・第 125 表／【図版編】遺構図：第 144 図、遺物図：第 177 図 32～43、第 205 図 17～18）

調査区中央北部の J21 グリッドで検出した。SX1600 上に形成されており、遺構検出に手間取った遺構である。同地点で形成される SK280・250・2000 を切る SK125・240 らの大型廃棄土坑を掘り返した最上層の土坑である。長軸 2.9 m、短軸 2.1 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.55 m である。SK240 と同様円礫がレンズ状に堆積しているが 1 層のみであり、2 層は焼土や獸骨などを含む黒褐色土である。瓦質土器鍋 B、中国陶器灯明皿、華南三彩水注把手、製塩土器が出土した他、厚手の土師器皿 C・小皿 C が出土しており、D-1～2 期に位置づけられる。

97-1E SK395（【本文・表編】第 33 図・第 125 表／【図版編】遺構図：第 146 図、遺物図：第 208 図 3）

調査区西部の E15 グリッドで検出した。SK1146 を切る。長軸 2.7 m、短軸 1.75 m の不整方形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。埋土は 2 層に分層しており、1 層は灰黄色、2 層は黒色土である。遺物は「灰黄色土」中より相輪の未成品もしくは再加工品が出土した他、瓦質土器深鉢などが出土した。

97-1E SK1146（【本文・表編】第 33 図・第 127 表／【図版編】遺構図：第 146 図、遺物図：なし）

調査区西部の E14・E15 グリッドで検出した。SK395 に切られる浅い土坑である。長軸 2.1 m、短軸 1.35 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.1 m である。遺物は出土していない。

97-1E SK420（【本文・表編】第33図・第125表／【図版編】遺構図：第146図、遺物図：なし）

調査区西南端のB13グリッドで検出した。長軸1.6m、短軸1.4mの不整円形で検出面からの最大深度は0.4mである。土師器壺A・大内A式土師器皿が出土しており、AⅢ-2期頃に位置づけられる。

97-1E SK450（【本文・表編】第33図・第125表／【図版編】遺構図：第146図、遺物図：第178図27～30、第179図1～6）

調査区中央北部のI17グリッドで検出した。中央部土坑群を構成するSK355に切られ、SK520・755を切る。長軸4.75m、短軸2.65mの不整方形で検出面からの最大深度は0.9mである。出土遺物は土師器壺Bnが主体だが、土師器小皿Cを含んでおり、C-1期に位置づけられる。

97-1E SK473（【本文・表編】第33図・第125表／【図版編】遺構図：第146図、遺物図：なし）

調査区中央北部のI21グリッドで検出した。SX1600上面に展開する土坑である。SK852及びSK722を切る。長軸1.95m、短軸1.65mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.55mである。埋土は黒褐色土の単層で、一段下げ時に大礫を多量に検出した。遺物は土師器壺Bn・小皿Cが出土した。D-1期に位置づけられる。

97-1E SK852（【本文・表編】第33図・第127表／【図版編】遺構図：第146図、遺物図：なし）

調査区中央北部のI21グリッドで検出した。SK473・SK722に切られる。長軸1.25m、短軸0.75mの不整橢円形で検出面からの最大深度は0.45mである。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

97-1E SK722（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第146図、遺物図：なし）

調査区中央北部のH21・I21グリッドで検出した。SK473に切られSK722を切る。長軸1.8m、短軸1.45mの不整橢円形で検出面からの最大深度は0.15mである。埋土は表面上に石(円礫)を多数検出した。遺物は出土していない。

97-1E SK440・435（【本文・表編】第33図・第125表／【図版編】遺構図：第147図、遺物図：第178図20～26）

調査区中央南端のA20グリッドで検出した。検出時にSK285・355・425・430のプランを確認しており、第147図に示すように土層は各土坑に対応する。第147図はSK435・440等全ての遺構を完掘した図であり、長軸5.0m、短軸2.76+ α mで検出面からの最大深度は2.5mである。南側は調査外に展開している。第147図に示すように複数の土坑が切りあって形成されている。SK355・435・440からは獸骨や貝などが出土しており、食物残滓等が廃棄されていたようである。埋土最下層であるSK440は、粘質の強い埋土であったことから土壤分析を行った。詳細は第5章第1節にのべてあるが、寄生虫卵を多様に検出しており、トイレに関連する遺構であることが判明した。

SK440からはやや厚手の土師器皿Cの他、漳州窯系青花碗が出土しておりC-2～D-1期に、SK453からは青磁稜花皿が3個体出土しており、組物の可能性がある。D-1期以降に位置づけられる。これらの上位に連続して形成されたSK430・425・355・285もD-1～2期の土坑と考えられる。

97-1E SK486（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第148図、遺物図：なし）

調査区西北部のK15グリッドで検出した。長軸1.3m、短軸1.3mの方形土坑で検出面からの最大深度は0.3mである。土師器皿Cや青花の端反碗が出土しており、D期に位置づけられる。

97-1E SK520（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第140図・第148図、遺物図：第179図12）

調査区西部のH16・H17グリッドで検出した。中央部土坑群を構成するSK450に切られる。長軸2.1m、短軸1.65+ α mの不整橢円形で検出面からの最大深度は0.35mである。完形の土師器壺Bnが複数出土しており、B-2期に位置づけられる。

97-1E SK515（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第140図・第148図、遺物図：第200図13）

調査区中央のH18・G18グリッドで検出した。中央部土坑群を構成するSK180に切られ、SK540を切る。長軸4.5m、短軸2.0mで検出面からの最大深度は1.15mである。出土遺物は床面直上の6層より完形の土師器壺Bnが出土した他、各層より土師器壺Bが出土しておりB期に位置づけられる。

97-1E SK535（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第140図・第148図、遺物図：第179図24～72）

調査区東部のH22グリッドで検出した。長軸4.2m、短軸1.4mで検出面からの最大深度は0.3mである。土坑として報告するが、不定形で浅く土師器が多量に出土した遺構であることから部分的な整地層と考えられる。土師器小皿AⅠ・坏Aが多量に出土した他、京都産の土師器小皿・皿も少量出土した。出土遺物からAⅢ-1期に位置づけられる。

97-1E SK540（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第140図・第149図、遺物図：なし）

調査区中央北部のH18・I18グリッドで検出した。中央部土坑群を構成するSK180・515に切られる。長軸2.3m、短軸1.8mの不整橙円形で検出面からの最大深度は0.3mである。土師器坏A・皿Cが出土しているが、B期のSK515より確実に古いことから、土師器皿Cは混入の可能性が高く、B期以前の遺構と考えられる。

97-1E SK625（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第140図・第149図、遺物図：第181図16～24）

調査区西端のD12グリッドで検出した。長軸1.7m、短軸0.8mの隅丸方形の土坑で、検出面からの最大深度は0.45mである。遺物は龍泉窯系青磁花入、青白磁梅瓶片などの希少品が出土した。その他、土師器坏A・小皿AⅠ・小皿AⅡ、土師質土器鍋B1が出土しており、AⅢ-1期頃に位置づけられる。A期に遡る方形土坑である。

97-1E SK590（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第140図・第149図、遺物図：なし）

調査区中央のG18グリッドで検出した。中央部土坑群を構成するSK515に切られる。長軸1.0m、短軸0.5mで検出面からの最大深度は0.7mである。埋土は灰褐色土の単層である。土師器坏Aが出土しており、A期に位置づけられる。

97-1E SK545（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第140図・第149図、遺物図：第180図1～10）

調査区中央北部のI18・J18グリッドで検出した。中央部土坑群を構成するSK295・320・325に切られる。長軸3.65m、短軸1.9mの不整橙円形で検出面からの最大深度は0.75mである。厚手の土師器皿C、龍泉窯系青磁碗、朝鮮陶器碗、土師器燭台C・小皿Cなど多くの遺物が出土した。C-2～D-1期に位置づけられる。

97-1E SK605（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第149図、遺物図：第181図2～7）

調査区西南部のD14グリッドで検出した。SK610を切る。長軸2.0m、短軸0.8mの不整橙円形で検出面からの最大深度は0.45mである。土師質土器鍋Cや瓦質土器椀が出土しており、C～D期に位置づけられる。

97-1E SK610（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第149図、遺物図：第181図8～13）

調査区西南部のD14グリッドで検出した。SK605に切られる。長軸2.1m、短軸1.0mの橙円形で検出面からの最大深度は0.4mである。土師器坏Aや東播系片口鉢など、古手の遺物が出土するが、白磁皿E群や青花が出土しており、C～D期に位置づけられる。

97-1E SK750（【本文・表編】第33図・第127表／【図版編】遺構図：第150図、遺物図：第183図12）

調査区西端のG13グリッドで検出した。長軸2.05m、短軸1.5mの不整橙円形で検出面からの最大深度は0.65mである。埋土はブロック土を多く含んでおり、人為的に埋められたと考えられる。土師器坏Aや東播系片口鉢が出土しており、AⅢ-1～AⅢ-2期に位置づけられる。

97-1E SK630（【本文・表編】第33図・第126表／【図版編】遺構図：第149図、遺物図：第181図25～28）

調査区西南部のC13グリッドで検出した。SK705を切る。長軸1.5m、短軸0.7mの隅丸方形で検出面からの最大深度は0.5mである。ブロック土を含む黒褐色土によって埋められる。土師器坏B・薄手の皿Cが出土しておりC-1期に位置づけられる。

97-1E SK2000（【本文・表編】第33図・第127表／【図版編】遺構図：第150図、遺物図：第186図7～30、第202図6～7、第206図5～7、第207図4）

調査区北端の J21 グリッドで検出した。第 150 図の模式図に示すように、SK330・280・250 と一連の土坑である。長軸 5.45 m、短軸 4.9 m の不整円形で検出面からの最大深度は 1.3 m である。遺物は中国南部産陶器鉢 C や厚手の土師器皿 C が出土した。各層からの出土遺物にも大きな時期差は考えられず、D-1 期に位置づけられる。

97-1E SK2001（【本文・表編】第 33 図・第 127 表／【図版編】遺構図：第 151 図、遺物図：なし）

調査区中央の G19 グリッドで検出した。C-1 期に埋没した大型土坑 SK2015 を切る。長軸 1.85 m、短軸 0.9 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.45 m である。遺物は少なく、土師器壺 A、備前焼甕片のみが出土したが、D-1 期の SK2015 を切ることから、D-1 期以降に位置づけられる。

97-1E SK2010（【本文・表編】第 33 図・第 128 表／【図版編】遺構図：第 151 図、遺物図：第 187 図 14～15）

調査区中央東部の H23 グリッドで検出した。整地層除去後の 2 面目の遺構である。長軸 1.9 m、短軸 1.65 m の不整円形で検出面からの最大深度は 0.35 m である。壺 A などの土師器類が多量に出土した SD2030 を切る。埋土は暗褐色の単層である。土師器壺 A・耳皿 A が出土した。

97-1E SK2005・2098（【本文・表編】第 33 図・第 128・129 表／【図版編】遺構図：第 151 図、遺物図：第 187 図 1～10、第 208 図 4、第 217 図 16）

調査区中央の H21 グリッドで検出した。SX1600 除去後に確認した。長軸 $4.0 + \alpha$ m、短軸 3.3 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.8 m である。遺物は 3 層に分層しており、1 層は礫を多量に含む「暗灰色土」、2 層は「灰色土」、3 層が「暗灰茶色土」である。「皇宋通宝」、相輪が出土した他、薄手の土師器皿 C や備前焼擂鉢（中世 5a 期）が出土しており、C-1 期に位置づけられる。SK2098 は SK2005 に切られる土坑で、長軸 $2.8 + \alpha$ m、短軸 2.75 m、深さ 0.25 m と浅い。土師器小皿 A I が出土しており A 期以降に位置づけられる。

97-1E SK2035（【本文・表編】第 33 図・第 128 表／【図版編】遺構図：第 152 図、遺物図：第 188 図 13）

調査区中央北部の I21 グリッドで検出した。SX1600 除去後に確認した。長軸 2.1 m、短軸 1.4 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。埋土は炭まじりの単層である。変形菱型文軒平瓦や土師器壺 B・大内 A 式土師器皿、備前焼擂鉢（中世 6 期）が出土しており、B-2 期に位置づけられる。

97-1E SK2015（【本文・表編】第 33 図・第 128 表／【図版編】遺構図：第 152 図、遺物図：第 187 図 16～31、第 188 図 1～12、第 207 図 10、第 217 図 17）

調査区中央北部の H20 グリッドで検出した。SX1600 除去後に確認した。SK2001・255・690・2005 に切られる。長軸 5.45 m、短軸 3.0 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.9 m、東側が大きくくぼむ。「景祐元宝」、地輪が出土した他、各層より土師器壺 Bn を中心に、多くの遺物が出土した。土師器皿 C が少量出土しており、B-2～C-1 期に位置づけられる。

97-1E SK2043（【本文・表編】第 33 図・第 128 表／【図版編】遺構図：第 152 図、遺物図：なし）

調査区中央南端の B17 グリッドで検出した。長軸 1.85 m、短軸 0.85 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 0.4 m である。埋土は灰色土の単層である。出土遺物は少なく、時期の確定は難しいが A 期以降に位置づけられる。

97-1E SK2055（【本文・表編】第 33 図・第 129 表／【図版編】遺構図：第 153 図、遺物図：第 190 図 11～12）

調査区中央南端の B17 グリッドで検出した。2 面目で確認された遺構である。長軸 1.65 m、短軸 0.95 m の方形で検出面からの最大深度は 1.4 m と深い。ブロック土で埋没しており、人為的に埋められたと考えられる。出土遺物は極めて少ない。土師器壺 A の他、瓦質土器鍋 D 片が出土しており、C 期以降に位置づけられる。

97-1E SK2045（【本文・表編】第 33 図・第 128 表／【図版編】遺構図：第 153 図、遺物図：第 189 図 1～45、第 190 図 1～10、第 216 図 7、第 217 図 18）

調査区中央北端の E19・E20 グリッドで検出した。1 面目検出時から西側のプランが確認できていたが、SX1600 及び SX2050 除去後に全体プランを確認した。長軸 5.3 m、短軸 3.8 m の隅丸方形で、検出面からの最大深度は 1.5 m の擂鉢状にくぼむ大型土坑である。出土遺物は一段下げ時の「SK2045」と上位層より順に「黒褐色土」「灰色土」「灰色粘質土」「礫混じり土」から取り上げた。遺物は「黒褐色土」からガラス片が出土し、

「灰色土」より「天聖元宝」が出土した。その他、厚手の土師器皿C・小皿Cが多く出土した他、備前焼擂鉢(近世1期)、土師質土器鍋C、瓦質土器擂鉢などの雑器類や、五彩碗などが出土した。D-1期に位置づけられる。

97-1E SK2078 (【本文・表編】第33図・第129表／【図版編】遺構図：第153図、遺物図：第190図30～32)

調査区中央北端のH21グリッドで検出した。SX1600除去後に確認した遺構で、大部分がSK473・852に削平されている。長軸 $1.4+\alpha$ m、短軸 $1.4+\alpha$ mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.3mである。埋土は暗灰色砂質土である。中世の遺物は含まず土師器壺・椀cの体部、蓋など9世紀代の土器が出土した。本調査区唯一の古代に遡る遺構である。なお、本資料の他、SK745は外面斜格目タタキをもつ古代瓦(第183図11)、SK765暗灰色土からは荒尾産の可能性のある須恵器壺体部片(第183図23)が出土している。全て混入品であるが、9世紀代の遺物群である。当遺構以外にも同時期の遺構が存在していた可能性が高い。

97-1E SK2081 (【本文・表編】第33図・第129表／【図版編】遺構図：第153図、遺物図：なし)

調査区中央南部のD19グリッドで検出した。長軸2.3m、短軸1.4mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.2mである。土師器壺A片が出土した。A期以降に位置づけられる。

97-1E SK2115・2140 (【本文・表編】第33図・第129表／【図版編】遺構図：第154図、遺物図：第191図1～23、29～30、第202図8～11、第207図11、第217図19)

調査区北東部のD20・D21グリッド付近で検出した。SX1600最下面で確認した遺構群である。SX1600(SX2050・SK2040・2080)はSXの項目で記述し、ここではSK2115・2140等について述べる。

SK2115は、C-1期のSE2100に切られる。長軸2.6m、短軸2.2mのほぼ円形で検出面からの最大深度は1.1mである。土師器壺Bnが多く出土しておりB-2期を主体とするが、薄手の土師器皿Cをわずかに含むことからB-2～C-1期にかけて埋没したと考えられる。埋土中からは完存する備前焼小壺(第191図20)が出土した。SK2140は、長軸2.3m、短軸 $0.9+\alpha$ mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.95mである。土師器壺Bnが出土しておりB-2期を主体とする遺構と考えられる。

97-1E SK2110・SK2131・SK2132 (【本文・表編】第33図・第129表／【図版編】遺構図：第155図、遺物図：第191図26～27・28)

調査区中央南部のB20グリッドで検出した。SX2050除去後に確認した。SK2131→SK2132→SK2110の順で形成される。調査期間の関係上SK2110とSK2131の一部の掘削のみにとどまる。SK2110は長軸2.95m、短軸2.45mの不整円形で、検出面からの最大深度は $0.8+\alpha$ mである。土師器壺Bの他、備前焼擂鉢(中世6期)が出土しておりB-2期頃のSK2131・2132とも規模は不明確であるが、検出面からの最大深度はそれぞれ0.5m、0.35mを測る。SK2131からは土師器壺B、備前焼擂鉢(中世5期)が出土しておりB期に位置づけられる。SK2132からは時期を特定する遺物が出土していないが、遺構の重複関係からB期に位置づけられる。

97-1E SK2085・2090・2095 (【本文・表編】第33図・第129表／【図版編】遺構図：第155図、遺物図：なし)

調査区中央北部のH20グリッドで検出した。全てSK2015に切られている。SK2085・2090・2095は、0.7mの間隔に配された同規模の遺構であり、近似した性格が考えられる。土師器壺A・小皿Aの小片が出土しており、A期の遺構と考えられる。

SK2085は、長軸 $2.05+\alpha$ m、短軸0.45mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.2mである。SK2090は、長軸 $1.75+\alpha$ m、短軸0.6mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.2mである。SK2095は、長軸 $1.45+\alpha$ m、短軸0.35mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.15mである。

97-1E SK2145 (【本文・表編】第33図・第129表／【図版編】遺構図：第155図、遺物図：第191図31～32)

調査区南西端のC12グリッドで検出した。南北道路前面のピット群中に展開する部分整地除去後に確認した2面目の遺構である。97-1SK3006に切られる。長軸0.95m、短軸0.8mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.2mである。遺物は常滑焼壺、土師質土器鍋Bが出土した。出土遺物よりAⅢ期に位置づけられる。

97-1E SK3000・3023 (【本文・表編】第33図・第129表／【図版編】遺構図：第155図、遺物図：第192図4～6)

調査区中央西側のE13グリッドで検出した。部分整地除去後に検出した2面目の遺構である。SK3000が

SK3023 を切る。SK3000 は長軸 0.8 m、短軸 0.75 m の小型の隅丸方形で検出面からの最大深度は $0.2+\alpha$ m、SK3023 は長軸 1.85 m、短軸 1.15 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.2 m である。SK3000 は床面より瓦質土器擂鉢の底部片が天地逆の状態で出土した。SK3023 の瓦質土器擂鉢と接合し、ほぼ完形品に近く復元できる。土師器小皿 A II が出土しており A III -2 期頃に位置づけられる。SK3023 からは大内 A 式土師器皿や白磁皿 IX 類が出土しており同じく A III -2 期ごろに位置づけられる。

97-1E SK3005・3010（【本文・表編】第 33 図・第 129 表／【図版編】遺構図：第 155 図、遺物図：第 192 図 7～8、9）

調査区中央西側の E13 グリッドで検出した。部分整地除去後に検出した 2 面目の遺構である。SK3010 が SK3005 を切る。SK3005 は長軸 1.15 m、短軸 0.8 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.1 m、SK3010 は長軸 1.05、短軸 0.7 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.05 m である。SK3005 は床面より完形品の土師器坏 A が出土した。A III -1～2 期頃に位置づけられる。なお、SK3005・3010 の上面を覆う E12 グリッド「整地層」からは第 109 図 11～13 に示す土師器坏 A が出土した。A III -1～2 期頃にみられる土器であり 2 面目の遺構の下限を示す遺物である。SK3010 もこれに近似した時期と考えられる。

97-1E SK3030（【本文・表編】第 33 図・第 129 表／【図版編】遺構図：第 155 図、遺物図：第 192 図 16～22）

調査区南西端の C14・D14 グリッドで検出した。2 面目の遺構として調査したが、土層観察から整地層上面から掘削された 1 面目の遺構であることがわかった。長軸 3.15 m、短軸 $1.9+\alpha$ m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.4 m である。土坑の上層・下層より多くの遺物が出土した。土師器坏 A 主体であるが土師器坏 Bn が出土しており B 期に埋没した遺構と考えられる。

溝 (SD)

南北方向の溝を 3 本 (SD957・2070・2128)、東西方向の溝 1 本 (SD150) を確認した。SD2086・2065・2120 は南北に主軸をもつ遺構で、溝とするよりは長土坑としたほうが妥当かもしれない。

97-1E SD150（【本文・表編】第 35 図・第 123 表／【図版編】遺構図：第 156 図、遺物図：第 216 図 3）

C11 グリッドで検出した。南北道路 SF100 検出時に確認した、東西方向の溝状遺構である。97-1SK260 を切る。本来は 97-1 内に相当する位置にあるが、調査時点では 97-1E の遺構番号を付しており、97-1E にて報告する。幅 0.5～1.0 m、検出面からの最大深度は 0.5 m、ほぼ直線で主軸方向 N - 4.89° - W である。底部の標高は F 8 グリッドで 3.7 m である。断面は台形状である。埋土中からは、鉛素材の可能性のある棒状の鉛製品が出土した。土師器皿 C、備前焼擂鉢 (近世 1 期) が出土しており、D-1～2 期頃に廃絶したものと考えられる。

97-1E SD472（【本文・表編】第 35 図・第 125 表／【図版編】遺構図：なし、遺物図：第 192 図 23～26）

調査区北西端の C21・D21 グリッドで検出した南北方向の溝状遺構である。SX1600 上面に形成される。長さ 0.75 m、幅 1.0～2.0 m、検出面からの最大深度は 0.5 m である。調査当初は SD957 に接続する一連の溝と考えたが、連続しないことから長土坑としたほうが適当かもしれない。埋土中には礫を多量に含む。厚手の土師器碗 C や朝鮮陶器碗などが出土した。D-1～2 期に位置づけられる。

97-1E SD957（【本文・表編】第 35 図・第 127 表／【図版編】遺構図：第 156 図、遺物図：なし）

調査区北西端の F21 グリッドの SX1600 上面で検出した溝状遺構である。長さ 13 m、幅 0.6～1.0 m、検出面からの最大深度は 0.6 m、ほぼ直線で主軸方向 N - 8.66° - W である。底部の標高は F 8 グリッドで 3.7 m である。埋土は下位層から上位層にいくにしたがって粘性が強くなる。厚手の土師器皿 C や青花 E 群などが出土した。SX1600 を切ることから、D-1～D-2 期に埋没したと考えられる。

97-1E SD2030（【本文・表編】第 35 図・第 128 表／【図版編】遺構図：第 156 図、遺物図：第 193 図 1～42）

調査区北西端の G24・H24 グリッドで検出した溝状遺構である。整地層除去後の 2 面目で確認した。SK2010 に切られる。幅 0.4～1.0 m、検出面からの最大深度は 0.2 m である。遺構中央付近より、大量の土師器供膳具類が一括して出土した。土師器小皿 A I・坏 A の他、京都産土師器皿、吉備系土師器碗が出土した。A II -2～A II -3 期に埋没したと考えられる。

97-1E SD2037（【本文・表編】第35図・第22表／【図版編】遺構図：、遺物図：第193図1～42）

調査区東側のE22グリッドで検出した溝状遺構である。整地層除去後の2面で確認した。SK2010に切られる。幅0.4～1.0m、検出面からの最大深度は0.2mである。遺構中央付近より、大量の土師器供膳具類が一括して出土した。土師器小皿A I・坏Aの他、京都産土師器皿・吉備系土師器碗が出土した。A II -2～A II -3期に埋没したと考えられる。

97-1E SD2065（【本文・表編】第35図・第129表／【図版編】遺構図：第157図、遺物図：第193図43～45）

調査区北西端のB14・C14グリッドから検出した溝状遺構である。整地層除去後に確認した。SK140に切られており、長さ2.8mを検出した。幅0.9m、検出面からの最大深度は0.5mを測る。埋土は「黒褐色土」の単層である。土師器坏A、その他出土遺物からA III -2期に廃絶したものと考えられる。

97-1E SD2070（【本文・表編】第35図・第129表／【図版編】遺構図：なし、遺物図：第193図46～50）

調査区北西端のB21グリッドで検出した溝状遺構である。SX1600除去後に確認した。長さ $7.5+\alpha$ m、幅0.4m、検出面からの最大深度は0.2mである。土師器皿Cが出土しているがB-2期のSK2110に切られており、B期の遺構である可能性が高い。

97-1E SD2120（【本文・表編】第35図・第129表／【図版編】遺構図：なし、遺物図：第194図4～16）

調査区北東部のD20・D21グリッド付近で検出した。SX1600最下面で確認した大部分がSK2115・2140に切られる為、全体の形状は不明である。直線的なプランから溝としたが長土坑の可能もある。長さ $2.7+\alpha$ m、幅1.2～1.3m、検出面からの最大深度は0.6mで、断面台形のほぼ直線である。土師器坏Bnが主体で備前焼擂鉢（中世6a期）を伴う。B-2期に埋没したと考えられる。

97-1E SD2128（【本文・表編】第35図・第129表／【図版編】遺構図：なし、遺物図：第194図17～19）

調査区北西端のA18～D18グリッドで検出した大形の溝状遺構である。整地層除去後に検出した。長さ $12+\alpha$ m、幅0.7～1.0m、検出面からの最大深度は0.55m、断面台形のほぼ直線で主軸方向N-0°～Wである。底部の標高はF8グリッドで3.7mである。土師器坏A・小皿A Iが出土した。A III -1～A III -2期頃に埋没したと考えられる。

土器埋設遺構（SJ）

4基の遺構を確認した。

97-1E SJ405（【本文・表編】第34図・第125表／【図版編】なし、遺物図：第194図20～29）

調査区北東部付近のJ22グリッドで検出した。長軸2.4m、短軸1.4mの楕円形で、検出面からの最大深度は0.4mである。床面より拳大の礫とともに土師器坏Bnが正置した状態で出土したため、埋納遺構として調査した。なお、遺構床面からは備前焼擂鉢の破片や瓦など雑器類の破片も出土している点、土師器坏は完形品ではないものも含まれる点などから埋納遺構としてよいか、やや不安が残る。B期の遺構と考えられる。

97-1E SJ600（【本文・表編】第35図・第126表／【図版編】遺構図：第159図、遺物図：第194図30）

調査区中央西よりのF14グリッドで検出した。長軸0.55m、短軸0.4mの楕円形で、検出面からの最大深度は0.45mを測る小型のピット状の遺構中より瀬戸産華瓶が埋納された状態で出土した。華瓶の頸部を打ち欠き、遺構底面に頸部を横位に置き、その上に天地を逆にした体部を置いていた。中期瀬戸であり、14世紀代（A II期頃か）に相当する遺構と考える。なお、口縁部は1/6を残して打ち欠きがみられた。

97-1E SJ635（【本文・表編】第35図・第126表／【図版編】遺構図：第159図、遺物図：第214図14）

調査区南東よりのB23グリッドで検出した。長軸0.75m、短軸0.7mの楕円形で、検出面からの最大深度は0.35mである。床面付近より、先端部を欠損する十能と考えられる鉄製品が出土した。

97-1E SJ2129（【本文・表編】第35図・第129表／【図版編】遺構図：第159図、遺物図：第194図31～32）

調査区中央西よりのC16グリッドで検出したピット状の土坑である。長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形で、検出面からの最大深度は0.25mである。埋土は単一層である。底面からは備前焼甕の口縁部と底部片及び川原石が出土した。建物の礎盤である可能性が高いが、建物プランになりそうな柱穴は周囲に展開していない。中世

第22表 第97-1E次調査区 溝跡 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SD012	F13	D期～	×	銅錢のみ	105・106
SD150	C11	D-1～2期			160
SD472	C21・D21	D-1～2期	×		105・106
SD585	H22	C期	×		105・106
SD957	F21	D-1～2期		×	160
SD2030	G24・H24	A II-2 ～3期			160
SD2037	E22	A II-2 ～3期	×	×	105・106
SD2065	B14・C14	A III-2期			161
SD2070	B21	B期	×		105・106
SD2086	D16	A期～	×		105・106
SD2120	C21・D21	B-2期	×		105・106
SD2128	A18～D18	A III-1 ～2期			105・106

第23表 第97-1E次調査区 埋納遺構 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SJ405	J22	B期			159
SJ600	F14	A II～III期			159
SJ635	B23	A期			159
SJ2129	C16	B期			159

第24表 第97-1E次調査区 柱穴 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SP133	J22	A期～	×		105・106
SP148	J23	不明	×		105・106
SP174	I24	C期	×	銅錢のみ	105・106
SP266	H24	C期	×		105・106
SP282	G23	不明	×		105・106
SP349	H23	A期	×		105・106
SP376	E24	B～C期	×		105・106
SP441	E24	A期	×		105・106
SP449	C24	C期	×		105・106
SP519	E13	A期	×		105・106
SP573	E23	A期	×		105・106
SP597	D18	不明	×		105・106
SP627	C23	B期	×		105・106
SP681	B23	C期	×		105・106
SP726	E12	不明	×	銅錢のみ	105・106
SP735	G23	A期～	×		105・106
SP762	K18	不明	×		105・106
SP797	C23	不明	×	銅錢のみ	105・106
SP918	H19	B期～	×		105・106
SP959	C15	A期～	×		105・106
SP964	K15	B期			152
SP971	C22	C-1期	×		105・106
SP1067	F13	不明	×	銅錢のみ	105・106
SP1323	F14	不明	×		105・106
SP1351	A23	不明	×		105・106
SP1458	E25	A期～	×		105・106
SP1464	E15	不明	×		105・106
SP1498	D14	不明	×		105・106
SP1548	F13	不明	×	銅錢のみ	105・106
SP2038	C22	A期	×		105・106
SP2126	D17	不明	×		105・106
SP3013	C12	A期			159

構の切り合いから C-2～D 期に位置づけられる。調査区東側に展開する掘立柱建物群への出入口であった可能性が想定される。（堀麗・長直信）

6a 期の遺構と考えられる。

【その他（SX）】

97-1E SX1600・2050・2080・SK2040（【本文・表編】第33図・第127・128・129表／【図版編】遺構図：第154図、遺物図：第191図1～23、29～30、第202図8～11、第207図11、第217図19）

調査区中央東側の19から23グリッドの幅で検出した地形の「落ち」部分と、これを埋める整地層群である。第154図の周辺遺構配置図はSX1600部分を重機により掘り下げた後の遺構検出状況図である。SX1600の残り部分をSX2050・2080、SK2040として掘り下げ及び遺物回収を行った（SK2040は土坑として報告しているが、遺構の性格はSX2050の北側に分布する整地層である）。これらの層は地形の「落ち」を埋める一連の埋土「整地層」と考えられる。多くの遺物が出土した他、整地層中のC22グリッド部分では整地する際に投棄したと考えられる礫が南北方向に帯状に集中する地点がみられる。整地の時期はC-2～D-1期に位置づけられる。

97-1E SX2019（【本文・表編】第35図・第128表／【図版編】遺構図：第159図、遺物図：なし）

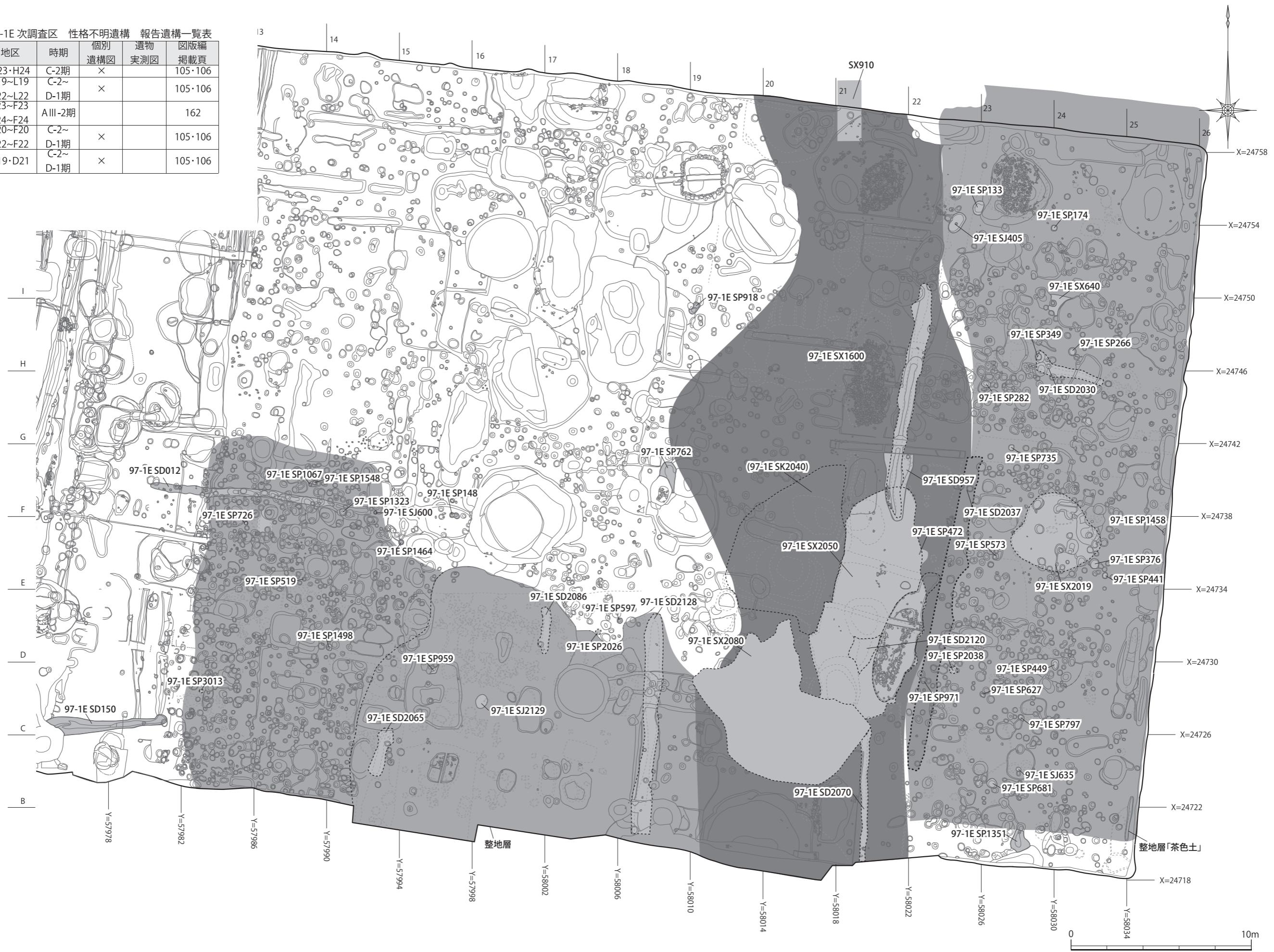
調査区中央東端のE23グリッドで検出した。整地層除去後の2面目の遺構である。長軸4.9m、短軸4.4mの不整橿円形で検出面からの最大深度は0.2mと浅い。土師器壺Aや大内A式土師器皿が出土しており、A III-2期頃に位置づけられる。

97-1E SX910（【本文・表編】第38図／【図版編】土層図：第108図、遺物図：なし）

調査区中央北側のK20グリッド付近で確認された硬化した砂礫層である。第108図の土層中にのみ記載している。この砂礫層は、D期の井戸であるSE090に切られる、1面目に展開する幅0.5m程が遺存する層である。10m北側の97-3南壁土層中においても酷似した砂礫層（97-3SX510・515）が確認されており、97-1E北側付近から97-3にかけて幅1.5mから最大5m程の帶状の硬化面が想定され、簡易な道路状遺構を形成している可能性がある。遺

第 25 表 第 97-1E 次調査区 性格不明遺構 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SX640	H23・H24	C-2期	×		105・106
SX1600	B19～L19 B22～L22	C-2～ D-1期	×		105・106
SX2019	E23～F23 E24～F24	A III-2期			162
SX2050	B20～F20 B22～F22	C-2～ D-1期	×		105・106
SX2080	C19・D21	C-2～ D-1期	×		105・106



第34図 第97-1E次調査区 SD・SP・SJ・SX掲載位置図(1/200)

(4) 97-4 の概要 (第 22 図)

97-1E 北東、97-2 北西部間に位置する東西 8 m、南北 10 m の 80 m² の調査区である。遺構検出の結果、SK005 とした直径 4.5 m の大型円形プランを検出した。遺構中には人頭大の礫の集中がみられる。遺構の南側は埋土の異なる遺構プランが弧を描いて形成されていることから、数度の掘り返しを伴う大型廃棄土坑であると考えられる。開発対象地外であるため 97-4SK005 は遺構検出に留めたが、検出面から土師器皿 C や備前焼擂鉢（中世 6 期）や甕などが出土しており、C～D 期を中心とする時期の廃棄土坑と考えられる。SK005 の東側には 97-1ESK125・115・2000 などの大型廃棄土坑が存在する。これらの廃棄土坑群は形成時期や最終埋没時期に若干時期差をもつが、およそ 3 m の間隔をおいて規則正しく並んで形成されていることとなる。なお、97-4 の位置は 97-1E 東側に展開する掘立柱建物群に付随する南北道路の存在が想定されたが、その痕跡はみられず廃棄空間であることが確認された。



第 35 図 第 97-4 次調査区 全体遺構図 (1/500)

(4) 出土遺物

本調査区における一括資料、特殊遺物、SK020 出土兜について概観する。以下の図版番号は全て【図版編】のものである。

■一括資料 SK020・040・050・180 は代表的な火災処理土坑である。全て D-1 期に相当する。以下では事例の少ない A 期を中心に概観する。

SK348 は東播系須恵質土器甕や瓦質土器鍋 B が共伴する A III -1 頃の資料である。SK525 は横耳の石鍋と土師質土器鍋 B、瓦質土器擂鉢、京都産土師器皿が共伴する A III -1 頃の資料である。石鍋は 2/3 が遺存する。SK535 は京都産土師器へそ皿・皿が共伴する資料で、一部混入品もみられるが A II -1 期を中心とする時期の遺物群である。SK570 は遺存状態の良い土師質土器鍋 B や瓦器片、東播系須恵質土器片口鉢が共伴する、A III -1 期を中心とする遺物群である。SK3000 はほぼ完形に近い瓦質土器擂鉢と土師器小皿 A II が共伴した資料である。擂鉢は A III 期代の瓦質土器擂鉢の形態を知るうえで重要な資料である。SD2030 は京都産土師器皿 4 個体、吉備系土師器碗 1 個体が共伴する土師器の一括廃棄遺構で、A II -3 期の供膳形態や他地域との並行関係を考えるうえで非常に重要な資料である。なお、京都産土師器皿は口縁部のみの出土であったが、全形は遺構検出時に出土した第 197 図 33 より窺うことができる。第 199 図 11～13 は E12 ゲリッドの整地層掘削時に出土した遺物である。11 は深手の器形をもち、厚みをもったやや重厚な土器で、12 は器高が低く口縁部を強くつまみだす形態、13 は体部が内湾する形態をもつ土師器である。A III -1 期頃にみられる土器群である。

■その他特殊遺物

第 166 図 29 は 1/2 が遺存する土師器碗である。外面に上部には細い線で 6 cm 幅で船のような線刻を施している。オールのような 13 本の斜めの線と、その上部にも斜線と直線でなにか（帆？）を表現している。中央の図像は小屋などの家屋を表現した可能性がある。土器の形態は中世の土師器の類例のない特異なものであるが、土師器碗 A や大内 A 式土師器皿などとともに出土しており、A III 期を中心とする 15 世紀以降の遺物と考えられる。

第 168 図 1 は青花の碗である。外面には印刻された波状の文様をもち、外面全体には黄緑色の釉のかかる外面青磁碗である。端反の口縁端部をもち器形のプロポーションからみて B 群の一種と考えられる。97-2SK098 褐灰色土（【図版編】第 236 図 6）と同型式の資料である。

第 176 図 32 は朝鮮陶器碗である。深手で体部が背反する形態をもつ。釉薬の熔融状態がきわめて悪く、淡赤橙色に焼成された素焼き状の製品である。窯址でみられる本焼きの失敗品とみられ、釉面の発泡と思われる箇所、底部には明らかに指目が残されていることが観察される（註 3）。窯買いに乘じて流入した資料の可能性も考えられるが、類例のない資料である。

第 177 図 30 は中国磁器碗である。内面に乳白色の白釉、外面体部下半に淡い緑色の褐色釉がごく薄くかかる資料である。小型の台形状の高台を削り出し体部は丸みを帯びる。外面下半部には削り残したカンナ痕が観察できる。共伴した資料は C-2 期頃の遺物に占められるが、遺物の時期は不明である。

第 179 図 11 は SK475 出土の瓦質土器の蓋状の製品である。総瓦葺きの屋根を表現したと考えられる。頂部には穿孔部が確認できこれを中央にした場合、長方形に復元できる。形象的な瓦質土器は珍しく軒先の表現も丁寧に造形されている。蓋として報告するが性格は不明である。

第 197 図 30 は瀬戸華瓶である。外面は口縁部から体部下半にかけて褐色釉が厚くかかるが、二次被熱を受けたのか釉調がやや変質し青味がかっている。底部は糸切り離し痕が確認され、高台部は粗く成形される。口縁端部は 1/6 を残して人為的な打ち欠きがみられる。体部には図示したような文様を陰刻する。図中の矢印部で上下を分割し、それぞれ埋置されていた。

第 196 図 16 は瓦質土器で、外面に蓮華文や竹管状、格子型のスタンプを施す。三足の土器で体部上半部が欠損しており、全形は不明だが金属器を模した仏具類の可能性がある。

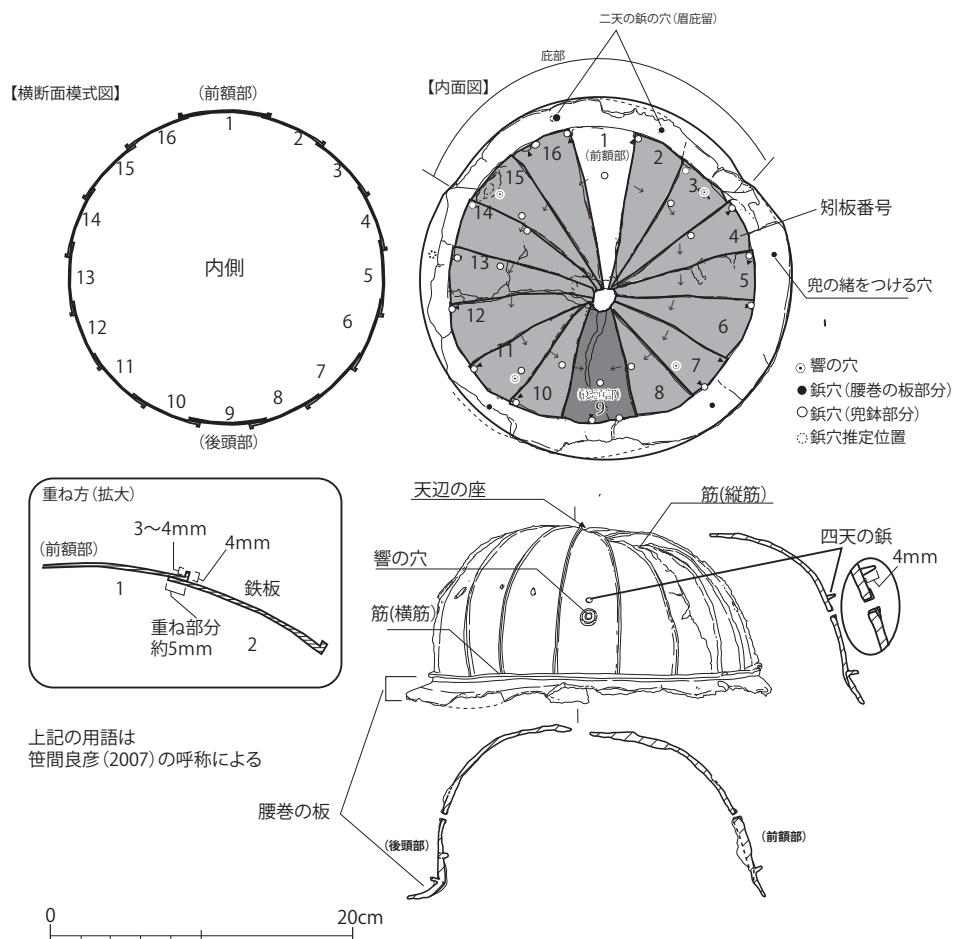
■ SK020 兜について（第36図・写真16【図版編 第213図】）

SK020からは多種多様の遺物が出土した。遺物全体の様相は第VI章で述べ、ここでは兜のみ触れる。遺物は火災処理土坑より出土しており、有機物や釘が銹着しているため、鉢の状況や表面の仕上げなどの詳細は把握できない。報告者の無知ゆえ、正面部の位置を取り間違えて実測しており、第213図に示すようにいびつな実測図となっている。よって見通し図の位置が悪く不明確であるが矧板の前後がややふくらむ「阿古陀」形の兜である。正面部分は写真15に示すX線CTスキャン写真を参照いただきたい。兜は16枚の筋と矧板から作られたいわゆる16間筋兜である。前後長23.4cm、左右幅23.4cmである。高さは12.8cm、保存処理後の重量は890gと見た目より軽い。使用された矧板は、本体は厚さ2~3mmの矧板16枚、これとは別に直径16.5cmの円盤状の矧板1枚？を接合し底部をつくりだす。兜本体を形づくる各矧板は鉄鋤によって接合すると考えられるが、矧板の重ね部分で施鋤された、いわゆる「目隠し鉢」のため、肉眼観察ではその位置は特定できない。断面形状は第36図横断面模式図に示すように、直線的に地板を矧ぎ重ねた「明珍系」の重ね方であろう。附属品はすべて外れさせており、天辺座の金具や鍔形前縦などは出土していない。正面部分には鍔形台を固定するためか底部に二箇所、矧板部分に2か所の穿孔が確認できる。その他、第36図に現状で把握しうる情報を記載したが、本遺物



写真15 第97-1E SK020 出土兜X線CT写真

は、九州歴史資料館においてX線CTスキャン撮影を行っており、十分な知識をもってすれば今後より詳細な検討が可能である。（長直信）



第36図 第97-1E次調査区 兜詳細図(1/5)

第4節 第97-2次調査区

(1) 概要

97-1E 東部から 8 m 東側に位置する。確認調査（第3トレンチ）では遺構密度が低いと判断された地区である。調査の結果、井戸 3 基、土坑 49 基が確認された。遺構は 97-1E 区側である西側と、北側に集中して分布する。調査区全面は農地であったが、調査区南辺部は近世～近代の墓地が存在し、墓地の周囲には中世瓦、備前焼大甕片や擂鉢片、中国陶磁器類、五輪塔部材が散布する状況であった。

本調査区で特筆すべき点は、SK100・110・120・115とした 16 世紀後葉～末頃の大型廃棄土坑である。3 回以上の掘り返しと遺物廃棄を繰り返した遺構であり、埋土中から被熱により変形したものを含む夥しい数の瓦類と石塔類が出土した。本調査区では建物遺構は確認できなかったが調査地付近に瓦葺建物や石塔群などの存在が想定され、場の利用を考える上で重要な成果となった。

(2) 基本土層（第37図）

黄灰色シルト質土が基盤層であるが、調査区中央東側より灰色砂・灰色粗砂層が面的に確認される。基盤層はシルト層と砂質土との互層になると考えられる。調査区東端部から東側は現況地形において 1 m 程大分川方向へ地形が下がっており、大分川の氾濫によって侵食された可能性がある。遺構はこれらの基盤層直上に形成されたものと、「茶色土」とした整地層と考えられる 0.1 m ほどの層の上面で形成されるものがあるが、遺構の確認が困難であることから調査では基盤層の面まで機械掘削を行った後に検出作業を行っている。

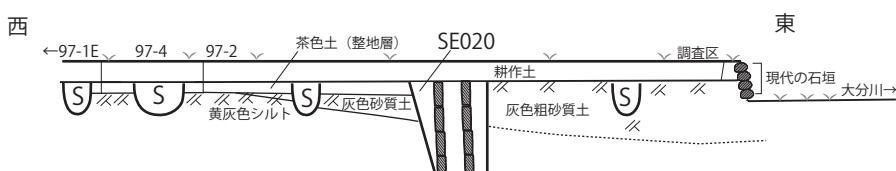
(3) 主要遺構

井戸跡（SE）

97-1 や 97-3 と比較してピットが少なく遺構密度も低いものの、3 基の井戸を確認した。全て C～D 期（16 世紀後半～末）に帰属するものである。

97-2 SE020（【本文・表編】第38図・表26／【図版編】遺構図：第221図、遺物図：第232図1～7、第250図石製容器1、第251図5、第253図2～3、第256図6～7）

調査区中央部の E4 グリッドで検出された。七角形の石組井戸である。一辺 50 cm 程の板材を用いる。検出面での掘方は長径 4.65 m、短径 3.10 m の不整橿円形である。完掘は行っていないが、深さ $2.19 + \alpha$ m を測る。井戸枠内からは五輪塔火輪が出土した。井戸枠の裏込から龍泉窯系青磁小壺Ⅲ～Ⅳ、青花碗 B のほか、備前焼擂鉢（近世 1 期）や土師器椀 C が出土しており、D 期に形成されたと考えられる。



第37図 第97-2次調査区 基本土層模式図

第26表 第97-2次調査区 井戸跡 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SE020	E4	D期			224
SE090	B1	C-2期			224
SE180	D5	C期		×	224

第27表 第97-2次調査区 土坑墓 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
ST001	J3	近世		×	232

第28表 第97-2次調査区 柱穴 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SP026	F2	15c～?	×	×	
SP077	I1	D期	×	銅錢のみ	×
SP125	H5	D期か			232

第29表 第97-2次調査区 性格不明遺構 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SX025	F1	C期	×		×
SX088	I5～I6	D期～18C	×		×
SX091	C-D1～2	C期	×		×
SX095	A4～A5 C4～C5	~18C	×		×
SX185	F6～	C期	×		×

第30表 第97-2次調査区 土坑 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁	遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SK003	B1	D期			224・225	SK098	D1	B期	×		×
SK005	B5・B6	D期			225	SK100	I6	D期			228・229
SK010	A5・B5	C~D期			225	SK102	A5	C期	×		×
SK028	E2	B期	×		×	SK105	D1・D2	C-2期			229
SK035	K5	C-2~D期			225	SK106	H8	B~D期か			230
SK040	A・B2~4	C-2~D-1期			226	SK109	I6	D-1期			228
SK045	B1	不明		×	226	SK110	I6	D期			228・229
SK046	K6	D期			227	SK115	I6	D期	×		228
SK048	K2	B期	×		×	SK116	E2~F2	不明			×
SK050	B1	B-2期			226	SK117	G4	A期			×
SK055	J5	B期	×		×	SK118	D5	B期			×
SK062	J6	B期			227	SK120	I7	D期			228・229
SK065	E6	C期			226	SK130	H5	不明		×	230
SK067	J7	C期			226	SK135	H6	不明		×	230
SK070	A2・A3	C期			226	SK140	E1	B-1期			227
SK075	A3・A4	B-2期			226	SK145	A4	B-1期			231
SK076	I2	AIII-1期			226	SK150	C4	B期			×
SK079	E1	C期			227	SK155	D1	C-1期			230
SK080	B1	C-1期		×	227	SK160	D1	B期			230
SK081	E1	C期			227	SK165	B4	B-2~C-1期			231
SK085	A2・A3	C-1期			226	SK175	D5	C~D期	×		×
SK089	B1	C-2期	×		×	SK190	F5	C-1期			232
SK092	B1	AIII-3期			227	SK195	E6	D期			232
SK094	D1・E1	B期	×		×	SK200	E6	C-2期			232
SK097	E1	B期			227						

97-2 SE090（【本文・表編】第38図・第131表／【図版編】遺構図：第221図、遺物図：第232図8～35）

調査区南西部のB1グリッドで検出された。SK003・030・034・089に切られる。検出面での掘方は長径3.75m、短径3.2mの隅丸方形である。完掘は行っていないが、深さ $0.75+\alpha$ m以上となる。遺構中央のSK003はSE090の井戸枠抜き取り痕の可能性が高く、SE090として掘削した範囲は井戸の裏込め部分に相当すると考えられる。遺物は「褐色土（裏込）」「灰色土（井戸枠内）」として取り上げた。「褐色土」からは多くの遺物が出土しており、瓦質土器風炉、瓦質土器華瓶、中国南部産陶器蓋、朝鮮磁器白磁碗が出土した。図版編第232図31の中国南部産陶器蓋は摘み部が完存する希少な遺物である。土師器皿Cが出土し近世1期の備前焼擂鉢が出土していないことからC-2期に形成したと考えられる。なお、後述するSK003の出土遺物からD期頃に井戸枠抜き取りが行われた可能性がある。

97-2 SE180（【本文・表編】第38図・第132表／【図版編】遺構図：第221図、遺物図：なし）

調査区中央部のD5グリッドで検出された。木製井戸枠を伴なう井戸と考えられる。SK170・175に切られる。検出面での掘方は長径3.95m、短径3.8mの不整楕円形である。完掘は行っていないが、深さ2.05m以上となる。遺物は極めて少なく図示していないが、井戸枠より土師器壺Bn・小皿Cが出土しており、C期に位置づけられる。

土坑（SK）

D期の巨大な廃棄土坑である97-2SK109・100・110・115・120や、SK155・160とSK105のように同一地点で複数回形成される大型土坑の他、SK165やSK040などB期に帰属する土坑が比較的多くみられた。

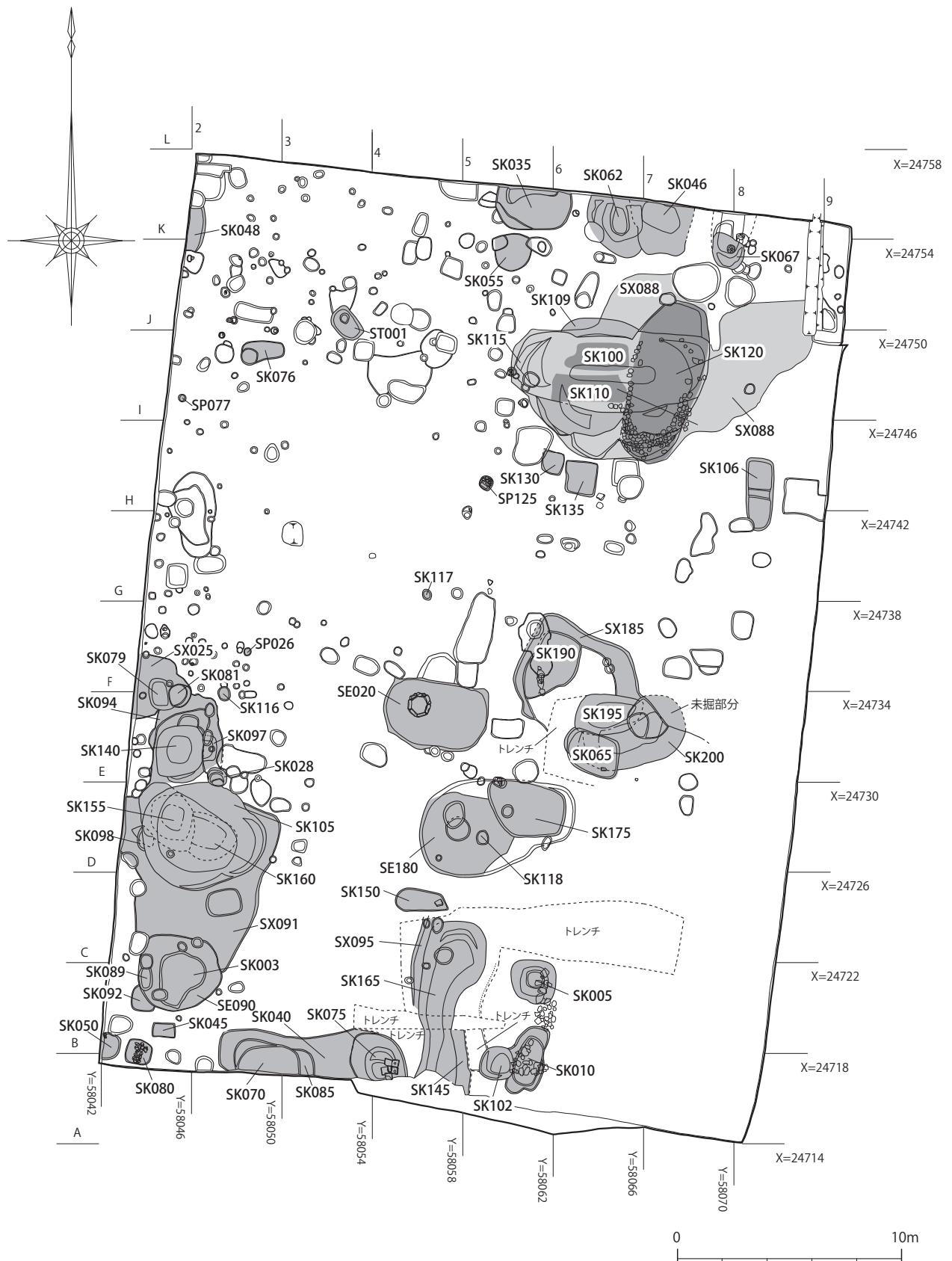
97-2 SK003（【本文・表編】第38図・第130表／【図版編】遺構図：第222図、遺物図：第233図1～3）

調査区南西部のB1グリッドで検出された。SE090の井戸枠抜き取りに伴う遺構と考えられる。長軸2.45m、短軸2.0mの楕円形で検出面からの最大深度は $0.75+\alpha$ mである。完掘は行っていないが、深さ1.0m以上となる。

埋土は3層に分層しており1層は褐灰色土、2層は暗褐灰色土、3層は黒褐色土である。出土遺物は「SK003」と「褐灰色土」から取り上げたが、「褐灰色土」は1層に対応する。D期頃に位置づけられる。

97-2 SK005（【本文・表編】第38図・第130表／【図版編】遺構図：第222図、遺物図：第233図4～17、第250図石臼1～2、第251図6、第253図4～6、第256図8）

調査区中央南部のB5・B6グリッドで検出された。石塔等、石製品がまとまって出土した。長軸2.0m、短軸



第38図 第97-2次調査区 SE・SK・ST・SP・SX掲載位置図(1/250)

1.95 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.95 m である。調査以前は付近に近世墓が存在していたことから、関連する土坑墓の可能性を考えたが、骨や供獻遺物等は出土していない。埋土は 4 層に分層しており、1 層は褐灰色土、2 層は暗褐灰色土、3 層は灰褐色土、4 層は灰色砂である。出土遺物は「SK005」、1 ~ 4 層に対応する「暗褐灰色土」で取り上げた。「SK005」と「暗褐灰色土」からの出土遺物は、ともに遺構検出時のものである。土師器皿 C、白磁皿 E-5、龍泉窯系青磁碗 E 類、備前焼擂鉢（近世 1 期）が出土した。土師器小皿 C の形態からみて D 期に位置づけられる。

97-2 SK010（【本文・表編】第 38 図・第 130 表／【図版編】遺構図：第 222 図、遺物図：第 233 図 18 ~ 19、第 250 図 茶臼 5、第 253 図 7 ~ 9、第 255 図 2 ~ 3、第 257 図 7）

調査区中央南部の A5・B5 グリッドで検出された。SK102 に切られる。長楕円形プランの土坑で、埋土最上層は人頭大の礫や石塔で埋められていた。土坑は長軸 3.2 m、短軸 1.65 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.5 m である。礫の出土状況や規模からみて SK005 と同様の遺構と考えられる。出土遺物は「SK010」「暗褐灰色土」「褐灰色土」から取り上げた。「SK010」と「褐灰色土」からの出土遺物は、ともに遺構検出時のものである。遺物は瓦質土器蓋や椀が出土しており、C ~ D 期に位置づけられる。

97-2 SK035（【本文・表編】第 38 図・第 130 表／【図版編】遺構図：第 222 図、遺物図：第 233 図 22 ~ 23）

調査区中央北端の K5 グリッドで検出された。SK069 を切る。長軸 3.4 m、短軸 1.9+ α m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.6 m である。埋土は 4 層に分層しており、1 層は褐灰色土、2 層は暗褐灰色土ブロック、3 層は黄灰色土、4 層は灰色砂である。出土遺物は「褐灰色土」「黄灰色土」から取り上げたが、それぞれ 1 層、3 層に対応する。土師器皿 C、備前焼擂鉢（近世 1 期）が出土しており C-2 ~ D 期に位置づけられる。

97-2 SK040（【本文・表編】第 38 図・第 130 表／【図版編】遺構図：第 223 図、遺物図：第 233 図 24 ~ 36、第 234 図 1 ~ 15、第 258 図 1）

調査区南西部の A・B2 ~ 4 グリッドで検出された。SK070・SK075・SK085 を切る遺構で、上記の遺構の上位を掘削する大型の土坑である。長軸 4.6+ α m、短軸 2.0+ α m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.6 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は灰白色土、2 層は黒褐色砂、3 層は暗白色土である。出土遺物は「SK040」「灰色土」「西側」「西側灰色土」「東側」「東側灰色土」「暗灰白色土」から取り上げた。東西は中央に設定した南北ベルトからみた西側・東側を示す。「灰色土」は 1 層に相当し、土師質土器、青花皿 F、青白磁梅瓶、砥石が出土している。「暗灰白色土」は 3 層に相当し、瓦質土器釜、朝鮮陶器碗などが出土地した。C-2 ~ D-1 期に位置づけられる。

97-2 SK070（【本文・表編】第 38 図・第 130 表／【図版編】遺構図：第 223 図、遺物図：第 235 図 17 ~ 27）

調査区南西部の A2・A3 グリッドで検出された。SK085 を切り、SK040 に切られる。長軸 2.7 m、短軸 1.35+ α m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.9 m である。埋土は 2 層に分層しており、1 層は褐灰色土、2 層は暗褐灰色土である。褐灰色土から土師器壺 Bn がまとまって出土しており、B 期の様相を持つが、SK070 に切られる SK085 より土師器皿 C が出土することから、C 期の遺構と考えられる。

97-2 SK085（【本文・表編】第 38 図・第 131 表／【図版編】遺構図：第 223 図、遺物図：235 図 38）

調査区南西部の A2・A3 グリッドで検出された。SK040・070 に切られる。長軸 1.2+ α m、短軸 0.65+ α m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.6 m である。埋土は黒褐色土の単層である。やや薄手の土師器皿 C が出土しており C-1 期に位置づけられる。

97-2 SK045（【本文・表編】第 38 図・第 130 表／【図版編】遺構図：第 223 図、遺物図：なし）

調査区西部南端の B1 グリッドで検出された。長軸 1.0 m、短軸 0.6 m のほぼ長方形で検出面からの最大深度は 0.5 m である。埋土は 2 層に分層しており、1 層は暗褐色土、2 層は灰褐色砂である。出土遺物は 1 ~ 2 層あわせて取り上げを行った。土師質土器片のみの出土であり時期は不明である。

97-2 SK050（【本文・表編】第 38 図・第 130 表／【図版編】遺構図：第 223 図、遺物図：第 234 図 38 ~ 41）

調査区西部南端の B1 グリッドで検出された。長軸 1.2 m、短軸 0.7+ α m で、調査区外に伸びる。検出面から

の最大深度は0.35mである。埋土より完形の土師器坏Bnが4点出土した。出土遺物は「SK050」と「褐灰色土」から取り上げた。B-2期に位置づけられる。

97-2 SK065（【本文・表編】第38図・第130表／【図版編】遺構図：第223図、遺物図：第235図8～10）

調査区中央のE6グリッドで検出された。SX185、SK200を切る。長軸2.3m、短軸1.8mの楕円形で検出面からの最大深度は0.4mである。埋土は2層に分層しており、1層は灰白色砂、2層は褐灰色土である。出土遺物は「SK065」と「灰白色砂」から取り上げた。「SK065」は遺構検出後の一段掘り下げ時の遺物である。「灰白色砂」からは土師器皿Cや瓦質土器火鉢が出土しており、C期に位置づけられる。

97-2 SK067（【本文・表編】第38図・第130表／【図版編】遺構図：第223図、遺物図：第235図11～16、第255図4）

調査区北東部のJ7グリッドで検出された。埋土中より五輪塔水輪（第255図4）を含む人頭大の礫が多量に出土した。長軸1.8m、短軸1.4mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.8mである。出土遺物は「SK067」と「褐灰色土」で取り上げた。土師器坏B・皿C、備前焼擂鉢（中世6期）が出土しており、C期に位置づけられる。

97-2 SK075（【本文・表編】第38図・第131表／【図版編】遺構図：第223図、遺物図：第235図28～31、第253図10～12、第255図5、第257図1）

調査区中央南端のA3・A4グリッドで検出された。SK040に切られる。長軸2.3m、短軸 $2.3+\alpha$ mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.75mである。埋土は4層に分層しており、1層は褐灰色土、2層は暗褐灰色土、3層は黒褐色土、4層はにぶい黄褐色ブロック土である。出土遺物は「褐灰色土」、「暗褐灰色土」、「黒褐色土」から取り上げたが、それぞれ1層、2層、3層に対応する。「褐灰色土」からは五輪塔部材が数点出土した他、土師器坏Bn、土製品灯明芯受けが出土しておりB-2期に位置づけられる。

97-2 SK076（【本文・表編】第38図・第131表／【図版編】遺構図：第223図、遺物図：第235図32～34）

調査区北東部のI2グリッドで検出された。SK006に切られる。長軸1.8m、短軸0.8mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.4mである。埋土は灰色土の単層である。土師器坏A・小皿AII・燭台A1類が出土しており、AIII-1期に位置づけられる。

97-2 SK046（【本文・表編】第38図・第130表／【図版編】遺構図：第224図、遺物図：第234図16～34、第258図2～5）

調査区中央北端のK6グリッドで検出された。B期の廃棄土坑であるSK062・093を切る。長軸 $2.25+\alpha$ m、短軸2.25mのおそらく楕円形で検出面からの最大深度は1.25mである。埋土は9層に分層しており、1～2層は灰色土、3～6層は暗灰黄褐色土、7～8層は暗褐色土である。3～6層は土坑の掘り返し後の堆積の可能性がある。埋土には各層ともブロック土を多く含んでおり、人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物は「褐灰色土」「灰色土」「黄灰色土」「暗灰黄褐色土」「褐灰色土（2層）」「暗褐色土」から取り上げた。最下層である「暗灰褐色土」には青花F群の皿を含んでおり、D期に位置づけられる。

97-2 SK062（【本文・表編】第38図・第130表／【図版編】遺構図：第224図、遺物図：第234図45～48、第235図1～7）

調査区中央北端のJ6グリッドで検出された。SK046に切られる。長軸 $2.60+\alpha$ m、短軸 $1.9+\alpha$ mのおそらく楕円形で検出面からの最大深度は2.1mである。埋土は15層に分層しており、遺物は10～13層を「黒褐色土」、14～19層を「暗褐色土」、20～25層を「灰色土」として取り上げた。各層には土師器坏B・大内A式土師器が伴う。また類例の少ない軒平瓦（第235図7）が出土した。B期に位置づけられる。

97-2 SK079（【本文・表編】第38図・第131表／【図版編】遺構図：第224図、遺物図：第235図35～36）

調査区中央西端のE1グリッドで検出された。遺物包含層であるSX025掘削後に検出した。SK081に切られる。長軸1.4m、短軸1.15mの楕円形で検出面からの最大深度は0.6mである。3層に分層しており、1層は灰色土、2層は褐灰色土、3層は黄灰色土である。遺物は1層に対応する「灰色土」より出土した。遺物は龍泉窯系青磁把手や土師器皿Cが出土しておりC期に位置づけられる。

97-2 SK081（【本文・表編】第38図・第131表／【図版編】遺構図：第224図、遺物図：第235図37、第253図13）

調査区中央西端のE1グリッドで検出された。遺物包含層であるSX025掘削後に検出した。SK079を切る。長軸1.0m、短軸1.0mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.2mである。埋土は黒褐色土の単層である。土師器皿Cとともに皿型化した土師器坏B(第235図37)が出土した。C期に位置づけられる。

97-2 SK080（【本文・表編】第38図・第131表／【図版編】遺構図：第224図、遺物図：なし）

調査区西部南端のB1グリッドで検出された。遺構中央に拳大礫が並列したような状況で出土した。長軸1.1m、短軸1.0mのほぼ台形で検出面からの最大深度は0.5mである。埋土は褐灰色土の単層である。土師器坏B・薄手の皿Cが出土しており、C-1期に位置づけられる。

97-2 SK092（【本文・表編】第38図・第131表／【図版編】遺構図：第224図、遺物図：第235図42）

調査区南部西端のB1グリッドで検出された。SK089、SE090に切られる。長軸1.2m、短軸1.0mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.8mである。埋土は褐灰色土の単層である。金雲母を多量に含む土師器坏A(第235図42)が出土している。AⅢ-3期頃に位置づけられる可能性がある。

97-2 SK097（【本文・表編】第38図・第131表／【図版編】遺構図：第224図、遺物図：第236図5）

調査区中央西端のE1グリッドで検出された。たまり状の遺構であるSX094掘削後に検出した。SK140を切る。長軸1.05m、短軸0.05mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.45mである。埋土は黒褐色土の単層である。土師器坏Bや土師質土器鍋Cが出土しており、B期頃に位置づけられる。

97-2 SK140（【本文・表編】第38図・第132表／【図版編】遺構図：第224図、遺物図：第244図7～16、第250図10）

調査区中央西端のE1グリッドで検出された。遺物包含層であるSX094掘削後に検出した。SK097に切られる。長軸2.15m、短軸2.10mのほぼ円形で検出面からの最大深度は1.75mである。埋土は3層に分層しており、1層は黄灰色土、2層は褐灰色土、3層は暗褐灰色土である。出土遺物は「SK140」「黄灰色土」「暗褐灰色土」から取り上げた。土師器坏Bn・燭台B、備前焼擂鉢の形態からみてB-1期ごろに位置づけられる。

97-2 SK100・109・110・120

調査区中央北部のI6グリッドで検出された大型土坑群である。遺構上面にはSX088とした遺物包含層がアーベー状に分布しており、これを除去すると拳大～人頭大礫が「U」字型に連なって検出された。この礫群を含む南北方向の長楕円形土坑をSK120、礫群より西側で確認した焼土や炭を多く含む隅丸方形プランの土坑をSK100、SK100に切られる同プランの土坑をSK110、これらの遺構の下位で検出した東西方向に長い大型土坑をSK115とした。さらにSK115に大部分が削平され一部のみ残存するSK109が存在する。

SK120とSK100は切り合い関係をもたないため前後関係は不明であるものの、SK109→SK115→SK110の順に形成されていったと考えられる。SK100・110は遺構の規模からみてSK115の最終埋没土、もしくは掘り返し後の堆積層である可能性がある。

出土遺物の様相からみて、D期の近接した時期に南北方向(SK109・120)と東西方向の長土坑(SK115)が交互に形成されていったと見られる。

97-2 SK100（【本文・表編】第38図・第131表／【図版編】遺構図：第225・226図、遺物図：第236図7～23、第251図7、第252図2、第257図2、第258図6）

SX088掘削後に検出した。SK110・115を切る。長軸3.0+ α m、短軸2.4mの楕円形で検出面からの最大深度は0.3mと浅い。大型の土坑で、SK115の最終埋没土、もしくは掘り返しの可能性がある。埋土中には焼土を多量に含むことから火災処理層の可能性が高い。出土遺物は「サブトレーンチ北側黒褐色土」「黒褐色土」として取り上げた。「黒褐色土」からは被熱した瓦を含む平瓦コンテナ3箱、丸瓦コンテナ1.5箱、博コンテナ0.5箱が出土した。土師器皿Cの形態からD期に位置づけられる。

97-2 SK109（【本文・表編】第38図・第131表／【図版編】遺構図：第225・226図、遺物図：第239図2～6）

調査区中央北部のI6グリッドで検出された。遺構の大部分をSK115によって削平される。連続土坑群の形成

最初期の土坑と考えられる。長軸 6.2 m、短軸 3.2 m 程の橢円形と考えられ検出面からの最大深度は 0.3 m である。出土遺物は「SK109」「褐灰色土」から取り上げた。厚手の土師器皿 C や備前焼徳利が出土しており D-1 期に位置づけられる。

97-2 SK110（【本文・表編】第 38 図・第 131 表／【図版編】遺構図：第 225・226 図、遺物図：第 239 図 7～12、第 258 図 10）

調査区中央北部の I6 グリッドで検出された。SK115 を切り SK100 に切られる。長軸 $3.0 + \alpha$ m、短軸 2.2 m の橢円形で検出面からの最大深度は 0.2 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は「暗褐色土」、2 層は「褐色土（炭層）」、3 層は「黒褐色土」であるが「褐色土」として一括して遺物を取り上げた。焼土を微量に含んだ層群である。遺物は被熱した平瓦片や土師質土器羽釜、備前焼擂鉢（近世 1 期）などが出土した。D 期に位置づけられる。

97-2 SK115（【本文・表編】、第 38 図・第 132 表／【図版編】遺構図：第 225 図、遺物図：第 239 図 13～22、240～242 図、243 図 38～53、250 図 石製容器 2、252 図 空風輪 3・4、254 図 1～8、255 図 6～12、256 図 1、257 図 3・6・8・9、258 図 銅製品 2）

調査区北東部の I6 グリッドで検出された。長軸 8.2 m、短軸 4.4 m の長橢円形で、検出面からの最大深度は 2.3 m である。埋土の大部分は大量の石塔を含む人頭大の礫と瓦によって埋められていた。礫層の下位には礫をほとんど含まない焼土粒を微量に含む土「褐灰色土」が堆積する。埋土中からはコンテナ 6.5 箱分の平瓦、コンテナ 3.3 箱分の丸瓦、若干の壇が出土した。瓦には被熱をうけたものも多い。その他、鎌倉末期に遡る可能性のある五輪塔水輪（第 256 図 1）を最古とする五輪塔の部材や無縫塔・宝塔の塔身、空風輪や凝灰岩製品などが豊富に出土した。水輪や塔身など球体の石材の量が多いことから、石塔類の解体後、必要部材は別途転用し、転用しにくい球体部材を廃棄したと考えられる。「礫層」中からは土師器皿 C や青花皿 F 群、備前焼擂鉢（近世 1 期）などが出土しており D 期に位置づけられる。なお、SK120 でも述べるように SK115「礫層」中には SK120「礫層」に帰属する遺物も混在している。最下層である「褐灰色土」からは土師器壺 Bn・薄手の皿 C など C-2 期の古相を呈す遺物も含まれており、廃棄土坑の形成が C 期まで遡る可能性がある。

97-2 SK120（【本文・表編】、第 38 図・第 132 表／【図版編】遺構図：第 225・226 図、遺物図：第 243 図 1～14、第 244 図 1～6、第 250 図 9、3、第 252 図 5）

調査区北東部の I7 グリッドで検出された。SK115 を切る。検出時は遺構プランにそって拳大～人頭大礫が「U」字型に分布していた。礫の内側には「灰褐色土」が堆積しており、礫層を掘り返して再堆積した層である可能性がある。類似した土坑は 97-1ESK135 や SK255 等に見ることができる。長軸 7.2 m、短軸 3.3 m の橢円形で検出面からの最大深度は 1.4 m であるが、SK120 の下位層である「礫層」と SK115 の埋土である「礫層」が重複する部分は埋土の区分が難しく、両遺構の埋土を混在させ遺物を取り上げている。したがって、実際は 1.0 m ほどの深さのある土坑と考えられる。

出土遺物は「褐灰色土」「礫層」「灰色土」から取り上げた。埋土中からはコンテナ 8.5 箱分の平瓦、コンテナ 6 箱分の丸瓦、若干の壇が出土した。瓦には被熱を受けたものも多い。その他、五輪塔部材や石製壠、土師器皿 C や青花皿 F 群や備前焼擂鉢（近世 1 期）などが出土しており、D 期に位置づけられる。

97-2 SK105・155・160

調査区中央西端の D1・D2 グリッドで検出された大型土坑群である。SK105 は遺物包含層である SX094 除去後に検出した。SK105 挖削後、SK155 が SK160 を切った状態で検出した。97-1SK010 と SK150・160 に類似した形態の土坑で、同地点で廃棄土坑が連続して形成されたものと考えられる。B 期に SK160、C-1 期に SK155、C-2 期に SK105 が形成されている。

97-2 SK105（【本文・表編】第 38 図・第 131 表／【図版編】遺構図：第 226 図、遺物図：第 237 図 1～37、第 238 図 38～44、1～24、第 258 図 7～9）

SX094 挖削後に検出した。SK155・160 を切る。長軸 5.5 m、短軸 4.8 m のほぼ円形で検出面からの最大深度

は 1.1 m である。埋土は 4 層に分層しており、1 層は「褐灰色土」、2 層は「暗褐灰色土」、3 層は「暗灰色土」、4 層は「灰色土」である。出土遺物は個々の層から取り上げた。遺存率の良い遺物が多く出土しており、「褐灰色土」から土師器小皿 B・耳皿 Bn、瓦質土器浅鉢形火鉢 C、青白磁梅瓶、朝鮮陶器皿、瓦類が出土した。最下層である「灰色土」からは土師器坏 B を中心とした遺物が出土した。SK150・160 の遺物の様相が B-2 ~ C-1 期を示すことから、C-2 期に形成され D-1 期頃に埋没した遺構と考えられる。

97-2 SK155（【本文・表編】第 38 図・第 132 表／【図版編】遺構図：第 227 図、遺物図：第 245 図 1～5）

調査区南部西端の D1 グリッドで検出された。SK160 を切り、105 に切られる。長軸 3.25 m、短軸 2.25 m の楕円形で検出面からの最大深度は 1.85 m である。埋土は「褐灰色土」の単層である。土師器坏 Bn と薄手の土師器皿 C が出土しており、C-1 期に位置づけられる。

97-2 SK160（【本文・表編】第 38 図・第 132 表／【図版編】遺構図：第 227、遺物図：245 図 6～11、第 258 図 11～12）

調査区南部西端の D1 グリッドで検出された。SK105・SK155 に切られる。長軸 2.1 m、短軸 1.9 m の楕円形で検出面からの最大深度は 1.8 m である。埋土は炭化物を微量に含む「暗褐灰色土」の単層である。出土遺物は土師器坏 Bn を主体とするものであり B 期に位置づけられる。

97-2 SK106（【本文・表編】第 38 図・第 131 表／【図版編】遺構図：第 227 図、遺物図：第 239 図 1）

調査区中央端東の H8 グリッドで検出された。長軸 3.2 m、短軸 1.15 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.65 m である。埋土は「灰色砂」の単層である。出土遺物は極めて少ないが青花片の出土から B ~ D 期頃の遺構と考えられる。朝鮮陶器象嵌青磁碗が出土している。

97-2 SK130（【本文・表編】第 38 図・第 132 表／【図版編】遺構図：第 227 図、遺物図：なし）

調査区中央の H5 グリッドで検出された。長軸 0.9 m、短軸 0.9 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 0.4 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は灰白色砂、2 層は灰色土、3 層は黄褐色ブロック土である。遺物は出土していない。

97-2 SK135（【本文・表編】第 38 図・第 132 表／【図版編】遺構図：第 227 図、遺物図：なし）

調査区中央の H6 グリッドで検出された。長軸 1.4 m、短軸 1.35 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 0.4 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は灰白色砂、2 層は灰色土、3 層は黄褐色ブロック土である。遺物は出土していない。

SK130・135 とも時期は不明であるが同一の形態、埋土をもっており、関連する遺構の可能性がある。

97-2 SK145・165

調査区中央南端の B4 グリッドで検出された土坑群である。遺構は遺物包含層である SX095 を除去後に検出した。SK165 が SK145 を切った状態で検出した。

97-2 SK145（【本文・表編】第 38 図・第 132 表／【図版編】遺構図：第 228 図、遺物図：第 244 図 17～27、第 257 図 4）

調査区中央南端の A4 グリッドで検出された。SK165 に切られる。長軸 $3.1 + \alpha$ m、短軸 1.6 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 1.1 m である。直線的なプランをもち、南側が調査区外に延びるため溝跡の可能性も考えられる。埋土は炭化物を多く含み、出土遺物は「SK145」「上層」「下層」から取り上げた。土師器坏 Bn、土師質土器鍋 D が出土しており、B -1 期に位置づけられる。

97-2 SK165（【本文・表編】第 38 図・第 132 表／【図版編】遺構図：第 228 図、遺物図：第 245 図 12～30、第 254 図 9）

調査区中央南端の B4 グリッドで検出された。SK145 を切る。長軸 4.6 m、短軸 2.7 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 1.0 m である。出土遺物は「茶褐色土」「炭層」から取り上げた。土師器坏 Bn・極小皿 B が複数個体出土しているほか、朝鮮灰青沙器皿などが出土している。図示していないが土師器皿 C が出土しており、B-2 ~ C-1 期に位置づけられる。

97-2 SK190（【本文・表編】第 38 図・第 132 表／【図版編】遺構図：第 229 図、遺物図：第 245 図 31）

調査区中央の F5 グリッドで検出された。SK114、SX185 に切られる。長軸 3.3 m、短軸 1.95 m のほぼ円形で検出面からの最大深度は 0.25 m である。埋土は単層である。薄手の土師器皿 C が出土しており、C-1 期に位置

づけられる。

97-2 SK195（【本文・表編】第38図・第132表／【図版編】遺構図：第229図、遺物図：第245図32～41、第250図4、第254図11、第256図2）

調査区中央のE6グリッドで検出された。SX185に切られる。長軸3.1m、短軸1.8mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.85mである。埋土は単層である。土師器椀Cが出土しており、D期に位置づけられる。

97-2 SK200（【本文・表編】第38図・第132表／【図版編】遺構図：第229図、遺物図：第246図1～23、第250図11、第254図12、第256図3～4）

調査区中央のE6グリッドで検出された。SK195、SX185に切られる。長軸5.2m、短軸2.7mのほぼ円形で検出面からの最大深度は1.7mである。埋土は9層に分層しており、1層は灰色砂、2層は灰褐色土、3層は暗灰褐色土、4層は褐灰色土、5層は灰褐色砂、6層は灰白色砂、7層は灰褐色砂、8層は暗灰褐色砂、9層は茶褐色砂である。出土遺物は「灰色砂」「褐灰色土」「小礫層」からそれぞれ取り上げたが、1層、2～4層、5～9層に対応する。「灰色砂」からは土師器坏B・やや厚手の皿C、土師質土器鍋Eが出土した。「褐灰色土」からは土師質土器鍋D、白磁皿E-5が出土しており、C-2期に位置づけられる。

埋葬遺構（ST）

97-2 ST001（【本文・表編】第38図・第130表／【図版編】遺構図：第230図、遺物図：なし）

調査区中央北西端のJ3グリッドで検出された。長軸1.5m、短軸1.0mの隅丸方形で、検出面からの最大深度は0.55mである。人歯が出土した。近世以降の土坑墓と考えられる。

柱穴遺構（SP）

97-2 SP125（【本文・表編】第38図・第132表／【図版編】遺構図：第231図、遺物図：第247図1～2、第248図3～4）

調査区中央のH5グリッドで検出された。長軸0.9m、短軸0.9mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.35mである。床面直上で拳大の礫と大型の雁振瓦（第247図）、平瓦、塼が出土した。調査区の基盤層は砂層であることから建物の柱を据えるための基礎遺構と考えたが、SP125の他に展開する柱穴は確認できなかった。時期の分かる遺物は出土していない。大型で造りの良い雁振瓦は万寿寺に関連する建物遺に葺かれたと想定される。（堀麗・長直信）

その他の遺構（SX）（【本文・表編】第38図・第130・131・132表／【図版編】遺構図：第226図、遺物図：第237図1～37、第238図38～44、1～24、第258図7～9）

97-2SX025・088・091・094・095・185とする遺物包含層を確認した。これらの遺構は大型遺構が密集する地点で確認されることから、遺構の密集した地点の窪みに堆積した層群と考えられる。各層からは多くの遺物が出土した。

（4）出土遺物

当調査区は他の調査区と比較して面積が小さく、また、遺構密度が低いにも関わらず、軒瓦を含む多量の瓦類と石塔類が出土した点が大きな特徴である。瓦と石塔については第VI章において述べることとし、ここでは土器・陶磁器類を中心に一括性の高い遺物及び特殊遺物について概観しておく。なお、以下の図版番号は全て【図版編】のものである。

■一括資料 B期は、SK050・140・145・160が代表的な一括資料である。B期は97-1や97-3含めて大型廃棄土坑の出現期にあたり、廃棄空間の形成時期を示す意味でも重要な資料群である。SK050は小型の土坑中より坏Bnが完形で出土した遺構で、出土状況から埋納遺構の可能性がある。第234図41の坏Bnは口径15.8cmと大型で、大きく外反する形態をもち第234図38～40も法量分化後的小皿形態であることから、B-2期の一括資料と考えられる。SK140からは完存する土師器燭台B1（第244図9）で、当該期の燭台の形態を示す。その他、第244図11・12の中世5b期の備前焼擂鉢や甕の型式から見ても16世紀初頭前後と考えられる資料群である。また、掘り返しが多く一括性は担保できないもののSK062もB期の土坑であり、1/2が遺存する類例

の少ない軒平瓦（第235図7）の存在は注目される。

C期は坏Bnを多く含むSK070や075、105、160、165、155などの遺構や、皿Cが主体となるSK067、SK200などが当該期の資料である。SK105はSK155・160の上部を掘り返して形成される大型土坑であり、SK155・160の遺物が混入しているが、その他の陶磁器類を含めC期の様相を示す多くの遺物群が出土している。SK067からは水輪と共に薄手の皿C（第235図13～15）が出土しており、C-1期に相当する。SK200からは薄手の皿Cや、やや厚手の皿Cとともにほぼ完形の耳皿C（第246図15）、燭台（第246図17）が出土した。C-2期に相当する。また、個別遺構図は掲載していないがSK089もC-2期頃の遺構で、ほぼ完形の耳皿C（第235図39）が出土した。その他、SK075では灯明芯受けが（第235図29）、SK105・155・165では極少皿B（第237図1・第245図1・19・20）、耳皿Bn（第237図20）が出土している。これらの武家儀礼に関連する遺物群の存在から、B～C期には当地が武家地的な性格を持っていた可能性がある。

D期はSK109・100・110・115・120と連続して形成された大型土坑群が代表的な資料である。SK110・115・120からは焼けた土壁（第241図51）、被熱のため大きく焼けひずんだ瓦（第239図11、第240図35、第241図48）や、備前焼などの他の遺物と融着した瓦（第243図50・51・14）など、火災に伴って変形した瓦類を多く含んでいることから大規模な火災に伴う火災処理土坑群と考えられる。遺構の重複が著しいため、純粋な一括資料ではないものの、D期の様相を良好に示す土師器・瓦質土器・土師質土器、国内外の陶磁器類が豊富に出土した。また、詳細は第VI章にて述べるが瓦類と石塔類の多さは特筆される。SK115褐灰色土からは遺存状態の良い土師器坏Bnが多く出土したほか、薄手の皿Cなど古相を示す遺物群も多い。SK115礫層からは良質な青花皿F群（第240図32）が出土しており、陶磁器組成としても最新の様相を示す。

なお、本調査区は他の調査区と異なり土師器坏Aは極めて少ない。A期に相当する遺構もわずかであり、B期以前は積極的な開発は行われていなかったようである。

■その他特殊遺物 第232図6は景德鎮窯系青花の碗でB群と考えられる。外面に唐草文？を描く端反の口縁端部をもつ。豊後府内でもB群の出土は少なく、希少な例である。

第232図12～35はC期の井戸跡SE090褐色土出土遺物で、裏込の最上層から出土した遺物群である。一括性は低いもののバリエーションに富む遺物が出土した。20の土師器皿Cは器壁8mm、口縁部形態はe類と新相の属性をもつ。22は類例に乏しい瓦質土器である。口縁端部にかえり状の突起があることから蓋の可能性もある。97-2SK105暗褐灰色土遺物（第238図4）と同一個体の可能性がある。27は大型の瓦質土器風炉Aである。口縁部体部にはスタンプ文が確認でき、体部には透かしが入る。丁寧な成形で、かつ焼成も良好の良質な瓦質土器である。28は外面に小振りの巴文スタンプを連続して押印する小型の瓦質土器風炉Aの底部、もしくは仏具などと考えられる。底部は欠損しているが三足の脚部がつく。31は中国南部産陶器蓋である。外面に褐色（茶色）釉がかかる。ボタン状の摘みをもち天井部の1/2ほどは回転ヘラケズリによって平滑に仕上げられる。完形に近い資料である。35は97次調査では出土例の少ない朝鮮磁器白磁碗である。高台部には削り込みがあり畳み付け部分には砂目が付着する。乳白色の白釉がかかる。

第236図3・第245図18は灰青紗器である。2/3以上が残存する。第236図3は見込み部と高台に6箇所の目痕が残る。15世紀末～16世紀初頭にあたるB期に流入した朝鮮陶器として重要である。第245図18は16世紀前葉にあたるC-1期の土器群と共に伴した資料である。

第236図6は景德鎮窯系青花の碗である。外面には印刻された松？状の文様をもち黄緑色の釉のかかる外面青磁碗である。内面には雨降り文状のじんじん文様が発色の鈍い青緑色のコバルト釉によって描かれる。端反の口縁端部をもち器形のプロポーションからみてB群の一種と考えられる。第239図1は朝鮮陶器象嵌青磁碗である。内面に連続した円文を外面に圈線状の文様を象嵌する。87次調査の際も数点の象嵌青磁が出土しているが、調査区全体でも希少な遺物である。

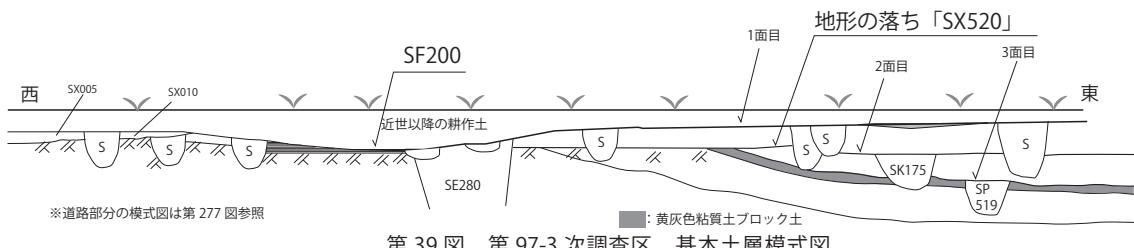
第240図27は青磁の大型品で、太鼓形銅盤と思われる体部片である。87-7からも類似した青磁が報告されている（大分市教育委員会2010 p26）。（長直信）

第5節 第97-3次調査区

(1) 概要

97-1 北端より約 10 m北側に位置する東西 160 mの細長い調査区である。調査区西端部より 11 m西側では町30次調査が行われており、「片側町（魚ノ店）」を構成すると考えられる柱穴群や土坑、井戸などと共に石列と階段をともなう東西道路が確認されている（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2010）。また、南北道路と西側道路側溝を確認した町 87-17・18 トレンチ、15世紀代の井戸跡と東側道路側溝を確認した町 87-14 トレンチの一部及び五重塔想定地で、「空閑地」を検出した町 87-12 トレンチの一部が重複する。

調査の結果、97-1SF100 の延長部にあたる 14 mの幅員をもつ巨大な南北道路 SF200 や道路上面より掘削される南北溝群、調査区西側では町 30 次調査の石列と東西道路延長部 SF490 を確認した。南北道路 SF200 の西側では東西約 10 mの幅で極めて高い密度で分布するピット群を確認したほか、14世紀代の斜行する南北溝（SD195・335）や廃棄土坑（SK070）、土器埋設遺構（SJ280）を確認した。南北道路東部は五重塔想定地として町 87-12 調査を行った地点である。今回の調査区において遺構密度は極めて低く、閑散とした状態であり、97-1E の調査成果と合わせて「空閑地」であることを追認した結果となった。なお、南北道路の下層からは 15世紀後半に埋没した井戸跡 1 基（SE280）が確認されており、南北道路形成時期を知る上で重要な成果がえられた。調査区全体が 16世紀後半の東西・南北の道路に面していることもあり井戸や廃棄土坑などが展開しない「表」空間であったと考えられる。14世紀後半の溝や土坑の存在は町 30 次調査においても確認されており、当該期の遺構の面的な広がりを確認することができた。



第39図 第97-3次調査区 基本土層模式図

(2) 基本土層（第39図）

97-1 や 97-2 と同様に、基盤層である黄灰色シルト質土上に 15世紀代の遺構が形成され、一部に部分的な整地層をはさみつつ、16世紀初頭前後から 16世紀後半にかけての遺構が展開する。調査区中央部付近にあたる南北道路 SF200 部分は近世の土地造成等により遺構上面の攪乱が大きく、明確な道路面の確認はできない。また、西側は遺構検出面より 0.1 ~ 0.4m 低い位置にある東西道路 SF490 や、これに伴う石列 SX300・305 や 16世紀後半の土坑など全体を被覆する SX005・SX010 とした遺物包含層が確認される。16世紀代の遺構はこの包含層除去後に検出された。南北道路東側は整地層を挟まず、黄灰色シルト質土上に 15 ~ 16世紀代の遺構が少量検出された。なお、南北道路東端部より 25 m東側から地形の傾斜 SX520 が確認され、図に示すように傾斜地を整地しながら複数の遺構面が確認できる。

面的な検出を行えていないものの、図版編第 261 図調査区南壁土層断面図による所見では、黄灰色粘質土ブロック土とした識別しやすい層の上面より形成される SP519 が確認でき、糸切痕をもつ土師器坏の底部片が出土した。12世紀以降に形成された遺構面と考えられる（3面目）。その後、SX520 上には厚い整地層が確認され、その上面より土師器坏 A を含む SK421 が形成されることから、SX520 を埋める整地は 15世紀代のものと考えられる（2面目）。その後、2面目の遺構を埋める整地土を挟んで、15世紀～16世紀代の遺構が展開する面が確認できる（1面目）。以上の地形の変化点とこれを埋める土地造成の様相は 97-1E で述べた町 87 次調査東側トレンチで確認された「落ち」地形の様相に類似しており、町 97 次調査区の東部にはこのような地形の落ちが帶状、もしくは大分川にそって扇状に存在していた可能性が高い。この SX520 は 97-1E SX1600 の北側延長部と考えられる。今回の調査結果から、この地形の傾斜を 15世紀の後半頃までにある程度平坦に成形し、土地利用を拡大していった可能性が高いと判断される。

第31表 第97-3次調査区 掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	規模	梁行(cm)	桁行(cm)	方位	床面積(m ²)	場所	遺構番号	規模	梁行(cm)	桁行(cm)	方位	床面積(m ²)	場所
SB415	2×2(5)	3.39	4.42	N-0° -E	15.0	東西道路前面	SB445	3×1(2)	3.82	4.56	N-3.01° -E	17.4	東西道路前面
SB420	2×5	2.10	4.58	N-0.64° -W	9.6	東西道路前面	SB450	1×2(4)	2.89	4.28	N-0.5° -W	12.4	東西道路前面
SB425	3×4	2.56	4.67	N-3.69° -E	12.0	東西道路前面	SB455	1(2)×4(6)	2.35	5.90	N-2.21° -E	13.9	南北道路前面
SB430	2×4	3.91	4.50	N-0° -E	17.6	東西道路前面	SB460	2×7	2.54	7.90	N-0° -E	20.1	南北道路前面
SB435	1(3)×5	3.51	6.40	N-1.1° -E	22.5	東西道路前面	SB465	3×4	2.62	6.11	N-0° -E	16.0	南北道路前面
SB440	3×3(5)	3.19	5.29	N-5.22° -E	16.9	東西道路前面	SB470	3(4)×5	2.48	7.47	N-0° -E	18.5	南北道路前面

第32表 第97-3次調査区 掘立柱建物跡出土遺物一覧表

遺構名	柱穴	出土遺物	時期	遺構名	柱穴	出土遺物	時期
SB415	c(SP344)	出土遺物なし	C期~	SB440	a(SP392)	鉄製品：鉄釘	C期~
	O(SP046)	小皿A II			b(SP396)	須恵質土器：甕	
	b(SP458)	出土遺物なし			i(SP087)	土師器：壺A小片	
	c(SP115)	青磁：碗			k(SP483)	土師器：壺A・小皿A	
	g(SP346)	出土遺物なし			o(SP166)	土師器：皿C(c)	
	j(SP339)	出土遺物なし			SB445	b(SP094)	C期~
SB420	m(SP452)	出土遺物なし	C期~		SB450	出土遺物なし	不明
	c(SP014)	出土遺物なし	SB455	a(SP268)	土師器：壺A	D期~	
	e(SP066)	出土遺物なし		e(SP192)	出土遺物なし		
	g(SP358)	出土遺物なし		f(SP191)	出土遺物なし		
	k(SP064)	土師器：壺A・大内A式		j(SP208)	土師器：供膳具片		
	f(SP346)	出土遺物なし		k(SP211)	出土遺物なし		
SB425	j(SP449)	出土遺物なし	A III-2~	SB460	j(SP223)	土師器：壺A(底部小片)	D期~
	a(SP071)	出土遺物なし			k(SP274)	土師器：皿C	
	b(SP151)	出土遺物なし			o(SP281)	土師器：白色系大皿	
	d(SP074)	土師器：小皿A II			b(SP286)	出土遺物なし	
	e(SP437)	土師器：壺A・小皿A			e(SP474)	出土遺物なし	
	f(SP139)	土師器：壺A(底部片)			h(SP336)	出土遺物なし	
SB435	g(SP013)	土師器：小皿A I	D期~	SB465	I(SP198)	土師器：小皿A II	C期~
	o(SP086)	土師器：小皿A II			h(SP289)	国産陶器：備前壺	
	p(SP063)	土師器：壺A			j(SP217)	出土遺物なし	
					n(SP193)	出土遺物なし	

(3) 主要遺構

掘立柱建物跡 (SB)

第31表に示すように12棟を確認した。調査期間中に認識できていたものもあるが、工期の関係上、半截等の詳細な調査ができなかったものが大部分である。また、調査終了後に検討し建物としたものもある。これらの建物跡に関しては意識的に調査できていないことから、柱痕の有無や土層観察が行えていない。また柱列の並びの不揃いなもの、極端に掘方が浅いものなどを含んでいる。

東西道路SF490に直行して展開するピット列を遺構配置図・空中写真と現地での検討をもとに6棟(SB415・430・425・435・440・445)分のプランを復元した。検討の視点は、柱穴の並びと、東西道路に付属する石列に新・旧二時期あることからこれに連動した建物配置の変化が想定される点、石列自体を建物基礎として利用した可能性、石列に並行して帶状に並ぶ小規模の礫の並びを雨落ち溝として利用した可能性などである。調査終了後の整理段階で、SB455や南北道路SF200に面する東西棟の建物プランSB470・460・470やSB455を図上復元した。南北道路一帯を広く調査した97-1と異なり、道路の際から6～7m程でしか柱穴群の広がりを確認できないため、規模の確定が難しいものもあった。整理時に復元した建物も調査時に復元した建物プランにも不安が残るが、道路際に密集するピット列を積極的に評価する意図から建物案として提示する。

各棟の計測値などについては第31表にまとめている。個別図中の柱間数値は厳密なものではない。また、柱穴出土遺物は土師器壺AなどのA期に帰属する遺物が大部分であるが、東西・南北の道路状遺構の形成時期とその位置関係より第31表に示す時期を想定した。

97-3 SB415（【本文・表編】第40図・第31・32表／【図版編】遺構図：第262図、遺物図：第282図1）

調査区西部隅のD1グリッドで検出された。梁行2間、桁行2(5)間、身舎面積15.0m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-0°-Eの南北棟である。柱穴は直径0.16～0.8mの概ね円形を呈する。柱間は梁行1.0～2.1m、桁行0.5～1.5mである。柱穴oより実形に近い土師器小皿A IIが出土した。

97-3 SB420（【本文・表編】第40図・第31・32表／【図版編】遺構図：第262図、遺物図：第282図2）

調査区西部のD2グリッドで検出された。梁行2間、桁行5間、身舎面積9.6m²の掘立柱建物で、建物主軸方向N-0.64°-Wの南北棟である。南側が調査区外に伸びており、柱穴は直径0.24～0.72mの概ね円形を呈す



第 40 図 第 97-3 次調査区 SB 掲載位置図 (1/150)

る。柱間は梁行 0.6 ~ 1.5 m、桁行 0.6 ~ 1.6 m である。柱穴 c の SP115 は、長軸 1.03m、短軸 0.8m の橢円形で、検出面からの最大深度は 0.75m である。床面直上より遺構からは体部を打ち欠いた龍泉窯系青磁碗が 1 点出土した。

97-3 SB425（【本文・表編】第 40 図・第 31・32 表／【図版編】遺構図：第 263 図、遺物図：なし）

調査区西部 D3 グリットで検出された。梁行 3 間、桁行 4 間、身舎面積 12.0 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 3.69° - E の南北棟である。南側が調査区外に伸びており、柱穴は直径 0.24 ~ 0.56 m の概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行 0.5 ~ 1.1 m、桁行 0.8 ~ 2.0 m である。柱穴 k から土師器壺 A・大内 A 式土師器皿が出土した。

97-3 SB430（【本文・表編】第 40 図・第 31・32 表／【図版編】遺構図：第 263 図、遺物図：なし）

調査区西部の D2 グリッドで検出された。梁行 2 間、桁行 4 間、身舎面積 17.6 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 0° - E の南北棟である。柱穴は直径 0.24 ~ 0.4 m の概ね円形を呈する。柱間は梁行 1.1 ~ 3.2 m、桁行 0.6 ~ 2.3 m である。SB430 の軒先の雨落溝とを想定している SX290 からは A III -3 期頃の遺物が出土している。

97-3 SB435（【本文・表編】第 40 図・第 31・32 表／【図版編】遺構図：第 264 図、遺物図：なし）

調査区西部 D3 グリットで検出された。梁行 1(3) 間、桁行 5 間、身舎面積 22.5 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 1.1° - E の南北棟である。柱穴は直径 0.1 ~ 0.88 m の概ね円形を呈する。北側の妻部分は南北道路 SF495 に付帯する石列 SX305 の中でも地輪を利用した部分と礫が密集している部分を結んだ部分を考えた。柱間は梁行 0.9 ~ 3.6 m、桁行 1.0 ~ 1.8 m である。南側に廂と考えられる施設が附属するプランを図示しているが調査区が狭く想定が正しか不安が残る。各柱穴からは A III -2 ~ 3 期を主体とする土師器壺や土師器小皿が出土した。

97-3 SB440（【本文・表編】第 40 図・第 31・32 表／【図版編】遺構図：第 264 図、遺物図：なし）

調査区西部 D4 グリットで検出された。梁行 3 間、桁行 3(5) 間、身舎面積 16.9 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 5.22° - E の南北棟である。柱穴は直径 0.24 ~ 0.64 m の概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行 0.4 ~ 1.5 m、桁行 0.5 ~ 1.9 m である。東側に廂と考えられる施設が附属する。柱穴 o から図示していないが土師器皿 C が出土しており、C 期以降に形成された建物と考えられる。

97-3 SB445（【本文・表編】第 40 図・第 31・32 表／【図版編】遺構図：第 265 図、遺物図：なし）

調査区西部 D6 グリットで検出された。梁行 3 間、桁行 1(2) 間、身舎面積 17.4 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 3.01° - E の南北棟である。柱穴は直径 0.24 ~ 0.64 m の概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行 1.1 ~ 1.5 m、桁行 1.5 ~ 2.7 m である。東側に廂が存在した可能性を考えプランに加えたものの不安が残る。柱穴 b から埴堀に転用された土師器壺 A が出土した。

97-3 SB450（【本文・表編】第 40 図・第 31・32 表／【図版編】遺構図：第 265 図、遺物図：なし）

調査区西部 E5 グリットで検出された。梁行 1 間、桁行 2(4) 間、身舎面積 12.4 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 0.5° - W の東西棟である。柱穴は直径 0.16 ~ 0.48 m の概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行 1.4 ~ 2.9 m、桁行 0.9 ~ 1.7 m である。遺物は出土していない。

97-3 SB455（【本文・表編】第 40 図・第 31・32 表／【図版編】遺構図：第 266 図、遺物図：なし）

調査区 C11 グリットで検出された。梁行 1(2) 間、桁行 4(6) 間、身舎面積 13.9 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 2.21° - E の南北棟である。柱穴は直径 0.24 ~ 0.8 m の概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行 1.1 ~ 2.3 m、桁行 0.7 ~ 1.9 m である。柱穴 a から土師器壺 A・砥石が出土した。

97-3 SB460（【本文・表編】第 40 図・第 31・32 表／【図版編】遺構図：第 266 図、遺物図：なし）

調査区西部 D13 グリットで検出された。梁行 2 間、桁行 7 間、身舎面積 20.1 m² の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 0° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.24 ~ 0.4 m の概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行 1.1 ~ 1.5 m、桁行 1.0 ~ 2.3 m である。SB435 同様、東側妻部分は南北道路 SF500 に付帯する石組側溝 SD110 の一部を利用した可能性を考えたが、柱穴 c・t・p を結んだ部分で収まる建物としても良いかもしれません。

ない。柱穴 k から図示していないが土師器皿 C が出土した。

97-3 SB465（【本文・表編】第 40 図・第 31・32 表／【図版編】遺構図：第 267 図、遺物図：なし）

調査区西部 D13 グリッドで検出された。梁行 3 間、桁行 4 間、身舎面積 16.0 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 0° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.12 ~ 0.4 m の概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行 0.5 ~ 1.2 m、桁行 0.8 ~ 2.6 m である。柱穴 1 から土師器小皿 A II が出土した。

97-3 SB470（【本文・表編】第 40 図・第 31・32 表／【図版編】遺構図：第 267 図、遺物図：なし）

調査区西部 D12 グリッドで検出された。梁行 3(4) 間、桁行 5 間、身舎面積 18.5 m²の掘立柱建物で、建物主軸方向 N - 0° - E の東西棟である。柱穴は直径 0.24 ~ 0.4 m の概ね円形を呈する。柱痕は検出されていない。柱間は梁行 0.4 ~ 1.2 m、桁行 1.0 ~ 2.2 m である。柱穴 h から備前焼壺が出土した。

井戸跡 (SE)

97-3 SE280（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 268 図、遺物図：第 282 図 3 ~ 5）

調査区中央の C17・C18 グリッドで検出された。町 87-14 次調査で SE010 として報告した遺構である。南北方向の溝状遺構 SD150、155、230、475 に切られている。検出面での掘方は長径 5.35 m、短径 3.3+α m の不整橢円形である。安全面の関係上、深度については検出面から 1.7 m の地点までの掘削にとどめた。町 87-14 次調査においても井戸枠痕跡は確認できないことから、97-1SE865 などと同様に井戸枠を抜き取られた可能性が高い。埋土中からは土師器坏 A、備前焼擂鉢（中世 4 期）、丸瓦が出土した。土師器坏 A や備前焼擂鉢（中世 4 期）の形態から、井戸の最終埋没時期は A III -1 ~ 2 期に帰属すると考えられる。

土坑 (SK)

南北道路西側を中心に分布する。他の調査区同様、方形土坑が多く分布するが大型土坑は皆無である。方形土坑は 97-1 に比べ小規模で浅いものが多い。出土遺物に乏しいが A 期に帰属する遺構も多く、16 世紀後半段階の「片側町」「寺小路町」の時期に機能している土坑は少ないようである。

97-3 SK001（【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：第 282 図 6 ~ 7）

調査区西側の E1 グリッドで検出された。SK285・360 を切っている。長軸 1.45 m、短軸 1.0 m の橢円形で検出面からの最大深度は 0.1 m である。埋土は 3 層に分層している。1 層は灰色土、2 層は褐灰色土、3 層は黒褐色土である。出土遺物は「SK001」と「灰色土」、「褐灰色土」から取り上げた。土色はそれぞれ 1 層、2 層に対応する。土師器坏 A や土師質土器鍋 B 類の出土と SK265・360 の帰属時期から A III -3 期以降に埋没したと考えられる。

97-3 SK015（【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：第 282 図 8 ~ 10）

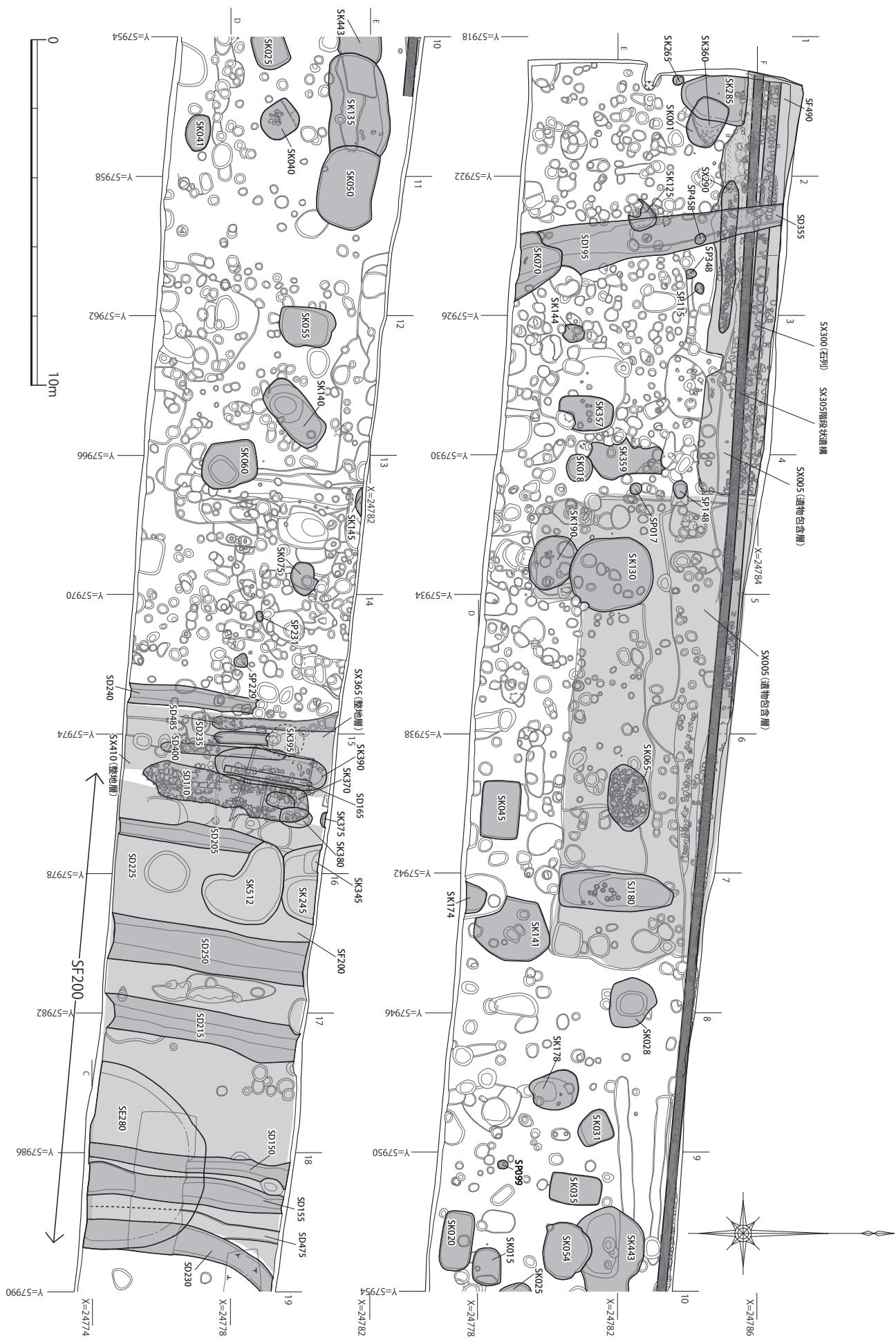
調査区西側の D9 グリッドで検出された。長軸 1.0 m、短軸 0.8 m の橢円形で検出面からの最大深度は 0.2 m である。埋土は 2 層に分層しており、1 層は褐灰色土、2 層は黄灰色土である。出土遺物は「SK015」と「褐色土」から取り上げたが、「褐色土」は SK015 の 2 層に対応する。「褐色土」から土師器皿 C が出土しており C 期に位置づけられる。

97-3 SK018（【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：第 282 図 11 ~ 15）

調査区西側の D4 グリッドで検出された。SK138 を切っている。長軸 0.8 m、短軸 0.7 m の橢円形で検出面からの最大深度は 0.25 m である。埋土は 2 層に分層しており、1 層は灰色土、2 層は褐灰色土である。出土遺物は「SK018」と「褐灰色土」から取り上げた。「褐灰色土」は 2 層に対応する。遺物は土師器坏 A や大内 A 式土師器皿、中国陶器壺などが出土した。A III -2 期に位置づけられる。

97-3 SK020（【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：第 282 図 16・17、第 294 図銅鏡 1）

調査区西側の C9 グリッドで検出された。長軸 1.7 m、短軸 0.90 m の隅丸長方形で検出面からの最大深度は 0.1 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は褐灰色土、2 層は黄灰色土である。出土遺物は「SK020」と



第 41 図 第 97-3 次調査区 SE・SK・SD・SF・SJ・SP・SX 掲載位置図 (1/150)

第33表 第97-3次調査区 井戸跡 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SE280	C17・C18	A III-1~2期			271

第35表 第97-3次調査区 溝跡 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SD195	D2・E2	A II-3期			277
SD355	E2・F2	A II-3期			277
SD501	B26	A期			277

第36表 第97-3次調査区 埋納遺構 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SJ180	D7・E7	A III-2期			278
SJ275	B27	A III-1~2期			278

第37表 第97-3次調査区 柱穴 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SP017	E4	C期	×		259・260
SP099	D9	A期	×	銅錢のみ	259・260
SP148	E4	A期~	×		259・260
SP229	D14	不明	×		259・260
SP231	D14	B2~C1期	×		259・260
SP248	B20	C2~D期			278
SP253	C20	C2期	×		261・262
SP254	C22	A III-1期			278
SP264	C25	A III-1期	×		261・262
SP293	C25	A II期	×		261・262
SP299	B25	C期	×		261・262
SP302	B26	不明	×		261・262
SP314	C25	A II期	×		261・262
SP316	B27	A III-1期	×		261・262
SP348	E2	D期	×		259・260
SP411	B30	A III-1期	×		261・262
SP416	B29	不明	×		261・262
SP432	B29	D1期	×		261・262
SP458	E2	A期	×	銅錢のみ	259・260
SP517	B29	A期~	×		261~264

第38表 第97-3次調査区 性格不明遺構 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SX005	D4~D7 E4~E7	D-2期~	×		259・260
SX010	E1~E4 F1~F4	D-2期~	×		259・260
SX290	E2	A III期	×		259・260
SX365	D15	C期	×		259・260
SX410	C15	A期	×		259・260
SX414	B29・B30	C期	×		261・262
SX417	B28	A期	×	銅錢のみ	261・262
SX419	B28	D期	×		261・262
SX503	B29・B30	A II-III期	×		261・262
SX510・515	B28・B29	C2~D期	×	×	263・264

第39表 第97-3次調査区 道路状遺構 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	備考	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SF200	C・D15~18	C-2~ D-2期	97-1 SF100と同一		279~281
SF500	C・D15~	A III-2~ 3期	南北道路(古)	×	279
SF490	F1~F4	D期	東西道路(新)	×	282・283
SF495	F1~F4	B~C期	東西道路(古)	×	282・283
SX300 (石列)	F1~F5	D期	SF490に伴う石列		282
SX305 (石列)	E1~E10	B~C期	SF495に伴う石列		282

第34表 第97-3次調査区 土坑 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	個別 遺構図	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SK001	E1	A III-3期			272
SK015	D9	C期			272
SK018	D4	A III-2期			272
SK020	C9	B-2期			272
SK025	D10	A II~ A III-1期			272
SK028	E7	A III-2~3期			272
SK031	D8	A III-2期			272
SK035	D9	A II~III期			272
SK040	D10	D期			272
SK041	C10	不明		×	272
SK045	D6	18C~			272
SK050	D11	C期			273
SK054	D9	C期			273
SK055	D12	D期			273
SK060	C13・D13	C~D期			273
SK065	E6	D期			273
SK070	D2	A II-3期			273
SK075	D13	A期			273
SK080	C22	D期			273
SK085	C21	A II期~			273
SK090	C24	A III期			273
SK095	C23	A期			273
SK100	B22・B23	A III-1~2期			274
SK105	C21	A期			274
SK125	E2	A III期	×		259・260
SK130	D4・E4	B-2期			274
SK135	D10	A II-3期			274
SK140	D12	A III期			274
SK141	D7	A II期			274
SK144	D3	A期~	×		259・260
SK145	D13	C期	×		259・260
SK170	C26	A II期			274
SK174	C7	A期~			275
SK175	B28・B29	D期			275
SK178	D8	A III-1期			275
SK190	D4	A III-2期			275
SK245	D16	C-1期			275
SK252	C20	C期			275
SK265	E1	A III-3期			275
SK307	C26	A II期	×		261・262
SK311	B28	A III-1期			275
SK331	C22	A III-1期			275
SK345	D15	A II期			275
SK357	D3	A期	×	銅錢のみ	259・260
SK359	D3・E3	C~D期	×		259・260
SK360	E1	A期~	×		259・260
SK370	D15	A III期			276
SK375	D15	A期~	×		281
SK380	D15	A III期			276
SK390	D15	B期			276
SK395	D15	A期~	×		280
SK397	B32	A III期			276
SK421	B27	A期	×		261・262
SK443	D9	A II期			276
SK512	D16	不明		×	276
SK518	B28	A期~	×		261・262

第40表 第97-3次調査区 SF200上面溝状遺構 報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	備考	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SD205	C・D15~17	D-1~2期	97-1 SD435と同一		279~281
SD210	C・D15~17	D-2期	整地層か		279
SD215	C17・D17	D-1~2期	97-1 SD370と同一		279・281
SD225	C・D15~17	D-2期	整地層か		279・281
SD250	C16・D16	D-2期	97-1 SD380と同一	×	279・281

第 41 表 第 97-3 次調査区 東側南北溝(道路側溝)
報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	備考	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SD150	C18・D18	A III-2 ~3期		279・281	
SD155	C18・D18	A III-2 ~3期	97-1SD 580と同一	279・281	
SD230	C18・D18	C期~ D-1	97-1SD 585と同一	279・281	
SD475	C18・D18	~D-1期		×	279・281

第 42 表 第 97-3 次調査区 西側南北溝(道路側溝)
報告遺構一覧表

遺構番号	地区	時期	備考	遺物 実測図	図版編 掲載頁
SD110	C15~D15	D期	97-1 SD465と同一		279~281
SD165	D15	C~D期		×	279~280
SD235	C15・D15	A III-2期	97-1 SD980と同一		279~281
SD240	C14・D14	B期			279~281
SD400	D15	B期			279~281
SD485	D14	A期~		×	279~281

「褐灰色土」から取り上げたが、「褐灰色土」は 1 層に対応する。「褐灰色土」から 12 枚重ねの銅錢が出土した。土師器壺 Bn とともに極めて薄手の土師器皿 C が出土したことから B-2 期頃に位置づけられる。

97-3 SK025 (【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：第 282 図 19)

調査区中央(道路)西側の D10 グリッドで検出された。長軸 1.1 m、短軸 0.9 m の隅丸方形で検出面からの最大深度は 0.2 m である。埋土は 2 層に分層しており、1 層は褐灰色土、2 層は黄灰色土である。出土遺物は「SK025」と「黄灰色土」から取り上げた。「黄灰色土」は 2 層に対応する。土師器壺 A、須恵器質土器東播系片口鉢が出土していることから A II 期～A III -1 期に位置づけられる。

97-3 SK028 (【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：第 282 図 20～22)

調査区西側の E7 グリッドで検出された。長軸 1.4 m、短軸 1.35 m の不整円形で検出面からの最大深度は 1.25 m と遺構プランのわりに深い遺構である。埋土は黒褐色土の単層である。土師器壺 A や小皿 A II が出土していることから A III -2～3 期に位置づけられる。

97-3 SK031 (【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：第 282 図 23～25)

調査区西側の D8 グリッドで検出された。長軸 1.0 m、短軸 0.8 m の不整円形で検出面からの最大深度は 0.4 m である。土師器壺 A や小皿 A I、大内 A 式土師器皿が出土しており A III -2 期に位置づけられる。

97-3 SK035 (【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：第 282 図 26～28)

調査区西側の D9 グリッドで検出された。長軸 1.5 m、短軸 0.8 m の隅丸長方形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。埋土は 2 層に分層しており、1 層は焼土・炭化物を多量に含む褐灰色土である。出土遺物は「SK035」と「褐灰色土」から取り上げた。「褐灰色土」は 1 層に対応する。土師器壺 A や小皿 A I が出土したことから A II ～ III 期に位置づけられる。

97-3 SK040 (【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：第 282 図 29～32)

調査区中央西側の D10 グリッドで検出された。長軸 1.11 m、短軸 0.9 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.1 m である。厚手の土師器皿 C が出土していることから D 期に位置づけられる。

97-3 SK041 (【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：なし)

調査区中央西側の C10 グリッドで検出された。長軸 1.0 m、短軸 0.7 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.34 m である。埋土は 2 層に分層しており、1 層は灰色土、2 層は褐灰色土である。遺物は出土していない。

97-3 SK045 (【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 269 図、遺物図：第 282 図 33～35)

調査区西側の D6 グリッドで検出された。長軸 1.7 m、短軸 1.1 m の隅丸長方形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。埋土は 2 層に分層しており、1 層は褐灰色土、2 層はにぶい黄褐色差質土ブロックである。出土遺物は「SK045」と「褐灰色土」から取り上げた。「褐灰色土」は 1 層に対応する。「褐灰色土」からは近世の国産陶器陶胎染付碗、肥前系の国産磁器が出土していることから 18 世紀前半代に位置づけられる。

97-3 SK050 (【本文・表編】第 41 図・第 133 表／【図版編】遺構図：第 270 図、遺物図：第 282 図 36)

調査区中央(道路)西側の D11 グリッドで検出された。SK135 を切っている。長軸 2.4 m、短軸 1.5 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は灰黄褐色土、2 層は褐灰色土、3 層は黄灰色土である。出土遺物は「SK050」と「灰黄褐色土」、「褐灰色土」から取り上げた。土色はそれぞれ 1 層、2 層に対応する。「灰黄褐色土」からは土師器壺 A、白磁碗が出土しているが、遺構の 1 段掘り下げ時

に取り上げた「SK050」からは備前焼擂鉢（中世6期）が出土している。

97-3 SK054（【本文・表編】第41図・第133表／【図版編】遺構図：第269図、遺物図：第282図37～42、第283図43～46）

調査区西側のD9グリッドで検出された。長軸1.6m、短軸1.4mの楕円形で検出面からの最大深度は0.75mである。埋土は拳大礫を多量に含む炭層である。出土遺物は「SK054」と「下層」から取り上げた。土師器皿Cや備前焼擂鉢（近世1期）が出土していることからC期に位置づけられる。

97-3 SK055（【本文・表編】第41図・第133表／【図版編】遺構図：第270図、遺物図：第283図1～5）

調査区中央（道路）西側のD12グリッドで検出された。長軸1.5m、短軸1.1mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.6mである。埋土は黒褐色土の単層である。厚手の土師器皿Cがまとまって出土しておりD期に位置づけられる。

97-3 SK060（【本文・表編】第41図・第133表／【図版編】遺構図：第270図、遺物図：第283図6～10）

調査区中央（道路）西側のC13・D13グリッドで検出された。SP218を切っている。長軸1.6m、短軸1.3mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.5mである。埋土は3層に分層しており、1層は黒褐色土、2層は褐灰色土、3層は黄灰色土である。出土遺物は「SK060」と「黒褐色土」、「褐灰色土」から取り上げた。土色はそれぞれ1層、2層に対応する。土師器皿Cが出土していることからC期～D期に位置づけられる。

97-3 SK065（【本文・表編】第41図・第133表／【図版編】遺構図：第270図、遺物図：第283図11～12）

調査区西側のE6グリッドで検出された。長軸1.3m、短軸1.1mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.6mである。拳大の礫によって埋没している。厚手の土師器皿Cが出土していることからD期に位置づけられる。

97-3 SK070（【本文・表編】第41図・第133表／【図版編】遺構図：第270図、遺物図：第283図13～42、第284図43～44）

調査区西側のD2グリッドで検出された。SK137及びSD195を切る。長軸1.5m、短軸1.3+ α mの不整形で南半分は調査区外に展開する。検出面からの最大深度は0.5mである。出土遺物は「SK070」と第270図に示すように第1層を「茶褐色土」、第4層を「暗褐灰色土」から取り上げた。埋土の観察からは遺構の掘り返しなどの土層の攪乱はみられない。「茶褐色土」からは土師器坏A、吉備系土師器椀、龍泉窯系青磁碗II類、砥石、玉石が出土したほか、「暗褐灰色土」からは土師器小皿AⅠ、土師器小皿AⅡ、土師器坏A、亀山系の須恵質土器甕などが出土した。遺物組成からみてAⅡ-3期の良好な一括資料と考えられる。

97-3 SK075（【本文・表編】第41図・第133表／【図版編】遺構図：第270図、遺物図：第284図1）

調査区中央（道路）西側のD13グリッドで検出された。SP273及びSP426を切っている。長軸0.9m、短軸0.7mの楕円形で検出面からの最大深度は0.3mである。埋土は単層である。土師質土器・瓦質土器片や龍泉窯系青磁碗III類とともに、近江産の可能性のある緑釉陶器碗が出土した。A期以降に位置づけられる。

97-3 SK080（【本文・表編】第41図・第133表／【図版編】遺構図：第270図、遺物図：第284図2～4）

調査区東側のC22グリッドで検出された。長軸1.4m、短軸0.8mの楕円形で検出面からの最大深度は0.2mである。埋土は褐灰色土で単層である。厚手の土師器皿Cが出土しておりD期に位置づけられる。

97-3 SK085（【本文・表編】第41図・第133表／【図版編】遺構図：第270図、遺物図：第284図5・6）

調査区西側のC21グリッドで検出された。長軸1.5m、短軸1.3mの円形で検出面からの最大深度は0.3mである。亀山系須恵質土器甕や軒丸瓦が出土している。AⅡ期以降に位置づけられる。

97-3 SK090（【本文・表編】第41図・第133表／【図版編】遺構図：第270図、遺物図：第284図7～10）

調査区東側のC24グリッドで検出された。長軸1.4m、短軸1.1mの不整円形で検出面からの最大深度は1.05mである。埋土は2層に分層しており、1層は褐灰色土、2層は灰白色砂である。遺物は、遺構検出後の1段掘り下げ時の出土の「SK090」と「褐灰色土」から取り上げた。「褐灰色土」は1層に対応する。遺物は土師器小皿AⅠ、土師器小皿AⅡ、土師器坏A、土師器坏、瓦質土器鉢、須恵質土器東播系片口鉢、龍泉窯系青磁碗II類、龍泉窯系青磁碗C2類、備前焼甕、硯が出土している。一括性の高い資料である。

97-3 SK095（【本文・表編】第41図・第133表／【図版編】遺構図：第270図、遺物図：第284図11～12）

調査区東側のC23グリッドで検出された。長軸0.8m、短軸0.5mの不整楕円形で検出面からの最大深度は

0.2 mである。埋土は褐灰色土で単層である。土師器坏 A が出土しており A 期に位置づけられる。

97-3 SK100（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 271 図、遺物図：第 284 図 13～14）

調査区東側の B22・B23 グリッドで検出された。長軸 $2.0+\alpha$ m、短軸 1.0 m の楕円形で南半分は調査区外に展開する。検出面からの最大深度は 0.6 m である。町 87-12SK020 で報告した遺構と同一である。埋土は 4 層に分層しており、1 層は黒褐色土、2 層は灰色土、3 層は暗灰色土、4 層は褐灰色土である。出土遺物は「黒褐色土」、「灰色土」、「褐灰色土」で取り上げた。それぞれ 1 層、2 層、4 層に対応する。「灰色土」からは土師器小皿 A II が出土していることから A III-1～2 期に位置づけられる。なお、町 87-12SK020 としては板状銅製品を報告している（大分市教育委員会 2010 p 24）。

97-3 SK105（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 271 図、遺物図：第 284 図 15～16）

調査区東側の C21 グリッドで検出された。SK085 に切られている。長軸 2.0 m、短軸 $1.9+\alpha$ m の不整楕円形で北半分は調査区外に展開する。埋土は灰白色土の単層である。土師器坏 A や龍泉窯系青磁皿 III 類などが出土しており、A 期に位置づけられる。

97-3 SK130（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 271 図、遺物図：第 284 図 19～25）

調査区西側の D4・E4 グリッドで検出された。SP321 を切っている。長軸 2.5 m、短軸 2.0 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.2 m である。埋土は 3 層に分層しており、1 層は灰色土、2 層は褐灰色土、3 層は暗褐色土である。出土遺物は「灰色土」、「褐灰色土」から取り上げた。それぞれ 1 层、2 層に対応する。「灰色土」から土師器坏 A や龍泉窯系青磁碗 II 類、白磁皿 IX 類などの A 期の遺物とともに、青花碗 D 群や土師器坏 Bn が出土しており、B-2 期に位置づけられる。

97-3 SK135（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 271 図、遺物図：第 284 図 26～41、第 285 図 1～8）

調査区中央（道路）西側の D10 グリッドで検出された。SK443 を切り SK050 に切られている。長軸 3.2 m、短軸 1.6 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。出土遺物は「SK135」と「上層」、「下層」、「褐灰色土」、「暗褐色土」、「ベルト北側褐灰色土」、「ベルト南側褐灰色土」、「ベルト南側暗褐色土」と細かく取り上げた。「暗褐色土」からは土師器小皿 A I、土師器小皿、土師器皿、須恵質土器東播系片口鉢が出土した。「下層」からは備前焼甕が出土した。出土遺物から A II-3 期に位置づけられる。

97-3 SK140（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 271 図、遺物図：第 285 図 9～11）

調査区中央（道路）西側の D12 グリッドで検出された。SP243 を切っている。長軸 2.2 m、短軸 1.0 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.3 m である。埋土は黒褐色土の単層である。出土遺物から A III 期に位置づけられる。

97-3 SK141（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 271 図、遺物図：第 285 図 12～14）

調査区西側の D7 グリッドで検出された。SP176 を切る。長軸 2.2 m、短軸 1.7 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.1 m である。埋土は褐灰色土の単層である。遺物は土師器小皿 A I、土師器坏、中国陶器磁州窯白地鉄絵皿が出土した。A II 期に位置づけられる。

97-3 SK170（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 271 図、遺物図：第 285 図 19～22）

調査区東側の C26 グリッドで検出された。SP334 を切っている。長軸 2.5 m、短軸 1.0 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.1 m である。埋土は褐灰色土の単層である。土師器坏 A、須恵質土器東播系甕、吉備系土師器椀が出土しており A II 期に位置づけられる。

97-3 SK174（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 272 図、遺物図：第 294 図 鉄製品 1）

調査区西側の C7 グリッドで検出された。長軸 0.8 m、短軸 $0.5+\alpha$ m の楕円形で南半分は調査区外に展開している。検出面からの最大深度は 0.3 m である。出土遺物は埋土上位層である「褐灰色土」から土師器坏 A 片及びほぼ完形の鉄製ノコギリ（第 294 図 1）が出土した。

97-3 SK175（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 272 図、遺物図：第 285 図 23～29）

調査区東側の B28・B29 グリッドで検出された。SK418 を切っている。長軸 1.9 m、短軸 $1.3+\alpha$ m の楕円形

で南半分は調査区外に展開する。検出面からの最大深度は 0.2 m である。埋土は第 261 図南壁土層中に記載している。出土遺物は A 期の遺物群も含むが、厚手の土師器皿 C が複数出土しており D 期に位置づけられる。

97-3 SK178（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 272 図、遺物図：第 285 図 30～42）

調査区西側の D8 グリッドで検出された。SP032 に切られている。長軸 1.9 m、短軸 1.5 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 1.05 m である。埋土は褐灰色土の単層である。出土遺物は完全形品を含む土師器小皿 A I や坏 A が出土しており、良好な一括資料である。A III -1 期に位置づけられる。

97-3 SK190（【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：第 272 図、遺物図：第 285 図 43～49）

調査区西側の D4 グリッドで検出された。遺物包含層である SX005 除去後に検出した。SK130 に切られている。長軸 1.6 m、短軸 1.2 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.1 m である。埋土は褐灰色土の単層である。坏 Bn が一片出土しているが、混入と考えられ土師器小皿 A II や坏 A、備前焼擂鉢（中世 4 期）が出土しており A III -2 期に位置づけられる。

97-3 SK245（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 272 図、遺物図：第 285 図 50～53）

調査区中央（道路）の D16 グリッドで検出された。SD255 及び SD205 に切られている。検出位置は南北道路 SF200 の下位での検出となるが、近世以降の削平により遺構の形成面は SF200 形成後か形成以前かの区分はできない。長軸 1.3 m、短軸 1.0+ α m の楕円形で北側半分は調査区外に展開する。埋土は単層である。やや薄手の土師器皿 C が出土しており、C-1 期頃に位置づけられる。

97-3 SK252（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 272 図、遺物図：第 285 図 54）

調査区東側の C20 グリッドで検出された。長軸 0.8 m、短軸 0.7 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.1 m である。埋土は褐灰色土の単層である。土師器皿 C が出土しており、C 期に位置づけられる。

97-3 SK265（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：なし、遺物図：第 285 図 55・56）

調査区西端の E1 グリッドで検出された。SK001・285 に切られる。長軸 1.5+ α m、短軸 1.0 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.2 m である。土師器坏 A が出土している。A III 期に位置づけられる。

97-3 SK285（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 272 図、遺物図：第 286 図 1～2）

調査区西側の E1 グリッドで検出された。東西道路 SF490 に付随する SX305 に切られるほか、SK001 に切られている。長軸 1.9 m、短軸 1.5 m の不整楕円形で検出面からの最大深度は 0.8 m である。出土遺物は少ないが、体部がやや外反する土師器坏 A が出土しており A III -3 期である可能性が高い。東西道路形成期を考える上で重要な遺構であり、SX305 の形成は A III -3 期を遡らないと考えられる。

97-3 SK311（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 272 図、遺物図：第 286 図 5～6）

調査区東側の B28 グリッドで検出された。長軸 1.0 m、短軸 0.5+ α m の楕円形で南側は調査区外に展開している。埋土は黒褐色土の単層である。出土遺物から A III -1 期頃に位置づけられる。

97-3 SK331（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 272 図、遺物図：第 286 図 7～12）

調査区東側の C22 グリッドで検出された。長軸 0.9+ α m、短軸 0.6 m の隅丸長方形で北側は調査区外へ展開する。埋土は褐灰色土の単層である。遺物は土師器小皿 A I、土師器坏 A、京都産土師器皿、同安窯系青磁碗が出土している。A III -1 期頃に位置付けられる。

97-3 SK345（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 272 図、遺物図：第 286 図 13）

調査区中央（道路）の D15 グリッドで検出された。SD255・SD205、SK245 に切られている。長軸 0.6 m、短軸 0.5+ α m の楕円形で北側半分は調査区外に展開する。床面より完形の土師器坏 A が出土した。南北道路 SF200 の形成年代を考える上で重要な遺構である。

97-3 SK370（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 273 図、遺物図：第 286 図 17）

調査区中央（道路）の D15 グリッドで検出された。SF200 の道路側溝関連遺構である SD110 の除去後に確認した。長軸 0.8 m、短軸 0.4 m の楕円形で検出面からの最大深度は 0.4 m である。出土遺物が備前焼擂鉢体部片 1 点である。時期の絞込みは難しいが中世 5 期以前の遺物と考えられる。15 世紀代（A III 期代）に相当する遺

構である。

97-3 SK380（【本文・表編】第41図・第135表／【図版編】遺構図：第273図、遺物図：第286図19）

調査区中央（道路）のD15グリッドで検出された。道路側溝関連遺構であるSD110の除去後にSK370とともに確認した。長軸0.9m、短軸0.5mの楕円形で検出面からの最大深度は0.3mである。埋土は単層である。遺物は龍泉窯系青磁底部片が出土したのみである。15世紀代の所産と考えられる。

97-3 SK390（【本文・表編】第41図・第135表／【図版編】遺構図：第273図、278図、遺物図：第286図20）

調査区中央（道路）のD15グリッドで検出された。南北道路SF200の道路側溝関連遺構SD110西側に展開する整地層SX365及びSF200以前の道路状遺構と推定されるSF500除去後に検出した遺構である。長軸3.3m、短軸1.0mの楕円形で検出面からの最大深度は0.4mである。第278図に示すように遺構中央部は完掘できていないため、検出遺物は少ないが搬入品の可能性がある極めて薄手の土師器皿Cが出土した。

97-3 SK397（【本文・表編】第41図・第135表／【図版編】遺構図：第273図、遺物図：第286図21～23）

調査区東側のB32グリッドで検出された。長軸2.5m、短軸1.1mの不整楕円形で検出面からの最大深度は0.2mである。埋土は褐灰色土の単層である。出土遺物からAⅢ期に位置づけられる。

97-3 SK443（【本文・表編】第41図・第136表／【図版編】遺構図：第273図、遺物図：第286図26～29）

調査区西側のD9グリッドで検出された。SK135に切られている。長軸3.3m、短軸2.0mの不整形で検出面からの最大深度は0.5mである。埋土は褐灰色土の単層である。土師器小皿AⅠや壺Aや白磁碗IX類などが出土した。AⅡ期頃に位置づけられる。

97-3 SK512（【本文・表編】第41図・第136表／【図版編】遺構図：第273図、遺物図：なし）

調査区中央（道路）のD16グリッドで検出された。SD205・255に切られている。長軸2.4m、短軸1.6mの不整形で検出面からの最大深度は0.5mである。埋土には多量の礫が含まれていた。出土遺物は備前焼甕片のみで詳細な時期は不明である。

道路状遺構（SF）

当該区では、2本の道路状遺構を確認した。また、道路面にともなう同一方向の溝や石列を検出した。ここでは道路に関連する溝状遺構等も含めて記述する。

道路状遺構（SF）南北道路

万寿寺前面の寺小路町に面する幅14mの南北道路（97-3SF200=97-1SF100）と、その下位に存在する16世紀初頭前後～15世紀後半の道路状遺構と考えられるSF500及びこれにともなう道路側溝を確認した。

97-3 SF200（【本文・表編】第41図・第134表／【図版編】遺構図：第277～279図、遺物図：第289図9～10）

97-3SD230・SD110・SD400・SD165（【本文・表編】第41図・第134・135表／【図版編】遺構図：第278・279図、遺物図：第287図1～2、第288図36～39、第289図7、第292図【茶臼】2、【火輪】2）

調査区西中央のC15グリッドからB19グリッドにかけて検出された南北方向の道路状遺構である。東側溝の可能性があるSD230、東側の道路境界を示すと考えられるSD110からなる。

東側側溝 SD230は調査区中央付近で東に140度ほどの角度をもってゆるく折れ曲がる。幅4m、深さ0.4mと浅い。97-1SD585と同一遺構の可能性が高い。

西側側溝 SD110は方形凝灰岩を直線的に並べた遺構で、調査区中央で東側に一石分の張り出しが見られる。石列東側では拳大の礫が帶状に出土しているが、整然と並べられたものではなく、本来二列の側溝状の石列があったものが崩れたもしくは改変されて側溝内に石を入れ建物基礎などに転用した可能性がある。10m南側で確認された97-1SD465と同一遺構と考えられる。明確な掘方は確認できず、SF200路面上に並べたのみのようである。石列の主軸方向はN-12°-Wである。SD110の下層にはSD165とした同一方向の南北溝を確認した（第278図K-L土層図）。SD110はSD165上部に形成されている。この構造は同じ南北道路南側の西側側溝である町87-11でも確認されている。SD110と並行してSD400とした石列が確認できる。後世に攪乱されたためか石

の並びは不揃いであるが、SF200 の道路側溝に関連する遺構と考えられる。

SF200 は近世以降の攪乱のため、路面や道路構築土を面的に検出することはできなかった。第 279 図 A-B 土層中や、第 278 図 K-L、M-N 土層で道路痕跡を確認できる。ここでは 0.4 m ほどの堆積が確認できる。埋土は細かい単位で粘質土と砂質土が堆積する。なお、南壁で積土の単位が 0.2 m と粗い部分がある。この所見も町 87 次調査で指摘されており、地点により道路構築の精粗がみられるものであった。出土遺物は SD110 から、厚手の土師器皿 C、SD230 から土師器皿 C とともに青花碗 E 群が出土しており、D-1 期頃に位置づけられる。

97-3 SF500（【本文・表編】第 41 図・第 136 表／【図版編】遺構図：第 277～279 図、遺物図：第 289 図 9～10）

97-3 SD235・240・485・150・155（【本文・表編】第 41 図・第 134・135・136 表／【図版編】遺構図：第 278～279 図、遺物図：第 288 図 40～42、第 289 図 1～6、第 287 図 3～7）

調査区西中央の C15 グリッド付近で確認される南北方向の道路状遺構である。遺構は SF200 形成以前に堆積した C-1 期に形成された整地層 SX365 除去後に検出した。0.2 m ほどの厚さで遺存し、SF200 の積土と比較して非常に粗い堆積であるが、硬化した堆積土によって形成されている点、並行する南北溝 SD240 の存在からみて道路状遺構と判断した。

SF500 に伴うと考えられる東側溝は SD240・235・485、西側溝は SD155・150 である。SF200 及びこれに伴う遺構により大きく削平されることから遺構の全貌把握が難しいが、道路側溝の年代と SF500 の土層観察から、道路状遺構は SF500 新段階と古段階の二時期に分かれる可能性がある。

東側側溝 攪乱により SF500 の道路面との関係は不明であるが 97-1 での所見を踏まえると C18 グリッド付近で確認した南北溝 SD150・155・475 が西側側溝とともに同時存在した道路側溝と考えられる。SD155 は町 87-14 次調査で確認した SD015 として報告した遺構である。SD150 は幅 1.3 m、深さ 0.9 m、SD155 は幅 2 m、深さ 0.45 m、SD475 は幅 1 m、深さ 0.2 m で SD230 に切られる。溝は全て A III -2 期頃に埋没した SE280 を切る。SD475 からは遺物は出土しなかったが、D 期の SD230 以前に形成された溝、SD150 は土師器壺 A、SD155 は青磁香炉や中世 5 期以前の可能性のある備前焼擂鉢が出土していることから、A III -2 期～A III -3 期頃に形成されたと考えられる。

西側側溝 SD240 は C15 グリッド付近で確認された南北溝で、町 87-17 次調査で SD003 として報告した遺構である。調査中央付近で町 87-17SD003 調査区中央付近で止まっており、町 87-17 次調査含めて約 4 m 分が確認される、幅 0.5 m、深さ 0.4 m の溝である。出土遺物は土師器壺 Bn からなり B 期に位置づけられる。なお、10 m 南側の 97-1 では SD900 が同時期の溝となる。SD235 は SD240 の 0.6 m 東側で確認した南北溝である。町 87-17 次調査で SD002 として報告した遺構で、幅 0.6 m、深さ 0.4 m の溝である。北側は SK395 に切られて終わる。町 87-17 次調査含めて約 4 m 分が確認される。町 87-17 の調査地点と重複するため、遺物の混入を避けるために溝中央南を A、北を B として分けて遺物を取り上げた。出土遺物は土師器燭台 A3、小皿 A I、壺 A からなり A III -2 期に位置づけられる。

以上の状況から、SF500 には SD240 が東側側溝となる B 期のもの（SF500 新段階）と、SD235、SD150・155 を側溝とする A III -3 期のもの（SF500 古段階）に区分できる可能性がある。SF500 古段階に相当する土層は第 279 図 A-B 土層中の C とした土層がこれに対応する可能性がある。

道路状遺構（SF）東西道路

「片側町」に面する東西道路である。道路の南側には SF490・495 とした道路状遺構と 2 時期に分かれる石列 SX300 と SX305 が伴いそれぞれ「片側町」と道路との境を構成している。SX305 には SX305 階段状遺構とした一段分の階段状の施設を造り出し「片側町」より一段低い道路 SF495 から町に上がる出入口となっている。なお、SX305 西端から 10 m 西で検出された町 30 次 SX012 でも同様の石列を新・旧二時期分を確認した他、新段階の石列には階段状遺構が二段分確認されている。

両地点の所見を総合すれば、新段階には石列を道路側に拡張し、道路方向にのびる階段状の施設を作り出しており、町屋の一角が道路に浸食していくさまを見ることができる。

97-3 SF490・SX300（【本文・表編】第41図・第135・136表／【図版編】遺構図：第280図、遺物図：第292図1、第293図1、2）

調査区西側のE1グリッドからF6グリッド付近にかけて検出された南北方向の道路状遺構とこれに伴う石列である。SF490とした道路状遺構は面的にはE1グリッド～F3付近でのみ確認でき、大部分は調査区外に延びる。

第280図あ-い土層では横断土層の一部が確認できる。道路堆積は0.2m程である。道路面は近世以降に埋められたと考えられ、また図中にあるSF490の道路面（標高49m）は16世紀後半段階の道路面の標高を当時のまま維持していると考えられる。なお、東西道路は現在でも道路として維持されていることから、近世以降の堆積土自体も固くしまっており石列上面まで土を入れた後は再び道路として機能していた可能性がある。

石列SX300はSF490上に形成された石列である。調査区西側は拳大の小ぶりの石を用いて0.5m程の高さの石積みを行うが、基底部付近は土と石を混在させSF490の道路堆積土によって埋められている。よって道路面からの石列の高さは0.2mほどである。東側の石列は人頭大の大型の石材を用いている。SX300とSX305前面の間はSX300の裏込め部であり人頭大～拳大の石や石塔・石臼を用いて埋めている。裏込め中には灰色粘質土や灰色粘土が多量に含まれている。裏込め石材を強固にするために、粘質の土をも用いて練り積みされたと考えられる。

SF490、SX300からは時期の特定できる土器・陶磁器類は出土していないが、D期に形成されたと考えられる。

97-3 SF495・SX305（【本文・表編】第41図・第135・136表／【図版編】遺構図：第280図、遺物図：第290図21・22、第291図1、第292図2・4～6、第293図3～4）

調査区西側のE1グリッドからE11グリッドにかけて検出された南北方向の道路状遺構とこれに伴う石列である。

SF495とした道路状遺構はSF490に重複してE1グリッド～F3付近でのみ確認でき大部分は調査区外に延びる。第280図あ-い土層では道路堆積は0.1m程確認できる。SX305石列基底部の様相とSX305階段状遺構基底部の標高から図中にあるSF490の道路面（標高4.5m）は道路面の標高を当時のまま維持していると考えられる。したがって、東西道路はSF495を基準に嵩上げされながら連続して使用されていたと考えられる。

石列SX305はSF495の上に形成された石列である。SX300によって完全に埋め殺されている。調査区西側のSX305階段状遺構西側は拳大の小ぶりの石を用いて0.3m程の高さの石積みを行う。基底部付近も拳大の礫によって積まれている。階段状遺構東側は大型の火輪を立てこれより東側は大型の安山岩や半截した石塔など大型の石材を組み合わせて丁寧に石積みされている。道路面からの石列の高さは0.4～0.5mほどである。

SX305階段状遺構は、調査区西側のE2グリッドで検出したSX305に付随する階段状遺構である。火輪を半截したもの（第293図5）と火輪の頂部を削ったもの（第293図4）の3石を用いて階段にする。第280図A-B土層に示すよう、石の間は6・7層を用いて整形している。階段の東脇は第292図6の大型の火輪を立てて袖とし、西脇は拳大の礫と人頭大の礫がつまれているが袖は明確ではない。階段の二段目は安山岩をもちいた川原石3石を使う。

溝状遺構（SD）

SF200中央付近に形成される南北溝群である。97-1と同様、南北道路上に形成された溝状遺構について報告する。

■東側溝

97-3 SD205・225・210（【本文・表編】第41図・第134・135表／【図版編】遺構図：第279図、遺物図：第287図48～60、第288図1～15、20～35、第294図鉄製品2、第294図銅錢3）

調査区中央のC・D15～17グリッドで検出した遺構である。97-1の所見から南北道路及び南北溝が想定されていたが、想定以上に遺構上面に展開する近世の耕作痕に起伏が大きく溝の検出プランが認識できるまで道路想定地部分をSD210の遺構名で掘削した。SD210はSD250を切る遺構であり、近世に下る可能性がある。SD210掘削後、溝のプランが一部確認された段階でSD225と遺構名を分け、その後溝のプランが明確になった段階

で SD205 として溝部分の掘削を行った。SD225 はレンズ状に堆積する地点があったため溝としているが。97-1SX1125 と同様、南北道路面全体を覆う整地土状の遺構である。SD225 は、0.23 m の厚みで堆積している。

SD205 は、幅 0.5 ~ 0.7 m、検出面からの最大深度は 0.6 m、97-1SD435 の北側延長部の溝と考えられ、これを含めると溝の規模は南北 $26 + \alpha$ m となる。町 87-17 次調査で SD010 として調査した。ほぼ直線で主軸方向 N - 1.23° - W である。底部の標高は C15 グリッドで 4.0 m である。断面は台形状で、砂質土を多く含む埋土で埋没する。遺物は下位の層を「黒褐色土」、上位の層を「灰色土」として取り上げた。なお、「灰色土」中からイスラム陶器もしくは類例の少ない中国産陶器と考えられる瑠璃色の釉薬がかかる短頸壺（第 287 図 57）が出土した。出土遺物から、SD205・225 とも D-1 ~ 2 期頃に埋没したものと考えられる。

97-3 SD215（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 280 図、遺物図：第 288 図 16 ~ 19、第 290 図 21・22、）

調査区中央の C17・D17 グリッドで検出した遺構である。SD210・SD225 除去後に検出した。幅 0.9 ~ 1.1 m、検出面からの最大深度は 0.5 m、97-1SD370 の北側延長部の溝と考えられ、これを含めると溝の規模は南北 $38 m + \alpha$ となる。ほぼ直線で主軸方向 N - 10.23° - W である。底部の標高は C17 グリッドで 4.1 m で、断面は台形状となる。遺物は「SD215」単一の層で取り上げたが、第 279 図 A-B、C-D 土層を参照すると堆積に不整合がみられることから、掘り返しが行われた可能性が高い。出土遺物から SD205 と同様に D-1 ~ 2 期頃に埋没したものと考えられる。

97-3 SD250（【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 271 図、遺物図：なし）

調査区中央の C16・D16 グリッドで検出した遺構で 97-1SD380 と同一の遺跡である。SD210・SD225 除去後に検出したが、土層観察から SD225 上面より掘り込まれ SD215 を切る溝である。幅 1.3 ~ 3.8 m、検出面からの最大深度は 0.8 m となる。97-1SD380 の北側延長部の溝と考えられ、これを含めると溝の規模は南北 $112 m + \alpha$ となる。ほぼ直線で主軸方向 N - 9.69° - W である。底部の標高は C16 グリッドで 4.0 m である。断面は第 279 図 A-B、C-D 土層に示すように東側に幅 1.8 m ほどのテラスをもつ断面台形状プランで西側が 0.4 m ほどくぼんだ形状となる。97-1SD380 と同様、近世以降に大きく削平された溝の西側を復元すると幅 3.6 m、最大深さ 1.2 m の巨大な堀状の施設になる。埋土中には炭や焼土を含んでいる。遺物は「SD250」単一の層で取り上げたが、第 279 図の土層図に示すように平面的に調査できたのは溝の下層部分に相当する。出土遺物から D-2 期に埋没したものと考えられる。

■道路に関連する遺構以外の溝

97-3 SD195・355（【本文・表編】第 41 図・第 134・135 表／【図版編】遺構図：第 274 図、遺物図：第 287 図 8 ~ 47）

調査区西側の D2・E2・F2 グリッドから南側の E2 グリッドにかけて検出した調査区を斜行する南北方向の溝状遺構である。SK070 に切られている。調査区中央付近で急な傾斜をもって深くなる地点があり、第 274 図に示す 1 ~ 7 層までを SD195 として面的に掘削し、一段低くなる 8・9 層が堆積する溝北側部分を SD355 として区分した。遺物の様相に差はなく、同一の溝の可能性が高い。

SD195 は幅 0.7 ~ 1.2 m、検出面からの最大深度は 0.8 m、ほぼ直線で主軸方向 N - 11.38° - W である。遺物は「SD195」、「褐灰色土」、「暗褐灰色土」、最下層を「SD355」として取り上げた。遺物は各層からまとまった土師器供膳具類が出土した。SD355 からの出土遺物は土師器小皿 A I、土師器坏 A、京都産土師器皿、土師質土器鍋 B、国産陶器常滑甕、白磁皿 IV 類、同安窯系青磁碗 III 類、龍泉窯系青磁碗 I 類、瓦質土器火鉢鍋 B などが出土した。SD195 を切る SK070 とほぼ同様の時期であり A II -3 期に埋没したものと考えられる。

97-3 SD501（【本文・表編】第 41 図・第 136 表／【図版編】遺構図：第 274 図、遺物図：第 289 図 8）

調査区東側の B26 グリッドから C26 グリッドにかけて検出した南北方向の溝状遺構である。幅 0.5 m、検出面からの最大深度は 0.15 m、ほぼ直線で主軸方向 N - 6.06° - W である。調査区東側の傾斜地付近に位置しており整地層である明茶色土を除去後に検出した 2 面目に相当する遺構である。出土遺物は非常に少ないが、土師器坏 A が出土しており A 期に埋没したものと考えられる。

土器埋設遺構 (SJ)

97-3 SJ180 (【本文・表編】第 41 図・第 134 表／【図版編】遺構図：276 図、遺物図：第 289 図 11～26)

調査区西側の D7・E7 グリッドで検出された土坑である。長軸 2.9m、短軸 0.9m の楕円形で、検出面からの最大深度は 0.6m である。断面形状は逆台形を呈する。1～3 層と 4・5 層で遺物を区分しているが 1～3 層からは完形となる土師器坏 A が 15 個体出土した、遺物の出土状況からみて土坑を埋める際に一括して投棄もしくは堆積土中に埋置したと考えられる。出土遺物より A III -2 期に位置づけられる。

97-3 SJ275 (【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 276 図、遺物図：第 289 図 27～29)

調査区東側の B27 グリッドで検出された土坑である。長軸 0.2m、短軸 0.2m の円形で、検出面からの最大深度は 0.2m である。SD501 と同様、整地層である明茶色土を除去後に検出した 2 面目に相当する遺構である。完形の土師器小皿 A I が 3 枚出土した。A III -1～2 期に位置づけられる。

柱穴遺構 (SP)

97-3 SP248 (【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 276 図、遺物図：第 289 図 34)

調査区東側の B20 グリッドで検出されたピット状の土坑である。長軸 0.6m、短軸 0.5m の楕円形で、検出面からの最大深度は 0.3m である。埋土は褐灰色土の単層である。遺構からは土師器大皿 C が出土しており、C-2～D 期に位置づけられる。

97-3 SP254 (【本文・表編】第 41 図・第 135 表／【図版編】遺構図：第 276 図、遺物図：第 289 図 36～38)

調査区東側の C22 グリッドで検出されたピット状の土坑である。SK331 に切られている。長軸 0.5m、短軸 0.4m の楕円形で、検出面からの最大深度は 0.3m である。埋土は褐灰色土の単層である。遺物は土師器坏 A 片のほか、京都産と考えられる薄手の土師器が出土した。A III -1 期頃に位置づけられる。

その他の遺構 (SX)

97-3 SX510・515 (【本文・表編】第 136 表／【図版編】土層図：第 261 図、遺物図：なし)

調査区東側の B28・29 グリッドで検出された硬化した砂礫層である。第 261 図の土層中にのみ記載している。この砂礫層は 1 面目 D-1 期頃の遺構 SK175 上面に幅 34 m の SX510 が存在し、SX510 西端より 65 m 西の同一層位中に幅 24 m の SX515 が存在する。面的では確認できていないものの、97-1E 北壁土層中においても同一層位に同一の砂礫層が確認されており、簡易な道路舗装面を形成している可能性がある。遺構の切り合いから C-2～D 期に位置づけられる。

紙幅の都合上、本調査区出土遺物の概要は割愛する。

(堀麗・長直信)

第6節 第97次調査区確認調査及び第101次調査

(1) 概要

中世大友府内町跡第97次調査に先立っておこなわれた確認調査と、97次調査終了後の開発地の擁壁設置箇所において実施した第101次調査について報告する。

開発対象地は、中世大友府内町跡第87次として広範囲にトレンチ調査が行われているが、開発対象地域東側については調査が及んでいなかったことから、のちの97-2区に相当する地点に一箇所（確認調査第3トレンチ）、開発地東端部において2箇所のトレンチ（確認調査第1・第2トレンチ）を設定し遺構の有無を確認した。

町101次調査は擁壁設置箇所にあたり、町97次調査として実施した地点の30～40m東側に位置する。東西幅3～4m、南北約155mの762m²に対して行った。町101次調査地点は確認調査第1・第2トレンチと一部重複する。

確認調査第3トレンチの状況は、97-2次調査と重複する為、町97次調査ではわからなかった「寺小路町」側の最奥部の大分川沿岸部付近を対象に報告する。

(2) 基本土層

調査区中央部分では地表下0.3～0.4m程の旧表土を除去すると、砂礫を多く含む「暗茶灰色土」を検出した。この層を除去すると、地表下約0.7～0.8mより（標高3.5m付近）「暗茶色土」を検出した。

層中からは厚手の土師器皿Cや青花皿、瓦、赤間硯、牛馬の臼歯等が出土した他、部分的に拳大礫がまとまって出土した。

(3) 主要遺構

整地層

SX001（第43図）

確認調査第1トレンチ、第2トレンチで検出した東側（大分川方向）に向かって傾斜する大規模な「落ち」状の地形を埋める整地層である。地表より0.3m下で検出した。SX001の規模は、1トレンチで東西15m以上、確認できた部分での最大深さは1.8mで、調査区外となる大分川方向に対して更に深くなると考えられる。また、町101次調査区全面で確認され、南北155m以上の規模となることが分かっている。

埋土は大きく3層に分層できるが、最も下位の層は「灰色土」としたやや粘質の強い層で、16世紀後半～末頃の備前焼鉢片が出土している。また、この層の最下位には人頭大の礫が最大0.4mの厚さで堆積していた。この「灰色土」の上面には、砂質で遺物をほとんど含まない「茶色土」が堆積する。なお、SX001の埋没後、唐津焼皿（第45図1）を含む遺物包含層が0.2～0.3mほどの厚さで堆積していた。

砂脈

SX002（第44図）

町101次調査区南側で確認した。南北1m程の長さで確認した砂脈である。土層断面観察では砂層がSX001に貫入している状況を確認した。この砂層がどの層まで達していたかは今回の調査では確認できない。

(4) 出土遺物

部分的な調査のため出土遺物は少量である。SX001の埋没時期に関連するものに絞って報告する。

1は国産陶器唐津皿である。内面に胎土目が残る。灰色の光沢のある釉がかかる。第1トレンチのSX001上位の層より出土しており、遺構の埋没年代を考える上で参考になる遺物である。2は土師器皿Cである。口縁端部形態はe類で厚みは8mmと厚い。D期に位置づけられる資料である。3は石製品硯である。石材は赤間石である。表面には一部墨が残る。

(5) 小結

今回の調査では、SX001とした東側（大分川方向）に傾斜する大規模な「落ち」状の遺構と、これを埋める堆積層SX001及びSX001の一部を貫いて形成された砂脈SX002を確認した。

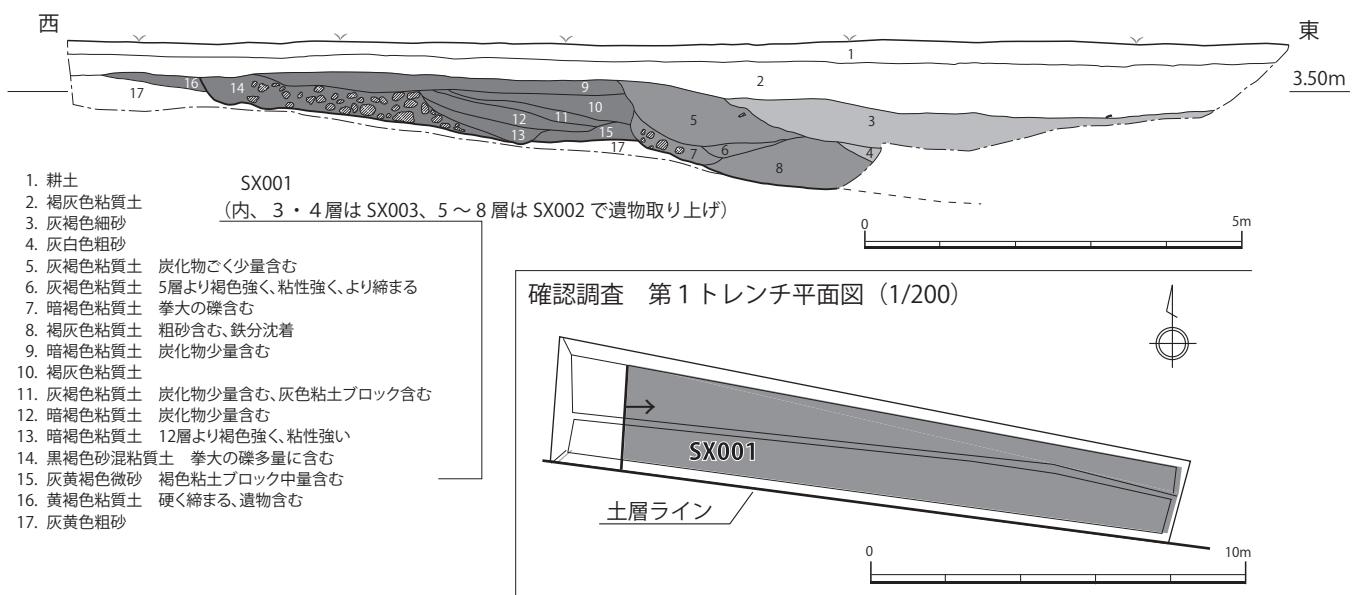


第42図 第97次確認調査・第101次調査区 位置図(1/1000)

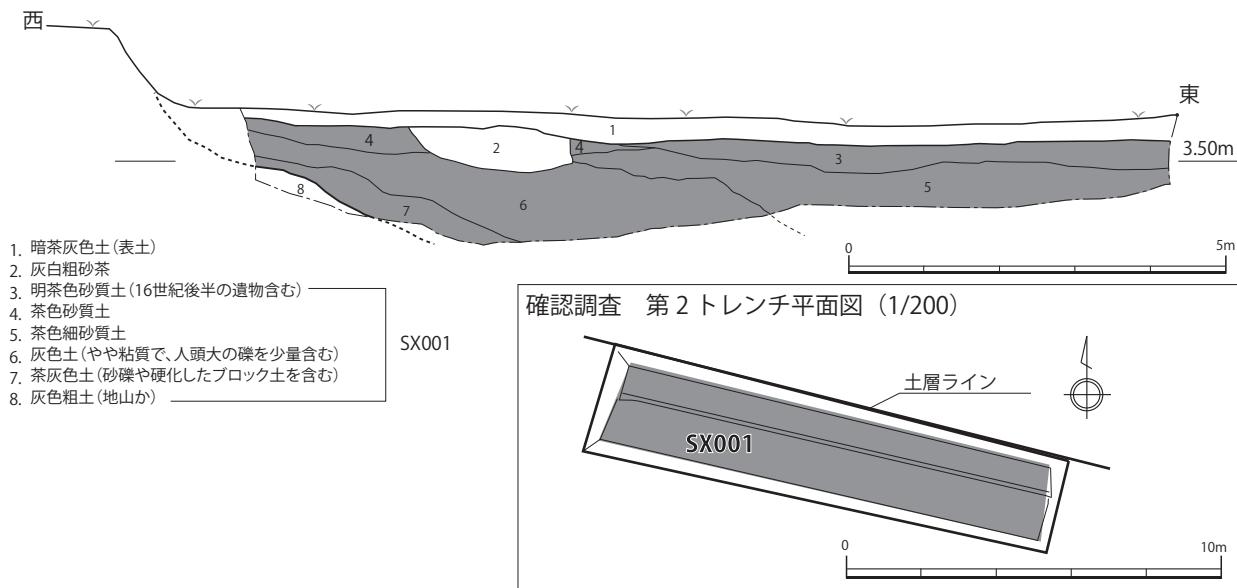
SX001 からは 15～16世紀代の土師器や備前焼、弥生土器等が出土するほか、埋没の最終段階には、胎土目を残す唐津焼皿を含む。近世陶磁器は SX001 より上位の表土直下において確認されたことから、SX001 の下限年代は 17世紀初頭に近い時期と考えられる。

町101次調査では、擁壁設置に伴う掘り下げ面（地表下より 1.7～1.8 m）よりも「落ち」の堆積土が深いため地山は確認できないが、標高 4.0m 程の水面をもつ大分川へ向かって傾斜すると考えられる。SX001 の性格は、現状では大分川へ向かって傾斜する自然地形か、人工的に大分川へ向かって傾斜する溝ないし切り通し状の遺構か判断が難しいが、大分川に沿って 155 m の長さで確認でき、堆積土中には砂層やラミナ層などが互層に確認できる地点もあることから、中世段階の自然地形であった可能性が高く、14世紀～17世紀初頭の長期にわたって埋没した可能性がある。（長 直信）

確認調査 第1トレンチ北壁土層図 (1/100)

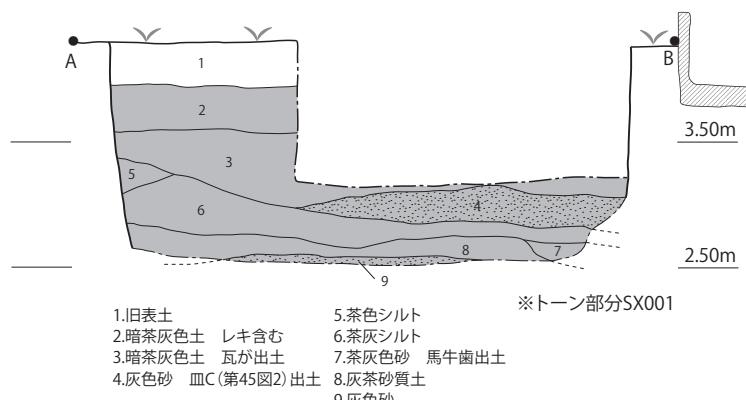


確認調査 第2トレンチ 北壁土層図 (1/100)

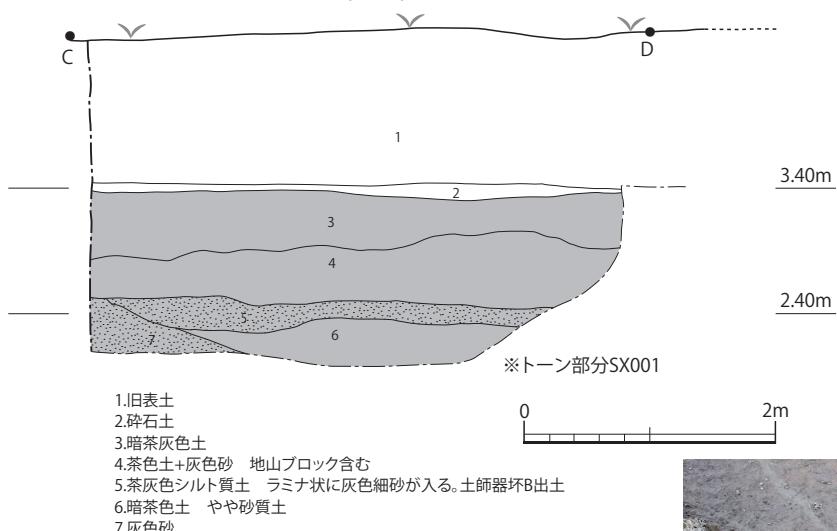


第43図 第97次確認調査 トレンチ個別図 (1/100・1/200)

第 101 次調査区 A-B 土層図 (1/60)

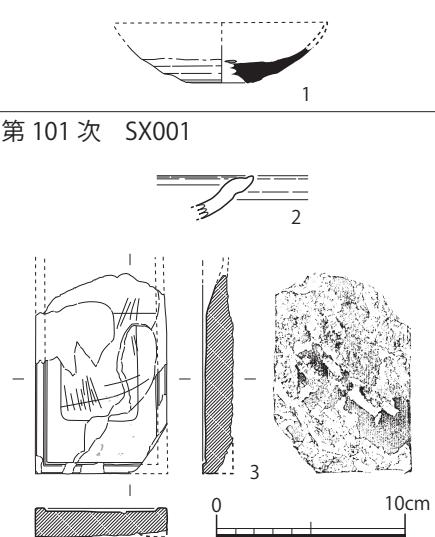


第 101 次調査区 C-D 土層図 (1/60)



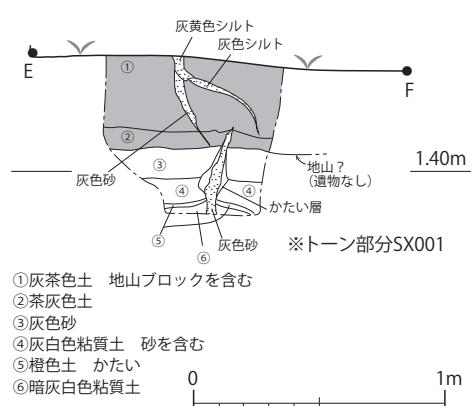
第 44 図 第 101 次調査区 トレンチ土層図 (1/30・1/60)

確認調査第 1 トレンチ SX001



第 45 図 第 101 次調査区 遺物実測図 (1/4)

第 101 次調査区 SX002(砂脈) E-F 土層図 (1/30)



第V章 自然科学分析

第1節 中世大友府内町跡第97-1E 次調査における環境考古分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

遺構の堆積物の遺体群集や性状を調べることによって、堆積環境や周辺の植生、利用植物、堆積物の生成の由来などが推定復原できる。便所遺構等では、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において特異性を示し、その遺体群集から食べた食物を直接的に探ることができる。ここでは鴻臚館跡から検出された土坑の堆積物の寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定、珪藻分析を行い、検討を加える。

2. 試料

分析試料は、97-1E SK295 から採取された試料 7 点、97-1E SK440 から採取された試料 8 点の計 15 点である。

3. 寄生虫卵分析

(1) 原理

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、便所遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができ便所遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。現状では近年研究されはじめた研究であり分析例も少ない。

(2) 方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) 試料から 1 cm³ を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
- 4) 25% フッ化水素酸を加え 30 分静置（2・3 度混和）
- 5) 水洗後サンプルを 2 分
- 6) 2 分したサンプルの一方にアセトトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
- 8) 検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2 分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を 3 回繰り返して行った。

(3) 結果

1) 分類群

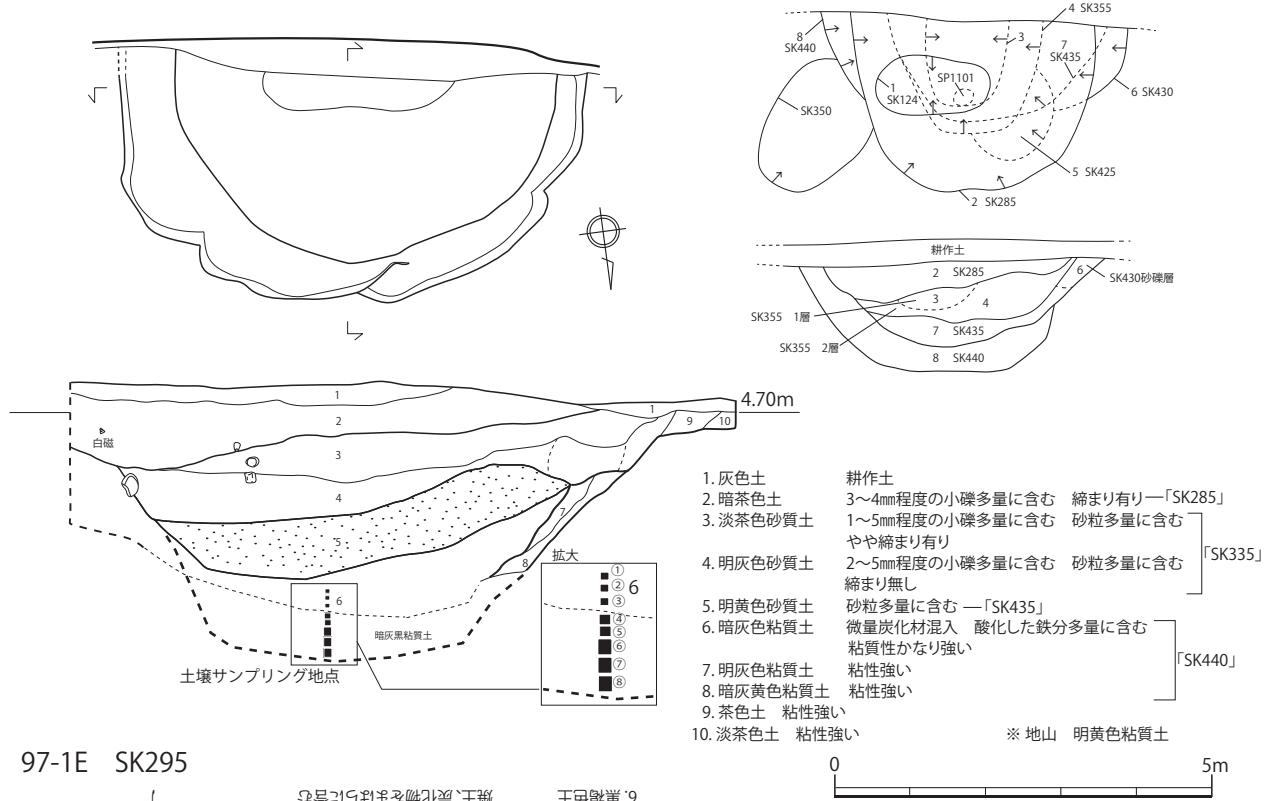
分析の結果出現した寄生虫卵は、6 分類群である。これらの学名と和名および粒数を第 43 表に示し、1 cm³ 中の寄生虫卵数を第 47 図に示す。出現した分類群は顕微鏡写真に示した。以下にこれらの特徴を示す。

・回虫 Ascaris lumbricoides

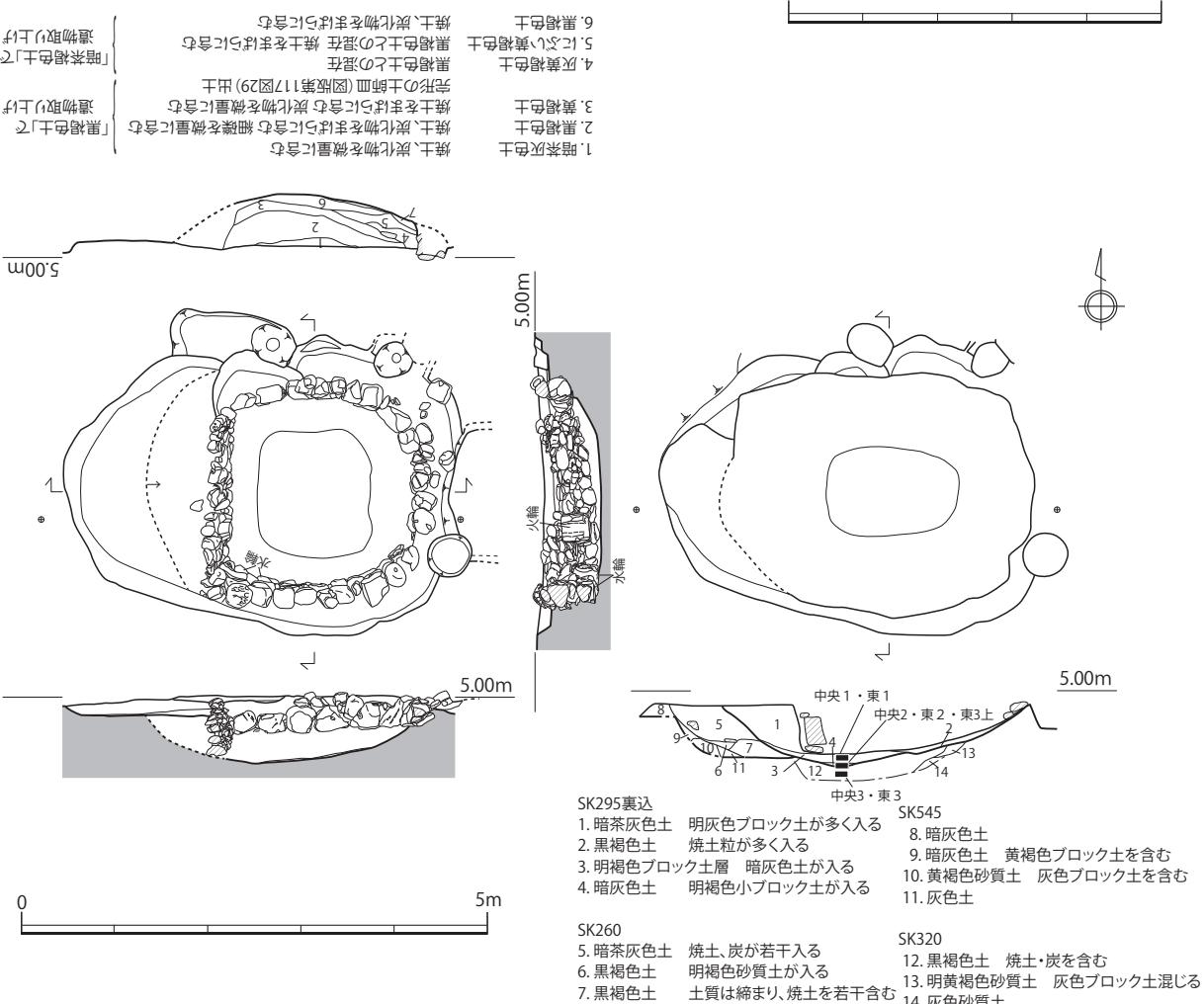
回虫は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられ、卵には受精卵と不受精卵がある。遺跡の堆積物の分析では、堆積年数や薬品処理のため、受精卵と不受精卵の区別は不明瞭である。比

97-1E SK440

遺構重複図・土層模式図



97-1E SK295



第46図 第97-1E次調査区 SK440・SK295 遺構実測図(1/80・1/100)

較的大きな虫卵で、およそ $80 \times 60 \mu\text{m}$ あり橍円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。

・鞭虫 *Trichuris trichiura*

鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは、 $50 \times 30 \mu\text{m}$ でレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

・肝吸虫 *Clonorchis sinensis*

肝吸虫は、アジア地域に広く分布し、特に中国、日本、ベトナム、韓国に多い。日本では岡山県南部、琵琶湖沿岸、八郎潟、利根川流域などが流行地として知られている。虫卵は、およそ $30 \times 16 \mu\text{m}$ でなすび型で一端に陣笠状の小蓋を有する。卵殻の表面には亀甲状の紋理を認める。糞便とともに外界に出た虫卵は、水中で第1中間宿主のマメタニシに食べられ、セルカリアになり水中に遊出し、第2中間宿主のモツゴ、モロコ、コイ、フナ、タナゴに侵入してメタセルカリアとなり、魚肉とともにヒトに摂取され感染する。

・異形吸虫類 *Metagonimus – Heterophyes*

日本各地でみられる横川吸虫や、瀬戸内海沿岸に多く、その他海に近い地域にかなり広く見られる有害異形吸虫は、中間宿主が異なるだけで発育史をはじめ形態なども良く似ている。卵はおよそ $27 \times 17 \mu\text{m}$ で、短橍円形または卵形、一端に小蓋を有するが、卵殻との境がほとんど突出せずスムーズである。卵殻表面は平滑で紋理はみられない。横川吸虫ではアユ、有害異形吸虫ではボラなどの生食により魚肉とともにヒトに摂取され感染する。遺跡においては、小蓋がとれたり、堆積環境や薬品処理などにより横川吸虫卵と有害異形吸虫卵の区別はつきにくく、異形吸虫類とする。

・カピラリア *Capillaria sp.*

鶏の小腸に寄生する毛体虫で、卵は大きさ形とも鞭虫卵に類似するが、両端栓状物がやや突出しその幅は小さく卵殻もやや薄い。鶏などの生食や不完全な調理で感染する。

・不明虫卵 Unknown eggs

卵の大きさは約 $115 \times 83 \mu\text{m}$ で淡黄色、小蓋がある。大きさ、形とも肝蛭卵に類似するが、小蓋の大きさの比率が小さく、ここでは不明虫卵とした。肝蛭（*Fasciola*）の虫卵は、およそ $135 \times 85 \mu\text{m}$ で長橍円形で、淡黄色、卵殻は薄く一端に小蓋を有する。ウシ、ヒツジ、ヤギ、シカなどの草食獣の肝臓に寄生する。ウシなどの糞とともに排泄された虫卵は水田、小川などで発育し、中間宿主のヒメモノアラガイに侵入しその後水草、枯葉などに付着し被囊、メタセルカリアになり終宿主に摂取される。汚染された水辺の植物（セリ、コナギなど）を生食したり、肝蛭が寄生しているレバーを生食することで感染する。肝蛭は、世界中の草食獣、なかでも反芻動物に蔓延している。

2) 寄生虫卵群集の特徴

・97-1E SK295（中央1、中央2、中央3、東1、東2、東3、東3上）

いずれの試料からも寄生虫卵は検出されず、明らかな消化残渣も認められない。

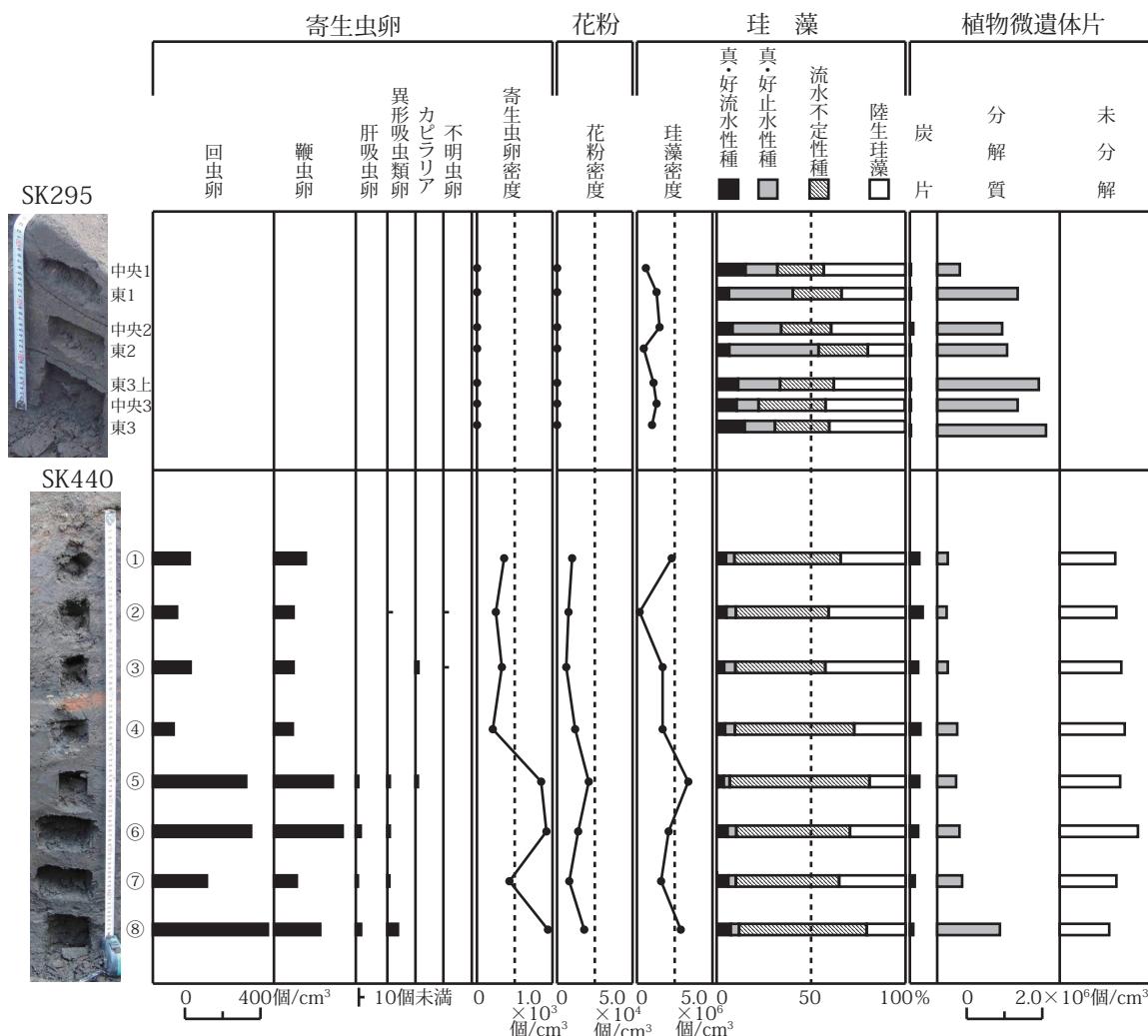
・97-1E SK440（①～⑧）

試料①～⑧ともに回虫卵、鞭虫卵が優位に検出され、やや回虫卵の割合が高い。試料⑤～⑧では、寄生虫卵の密度も高く、肝吸虫卵、異形吸虫類卵が伴われる。また試料③、⑤ではカピラリアが検出される。

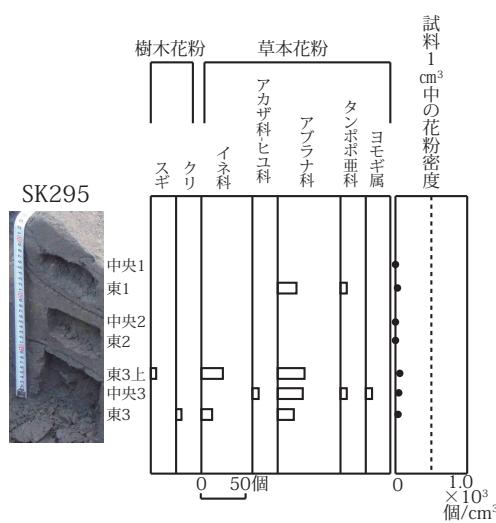
4. 花粉分析

（1）原理

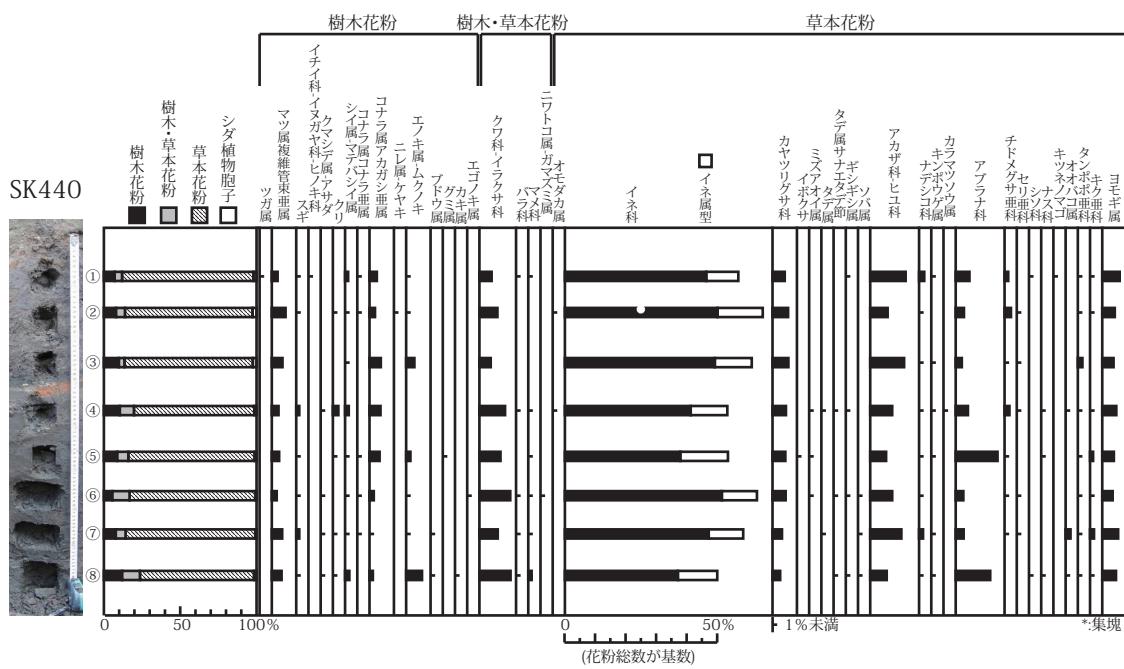
花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水



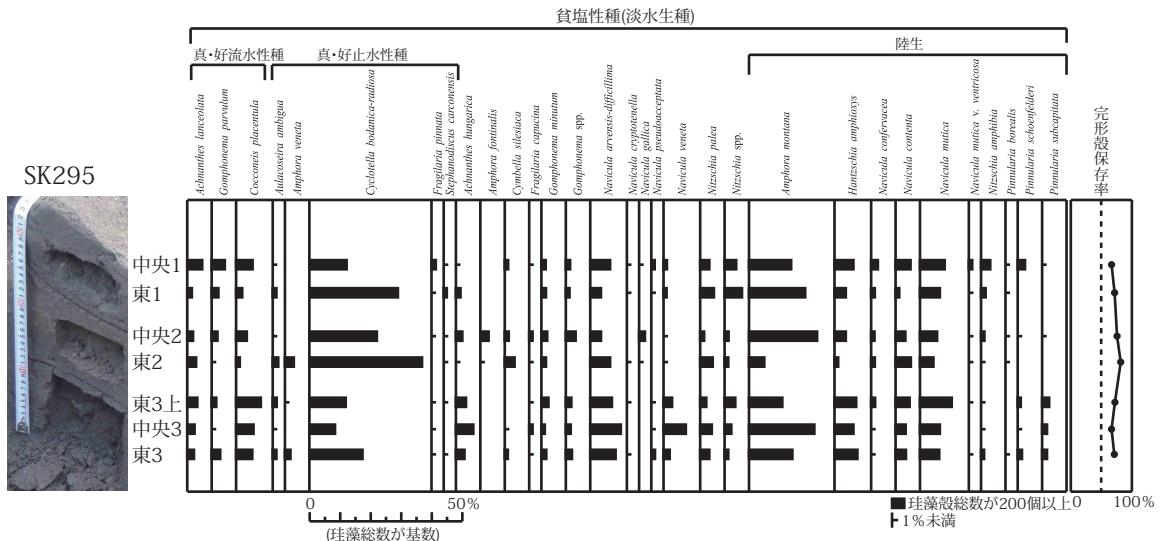
第47図 第97-1E次調査区における寄生虫卵ダイアグラムおよび微遺体密度



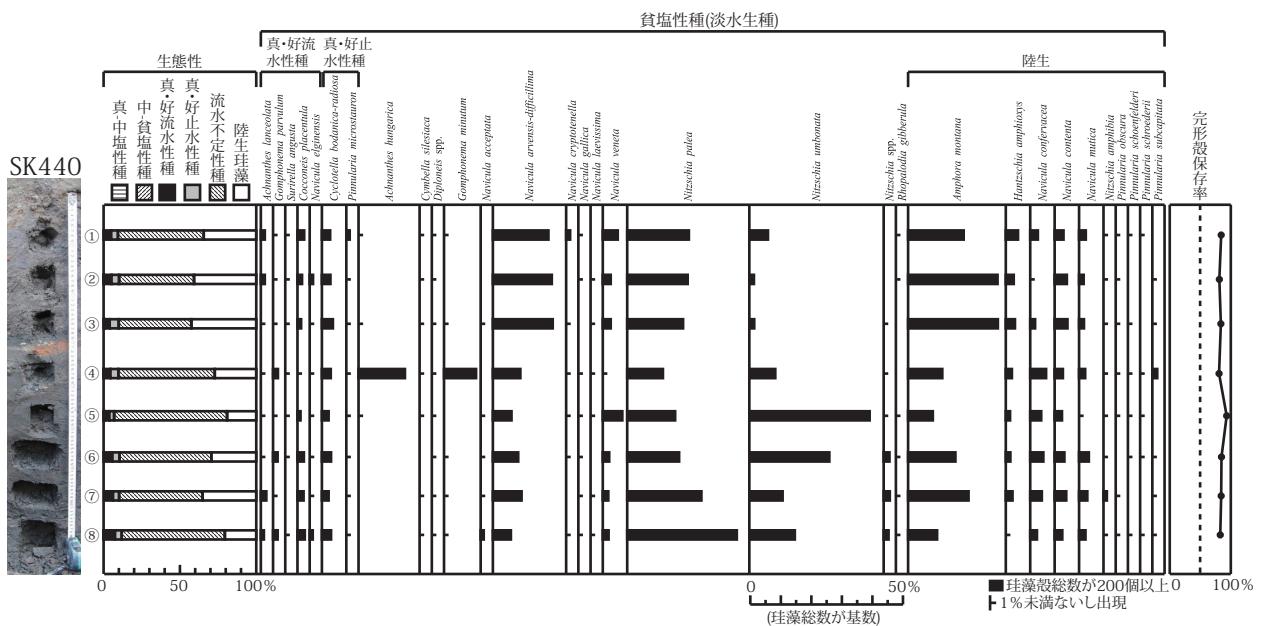
第48図 第97-1E次調査区SK295における花粉ダイアグラム



第49図 第97-1E次調査区 SK440における花粉ダイアグラム

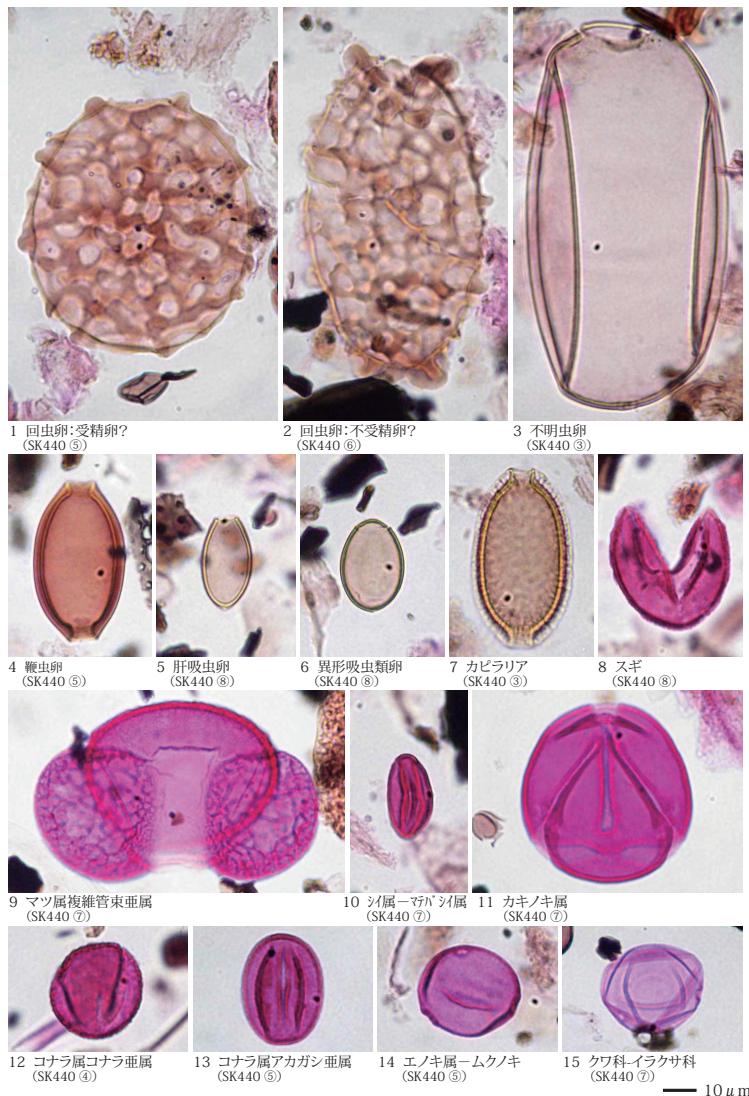


第50図 第97-1E次調査区 SK295における主要珪藻ダイアグラム



第51図 第97-1E次調査区 SK440における主要珪藻ダイアグラム

写真 18 第 97-1E 次調査区 花粉・胞子・寄生虫卵 I



成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 方法

寄生虫卵分析で2分しアセトトリス処理を施した沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製、検鏡・計数をおこなう。

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属について、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

(3) 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉15、樹木・草本花粉4、草本花粉24、シダ植物胞子2形態の計45である。これらの学名と和名および粒数を第43表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第48、49図に示す。なお、200個未満であっても計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、ブドウ属、グミ属、カキノキ属、エゴノキ属

[樹木・草本花粉]

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属-ガマズミ属

[草本花粉]

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、チドメグ

写真 19 第 97-1E 次調査区 花粉・胞子・寄生虫卵 II



サ亞科、セリ亞科、シソ科、ナス科、キツネノマゴ、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

- 97-1E SK295 (中央 1、中央 2、中央 3、東 1、東 2、東 3、東 3 上) (第 48 図)

いずれの試料も密度が極めて低く、中央 1、中央 2、東 2 からは花粉は検出されなかった。中央 3 からアブラナ科、アカザ科-ヒユ科、タンポポ亜科、ヨモギ属、東 1 からアブラナ科、タンポポ亜科、東 3 からアブラナ科、イネ科、クリ、東 3 上からアブラナ科、イネ科、スギがわずかに出現する。

- 97-1E SK440 (①~⑧) (第 49 図)

いずれの試料も花粉の組成、構成とともに類似した出現傾向を示す。樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く 75% から 85% 以上を占め、イネ科 (イネ属型を含む) が高率に出現する。草本花粉では、他にアカザ科-ヒユ科、アブラナ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が比較的多く、試料⑥~⑧ではソバ属が出現

する。樹木・草本花粉ではクワ科-イラクサ科が顕著に出現し、樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属-マテバシイ属、エノキ属-ムクノキなどが出現する。

5. 珪藻分析

(1) 原理

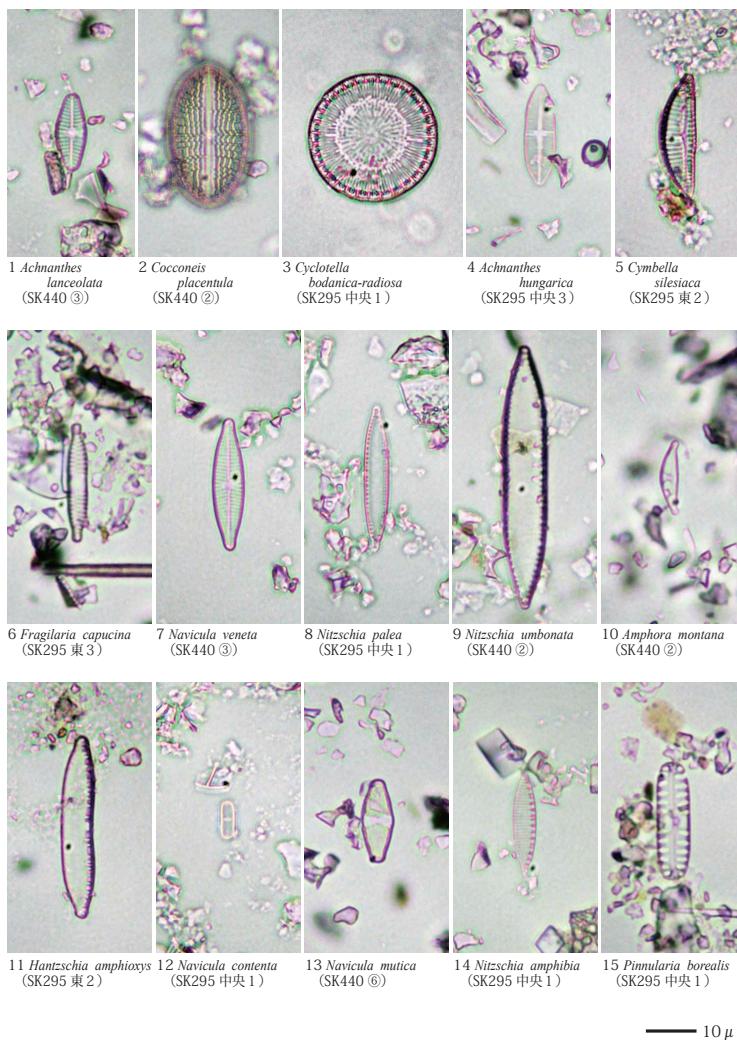
珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

(2) 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm³ を採量
- 2) 10% 過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晚放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗 (5 ~ 6 回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製

写真 20 第 97-1E 次調査区 珪藻



— 10 μm

6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600 ~ 1500 倍で行った。計数は珪藻被殼が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

(3) 結果

1) 分類群

試料から出現した珪藻は、真塩性種（海水生種）1 分類群、真一中塩性種（海一汽水生種）1 分類群、中塩性種（汽水生種）1 分類群、中一貧塩性種（汽一淡水生種）1 分類群、貧塩性種（淡水生種）129 分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端 2 個につき 1 個と数えた。第 44 表に分析結果を示し、珪藻ダイアグラムを第 50、51 図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe(1974) の記載により、陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉 (1988) により、淡水生種は安藤 (1990) による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を

記載する。

① 97-1E SK295 (中央 1、中央 2、中央 3、東 1、東 2、東 3、東 3 上)

Achnanthes hungarica、*Achnanthes lanceolata*、*Amphora fontinalis*、*Amphora montana*、*Amphora veneta*、*Aulacoseira ambigua*、*Cocconeis placentula*、*Cyclotella bodanica-radiosa*、*Cymbella silesiaca*、*Fragilaria capucina*、*Fragilaria pinnata*、*Gomphonema minutum*、*Gomphonema parvulum*、*Gomphonema spp.* *Hantzschia amphioxys*、*Navicula arvensis-difficillima*、*Navicula confervacea*、*Navicula contenta*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula gallica*、*Navicula mutica*、*Navicula mutica v. ventricosa*、*Navicula pseudoacceptata*、*Navicula veneta*、*Nitzschia amphibia*、*Nitzschia palea*、*Nitzschia spp.*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia schoenfelderi*、*Pinnularia subcapitata*、*Stephanodiscus carconensis*

② 97-1E SK440 (①~⑧)

[貧塩性種]

Achnanthes hungarica、*Achnanthes lanceolata*、*Amphora montana*、*Cocconeis placentula*、*Cyclotella bodanica-radiosa*、*Cymbella silesiaca*、*Diploneis spp.*、*Gomphonema minutum*、*Gomphonema parvulum*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula acceptata*、*Navicula arvensis-difficillima*、*Navicula confervacea*、*Navicula contenta*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula elginensis*、*Navicula gallica*、*Navicula laevissima*、*Navicula mutica*、*Navicula veneta*、*Nitzschia amphibia*、*Nitzschia palea*、*Nitzschia spp.*、*Nitzschia umbonata*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia obscura*、*Pinnularia schoenfelderi*、*Pinnularia schroederii*、*Pinnularia subcapitata*、*Rhopalodia gibberula*、*Surirella angusta*

2) 珪藻群集の特徴

それぞれの地点において珪藻構成と珪藻組成の特徴を記載する。

・97-1E SK295（中央1、中央2、中央3、東1、東2、東3、東3上）（第50図）

分析の結果、出現した珪藻はほとんど貧塩性種（淡水生種）で、中央1では、陸生珪藻の占める割合が高く、*Amphora montana*、*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*Nitzschia amphibia*、*Pinnularia schoenfelderi*、*Navicula confervacea*が優勢に出現する。真・好止水性種では、*Cyclotella bodanica-radiosa*、真・好流水性種では、*Gomphonema parvulum*、中～下流河川指標種の*Achnanthes lanceolata*、沼澤湿地付着生指標種の*Coccconeis placentula*、流水不定性種では、*Navicula arvensis-difficillima*、*Nitzschia palea*、小型の*Nitzschia spp.*、などが出現する。中央2では、中央1と組成はほとんど同じだが、陸生珪藻の、*Amphora montana*、真・好止水性種の*Cyclotella bodanica-radiosa*がやや増加し、真・好流水性種、他の陸生珪藻は減少する。変わって流水不定性種が多様に微増する。中央3では、*Navicula arvensis-difficillima*、*Navicula veneta*、*Achnanthes hungarica*などの流水不定性種が増加する。

東の試料でも、中央の珪藻組成、構成と大きな差は認められない。東1では、真・好止水性種と陸生珪藻の占める割合がほぼ同じで、真・好止水性種の*Cyclotella bodanica-radiosa*が優占し、次に陸生珪藻の*Amphora montana*が多い。陸生珪藻では他に*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*などが出現し、流水不定性種では、*Nitzschia palea*、*Nitzschia spp.*、*Navicula arvensis-difficillima*が出現する。東2では、真・好止水性種の*Cyclotella bodanica-radiosa*が増加し、陸生珪藻の*Amphora montana*が減少する。東3と4は、珪藻の組成、構成ともに極めて類似した出現傾向を示す。陸生珪藻の占める割合がやや高く、次いで流水不定性種が多い。陸生珪藻では、*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Navicula contenta*が出現する。真・好止水性種では、*Cyclotella bodanica-radiosa*、真・好流水性種では、沼澤湿地付着生種の*Coccconeis placentula*、中～下流河川指標種の*Achnanthes lanceolata*、好流水性種の*Gomphonema parvulum*が出現する。流水不定性種では、*Navicula arvensis-difficillima*、*Navicula veneta*、*Achnanthes hungarica*が出現する。

・97-1E SK440(①～⑧)（第51図）

試料①から⑧において、珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より3帯の珪藻分帯を設定し、分帯ごとに特徴を記載する。

試料⑧～⑤では、出現した珪藻はほとんど貧塩性種（淡水生種）で、流水不定性種が55%～75%を占め次いで陸生珪藻が20%～35%を占める。流水不定性種では、*Nitzschia palea*、*Nitzschia umbonata*が高率に出現する。下位では*Nitzschia palea*が優占し、上位では*Nitzschia umbonata*が優占する。他に*Navicula arvensis-difficillima*、*Navicula veneta*が出現する。陸生珪藻では、*Amphora montana*を主に*Navicula confervacea*、*Navicula contenta*、*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*が出現する。沼澤湿地付着生種の*Cyclotella bodanica-radiosa*、*Coccconeis placentula*、好流水性種の*Coccconeis placentula*、中～下流河川指標種の*Achnanthes lanceolata*も低率に出現する。

試料④では流水不定性種が60%以上を占めるが、I帯で高率に出現した流水不定性種の*Nitzschia palea*、*Nitzschia umbonata*や*Navicula veneta*は減少し、*Achnanthes hungarica*、*Gomphonema minutum*が増加する。

試料③～①では、*Amphora montana*の増加に伴い陸生珪藻の占める割合が増加する。流水不定性種では、*Navicula arvensis-difficillima*、*Nitzschia palea*が増加する。

6. 考察とまとめ

(1) 遺構の性格

97-1E SK295（中央1、中央2、中央3、東1、東2、東3、東3上）からは寄生虫卵は検出されず、花粉も極めてわずかであった。花粉とともに検出される分解質植物微遺体片は極めて多いが、未分解植物遺体片は各試

第43表 寄生虫卵・花粉分析結果

学名	和名	ESK295						ESK440									
		中央1	中央2	中央3	東1	東2	東3	東3上	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
Arboreal pollen	樹木花粉								1	8	23	14	11	14	7	13	14
<i>Tsuga</i>	ツガ属								1	1	1	1	5	5	1	4	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束葉属								1	1	1	1	1	1	1	1	1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ								1								
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科																
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クルミ属																
<i>Castanea crenata</i>	クリ								1	1	1	9	3	1	1	2	1
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属								4	2	1	6	1	4	2	6	6
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属								3	1			1	3	3	3	3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属								10	9	15	18	19	6	2	5	5
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属ニレキ属											1					
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ								2	4	11		8	2	3	23	
<i>Vitis</i>	ブドウ属													1		1	1
<i>Eleagnus</i>	グミ属																
<i>Diospyros</i>	カキ属																1
<i>Strix</i>	エゴノキ属																
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木+草本花粉								17	30	15	42	40	45	23	45	
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科								2	2		4	1	1	1	2	
Rosaceae	バラ科								2			1	2	3	1	5	
Leguminosae	マメ科								2					1			
<i>Sambucus-viburnum</i>	エワトコ属-ガマズミ属																
Nonarboreal pollen	草本花粉																
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属								2	4	195	1	1				
Gramineae	イネ科								44	256	*	199	206	218	228	180	164
<i>Oryza type</i>	イネ属型								17	26	21	22	24	19	12	11	
Cyperaceae	カヤツリグサ科																
<i>Anemone keisak</i>	イボクサ																
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属																
<i>Polygonum</i>	タデ属																
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節																
<i>Rumex</i>	ギシギシ属								3			2		1	1	1	
<i>Fagopyrum</i>	ゾハ属																
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科								1	49	29	45	36	30	32	39	24
Caryophyllaceae	ナデシコ科								7	1	2	3	3	2	5	1	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属								2		1	4	1	1	1	1	
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属											2					
Cruciferae	アブラナ科								4	3	3	5	19	14	8	20	79
Hydrocotylloideae	チドメグサ科								5	11	2	8	4	1	1	1	50
Apoioideae	セリ亞科																
Labiatae	シソ科																1
Solanaceae	ナス科																1
<i>Justicia procumbens</i>	キツネノマゴ											1					
<i>Plantago</i>	オオバコ属								1	1		6	3	3	2	2	2
Lactuceoideae	タンボボ科								2	2		1	6	2	5	1	
Asteroideae	ギク科								1								
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属								24	21	15	23	22	15	20	20	
Fern spore	シダ植物胞子																
Monolete type spore	単条溝胞子	1	1	2			1	3	4	1	4	6	1	2	2	2	
Trilete type spore	三条溝胞子		1				1	6	10	9	3	1	2	1	5		
Arboreal pollen	樹木花粉																
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木+草本花粉																
Nonarboreal pollen	草木花粉																
Total pollen	花粉総数	0	0	7	4	0	6	10	121	512	405	500	579	444	382	444	
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	0.0	0.0	4.9	2.8	0.0	3.6	6.0	1.0	7.6	6.1	1.2	2.1	1.4	8.1	1.8	
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0	7	8	6	8	5	
Fern spore	シダ植物胞子	1	0	2	2	0	0	2	9	14	10	7	3	3	7		
Helminth eggs	寄生虫卵									15	16	25	11	38	40	26	87
<i>Ascaris/lumbricoides</i>	回虫卵								13	13	13	10	24	28	11	35	
<i>Trichuris/trichiura</i>	鞭虫卵											1	2	1	4		
<i>Clonorchis sinensis</i>	肝吸虫卵											1	1	1	1	8	
<i>Metagonimus-Heterophyes</i>	異形吸虫類卵											2		1			
<i>Capillaria</i> sp.	カピラリア											1					
Unknown eggs	不明虫卵																
Total	計	0	0	0	0	0	0	0	28	31	41	65	71	39	134		
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	2.5	3.3	2.1	8.5	9.2	4.3	9.4	
Stone cell	石细胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Digestion rimeins	明るかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	

*:集塊

料とも含まれていない。このことから、97-1E SX295 の堆積物は、従来豊富な有機質が含まれていたが、乾燥か乾湿を繰り返す環境によって強い分解を受けたとみなされ、寄生虫卵および花粉も分解されたと考えられる。わずかに検出される花粉ではアブラナ科が多いことは、今までに示されている糞便堆積の花粉組成と一致し、また寄生虫卵が検出されないケースも同様に示されている（金原・金原、1996・1999）。以上から、97-1ESX295 は分解によって寄生虫卵など有機質遺体が検出されにくいか、わずかに検出される花粉群集組成から、糞便の堆積を含んでいたと考えられ、便所遺構である可能性が高い。珪藻群集では好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa*、*Amphora montana* を主とし、陸生珪藻も多く、やや不安定な池状水域と湿った程度の環境が示唆された。そのため、池状水域を呈した時期と珪藻が生育しにくい湿ったまたは乾燥した時期が、季節単位で繰り返す有機質が分解される環境であったと考えられる。

97-1E SK440(①～⑧)では、寄生虫卵、花粉、特に分解しやすい未分解植物微遺体が検出され、ほぼ分解を受けていないとみなされる。寄生虫卵はやや低密度で検出され、通常の生活汚染レベルより高い。回虫卵、鞭虫卵を主に肝吸虫卵、異形吸虫卵、カピラリアが検出される。花粉群集では、イネ属型を含むイネ科が優占し、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、クワ科-イラクサ科がやや多く、周辺の植生を反映しているとみなされる。珪藻群集では、上部と下部で分類群による優占傾向が異なるが流水不定性種が最も多く、陸生珪藻がやや多い。97-1ESK440 が水位の変動のある不安定な水域ながら滞水していたことが示唆される。以上から、寄

第44表 珪藻分析結果

分類群	SK295								SK435							
	中央1	中央2	中央3	東1	東2	東3	東3上	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	
貧塩性種(淡水生種)																
<i>Achnanthus crenulata</i>	1	2		1	2	2	2	1		1						1
<i>Achnanthus exiguus</i>	1															
<i>Achnanthus evillis</i>																
<i>Achnanthus hungarica</i>	3	8	21	6	2	13	14	4	4	1	68	4				
<i>Achnanthus lanceolata</i>	18	7	9	6	10	13	11	6	7	2	4	3	5	8	7	
<i>Achnanthus punctata</i>				1	1						2					
<i>Achnanthus spp.</i>					2											
<i>Amphora corollata</i>	1		1		1				2			1	1	1	1	
<i>Amphora fontinalis</i>		10			2											
<i>Amphora montana</i>	51	84	79	74	17	43	70	81	155	146	50	47	82	89	64	
<i>Amphora ovalis</i>																
<i>Amphora pediculus</i>	3			1		1				2	1					
<i>Amphora veneta</i>					10	3	9									
<i>Amphora sp.</i>					8	1	1									
<i>Autumnaria ambigua</i>		1	3	3	5	6	5	6		1				2	1	
<i>Autumnaria canadensis</i>														1		
<i>Autumnaria grandata</i>																
<i>Caloneis bacillaris</i>				1	1				1	1			1	2		
<i>Caloneis hyalina</i>													1	1	1	
<i>Caloneis silicula</i>	1					1										1
<i>Cocconeis disculus</i>	4		2				1							1	2	
<i>Cocconeis placenta</i>	20	13	21	8	4	32	26	10	8	6	4	6	11	9	16	
<i>Cyclotella bodanica-radialis</i>	45	83	31	117	125	47	86	12	15	18	13	13	16	10	20	
<i>Cyclotella contorta</i>					5											
<i>Cyclotella meneghiniana</i>		1	2	3			1		1						1	
<i>Cyclotella spp.</i>		2		1			1									
<i>Cymbella amphioxys</i>										1						
<i>Cymbella gracilis</i>	1															
<i>Cymbella naviculiformis</i>											1					
<i>Cymbella stictica</i>	4	5	1	11		5	2	4	1	2	1		2	3		
<i>Cylindrotheca closterium</i>	1	3		1		1				1	1	1				
<i>Cymbella turgida</i>	2	1	1	2	1	2								2	1	2
<i>Diatoma vulgaris</i>	1		1													
<i>Diploneis elliptica</i>	1		1													
<i>Diploneis intermixta</i>	1			2												
<i>Diploneis ovalis</i>																
<i>Diploneis pseudovalis</i>								1								
<i>Diploneis yanakensis</i>		5	1	1	1	2	2	2	4	4	3	5	4	1	4	
<i>Diplosphaera cylindrica</i>																
<i>Eutretum adnatum</i>			1	1	1	2	1	1	1							
<i>Eutretum minor</i>																
<i>Eutretum patuloides-rhomboidea</i>	1		1	1	1	1	2	1								
<i>Fragilaria brevistriata</i>	2					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
<i>Fragilaria capucina</i>	1	4	4	4	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	
<i>Fragilaria construens</i>	2	1		1	2				1				1		1	
<i>Fragilaria construens v. ventricosa</i>					1											
<i>Fragilaria elliptica</i>																
<i>Fragilaria fuscopunctata</i>	1	1	2		2				2							
<i>Fragilaria paradoxa</i>	1	1	1	3	3	1			2				2	2	1	
<i>Fragilaria pinnata</i>	5	2	2	2		3	1	1	1	1			2	1	1	
<i>Fritsilia rhomboides v. saxonica</i>																
<i>Fritsilia vulgaris</i>																
<i>Gomphonema acuminatum</i>	1		1								1					1
<i>Gomphonema angustum</i>																
<i>Gomphonema angustum</i>	1					1										
<i>Gomphonema gracile</i>	2															
<i>Gomphonema minutum</i>	5	7	4	6	5	9	8	1	3	47	4	4	3	3	3	
<i>Gomphonema parvulum</i>	16	7	3	9	2	6	14	2	4	7	4	8	3	10		
<i>Gomphonema spp.</i>	5	12	6	5		7	10		1				3	2		
<i>Gyrosigma spp.</i>													1	1	1	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	23	14	23	15	4	28	37	18	14	15	9	8	8	10	6	
<i>Moscovia rotunda</i>																
<i>Meridion circulare v. constructum</i>	1															
<i>Navicula accepta</i>																
<i>Navicula arvensis-difficillima</i>	24	13	37	14	22	28	41	81	102	97	40	35	44	42	40	
<i>Navicula bacillaris</i>					1											
<i>Navicula capitata</i>																
<i>Navicula confervacea</i>	8	4	2	5	4	5	4	11	4	8	23	21	23	17	15	
<i>Navicula contenta</i>	18	12	12	5	17	18	17	13	21	12	14	17	17	17		
<i>Navicula cryptonella</i>	1			2	1	3	4	6	2	2	1	2			1	
<i>Navicula cupido</i>		2		2	3	2	1		6	1	1	4	3	4	7	
<i>Navicula elegans</i>	1	7		3		2	1	1	1	2	1	2	1	3		
<i>Navicula goeppertiana</i>						1										
<i>Navicula kotschy</i>							1		1	1	1	1		1		
<i>Navicula lacustris</i>	1	1	1	1		1			2	1	1	1	1	2	8	
<i>Navicula mutica</i>	30	21	24	26	15	41	31	10	8	8	9	5	17	12	14	
<i>Navicula nana</i>	4	1		1	2	1	3		2			1	1		1	
<i>Navicula ventosa</i>																
<i>Navicula spp.</i>																
<i>Nestidium affine</i>																
<i>Nestidium alpinum</i>																
<i>Nestidium dilatatum</i>																
<i>Nitzschia amphibia</i>	11	4	2	6	2	1	5	3	1	1	3	3	4	5	5	
<i>Nitzschia breviseta</i>																
<i>Nitzschia brevissima</i>																
<i>Nitzschia capitellata</i>																
<i>Nitzschia clausii</i>	1	2			1	1	1	1							1	
<i>Nitzschia debilis</i>						1	1								2	
<i>Nitzschia gracilis</i>	1	1	2		1	2		2	2	3	91	52	91	90	109	243
<i>Nitzschia nana</i>		5	14	18	14	8	15	90	105							
<i>Nitzschia ovalis</i>																
<i>Nitzschia pectinata</i>																
<i>Nitzschia pusilla</i>																
<i>Nitzschia pseudoflexuosa</i>																
<i>Nitzschia rotundata</i>																
<i>Nitzschia triangularis</i>																
<i>Nitzschia truncata</i>																
<i>Pinnularia aciculifera</i>																
<i>Pinnularia aciculifera</i>																
<i>Pinnularia appendiculata</i>																
<i>Pinnularia borealis</i>																
<i>Pinnularia divergens</i>																
<i>Pinnularia implexa</i>																
<i>Pinnularia microstauron</i>	1	1	1	1	2	1	1	5	3	2	1	2	1	1	1	
<i>Pinnularia nodosa</i>																
<i>Pinnularia schoederii</i>	9	1	3			4	7	2	1	2	5	1	7			
<i>Pinnularia schoederii</i>																
<i>Pinnularia subcapitata</i>	3	1	6			9	8	5	1	3	7	1	3	4		
<i>Pinnularia subtilis</i>						1										
<i>Pinnularia spp.</i>																
<i>Rhoicissipera oblongata</i>	1		3													

生虫卵密度がやや低く、花粉群集の特徴も食用にならない風媒花植物が占めることから、汚染以上の糞便が混じる堆積で、糞便のみが投棄されたのではなく、糞便も投棄されるゴミ穴のような土坑であったと考えられる。堆積層も西から東に向かって傾斜し、町屋方向から投棄されたと考えられる。

(2) 食生活について

便所遺構ないし糞便が投棄された土坑であることから、寄生虫卵と花粉群集から食生活の一端が復原される。97-1E SK295 からはアブラナ科の花粉が検出され、花芽の付いたアブラナなどのアブラナ科植物が比較的多く食べられている。97-1E SK440 では、試料⑤、試料⑧でアブラナ科の花粉がやや高く、これらの試料は寄生虫卵密度もやや高く、糞便に起因するとみなされる。他にソバ属、ブドウ属、グミ属、カキノキ属の花粉が検出され、これらは食べられていたと可能性も考えられ、風媒花ではあるがイネ属型も同様に考えられる。寄生虫卵では、多い回虫卵と鞭虫卵から生野菜の摂食や飲み水の汚染が示唆される。肝吸虫卵や異形吸虫卵は少なく、特にコイ科やアユなどの淡水魚はあまり食べられず、寄生虫に感染しにくい海産魚を食べていたと推定される。他にカピラリアは主に鳥類の寄生虫で、鳥類を摂食していたと推定される。

(3) 周囲の植生および環境

97-1E SK440 の花粉群集組成から、イネ属型を伴うイネ科が優占し、周辺は広く水田が分布していたとみなされる。樹木花粉は低率で、周囲には樹木がほとんどなく、やや遠方にマツ属複維管束亜属（アカマツないしクロマツ）やコナラ属アカガシ亜属（カシ類）が分布していた。周囲にはアブラナ科、ヨモギ属をはじめ、チドメグサ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、オオバコ属の乾燥した人為地の草本が分布していた。土坑内または周囲の湿ったところには、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節などの水生植物が生育していた。



写真21 第97-1E調査区
SK440 土壌サンプリング状況(北より)



写真22 第97-1E調査区
SK295 土壌サンプリング地点(南より)